

# 巻 頭 言

北海道高等学校教育研究会  
会 長 林 恵 子

北海道高等学校教育研究会第59回大会が、1月12日・13日に、2年ぶりに開催されました。コロナ禍の影響で、例年のような集合での実施ができず、全体会も教科別集会も原則オンラインでの実施でしたが、多数の会員の皆様にご参加をいただき、大きな成果を得ることができました。皆様のご支援に心より感謝申し上げます。

本会の研究成果を収録した研究紀要を皆様にお届けいたします。令和2年度は、第58回研究大会をコロナ禍により中止し、研究紀要第58号はホームページ上に掲載しておりました。この度それと合わせて、第58号・第59号の合冊での発行となります。昨年度から今年度にかけては、学校の教育活動も、我々教職員の研究活動も、大きな制約を受け、十分な活動がなかなかできませんでした。そのような中でも日々の実践に基づく研究を着実に進めてこられた先生方に敬服するとともに、こうして2年ぶりに誌上でご発表いただくことができ、安堵もしております。会員の皆様の実践研究を促進し、研究紀要にご発表いただくことは、当会の業務の柱の一つであり、北海道の高等学校教育の発展の足跡を印すものであると自負しております。

今、高等学校教育は、大きな変化の時を迎えています。令和4年度の入学生から、新学習指導要領が本格実施となり、GIGAスクール構想により一人一台端末を利用しての教育活動も始まります。このような学校の変化は、その背景に先端技術の高度化、人口減少や産業構造の変化などの社会の大きな流れがあり、日常生活の中で子供たちを取り巻く環境も変化しています。さらに、コロナ禍により、これらの変化の軋みの中での諸課題が顕在化するとともに、臨時休業等の経験から、日本の学校の果たしてきた全人的な発達・成長を保障する役割や居場所・セーフティネットとしての福祉的な役割も再確認されました。今こそ、私たちにとって当たり前のものであり続けてきた学校や教育について、原点に返って考え、自らの実践を再構築していくべき時であると感じます。

会員の皆様の真摯な実践と研究活動の成果であるこの研究紀要の発行にあたり、多忙な校務を行いながら寄稿していただいた先生方、ならびに編集に当たられた事務局の方々に心より敬意を表し、深く感謝申し上げます。それとともに、この研究紀要が今後の皆様の取組みを一層豊かにする一助となることを期待して、巻頭のご挨拶といたします。

最後になりますが、本研究会のために、ご苦勞いただきました役員の皆様、地区支部、教科部会の皆様のご尽力に、心より感謝申し上げますとともに、今後とも北海道の高校教育の一層の発展のためにお力添えをいただきますようお願い申し上げます。

# 目 次

巻 頭 言……………北海道高等学校教育研究会 会長 林 恵 子

## 研究紀要第 58 号（所属は令和 2 年度）

### 教科部会

#### 〔地歴・公民〕

「現代社会」で取り組む「高校生議会」の実践報告

～広尾高校・模擬議会の取組と地域の課題の探求について～

……………北海道北見柏陽高等学校 中 野 俊 光 1

「現代社会」から「公共」へ

～公民科教育のあらたな展開～

……………札幌市立北翔養護学校 川 瀬 雅 之 11  
北海道札幌稲雲高等学校 志 田 光 瑞  
北海道札幌東陵高等学校 佐 藤 豊 記  
北海道千歳北陽高等学校 伊 藤 智 大  
市立札幌清田高等学校 藤 倉 水 緑  
北海道長沼高等学校 庄 司 健 浩  
北海道札幌国際情報高等学校 下 川 欣 哉  
北海道札幌東高等学校 吉 川 敦 巳

#### 〔家庭〕

「つなぐ」

～専門高校における共通教科「家庭」の実践と探究～

……………北海道静内農業高等学校 西 山 祥 子 22

#### 〔商業〕

地域連携を軸とした福島商業高校の取り組み

～学校存続に向けた実践～

……………北海道福島商業高等学校 塩ノ入 卓 爾 31  
白 幡 広 大

## 研究紀要第 59 号

### 教科部会

#### 〔国語〕

高校国語科における「話すこと・聞くこと」の授業実践に向けて

－先行実践の成果と課題－

……………苫小牧高等商業学校 山 田 千 春 41

#### 〔地歴・公民〕

「主体的・対話的で深い学び」という名の幻想

……………北海道北広島西高等学校 畠 師 広 光 49

#### 〔地歴・公民〕

未来を拓く公民科教育の創造

～「深い学び」に迫る「授業づくり」～

……………市立札幌新川高等学校 川 瀬 雅 之 57

〔数学〕			
「数学って何のために勉強するの？」を考える			
.....	北海道釧路江南高等学校	今野 嵩 弘	65
〔数学〕			
小規模校の特性を生かした数学科の取り組み			
.....	北海道阿寒高等学校	山 上 祥 吾	73
〔理科〕			
効果的なアクティブラーニングとICTの活用に関して			
.....	北海道札幌西高等学校	佐 藤 誠	81
〔英語〕			
令和4年度から始まる新学習指導要領の趣旨を踏まえた授業実践			
～「話すこと[やり取り]」の指導と評価におけるICT活用～			
.....	北海道札幌国際情報高等学校	佐々木 康 希	85
〔家庭〕			
プロジェクトマネジメントの視点を取り入れたスクールプロジェクトの実践			
－北海道札幌北高等学校 家庭クラブの取組から－			
.....	北海道札幌北高等学校	松 本 奈 巳	95
〔工業〕			
「生徒の特性などに対応した教育内容・指導方法の工夫・改善について」			
～カリキュラムマネジメントについて～			
.....	北海道札幌琴似工業高等学校	藤 村 洋 之	105
〔商業〕			
本校におけるマーケティング分野の取り組み			
～地域の活性化を目指して～			
.....	北海道士別翔雲高等学校	佐々木 惇 二	115
北海道高等学校教育研究大会全体集会講師一覧			127
北海道高等学校教育研究会会則			129



# 研 究 紀 要

第 58 号

令和 3 年 3 月

北海道高等学校教育研究会



# 「現代社会」で取り組む「高校生議会」の実践報告

## ー 広尾高校・模擬議会の取り組みと地域の課題の探究についてー

北海道北見柏陽高等学校 中野俊光

はじめに

いま政治に関心を持たない若年層の問題がよく話題にされる。2016(平成 28)年 6 月 19 日に改正公職選挙法が施行され、18 歳選挙権が本格的にスタートしたが、高校生を含む若者の政治的関心は依然として非常に低い。高校の教壇で「現代社会」や「政治・経済」を教えていても、日々のニュースでさえ関心を持たない生徒が多いことに驚かされる。政治や社会情勢のことに興味をもち、自分自身が当事者意識をもつようにするにはどうしたらよいか。特に人口減少が著しい地域においては、地域の課題に向き合うことがとりわけ重要となる。自分たちが住む地域で起きていることに興味をもち、自分たちの力で地域の課題を解決し、社会を動かしていく原動力につなげる。そのような実践を日々の授業で取り組むことはできないかと思うことがしばしばあった。

私がかつて勤務していた広尾高校では、2015(平成 27)年度から広尾町議会の協力による模擬議会(高校生議会)を隔年開催で実施している。生徒たちが主体的に地域の課題について考えて、地域の大人たちに自分たちの疑問を投げかける。教科書で学習する「地方自治の仕組み」を表面的にとらえるのではなく、地方議会の実務に実際に携わっている地方議員から直接アドバイスをもらいながら、一緒に一般質問を練り、実際の議場で行政責任者に質問をする。そうした一連のプロセスを通して、現実に活動している「地方議会」の実態を知り、「地方自治の仕組み」について興味関心をもつようになる。「主権者としての自覚」を高め、社会への当事者意識を喚起し、自分たちの住む地域の課題の探究につなげるのがねらいである。

その他にも広尾高校で実施していた「町議会議員との懇談会」や「町議会傍聴」「選挙啓発高校生出前講座」「農林漁業出前講座」などの体験活動とも絡めながら、いろいろ試行錯誤して取り組んだ主権者教育をこの小論にまとめてみたい。

[筆者は 2020(令和 2)年 4 月 1 日より北見柏陽高等学校へ異動となったので、前任校での実践報告となることとお断りしておく。]

### 1. 本校の概要について

広尾高校は十勝管内の人口約 6,700 名弱の広尾町に

ある普通科の道立高校である。広尾町は近年人口減少に歯止めがかからず、高齢化によるさまざまな課題を抱えている地域である。また毎年高校の生徒募集も苦戦しており、「学校の魅力化」が大きな課題となっている。

本校は全校生徒 127 名の小規模校である(2020 年 2 月末現在)。入学生のほとんどが広尾町内からの進学者で、隣接する大樹町やえりも町からも入学生はいるが、少数に留まっている。それゆえ外部からの刺激が少ない環境に置かれている。

学級数・生徒数・教員数[2020 年 2 月末現在]					
学年		1	2	3	合計
学級数		2	1	2	5
生徒数	男子	22	21	22	65
	女子	19	18	25	62
	計	41	39	47	127
教職員数		22			

本校の特徴としては、2006(平成 18)年度から始まった広尾町連携型中高一貫教育がある。これは町内の広尾町立広尾中学校と豊似中学校(2017 年 3 月閉校)と連携型の中高一貫教育を実践し、中学校との相互乗り入れ授業や授業参観をはじめ、部活動や生徒会の交流等を通じて、中学生の現状について理解を深めている。中学校との「つながり」を重視した高校教育を目指し、「地域に学び、地域とつながり、地域を支える、人材の育成」というスクールミッションのもと、郷土ひろおに貢献した教育活動を行っている。

本校は少人数であるがゆえに、生徒一人ひとりに対してきめ細かい指導を実施している。また広尾町の財政支援を受けてさまざまな活動を行っている。「通学費補助制度」「模擬試験補助」「資格・検定費補助」「部活動補助」「スクールバス補助」「給食費補助」「スタディーサポート・Classi にかかる補助」「長期休業期間中の予備校講習費補助」「下宿費補助」「部活動外部講師補助」などの支援を受けている。また町内の建設会社経営の畑下茂氏のご支援のもと、広尾高校生対象の下宿「学生会館とかち」が完成し、広尾町からの助成金も受け、町外生の受け入れ体制も整備されている。

その他にも本校では、1 年次の少人数習熟度別授業、家庭学習の支援、学校外の学修成果(資格・検定等)単位

認定、7時間授業(週1回)、土曜日授業(年4回)、放課後の進学講習、長期休業中の就職支援講座、町内企業による合同企業説明会、町内の事業所などへのインターンシップの実施など、一人ひとりの進路実現を確実に図ってきた。

また、カナダ・アルバータ州のブルックスコンポジット高校と本校の代表生徒を毎年10日間程度相互に派遣する取り組みを1995(平成7)年度から実施している。今年25周年目を迎え、本校生徒のみならず、広尾中学校、広尾小学校の子どもとの交流を深めている。この国際交流は、グローバルな視野を持ち、コミュニケーション能力を高める取り組みとして地域の関心も高い。

さらに、学校祭の行燈行列と雪中予餞会の二大生徒会行事は、本校生及び同窓生の誇りである。全校生徒が学級毎に山車を引いて町内を練り歩く行燈行列は、広尾町の夏の風物詩となっている。また、雪中予餞会で制作する雪像は町内の子どもたちが待ち望む行事である。年々生徒数が減少しているが、生徒と教職員の熱意で継続している。

## 2. 模擬議会の実践

次に高校生議会(模擬議会)の様子について触れておきたい。今回1学年の現代社会(必修科目)の授業の中で「高校生議会」に取り組み、自分たちの住む地域の課題について考える試みを行った。広尾町議会と広尾町による全面協力のもと、1学年41名の生徒全員を5～6名のグループ8班に分けて、町議会議長を除く町議会議員12名に各班に入ってもらい、高校生と議論しながら一般質問通告書の内容を練った。その通告書に対して、町の行政担当者から回答された答弁書を町議と再度検討する機会をもち、二次質問の内容を練った。高校生議会の議長も生徒が務め、各グループの代表生徒8名が高校生議員として町長に対して直接質問をする形式にした。参加人数はやや多くなったが、一人でも多くの生徒が自分たちの問題として考えるように、1学年全員が模擬議会に関わる形式にした。開催趣旨、実施方法、事前指導と事後指導の計画は次の通りである。

開催趣旨
未来を担う高校生が、議会の模擬体験を通して町政や議会について理解を深め、地域に関心や愛着を持ち、まちづくりに参加する意欲を高めるとともに、高校生の視点を活かした自由な発想や意見等について、議会議員が認識を深め、魅力あるまちづくりのために、ともに考え学ぶ機会とする。
実施方法
・一般質問形式の模擬議会とし、議員役は高校生が務める。 ・生徒はグループで質問内容を考え、模擬議会での質

問はグループの代表が行い、発表する生徒以外は傍聴する。

- ・町側の出席者は、町長、副町長、教育長、総務課長、企画課長、教委管理課長とする。
- ・生徒は「一般質問」について事前に理解の上、冬季休業中に質問内容を準備する。
- ・冬季休業後、各グループで考えた「一般質問」の原案について、町議が高校にて助言(1回目)を行う。
- ・町は「一般質問」の通告内容に応じて答弁書を作成する。
- ・答弁書を受けて、各グループは「二次質問」を作成するが、町議が高校にて助言(2回目)を行う。
- ・模擬議会の様子はネット中継する<sup>1)</sup>。

### 日時及び場所

・町議の高校訪問(1回目)1月21日(火)3校時  
10:45～11:35(本校3階多目的教室)

・町議の高校訪問(2回目)2月5日(水)3校時  
10:45～11:35(本校3階多目的教室)

・高校生議会(模擬議会)2月10日(月)2・3校時  
9:45～11:35(広尾町議会本会議場)

### 参加者

- ・広尾高校1学年生徒41名(発表8名・議長1名)
- ・広尾町議会議員13名(議長含む)
- ・広尾町長及び町職員6名
- ・議会事務局3名
- ・高校教職員4名(管理職2名・教諭2名)
- 計67名

### 高校生議会 授業計画表

1時間目	地方自治、地方公共団体の組織と住民の権利(教科書・事前学習) [本校教室]	2019/11/4
2時間目	地方分権の進展、地方財政の課題(教科書・事前学習) [本校教室]	2019/11/5
3時間目	模擬議会趣旨説明・班分け・情報収集 [本校教室]	2019/12/18
4時間目	情報収集・調査・宿題指示 [本校情報処理室]	2019/12/19
5時間目	一般質問通告書作成 [本校教室]	2020/1/17
6時間目	町議による事前指導(1回目) [本校多目的教室]	2020/1/21
7時間目	一般質問・二次質問作成 [本校教室]	2020/1/23
8時間目	町議による事前指導(2回)	2020/2/5

	目)[本校多目的教室]	
9 時間目	二次質問作成・発表練習 [本校教室]	2020/2/7
10 時間目	高校生議会本番(前半) [広尾町議会本会議場]	2020/2/10
11 時間目	高校生議会本番(後半) [広尾町議会本会議場]	2020/2/10
12 時間目	事後指導・礼状作成 [本校教室]	2020/2/10

「現代社会」の授業の中で、地方自治について2時間ほど教科書で予習した後、一般質問作成までに少し時間が空いてしまった。議会本番と町議の高校訪問の日程をなかなか詰めることができなかつたため、具体的な作成作業に入ることができたのは12月中旬になってからであった。したがって質問事項の細かい作成については冬季休業期間中の課題にした。ただしそれでも本校生が一人で質問事項を考えるのはかなり難しいことなので、事前に町政について調べる時間を確保して、過去の高校生議会の質問事項や議会だよりの一般質問を参考にしながら質問を練らせた。

冬季休業明けから本格的に「一般質問通告書」の作成にあたらせたが、班内でなかなか良い質問内容がまとまらなかつたので、町議会議員による事前指導の前にも1時間程度班ごとに話し合う時間を設けた。議員による事前指導の時間も短いので、なるべく事前に論点を整理しておく必要があつたからである。

町議会議員による事前指導では、一般質問作成上の注意点や質問の仕方などの具体的なアドバイスを受けた。質問する際に使ってよい言葉や質問内容など懇切丁寧に指導を受けた。またその時間の最後に「事前指導のまとめ」として、各班から全体に対してそれぞれの進捗状況と質問内容を報告してもらい相互に理解を深めた。1回目は「一般質問通告書」の原稿を完成させ、それを議会事務局経由で行政担当者に元に届け、2回目は通告書に対する行政担当者からの回答(答弁書)について「二次質問」を練る時間とした。



町議による高校訪問(1回目)



町議による高校訪問(1回目)生徒発表風景

この事前指導のために、町議には、本校に二度足を運んでいただき、高校生たちを根気強く指導していただいた。このような町議との交流を通して、地方議会の意義と役割について、また地方自治の実態について生徒たちは真剣に学ぶことができた。実はこの町議との懇談がこの高校生議会(模擬議会)の一番肝要な部分ではないかと思った。生徒たちが町政について真剣に考えている本気の大人と出会うことで、社会や政治とのつながりを意識する。それは生徒たちの人生の中で掛替えのない貴重な時間だと思うからである。また町議にとっても広尾町の将来を担う若い世代との交流ともなり、生徒・町議の双方にとってもメリットが大きいからである。

一方、課題としては、生徒たちが自分たちの住む町について知らないことが多いという点であった。いま町内で何が問題となっているのかということさえ興味も関心も低いことがあらためて浮き彫りとなった。若者の政治的無関心も同じような傾向にあるといえよう。高校生のような若い世代が地域社会のことについてもっと興味や関心をもてるようにいろいろと仕掛けや工夫をする必要があると思った。



生徒によるグループワーク(発表練習)

議会当日(2/10)は、広尾町教育委員会による配慮でスクールバスを手配していただいて高校から議場まで速やかに生徒の移動をすることができた。議場に入場すると早速、議会事務局の指示のもと、本番前の簡単な打ち合わせとリハーサルを行った後、本会議がスタートした。議事は以下の通りに進行した。

町議会議長挨拶

開会

会議録署名議員(2名)の選出

会期の決定

一般質問

- 1.防災対策について
- 2.若者の楽しめる場所について
- 3.商業施設の活用について
- 4.広尾町内の公園や施設の整備について
- 5.歩道の除雪について

信号機の設置について

- 6.サンタランドのイルミネーションの増色について  
メタンハイドレートの活用について
- 7.観光を中心とした街づくりについて
- 8.町内の街灯の少なさについて

閉会

生徒代表謝辞

学校長講評

町長挨拶

記念撮影



一般質問の様子



二次質問の様子

一般質問は予定通り順調に行われた。代表の生徒以外の生徒は議場後方の傍聴席に座り、自分の班の一般質問の様子を見届けた。傍聴席には多くの町民も観覧した。また道内の「高校生議会」のことを調査・研究している北海道大学教育学研究院の浅川和幸教授と院生数名も傍聴していただく機会にも恵まれた<sup>ii</sup>。

質問する生徒たちは、議会前はかなり緊張していたが、本番が始まると堂々とした態度で発言することができた。また一般質問の後の二次質問も十分に準備ができていたので、町長に対して鋭く質問をすることができた。生徒の中には、週末などを利用して家庭で何度も練習した者もいて、私の予想以上の出来映えであった。



町議会本会議場の様子(手前側が町議席)



高校生議員と傍聴席の様子



町長・町議と生徒たち(広尾町議会本会議場)



議長役の生徒

今回の高校生議会は、広尾町のまちづくりに関する一般質問が大勢を占めた。過去2回の高校生議会とも似通った質問もあったが、今どきの高校生らしい感性で質問をすることができた。広尾町内の公園や施設の整備について質問をしたグループでは、担当した町議が広尾町役場や関係者にいろいろ問い合わせて、細かい経緯や予算などについて調べて教えていただくこともあった。その甲斐もあって質問の内容については、実際の議会に引けを取らないほど充実したものとなった。町議の尽力には本当に頭の下がる思いであった。

実際に高校生議会を体験した生徒たちの感想は次の通りである。

#### 生徒たちの感想

##### 【高校生議員】

・発表する時はとても緊張しましたが、自分たちの考えた質問を町長にしっかり言えたので満足しました。大きな舞台に立てて良かったです。この経験をこれからの学校生活に生かしていきたいです。

・高校生議員として初めて出席し、貴重な経験ができて良かったです。とっても緊張しましたが、たくさん練習して成功することができて良かったです。今後の進路にも役立ち、議会に出席したことで何より自信ができました。

・高校生議員として質問するにあたって、自分の町に対する考えをより深め、また広尾町の行政がどのように尽力しているのかを知る機会となりました。これから高校生として何ができるか考えたいです。

・議場の席に実際に座ることができ、とても良い経験になりました。質問して町長が答弁するという一般質問の進行について知れてよかったです。

・今まで班のメンバーとたくさん話し合ったり、読む練習を重ねてきました。しかし、本番で人前に出ると、頭が真っ白になるほど緊張し、「議員さんはこんなに大変なんだな」と思いました。

・一番目ということもあって、すごく緊張しました。思ったこ

とをうまく伝えようとして、失敗したり噛んでしまったけれど、とても良い経験ができました。改めて、議員さんってすごいなと思いました。また、伝えるということの大変さをよく学びました。

##### 【傍聴した生徒】

・議場に入ってみて、普段は体験できない雰囲気にとっても緊張しました。今回の議会を通して広尾町の現状や課題、町の良いところなどを知りました。この機会を大切に、今後の広尾町について高校生として積極的に考えたいです。

・議会で普段どのようなことを行われているのかを体感することができ、とても良い機会になりました。私たちの住んでいる町がさまざまな段階を経て、形になっていることもわかり、より一層行政への関心が高まりました。

・日常で考えることのなかった広尾町のことを深く考えることができて良かったです。また、普段入ることがない議場に入って実際に議会に参加できて良かったです。今後も広尾町のことを考えていこうと思いました。

・地方自治の勉強をした上での高校生議会は、とてもいい経験になりました。この経験を生かしてこれからの学校生活や社会に出てからも、いろいろ頑張りたいです。

### 3. 模擬議会の経緯

今回の高校生議会は、本校では3回目の取り組みで、第1回は2016(平成28)年2月3日に、第2回は2018(平成30)年2月8日にそれぞれ実施した<sup>iii</sup>。過去2回は地歴公民科の授業ではなく、生徒会役員による参加で、主に地域のまちづくりに関して高校生が提言する内容となった。

今回は前回と違い、地歴公民科が主体となって、現代社会の授業の中で「地方自治」を学ぶ視点から広尾町の「地域の課題」と「未来への展望」を探究する試みとなった。教科主導で実施したことにより、政治・経済・社会・地理的な視点からも捉えられるようになりより多面的な観点から深く学ぶことができるようになった。また地元就職する機会の多い高校なので地域の産業についてもあらためて見直すことになり勉強になることが多かった。

参考までに過去の高校生議会で一般質問として取り上げた質問項目を次に挙げてみたい。

#### 高校生議会(模擬議会)質問事項

第1回高校生議会[2016(平成28)年2月3日実施]  
一般質問(質問者8名)(生徒会役員生徒参加)

・医療の充実について

・十勝港まつりにおけるイベントの充実について

<ul style="list-style-type: none"> <li>・高校教育について</li> <li>・高齢者問題の対策について</li> <li>・道路整備の状況について</li> <li>・観光について</li> <li>・少子化・子育てについて</li> <li>・まちづくりについて</li> </ul>
<p>第2回高校生議会[2018(平成30)年2月8日実施] 一般質問(質問者9名)(生徒会役員生徒参加)</p>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・広尾町の観光産業のあり方について <ul style="list-style-type: none"> <li>①インスタ映えする場所をつくってはどうか</li> <li>②サンタメール事業の今後の見通しは</li> </ul> </li> <li>・広尾町の将来について <ul style="list-style-type: none"> <li>①新たな飲食店開店でまちに活気を</li> <li>②新たな広尾の名産品づくりを</li> </ul> </li> <li>・広尾町のインフラ整備について <ul style="list-style-type: none"> <li>①高校生が楽しめる場所があれば</li> <li>②冬の通学路安全確保を</li> </ul> </li> <li>・広尾町の情報発信について <ul style="list-style-type: none"> <li>①ふるさと納税にサンタランド関連の取り組みを</li> <li>②日本ハムファイターズ応援大使をどう活用するか</li> <li>③広尾町の宣伝動画を作成してはどうか</li> </ul> </li> </ul>
<p>第3回高校生議会[2020(令和2)年2月10日実施] 一般質問(質問者8名)(1学年生徒41名参加)</p>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・防災対策について</li> <li>・若者の楽しめる場所について</li> <li>・商業施設の活用について</li> <li>・広尾町内の公園や施設の整備について</li> <li>・歩道の除雪について</li> <li>・信号機の設置について</li> <li>・サンタランドのイルミネーションの増色について</li> <li>・メタンハイドレートの活用について</li> <li>・観光を中心とした街づくりについて</li> <li>・町内の街灯の少なさについて</li> </ul>

#### 4.「議員とのまちづくり懇談会」及び「町議会傍聴」

先述したように広尾高校では模擬議会を隔年で実施しているが、模擬議会が開催されない年には、「広尾町議会議員との懇談会」を実施している。第3回高校生議会が開催された前年(2019年)に、議会事務局より「町議との懇談会」が実施できないかとの打診があった。それまではやはり「生徒会役員との懇談会」を放課後の時間に実施していたことはあったが、小規模なもので学校全体に周知されているようなものではなかった。

そこで当時の1学年の「現代社会」を担当していた自分が授業の中でこの懇談会を実施できないかと考えて企画する

ことになった。1学年生徒39名を7～8名のグループ5班に分けて、町議11名を各班に2～3名ずつ入ってもらった形式の懇談会が実現した。実施した内容は以下の通りである。

<p>広尾高校生と広尾町議会議員とのまちづくり懇談会</p>
<p>[2019(平成31)年2月8日 3・4校時(10:45～12:35) 本校多目的教室]</p>
<p>テーマ:「10年後の広尾町を考える～理想とする広尾町はどんなまち?～」</p>
<p>開会 議長挨拶 議員の自己紹介(11名) 町議会と町政についての説明(副議長より) 各グループに分かれて懇談 各グループからの発表(5班) 学校長講評 生徒代表謝辞 閉会 記念撮影</p>
<p>参加者</p>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・広尾高校1学年生徒 39名</li> <li>・広尾町議会議員 11名</li> <li>・議会事務局 3名</li> <li>・高校教職員 4名(管理職2名・教諭2名)</li> <li>計 57名</li> </ul>

懇談会のメインテーマは「10年後の広尾町を考える～理想とする広尾町はどんなまち?～」であったが、実際にはこのテーマに縛られずに自由活発な意見が交わされた。町議と初対面の生徒も多く、緊張した者も多かったようであったが、町の活性化についていろいろ話し合いができて充実した時間を過ごすことができた。

この懇談会は、模擬議会のような事前準備がそれほど必要ないので、生徒たちの負担も少なく開催するのが比較的容易であった。ただし生徒会執行部と少人数で実施していたときは違い、人数が多くなったので生徒と町議がよく話ができるように事前指導と開催方法についていろいろ工夫する必要はあった。せっかく「現代社会」の授業で地方自治のことについて学習しているので、地方自治の実態や地方議会の役割について現職の政治家から大いに学んでほしいと思った。そのため生徒たちが広尾町に対してどのような興味と関心を持っているかを事前によく調査した。そしてその実態をよく理解した上で、懇談会の企画運営となった。

この懇談会の準備の過程で私が議会事務局に「議会傍聴」のことはお願いしたら快諾していただいた。せっかくこのような懇談会が実現できたのだから、今度は生徒たちが広尾町議会へ行って実際の議会の様子を是非見学させてほ

しいと思ったからである。「町議会傍聴」は1ヵ月後の2019(平成31)年3月13日に実現した。人数がやや多かったので、傍聴席に全員入らず、半分の生徒が別室でモニター視聴することになったが、前半と後半に分けて傍聴席に入ることにしたので、全員議場の雰囲気を知ることができた。実際の町議会定例会はかなり専門的な議論が多く、内容は難しいが、生徒たちにとって比較的身近で理解しやすい「教育関連の予算審議」をする日に「議会傍聴」を設定して実現することができた。町議と行政担当者の白熱した論戦を初めて見て、生徒だけではなく私自身も圧倒されてしまった。



町議との懇談会風景



町議との懇談会(各グループからの発表)



町議とのまちづくり懇談会(本校多目的教室)

後日、議会事務局の担当者からこの「町議会傍聴」のこと

を聞く機会があったが、町議たちはこの日に高校生たちが傍聴に来るので、「教育関連の予算審議」までの他の議案を前日まで時間を延長してかなり急いで審議をしたとのことであった。そして議会傍聴当日、町議たちはかなり高校生を意識した発言が多かったとのことであった。議会は誰に対しても常に開かれてはいるが、平日の日中に行われることが多く、傍聴に来る者は少なく、ひっそりと行われていると聞く。1学年の現代社会の授業の中で「町議とのまちづくり懇談会」と「町議会傍聴」が一つにつながるとても有意義な時間を過ごすことができた<sup>iv</sup>。



町議会傍聴

#### 5.北海道農林漁業出前講座

広尾町のまちづくりについて議論する準備の過程で、広尾町で生まれ育った生徒たちが、案外広尾町のことについてよく知らないことがわかった。郷土である広尾町についての知識が非常に不足していたのである。

偶然ではあるが、この「町議とのまちづくり懇談会」と「町議会傍聴」が実施された前年に、広尾町の産業について全校で学習する機会があった。2018(平成30)年3月12日に、北海道十勝総合振興局森林室が企画した「北海道農林漁業出前講座」を本校体育館で開催することになった<sup>v</sup>。そのために1・2年生の地歴公民科授業の中で広尾町の農業・林業・漁業のことについて事前学習をすることになった。高校では小学校のように、自分が住む町の産業について授業の中で調べ学習をする機会はほとんどないが、せっかくの機会でもあるのでこの講座を利用して学習することにした。

この講座は、北海道農政部・水産林務部が一次産業の担い手づくりを推進するために企画したもので、前半が北海道の一次産業の概要を道庁の農業・林業・水産部門の専門家から説明をしてもらい、後半は広尾町内で農林漁業に従事している若手後継者に講話をしてもらった後で、生徒たちから事前に出してもらった質問にそれぞれ答えてもらうトークセッションを実施した。広尾町は漁港があるので漁業がさかんな場所として知られているが、実は農業も林業も活発な町で、一次産業が一つの町に全部揃っている珍しい町で

ある。後継者育成のために、少しでも各産業の実態を地元  
の高校生に知ってもらい、一次産業の魅力を一人でも多く  
の生徒たちに伝えたいとの趣旨で開催された。生徒たちには  
この講座の事前学習として広尾町の農業・林業・漁業の  
ことについて班ごとにいろいろと調べてもらい、模造紙1枚  
にまとめたものを授業の中で発表してもらった。その甲斐も  
あって、講座当日には若手後継者に対して多くの質問をす  
ることができて出前講座が非常に盛り上がり成功裏に終了  
することができた。特に北海道十勝総合振興局森林室主  
査(森林総合管理担当・当時)の佐々木健人氏との出会い  
がなかったら実現できなかった出前講座なので、本当に貴  
重な機会に恵まれたことに感謝している。



事前学習でまとめた発表用資料



北海道農林漁業出前講座全体風景(本校体育館)



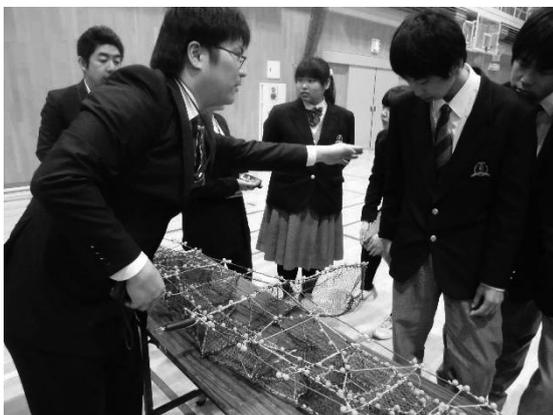
事前学習のまとめ作業風景(本校図書室)



講座で展示された林業関連の資料(会場後方に展示)



事前学習発表風景(本校教室)



漁業関連の展示資料の説明(定置網の模型)

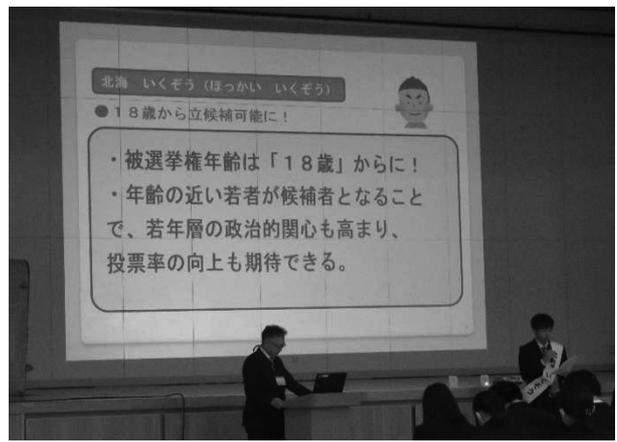


十勝毎日新聞[2018(平成 30)年 3 月 13 日]

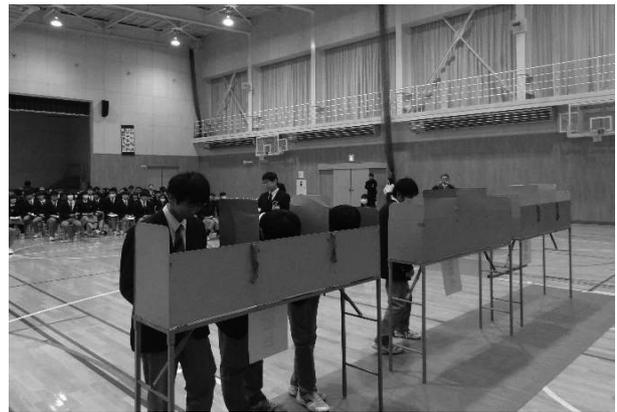
5. 選挙啓発高校生出前講座

先述したが、2016(平成 28)年 6 月 19 日に改正公職選挙法が施行され、18 歳選挙権が本格的にスタートした。そのことを受けて全国各地で「主権者教育」がさかんに行われるようになってきた。本校でもそうした流れを受けて「選挙啓発講座」を企画・実施することになった。第 1 回は 2015(平成 27)年 12 月 10 日に、第 2 回は 2017(平成 29)年 12 月 14 日に、第 3 回は 2019(令和元)年 12 月 10 日にそれぞれ実施した。講座は北海道選挙管理委員会事務局十勝支所に依頼して、隔年開催で実施している。

主な内容としては、選挙制度の歴史や選挙制度の仕組み、選挙の現状などについての解説の後、模擬選挙と模擬投票を行い、選挙制度を体験する講座である。高校 3 年生であれば在学中に満 18 歳に達する生徒もいるので、選挙権年齢の 18 歳になる前には必ず一度はこの講座を体験できるように設定している。実際の選挙で使用されている投票箱や記帳台が学校に運び込まれて、原寸大の模擬投票用紙で投票するので生徒たちの反応は非常に良いものになっている。ただし講座開催直後は、政治的関心が一時的に高くなるが、時間の経過とともに関心が徐々に薄れてしまう傾向にある。生徒たちの興味関心をいかに継続的に高めてゆくのかが今後の課題である。



選挙啓発高校生出前講座(立会演説会)



選挙啓発高校生出前講座(模擬投票・記帳台)



選挙啓発高校生出前講座(模擬投票)



選挙啓発高校生出前講座(模擬投票)

結びにかえて

「地方自治は民主主義の学校」とよく言われるが、その言葉が本当に意味することを生徒たちに少しでも考えさせるようなことが実践できたであろうか。

この小論の中で、広尾高校で行ってきたささやかな「主権者教育」について見てきた。特に人口減少が著しい地域であるからこそ、このような「主権者としての自覚」が重要になってくることを日々痛感させられた。広尾町を取り巻く環境は年々厳しくなるばかりで、先行き不透明な現状が続いている。私が広尾高校に在職した8年間でも人口は減り続け、町内の店舗数は徐々に減少した。人口減少社会および少子高齢化の時代に郡部の町村で「まちづくり」を今後どう進めるのかが問われている。広尾高校で学んだ生徒たちが広尾町の将来を担う人材であればこそ、彼らの成長と活躍に期待をかけるのである。

十勝管内では池田町や大樹町でも「高校生議会」(模擬会議)の活動が活発である。この高校生議会を先行実施している池田高校の米家直子先生や大気高校の門屋祐二先生にはいつも多くの刺激をいただいている。これらの町で議会の活動が活発である。この高校生議会を先行実施している池田高校の米家直子先生や大樹高校の門屋祐二先生にはいつも多くの刺激をいただいている。これらの町でも広尾町と抱えている問題は非常に似通っている。この高校生議会の活動を通して、自分たちの住む町の魅力をもう一度見直し、新たな発見があれば新たな活力となるに違いない。

今回の高校生議会(模擬議会)を通して、地方自治の問題について生徒たちと考える機会をもつことができた。生徒たちが地域のことに真剣に向き合っている大人と直接触れ合うことにより、身近な地域の政治的な課題に少しでも興味をもち、自分たちの住む地域社会を少しでもより良く変えてゆくきっかけをつくるのが果たしてできたであろうか。それは彼らの今後の活躍に期待したい。私が行ってきた授業実践がささやかながらその一助となれば幸いである。

#### 【註】

- <sup>i</sup> 過去の高校生議会の様子は次の場所で視聴できる。  
<https://www.town.hiroo.lg.jp/gikai/>
- <sup>ii</sup> 北海道大学浅川和幸教授は2019(令和元)年11月18日に本校に来校し、高校生議会が開催された経緯や前年に行われた「町議との懇談会」のことについて調査された。その直後の11月26日に帯広市のとちちプラザで開催された「十勝管内高等学校教育研究会地歴公民分科会」でも「中高生が地域社会に主権者としてどう関わるのか～人口減少社会をみすえて～」というテーマで講演された。浅川教授との出会いがなければ、第3回高校生議会は実現しなかったかもしれない。
- <sup>iii</sup> 詳細については次の場所を参照するとよい。  
<https://www.town.hiroo.lg.jp/gikai/>
- <sup>iv</sup> 第3回高校生議会の開催を受けて、2020(令和2)年3月11日に町議会傍聴の予定が組まれていたが、新型コロナウイルス感染拡大のため、臨時休校となってしまったので、急遽中止となった。
- <sup>v</sup> 「北海道農林漁業出前講座」は北海道十勝総合振興局森林室が本校進路指導部に開催依頼をしたものであるが、事前学習は主に地歴公民科が担当した。広尾町水産商工観光課、広尾町森林組合、広尾漁業協同組合青年部、菊地ファーム等の広尾町内の各団体の協力がなければ開催は実現できなかった。また道事業として推進した北海道農政部・水産林務部・十勝総合振興局の各職員の熱意がなければこの講座は実現できなかった。お世話になった多くの関係者にあらためてこの場を借りてお礼を申し上げたい。

#### 【参考文献】

- 磯崎初仁・金井利之・伊藤正次(2014)『地方自治[第3版]』北樹出版  
今井照(2017)『地方自治講義』ちくま新書  
辻陽(2019)『日本の地方議会』中公新書  
曾我謙悟(2019)『日本の地方政府』中公新書  
待鳥聡史(2015)『代議制民主主義』中公新書  
増田寛也編(2014)『地方消滅』中公新書  
黒井克行(2019)『ふるさと創生—北海道上士幌町のキセキ』木楽舎

本稿を執筆するにあたり多くの広尾町民や広尾町職員、広尾町議会議員の方々のお力を拝借した。特に「高校生議会」を開催するにあたり、広尾町議会議長堀田成郎氏、広尾町議会事務局長(当時)道淳一氏、同総務係長(当時)保坂一也氏には準備や運営面でひとかたならぬご尽力をいただいた。また筆者が8年間在職した北海道広尾高等学校の先生方には公私にわたりさまざまな場面で支えていただいた。「地域に学び、地域とつながり、地域を支える、人材の育成」というスクールミッションのもと、郷土ひろおに貢献する教育活動が今後も継続されることを願ってやまない。広尾高校を通して出会ったすべての方々はこの場を借りてお礼を申し上げたい。

# 「現代社会」から「公共」へ

## ～公民科教育の新たな展開～

北海道札幌市立北翔養護学校	川瀬雅之
北海道札幌稲雲高等学校	志田光瑞
北海道札幌東陵高等学校	佐藤豊記
北海道千歳北陽高等学校	伊藤智大
市立札幌清田高等学校	藤倉水緑
北海道長沼高等学校	庄司健浩
北海道札幌国際情報高等学校	下川欣哉
北海道札幌東高等学校	吉川敦巳

### はじめに

新学習指導要領（平成 30 年告示）において、公民科の必修科目が「現代社会」から「公共」へと再編成され、「政治・経済」「倫理」も選択の探究科目となることを受けて、昭和 54 年の学習指導要領社会科改訂において「現代社会」が新設されてからの公民科教育のあゆみもたどりながら、新たな展開について、これまでの実践に基づく論考を行う。

なお、本会の「研究紀要」第 55 号から第 57 号において、「高教研公民科における「指導案集」の取り組み～「授業改善」に向けた実践交流～」と題して、3 箇年に渡り、3 回の報告を行ってきた。そこで報告した「授業改善」に向けた実践交流の成果も踏まえ、公民科教育の今後について、課題と期待を明らかにしたい。

本稿の内容構成は、以下の柱立てとする。

1. 「背景」についての共通理解
2. 新科目「公共」への理解
3. 公民科教育のあゆみ
4. 高校教育改革、教育課程改革の先行例
5. 公民科教師の役割
6. 「授業改善」の方向性
7. 公民科教育がめざすもの
8. 今後の展望

### 1. 「背景」についての共通理解

#### (1) 「政治の時代」

「政治の季節」という言葉もあるが、21 世紀の現在は、政治的教養が真に求められる「政治の時代」であるとする。大きな社会変革を導く要因は、「コロナ禍」ばかりではない。他の人の立場に立って考える想像力の欠如、異なる意見や考え方を批判し、排除しようとする強制力や圧力、映画や小説、過去の歴史としてではなく、同時代の様々な社会現象として、その一端を目にすると、改めて、互いに尊重しあう「公的な空間」、複数性が担保され、皆でその複数性に耐える人間としての営み、意見交換やコミュニケーションを重視する人間の理性、「公的な空間」において、一つ一つの言葉を大切にす対話など、別世界の課題としてではなく、今まさに、私たちが、公民科教師として問われている「喫緊の課題」が、身近に、そして現実のものとして、そこにある。

2021 年、新年早々の 1 月 6 日にトランプ前大統領（この時点では、現職の大統領）の支持者らが、連邦議会議事堂に乱入し、死者まで出るという事件を垣間見て、民主主義という価値を代表する米国にあっても、ある意味容易に、民主主義は壊れてしまう危険性を、常にはらんでいるということを、実感させられた。

デイヴィッド・ランシマンの著書に『民主主義の壊れ方』がある。2018 年の著作であり、トランプ政権発足に際しての論考となっている。そのエピローグに、「アメリカの民主主義は、ドナルド・トランプ大統領であっても持ちこたえるだろう。大惨事についてはわからないが、クーデタはなく、法の支配が崩壊することもない。厳しくとも民主主義は存続し、歴史は続いていく。」という記述があった。確かに、アメリカにおいては、就任後早々に、バイデン新大統領が矢継ぎ早の大統領令を発して、トランプ政権からの方向転換を

図った。しかし一方で、あまり時をおかないうちに、アジアにおいて、ミャンマーで、国軍によるクーデタが起き、国民の激しい反発を巻き起こしながらも、力による押さえ込みの様相を呈している。この違いは、どこに起因するのか。

## (2) 「不断の努力」

政治哲学者のハンナ・アーレントは、考えるという営みを失った「無思想性」、物事を他者の視点で見ることの出来ない「複数性の破壊」、その先に、全体主義が絶対的な「悪」を設定することを指摘するとともに、「分かりやすい政治思想や、分かっただけにさせる政治思想を拒絶し、根気強く討論し続けることの重要性」を説いている。

日本国憲法においても、「国民に保障する自由及び権利は、国民の不断の努力によって、これを保持しなければならない。」そして「国民は、これを濫用してはならないのであって、常に公共の福祉のためにこれを利用する責任を負ふ。」(第12条)と定められている。

新学習指導要領の高等学校公民科で、新たに設けられる「公共」、また科目名は同じであっても、選択の探究科目として位置づけられた「政治・経済」と「倫理」を通して、直接生徒の指導に携わる私たち教師には、「不断の努力」を続け、「自由及び権利」を「濫用」せず「公共の福祉のためにこれを利用する責任」を自覚し、それを主体的に担う主権者を育成していくこと、また、教師自らも率先して取り組むことが、これまで以上に期待され、求められていると考える。

## (3) 「学びの時代」

「Society5.0」における学校として「学校 ver3.0」が提起され、「勉強」から「学習」、そして「学び」へと進化発展させることが期待されている。

新学習指導要領に示されている「主体的・対話的で深い学び」「社会に開かれた教育課程」「カリキュラム・マネジメント」等は、いずれも「学校 ver3.0」における「学び」に通じるものである。中教審の審議とその答申、文科省はじめ政府関係機関からの発信、日本学術会議はじめ学会からの提言などでも、時代の変化を読み解き、一歩先を切り拓くとともに、持続可能な実践基盤の構築が、私たち教師に、そして「学びの場」である教育現場に期待されている。

## (4) 「学び」への「パラダイムシフト」

「学力」については、知識の習熟（暗記・再生）に

重きを置く「従来型の学力」から、知識を活用し、自ら課題を解決していく能力としての「確かな学力」への転換が、さらに教育の在り方としても、知識伝達を主軸とする「勉強」や「学習」としての「教える (Teaching)」から、多面的・多角的な考察や深い理解を図る「探究」につながる、深く考える力の育成をめざした教育、つまり「学ぶ (Learning)」へ、大胆な転換が求められている。

以上、断片的ではあるが、新科目「公共」に向かう「背景」の一つとして共通理解しておきたい。

## 2. 新科目「公共」への理解

### (1) 「公共」についてのアンケート調査結果から

北海道高等学校政治経済研究会(道政研)では、2020年8月、新学習指導要領に基づく公民科「公共」の指導上の課題等について、北海道内の高等学校(全定含む)・中等教育学校を対象として、283校にメール送信によるアンケート調査を実施した。約半数の140校から回答を得た。その調査結果の中から、「公共」に対するイメージについて取り上げる。

なお、この調査結果については、道政研の「研究紀要」第10号(2020年11月)において、その分析が報告されている。ぜひ参照していただきたい。

調査では選択肢を提示しながら、「公共」についてのイメージを問うたところ、次のような結果となった。

ア 全く新しい科目	41%
イ 「現代社会」と変わらない科目	28%
ウ 「政治・経済」の領域が多い科目	10%
エ 「倫理」の領域が多い科目	1%
オ 「政治・経済」と「倫理」が合わさった科目	14%
カ その他	6%

「公共」を、公民科として、全く新しい科目であるという認識に立っている教員が、半分にも満たないという状況が明らかとなった。さらに、「現代社会」と変わらない科目という認識も28%であった。つまり、全体の3割程度は、既存の科目(「現代社会」)のリニューアルという認識を持っていた。

### (2) 「現代社会」と「公共」の違い

アンケート結果から、「現代社会」と「公共」の違いについて、十分な理解が浸透していない状況が見て取れたが、そもそも新科目「公共」と現行の「現代社会」の違いは、何なのか。先の「報告3」(「研究紀要」第

57号)の再掲となるが、改めて確認しておきたい。

2020年1月に開催された日本公民教育学会科研報告会において、岡山大学の桑原敏典氏が、「現代社会」から「公共」への変化について、「現代社会」の意義と限界を分析されたうえで、次のように報告された。

「現代社会」は、個から社会に向かう、思考・判断を重視し、現代社会研究、社会問題探究に取り組んできた。「公共」は、社会から個に向かう、議論・発信を重視し、社会形成、国民育成科目としての役割を担う。」というものであった。

また、自己と社会との関わりを踏まえ、社会に参画する主体として自立することや、他者と協働してよりよい社会を形成することなど、主権者教育としての「公共」の役割についても指摘された。

さらに桑原氏は、「公共」を核とする小・中・高一貫の公民教育の「フレームワーク」についても、構想を提起された。それは、「自立した主権者としての公共性の獲得過程」として、小学校社会科において「公共的な空間の理解＝公共性の自覚」、中学校社会科において「公共的な議論の必要性の理解＝公的領域と私的領域の区別」、高等学校公民教育「公共」において「公共的な議論に参画するための資質・能力の育成」、高等学校公民教育「倫理」、「政治・経済」において「専門的な知識の批判的修得による自立的な思想形成」、そして、「18歳＝自立した主権者としての自覚と資質・能力」という構想であった。

### (3) 「公共」についての「その他」の意見

前掲のアンケートに、以下のような意見があった。

- 「現代社会」に似ている科目ではあるが、より一層知識よりも思考力や表現力を重視している科目となっている印象
- 知識的なものは従来と変わらないと思うが、「教え方」が変わるイメージ
- 思考力、表現力、概念の理解力
- 公的部門の機能や役割との関連付けを重視している
- 主権者教育としての「現代社会」の学ばせ方の改正的發展
- 主権者である公民を育てる科目
- 「現代社会」+「倫理」の両方が合わさった科目
- 生徒の主体的な活動を重視する学習
- 従来の「現代社会」をシティズンシップ教育や主権者教育の視点から再構成した科目

「その他」の意見の中には、主権者教育を推進するための科目として期待されている意見が多数あった。

2016年6月13日に文科省「主権者教育の推進に関する検討チーム」が最終まとめを発表したが、その中

で、主権者教育の目的を、「単に政治の仕組みについて必要な知識を習得させるにとどまらず、主権者として社会の中で自立し、他者と連携・協働しながら、社会を生き抜く力や地域の課題解決を社会の構成員の一人として主体的に担うことができる力を身に付けさせること」としている。この目的が、科目「公共」の目標と合致しているとして、主権者教育が意識されていることを示すものと考えられた。

また「公共」は、「思考力や表現力を重視している」という意見もあった。確かに、新学習指導要領では従来の学習指導要領より、思考力・判断力・表現力等の育成について、重要視されている。

学校教育法第30条第2項において、「思考力、判断力等」とは、「知識及び技能」を活用して課題を解決するために必要な力と規定されている。新高等学校学習指導要領解説総則編では、生徒が「理解していることやできることをどう使うか」に関わる「思考力、判断力、表現力等」は、社会や生活の中で直面するような未知の状況の中でも、その状況と自分との関わりを見つめて具体的に何をなすべきかを整理したり、その過程で既得の知識や技能をどのように活用し、必要となる新しい知識や技能をどのように習得すればよいのかを考えたりする力であり、変化が激しく予測困難な時代に向けて、ますますその重要性は高まっている、と指摘されている。

### (4) 「主権者教育」について

新学習指導要領における公民科の役割として、従前の学校教育、高校教育についての認識を大きく変える必要がある。それは「18歳選挙権」から「18歳成人」に対応して、「未成年の高校生を相手とする高校教育」から「未成年の高校生と成人の高校生が混在する高校教育」への転換が求められ、高校教育が位置する社会的な基盤が変化する中、学習者・高校生の「社会における位置づけ」自体が大きく変化するためである。

「18歳成人」については、当然のことながら、特定の教科だけで対応することは難しく、高校教育全体として取り組むべきものである。「社会に開かれた教育課程」の背景として、「18歳成人」への対応をしっかりと読み取り、現場の意識改革を促す必要がある。

その上で、「主権者として、持続可能な社会づくりに向かう社会参画意識の涵養やよりよい社会の実現を視野に、課題を主体的に解決しようとする態度の育成、現代社会に生きる人間としての在り方生き方の自覚の涵養」が期待され、これらは公民科の「授業改善」の成果として求められている。それは特に、教育基本法及び学校教育法に規定されている「公共の精神に基づ

き、主体的に社会の形成に参画し、その発展に寄与する態度を養うこと」が、公民科における「学び」の究極の目標であり、「公民としての資質・能力の育成」と密接に関わるものであるためと考える。

#### (5) 文科省「主権者教育推進会議」

2022年度に成人年齢が18歳に引き下げられることを受けて、文科省の有識者会議「主権者教育推進会議」が開催され、2020年11月に中間報告、2021年の3月には最終報告がまとめられることになっている。中間報告において、すでにいくつかの提言がなされているが、最終報告に向けての検討課題として、「教員の養成と研修の在り方」「教育現場における政治的中立性の担保の方策」があげられていた。特に「政治的中立性」については、教育現場にあってこれまでも、様々な取組が試みられ議論されてきた課題の一つである。その在り方について考える上で、ドイツの「ボイテルスバッハ・コンセンサス」は、示唆を与えるものであり、2017年2月に日本学術会議から出された「高等学校新設科目「公共」に向けて～政治学からの提言」においても、「リアルな政治教育と「政治性中立性」の担保」という明確な学問的視点からの提言が示されており、必見のものとする。

なお、この文科省「主権者教育推進会議」において、中間報告にあげられた検討課題の「教員の養成と研修の在り方」「教育現場における政治的中立性の担保の方策」について、2020年12月、公立高等学校における取組事例を、道政研会長として川瀬が発表している。その記録、発表内容等については、文科省のHPにて公開されている。

#### (6) 「提言」と「ボイテルスバッハ・コンセンサス」

これもまた「報告3」（「研究紀要」第57号）の再掲となるが、上述の通り必見のものであり、この場において、改めて確認しておきたい。

日本学術会議の政治学委員会が2017年に出した提言「高等学校新設科目「公共」に向けて～政治学からの提言～」(2017年2月3日)の中に、「(2)リアルな政治学習と「政治的中立性」の担保」という項目があり、次のような内容の提言が行われている。

これは、2015(平成27)年10月29日付の文部科学省通知「高等学校等における政治的教養の教育 高等学校の生徒による政治的活動等について」において、「指導に当たっては、教員は個人的な主義主張を述べることは避け、公正かつ中立な立場で生徒を指導すること」が、「政治的教養の教育に関する指導上の留意事

項」の一つとして記載されているが、その「留意事項」にかかわる提言である。

「教師の影響力によって、特定の政治的立場を注入することは問題であるが、逆に「中立性」を「非政治性」に矮小化してしまうことは、生徒の政治的な「思考力、判断力、表現力」(学校教育法第30条第2項)の育成といった点からみて、百害あって一利なしである。判断力の芽を摘み取り、態度表明を自制する空気をつくってはならない。そこで教える側にとって重要なことは、教授内容を十分に研究・準備し、扱う問題に関する認識の確かさ(真実性)、情報源・方法の確実性(クレディビリティ)・信頼性(リライアビリティ)、専門性を高め、リアルな社会的・政治的問題に関する多様な立場や視点から教材・情報を集め、生徒たちに提供することである。教師は、賛否が分かれるテーマでは、個々の生徒を自身とは異なる意見にさらし、「公的争点分析アプローチ」がいう価値のジレンマ状況、個別事例と一般的原則の関係を意識させた上で、生徒個人個人の可塑的な意見の形成をリードしつつ、生徒自らが自身の立場を離れた上で、その意見の理由づけをすることを促す。こうした作業こそが、教師あるいは教授内容に「政治的中立性」を担保させ、生徒が先入観から解かれ、対象と「距離」をとりつつ、自由に自分なりの意見や判断を持つことの意義を理解させることにつながるであろう。」以上が、日本学術会議の提言内容である。

次に、「政治的中立性」に配慮しながら、「リアルな政治との対話」を進めることが大切であるが、その考え方の参考となるものとして、ドイツの「ボイテルスバッハ・コンセンサス」がある。

「ボイテルスバッハ・コンセンサス」(ドイツ1976)

- ①教員は生徒に期待される見解をもって圧倒し、生徒が自らの判断を獲得するのを妨げてはならない。
- ②学問と政治の世界において議論があることは、授業においても議論があることとして扱わなければならない。
- ③生徒が自らの関心・利害に基づいて効果的に政治に参加できるよう、必要な能力の獲得が促されなければならない。

ドイツにおいては、ナチスの独裁を招いた過去を教訓として、政治教育に取り組み、「関与しないことが中立性を守ることではない。むしろ、関与しないことによる弊害の方が大きい。われわれは「未来を築く(拓く)主体者」に対する責任を果たす必要がある」として、この「コンセンサス」を確認し、定めている。

## (7) 「公共」への期待

まとめとして、公民科の新科目「公共」には、次の3つのことが期待できる、又は期待されると考える。

第1は、リアルな「現実社会の諸課題」を取り上げることで、現実社会における複雑な課題を把握し、協働的に問題解決する力や情報を吟味する力を引き出し伸ばすことが期待できる。その際、「政治的中立性」に配慮しながら、「リアルな政治との対話」を進めることが大切である。

第2は、具体的な「学習課題（主題）」を設定することによって、既習事項や他教科科目における学びを活用し、「探究」活動を展開することが期待できる。具体的な「問い」（「学習課題（主題）」）に取り組むことにより、「覚える」から「考える」への学びの転換が図られ、深く考える力の育成を目指した教育が展開できると考える。

第3は、多様な学習活動を展開し、診断的・形成的評価の観点から、「指導と評価の一体化」を図ることで、生徒の学習意欲を高め、自らの学びを「自己調整」して、主体的な学習を継続させていくことが期待できる。「評価」の工夫により、「考える」ための「メタ認知」、自分の理解状態を自己診断できる力の育成が期待できると考える。

## 3. 公民科教育のあゆみ

### (1) 「現代社会」の誕生

昭和54年の学習指導要領改訂によって、高等学校社会科の新たな必修科目として「現代社会」が誕生した。「現代社会」は、「現代社会の基本的な問題」と「現代社会と人間の生き方」の2つの大項目によって構成され、「広い視野に立って、社会と人間についての理解と認識を深め、民主的、平和的な国家・社会の有意な形成者として必要な公民的資質を養う。」という高等学校社会科の目標に基づいて、現代社会に生きる人間として必要な資質を身に付けさせることを基本的な立場としていた。この立場から、現代社会に対する判断力の基礎と人間の生き方について自ら考える力を養うことをねらいとして、現代社会とそこに生きる人間に関する基本的な問題を取り扱い、具体的な指導内容の構成や指導方法は、生徒の実態に即して、各学校において創意工夫を活かして指導を進めていくことが出来る科目として構想された。このときの改訂においてすでに、思考力の育成を重視すること、生徒の発達段階や興味関心を考慮することへの配慮とともに、資料の活用や作業的な学習の導入についても提起されていた。

### (2) 「テキスト」からみる公民科教育のあゆみ

公民科教育のあゆみを、学習指導要領の変遷をたどる形で整理することも必要であるが、本稿では、もう一つの方法として、断片的ながら次の「テキスト」を取り上げることによって、そのあゆみを確認したい。

- ① 文部省『民主主義』
- ② 大津和子『社会科＝一本のバナナから』
- ③ 横山利弘『在り方生き方教育』
- ④ 奈須正裕『「資質・能力」と学びのメカニズム』
- ⑤ 児美川孝一郎『高校教育の新しいかたち』

① 文部省『民主主義』は、文部省著作の教科書として昭和23年から24年にかけて、上下巻が出版された。復刻版やダイジェスト版等も出版されているので、容易に読み返してみることが出来る「テキスト」であるが、「民主主義」について、その熱意が伝わってくる。「現代社会」誕生時の社会科の目標「民主的、平和的な国家・社会の有意な形成者として必要な公民的資質を養う。」に通じるものが、具体的に示されている。

② 大津和子『社会科＝一本のバナナから』は、「現代社会」の授業づくりの範となる「テキスト」として、多くの教師に感銘と刺激を与えた一冊である。日常的な果物であるバナナから南北問題を考える授業づくりが紹介されている。鶴見良行『バナナと日本人』（岩波新書）等をベースとしながら、関連する資料等を現地調査も実施しながら収集し、教材化し授業展開を組み立て、南北問題に迫っている。「現代社会」は、「創意工夫を活かして指導を進めていくことが出来る科目」とされていたが、その創意工夫の取組は、決して容易なものではない。しかし、4単位の必修科目であった頃の「現代社会」においては、北海道内はもとより全国で、様々に意欲的な授業実践が展開された。その中であって、優れた実践に学ぶという「授業づくり」「授業改善」の基本が共有されるきっかけを作った一冊がこの「テキスト」であった。高教研公民科の「指導案集」の取組もその一つである。また、教材の素材となる「ネタ」等を共有化する動きなども活発化した。

③ 横山利弘『在り方生き方教育』について、まず「在り方生き方教育」という言葉は、平成元年改訂の学習指導要領で登場し、平成6年度から実施されたものである。ここで留意すべきことは、平成元年の改訂において、高等学校の社会科は、「地理歴史科」と「公民科」に「再編成」された点である。「新たに独立の教科とし

て」設けられた「公民科」は、「広い視野から、現代社会の基本的な問題に関する理解や、人間としての在り方生き方についての自覚を深め、変化の激しいこれからの社会に生きる民主的、平和的な国家・社会の有為な形成者として必要な公民的資質を養うこと」をねらいとした。「人間としての在り方生き方教育」は、高等学校の全教育活動を通して、高校生一人ひとりに、人間としての在り方生き方についての自覚を深めることを求めているが、その中であって、公民科の果たす役割は大きなものとなっている。この「テキスト」には具体的な「現代の教育課題」ごとの教育の有り様も示されており、平成4年に文科省から出された『高等学校公民指導資料 指導計画の作成と学習指導の工夫』とともに、「授業づくり」の指針を示している。

④ 奈須正裕『「資質・能力」と学びのメカニズム』について、この「テキスト」は今般の「学力観の転換」を受けて、新学習指導要領が目指す学習活動の目的が、資質・能力の育成であることを、最新の教育用語を用いながら解説している。また「学びのプロセス」は、社会的な見方・考え方、社会の中で汎用的に使うことができる概念等に係わる知識を身につけ、それらを用いて現実社会に見られる複雑な課題を把握し、協働的に問題解決する力や情報を吟味する力を引き出し伸ばすために、身近な教材と学習方法・形態等を「編集」し、「授業」を展開することを示している。

⑤ 児美川孝一郎『高校教育の新しいかたち』について、この「テキスト」において、今後の高校教育改革に向けた検討課題が示されている。まず、新学習指導要領が目標とするのは、「社会に開かれた教育課程」の実現であると指摘している。「社会に開かれた」という表現が示しているのは、学校の教育課程は、現在から近未来に向けての社会の変化にけっして置いていかれないという至上命題であり、教育を主語として「開かれた」状態を目指すのではなく、教育は、半ば受動的に「社会」の変化にキャッチアップしていくことが求められていること。また、今回の学習指導要領は、教育課程の編成原理、その組み立て方について、「コンピテンシー」や「21世紀型スキル」などの「新しい能力」をベースとして、学校教育の刷新を進める先進諸国の動向に追いつくことを目指しており、学習指導要領によって指定された資質・能力を身に付けるために、「何を学ぶか」（教育内容）と「どのように学ぶか」（教育方法）が導かれ、教育課程の編成原理における「教育内容」ベースから「資質・能力」ベースへの大転換が図られたこと。さらに、これまでの学習指導要領では、「教育内容」についての縛りはあったが、「教育方法」

については、基本的に学校現場の裁量に任されてきたけれども、新しい学習指導要領は、「資質・能力」「教育内容」「教育方法」「学習評価」「カリキュラム・マネジメント」のすべてをセットにして、学校における教育課程の実施・運営をトータルにコントロールしようとするものであると指摘している。これらの指摘を踏まえた上で、高校教育の新しいかたちについて、現場の実践に根ざした課題等の検討が求められている。

### (3)「育成する資質・能力」の具体

新学習指導要領においては、これまで以上に、育成する資質・能力について、具体的な例が示されている。

例えば、諸資料から「主体的・対話的な深い学び」に必要な情報を、適切かつ効果的に調べる技能として、新高等学校学習指導要領解説公民編の「公共」では、次のように記されている。

「第一に、倫理的主体、法的主体、政治的主体、経済的主体などとして活動するために必要な社会的事象等に関する情報を収集する技能。第二に、人間と社会の在り方についての見方・考え方を働かせて、収集した情報を適切かつ効果的に読み取る技能。第三に、読み取った情報を効果的にまとめる技能。これらの技能は、情報化が進展する中で社会的事象等について考察するとき求められる力、すなわち、関連のある資料を様々な情報手段を適切かつ効果的に活用して収集し、かつ考察に必要な情報を合理的な基準で適切に選択し分析するとともに効果的にまとめる力を意味している。」（「高等学校公民編」 p31）

このように具体的に例示された「育成する資質・能力」を踏まえて、どのような授業を創っていくのか。さらに「授業改善」の工夫とその成果が、教育現場に期待されている。

## 4. 高校教育改革、教育課程改革の先行例

### (1)「教育目標」と「知識観」

教育学者の本所恵氏が『スウェーデンにおける高校の教育課程改革』において、スウェーデンの高校教育改革、特に教育課程改革について紹介している。

その中に、「目標による統制」という項目があった。「学校や社会の基本的価値観に関わる部分が「学校の基本的価値と任務」として整理され、それとは別に「教育目標」が明示された。」(p138) というもので、「教育目標を独立させるというのは、学校を目標で統制するという明確な立場の表明だった。つまり、教育実践を法規で詳細に規定するというそれまでの方法を否定し

て、重要な目標を共通に定め、具体的な実践部分は現場に任せるというスタンスであった。」と紹介され、「学校の基本的な価値と任務」として「学校に課せられた最大の任務は「知識をつたえること、そして、生徒がそれらの知識を受け入れて発展させる土台をつくること」とされている。」(p140)

さらにその「知識」について、次のような説明が本所氏により紹介されていた。簡単に概略を抜粋する。

知識を「3つの側面」と「4つの形式」で捉える。

まず、「3つの側面」とは、

- ①知識は、目標、既有知識、直面する問題状況、人の現実での行動という円環の中で常に発展していくという「構成的側面」
- ②知識は、置かれた文脈によって価値が異なるという「状況的側面」
- ③知識は生活に役立つ道具であるという「道具的側面」特に「道具的側面」について、知識を用いて以下の4点に活かすことが目標とされた。
  - ・仮説を定式化し、思考し、問題を解決する。
  - ・自分の経験を振り返る。
  - ・批判的に思考し、言説や関係性を価値づける。
  - ・現実の問題や職業上の課題を解決する。

以上の「3つの側面」の整理は、伝えられた知識を覚えて再生できることを重視するのではなく、身に付けた知識を様々な文脈の中で、道具として用いて発展させていくことが重要であるという考え方である。

次に「4つの形式」について、学習として得られた成果としての種類、かつ学習目標の種類で、その内容は、概念や法則などの「事実」、事実を言語で認識し解釈する「理解」、実際の行為である「スキル」、言語化されない感覚的な「熟知」というものである。各教科において、これら4つの形式がバランスよく含まれることが強調され、特に理論的な認識である「理解」と、実際の活動としての「スキル」の両方を重視することが重要となり、このような知識観は授業にも反映され、学んだ知識を用いて何かをまとめたり、製作したりするといった活動が多く行われるようになった。

## (2)「方向目標」と「到達目標」

本所氏はさらに、生徒の能力について発達の方向性を示す「方向付ける目標」(「方向目標」)と各科目の修了時に生徒が到達しているべき「到達目標」の2種類について、具体的な事例を挙げて紹介し説明している。

「方向目標」の事例には、知識を道具として用い、問題を解決し、振り返り、批判的に思考し、現実で利用することを強調する目標が並べられ、新たな知識・

技能の獲得よりも、知識を道具として、現実あるいは架空の問題状況で活用することに強調点がおかれている。また、能力の育成を目指す「方向目標」に沿って、各科目には内容領域と能力を規定する「到達目標」が設定されており、多くの目標において、理解すべき内容とともにその利用方法や状況が記され、日常生活や専門分野との関連が繰り返し言及され、教科内容を現実で利用したり、専門教育と関連付けることが強調されていると述べている。

以上が、本所氏によって紹介されていたスウェーデンの先行例である。ここでは一部のみの紹介とするが、スウェーデンの高校教育改革、特に教育課程改革には参考とすべき点が多くあると考える。また、「方向目標」「到達目標」については、「評価規準」や「評価基準」についての私たちの理解にも通じる内容と考える。

## 5. 公民科教師の役割

### (1) 佐藤学『教師花伝書』より

教育学者の佐藤学氏が『教師花伝書』の中で、高校教育改革の困難について次のような指摘をされている。

「高校の改革は小学校や中学校の改革に比べて困難である。第一に、高校の教師は講義形式の授業と定期試験というシステムにどっぷり慣れ切っており、生徒がこのシステムにおいて挫折し不適應になっても、生徒の問題とみなしている。第二に、高校の教師組織の問題がある。高校教師は教科の部屋を居場所にしており、教科の壁によるバルカナイゼーション(バルカン諸国化)によって小国の集合体を基盤として仕事をしている。…改革の挑戦が一部の教師によって開始されても内戦状態に陥るほかはない。第三に、(教師と生徒の人数が多いことを指摘したうえで)複雑なカリキュラムと複雑な組織によって教師も生徒も学校を「共同体」として意識することは希薄であり、一人ひとりが孤立感を深めている。」と指摘している。また、「校長が学校改革のリーダーシップを発揮するうえで最も重要なものは、確かな改革のヴィジョンとそのヴィジョンを実現する思慮深い方略である。」としている。

厳しい指摘であるが、管理職の在り方とともに佐藤氏は、教師が専門家として育つことへの期待も、強く述べられている。

### (2)「専門家としての教師」とは

佐藤氏はさらに、「教師はどこで育つのか。アメリカには「医者にはベットの傍らで育つ」という格言がある。それに倣って「教師は学校で育つ」といってよいだろ

う。どんなに優れた教師教育や現職教育を大学で実施しようとも、あるいは、どんなに優れた研修講座を教育委員会や教育センターが開講しようとも、また、どんなに活発な教育サークルが研究活動を展開しようとも、学校内の研修によって教師が育ち合う以上に教師が専門家として成長できる場所はない。」「専門家の学びは「経験」から学び、「経験」と「理論」を結びつけて「見識」を形成することにある。その最も重要な基礎となるのが「事実」（経験と出来事）から学ぶことである。教室の細やかな事実や出来事を「発見」し「驚き」を感じることができる能力が、そしてこの難解な探究を愉しむことができる能力が、専門家として教師に求められている。」と語られている。

「むずかしいことをやさしく、やさしいことをふかく、ふかいことをおもしろく、おもしろいことをまじめに、まじめなことをゆかいに、そしてゆかいなことはあくまでもゆかいに」この言葉は、「探究」の学びの本質を、簡潔に言い当てている劇作家の井上ひさし氏の言葉であるが、この言葉も「専門家としての教師」の、そして公民科教師の役割を、的確に示している。

## 6. 「授業改善」の方向性

### (1) 「授業改善の考え方」

新高等学校学習指導要領解説公民編に、学習指導の改善・充実等として「i）「主体的・対話的で深い学び」の実現」という項目がある。その中で「深い学びの実現のためには、「社会的な見方・考え方」を用いた考察、構想や、説明、議論等の学習活動が組み込まれた、課題を追究したり解決したりする活動が不可欠である。具体的には、教科・科目及び分野の特質に根ざした追求の視点と、それを生かした課題（問題）の設定、諸資料等を基にした多面的・多角的な考察、社会に見られる課題の解決に向けた広い視野からの構想（選択・判断）、論理的な説明、合意形成や社会参画を視野に入れながらの議論などを通し、主として用語・語句などを含めた個別の事実等に関する知識のみならず、主として社会的事象等の特色や意味、理論などを含めた社会の中で汎用的に使うことのできる概念等に関わる知識を獲得するように学習を設計することが求められる。」（「高等学校公民編」p15）

さらに、「主体的・対話的で深い学び」については、方式化された授業の方法や技術ではなく、授業改善の考え方として捉えるべきことが議論されてきた。これまで言語活動の充実などの形で教科を超えて図られてきた学習活動の改善が、引き続き「社会的な見方・考え方」を働かせる中で、公民科ならではの「問い」と

して設定され、社会的事象等に関わる課題を追究したり解決したりする活動が取り入れられることによって実現することが求められている。」（「高等学校公民編」p16）と記されている。

これは、新学習指導要領や『解説』の作成過程における議論にまで言及する、踏み込んだ説明である。「学習を設計する」「学習活動の改善」の視点、さらに「授業改善の考え方」として、「主体的・対話的で深い学び」を認識し、実践に結び付けていくことが強く求められているものと考えられる。

### (2) 「問題作成方針」の「通知」を受けて

大学入試改革も、現下の教育改革の重要な柱の一つとなっている。2020年の6月、大学入試センターから令和4年度に係る「大学入学共通テスト出題教科・科目の出題方法及び大学入学共通テスト問題作成方針について」の「通知」が出された。現行の学習指導要領に沿ったものではあるが、新学習指導要領に向けて、今後の方向性を考える資料としてこの「問題作成方針」については、ぜひ確認しておきたい。

#### ①問題作成の基本的な考え方

まず、基本的な考え方が示されている。特に「知識の理解の質を問う問題や、思考力、判断力、表現力等を発揮して解くことが求められる問題を重視する」

さらに「問題の場面設定」として、「授業改善のメッセージ性も考慮し、授業において生徒が学習する場面や、社会生活や日常生活の中から課題を発見し、解決方法を構想する場面、資料やデータ等を基に考察する場面など、学習の過程を意識した問題の場面設定を重視する」と明確に示されている。この「問題の場面設定」という考え方に留意したい。

従来のセンター試験においても、リード文に会話文等が用いられることはあったが、事象や関連事項についての説明を主とするリード文によって、場面が設定され、設問が展開がされる出題形式が多く見られた。

「プレテスト」等で試行されているような学習活動の過程を取り上げた会話文や資料の提示の仕方を、今後は「問題の場面設定」として重視するとされている。

#### ②問題作成のねらい、範囲・内容等

出題教科・科目の出題方法、問題作成のねらい、範囲・内容、問題の分量・程度、問題作成における配慮事項等の概要が示されている。特に、範囲・内容について、「高等学校における通常の授業を通じて身に付けた知識の理解や思考力等を新たな場面でも発揮できるかを問うため、教科書等で扱われていない資料等も扱

う場合がある」には留意しておきたい。

「教科書等で扱われていない資料等も扱う」ということを踏まえると、「教科書を教える授業」から「教科書で学ぶ授業」への深化、学んだ知識・技能を活用する資質・能力の育成に向かう「授業改善」が求められている、と考える。

## 7. 公民科教育がめざすもの

### (1) 『十五少年漂流記』と『蠅の王』のどちら？

周知のジュール・ヴェルヌの『十五少年漂流記』では、14歳を頭に15人の少年達が、生きるための様々な工夫を重ね、持ち前の知恵と勇気と好奇心とを使って冒険に満ちた生活を生き抜いた。一方、ゴールディングの『蠅の王』においては、当初大人のいない世界で、無邪気で無垢な少年達が理性的に隊長を選び、平和な秩序だった生活を送っていたが、次第に心に巢食う獣性に目覚め、激しい内部対立から殺伐で陰惨な闘争へと駆り立てられていく。

本稿の冒頭で述べた「背景」を振り返り、「警鐘」の意味であえて、この二つの小説を取り上げた。いずれの方を、よりよい社会の在り方と考えるか。大半の方は、迷わず前者を選ぶと思うが、リアルな現実社会を振り返って見たときに、その判断と実現可能性は、盤石であろうか。人間としての在り方生き方を踏まえ、課題を克服し未来を切り拓く上で、公民科教育の果たすべき役割の大きさを、再確認しておきたい。

### (2) 「民主主義」と「資本主義」の担い手

「民主主義」と「資本主義」、「民主政治」と「市場経済」。これらの間には「一定の緊張関係」があり、「異なる利害や価値観を持つ人々」がいる。その人々と共生する枠組みを、いかに形成していくのか。

「人と一緒にいる」のは素晴らしいことであると同時に、時としてつらいことでもある。「おもしろいし、楽しいけれど、時には対立が起き、すれ違いが生じる。」という基本的感覚を起点としながら、政治哲学者の宇野重規氏は、『未来をはじめる』の中で、「民主主義」と「未来への希望」について高校生に語りかけている。

また、あぶみあさき氏の『北欧の幸せな社会のつくり方』では、10代からの若者が社会を変える力を発揮している实际が、写真を交え詳しく紹介されている。

改めて、よりよい社会の実現をめざして、「民主主義」と「資本主義」の担い手を育成することが、公民科教育がめざす「一丁目一番地」である、と考える。

## 8. 今後の展望

教科研究会の道政研では、「北海道の未来を担う高校生のために、今、私たちができること」を2020年度の研究主題としている。「北海道の未来」は、地域を限定するものではなく、「グローバル」な広がりをつながりを持った、身近な取組を意図したものであり、地道な授業実践に軸足を置く視点である。「未来を担う高校生」に対峙する私たちに、今、できることは何か。また、何を成すことが期待され求められ、何を為すことができるのか。これらを問う研究主題である。

「学びの時代」において、「自ら学ぶ生徒」の傍らには「自ら学ぶ教師」が求められている。さまざまな「研修の機会」を活かして、教師一人ひとりが主体的にその持ち味と力量を伸ばしていくことが重要である。

無論、学校を支えるスタッフは教師ばかりではない。全教職員の「連携」、そして、幅広い外部との「協働」こそが「21世紀型の学校」には必要と考える。

そもそも教育の現場は、人間関係を築く場である。人間関係を築くことはまさに社会を築くことであり、未来を拓くことに通じるものである。人間関係を築く力を育むことが、教育に求められる不易なる課題の一つである、と考える。

さらに、「教育は人なり」である。どんなに高邁な理想を掲げても、その理想に向けて実践力を発揮する教師がいなければ教育は成り立たない。その教師の育成について、特にOJT (On the Job Training)の必要性和有効性を強調しておきたい。

コロナ禍の中、「新たな日常」を営みながら、「学びの時代」において、教師が主体的に「教育的な対話を通じて、ともに学ぶこと」を大切にしたい。幅広く仲間を募り、ともに学び、教育実践を積み重ねながら、「学びの時代」における新たな公民科教育を、北海道の教育現場から拓いていくことを、願っている。

### 参考文献・資料 等

本稿に関連する参考文献等を、分野ごとに紹介する。

#### (1) 公民科教育、新学習指導要領全般

- ・文部省『高等学校公民指導資料 指導計画の作成と学習指導の工夫』（海文堂出版1992）
- ・横山利弘『在り方生き方教育』（学陽書房1994）
- ・栗原久編著『入門 社会・地歴・公民科教育』（梓出版社2015）
- ・総務省、文科省『私たちが拓く日本の未来』（2015）
- ・唐木清志編著『「公民的資質」とは何か』（東洋館出版社2016）
- ・江口勇治監修編著『21世紀の教育に求められる「社

会的な見方・考え方』(帝国書院 2018)

- ・野村美明、江口勇治、小貫篤、齋藤宙治『話し合い  
でつくる中・高公民の授業』(清水書院 2018)
- ・東京都高等学校公民科「倫理」「現代社会」研究会『「公  
共の扉」をひらく授業事例集』(清水書院 2018)
- ・橋本康弘編著『高校社会「公共」の授業を創る』(明  
治図書 2019)
- ・原田智仁編著『平成 30 年版 学習指導要領改訂のポ  
イント高等学校地理歴史 公民』(明治図書 2019)
- ・日本公民教育学会『新版テキストブック公民教育』  
(第一学習社 2019)

## (2) 教育改革、学校改革、教員研修等

- ・佐藤学『教師花伝書』(小学館 2009)
- ・佐藤学『専門家としての教師を育てる』(岩波書店  
2015)
- ・原田信之『カリキュラム・マネジメントと授業の質  
保証』(北大路書房 2018)
- ・本所恵『スウェーデンにおける高校の教育課程改革』  
(新評論 2019)
- ・児美川孝一郎『高校教育の新しいかたち』(泉文堂  
2019)
- ・辻敏裕、堂徳将人監修、北海道高等学校教育経営研  
究会『「社会に開かれた教育課程」を実現する高校』  
(学事出版 2019)
- ・広田照幸『教育改革のやめ方』(岩波書店 2019)
- ・小松郁夫、稲井達也『「学校 ver3.0」時代のスクール  
マネジメント』(学事出版 2020)
- ・『学校をイノベーションする 14 の教育論』(岩波書  
店 2020)
- ・石井英真編著『流行に踊る日本の教育』(東洋館出版  
社 2021)

## (3) 「学び」に関する視点

- ・ジュール・ヴェルヌ『十五少年漂流記』(新潮文庫)
- ・ゴールディング『蠅の王』(新潮文庫)
- ・波頭亮『思考・論理・分析「正しく考え、正しく分  
かること」の理論と実践』(産業能率大学出版部  
2004)
- ・齋藤孝『教育力』(岩波新書 2007)
- ・田中智志編著『グローバルな学びへ』(東信堂 2008)
- ・東京大学 i・school 編『東大式 世界を変えるイノ  
ベーションのつくりかた』(早川書房 2010)
- ・岡田昭人『オックスフォードの教え方』(朝日新聞出  
版 2014)
- ・鈴木寛、岩瀬直樹、今井むつみ、市川力、井庭崇『ク  
リエイティブ・ラーニング』(慶應義塾大学出版会  
2019)

## (4) 「資質・能力」や「深い学び」「探究」

- ・今井むつみ『学びとは何か』(岩波新書 2016)

- ・奈須正裕『「資質・能力」と学びのメカニズム』(東  
洋館出版社 2017)
- ・田中耕治、石井英真、八田幸恵、本所恵、西岡加名  
恵『教育をよみとく』(有斐閣 2017)
- ・田村学、廣瀬志保編著『「探究」を探究する』(学事  
出版 2017)
- ・田村学『深い学び』(東洋館出版社 2018)
- ・北尾倫彦『「深い学び」の科学』(図書文化 2020)

## (5) 「授業改善」、教材開発等のヒント

- ・大津和子『社会科＝一本のバナナから』(国土社 1987)
- ・堂徳将人『公民教育の新展開』(学事出版 2011)
- ・ジェニ・ウイルソン&レスリー・ウィング・ジャン、  
吉田新一郎訳『増補版「考える力」はこうしてつけ  
る』(新評論 2018)
- ・多田孝志『対話型授業の理論と実践』(教育出版 2018)
- ・堀哲夫『新訂 一枚ポートフォリオ評価 OPPA』(東  
洋館出版社 2019)
- ・木村優、岸野麻衣編『授業研究』(新曜社 2019)
- ・小川雅裕『授業のビジョン』(東洋館出版社 2019)
- ・ジョン・スペンサー、A・J・ジュリアーニ、吉田新  
一郎訳『あなたの授業が子どもと世界を変える エ  
ンパワーメントのチカラ』(新評論 2020)
- ・栗原久『中学校公民の雑談ネタ 40』(明治図書 2020)

## (6) 現代社会の変化や課題についての理解

- ・広井良典『ポスト資本主義』(岩波新書 2015)
- ・樋田大二郎、樋田有一郎『人口減少社会と高校魅力  
化プロジェクト』(明石書店 2018)
- ・蟹江憲史監修『未来を変える目標 SDGs アイディアブ  
ック』(紀伊國屋書店 2018)
- ・広井良典『人口減少社会のデザイン』(東洋経済新報  
社 2019)
- ・安宅和人『シン・ニホン』(NewsPics2020)
- ・蟹江憲史『SDGs』(中公新書 2020)
- ・南博、稲場雅紀『SDGs』(岩波新書 2020)

## (7) 市民性教育、主権者教育、政治教育関連

- ・文部省著作教科書『民主主義』(径書房 1995)
- ・バーナード・クリック『シティズンシップ教育論』  
(法政大学出版局 2011)
- ・小玉重夫『学力幻想』(ちくま新書 2013)
- ・ガート・ビースタ『民主主義を学習する』(勁草書房  
2014)
- ・広田照幸監修、北海道高等学校教育経営研究会『高  
校生を主権者に育てる』(学事出版 2015)
- ・ガート・ビースタ『よい教育とはなにか』(白澤社 2016)
- ・小玉重夫『教育政治学を拓く』(勁草書房 2016)
- ・桑原敏典編著『高校生のための主権者教育実践ハン  
ドブック』(明治図書 2017)
- ・橋本康弘、藤井剛監修『授業 LIVE 18 歳からの政治

参加』（清水書院 2017）

- ・宇野重規『未来をはじめる』（東京大学出版会 2018）
- ・蒔田純『政治をいかに教えるか』（弘前大学出版会 2019）
- ・宇野重規『民主主義とは何か』（講談社現代新書 2020）
- ・糠塚康江『議会制民主主義の活かし方』（岩波ジュニア新書 2020）
- ・あぶみ あさき『北欧の幸せな社会のつくり方』（かもがわ出版 2020）

# 「つなぐ」

## ～専門高校における共通教科「家庭」の実践と探究～

北海道静内農業高等学校 西山祥子

### 1 はじめに

北海道静内農業高等学校は、新ひだか町の二十間道路に隣接している。令和2年5月1日の時点で在籍は122名。少人数ながら特色ある教育課程が展開され、日本各地から生徒が集まる高等学校である。

本校は昭和53年に北海道静内高等学校から独立し、42年目を迎えた。学科転換や閉科の経過を経て、現在は食品科学科と生産科学科の2学科が置かれている。

令和2年の学校教育目標は「自ら考え正しく判断できる力を養い、たくましく生涯を生きる生徒を育てる」であり、その具現化のため、多岐にわたる専門教育が展開されている。毎年3月1日の卒業式には、入学時に想像できない、生徒の成長した姿を目の当たりにし、本校での教育活動の成果を実感するとともに、ここで働く一教諭として感謝と感動を何度も経験させていただいている。

本校における家庭科の授業は、科目「家庭総合」のみである。赴任して9年、本校の様々な特色を生かし、学校教育目標と教科「家庭」の目標を達成することができる授業展開を模索してきた。本研究紀要において、その実践を紹介させていただきたい。

### 2 北海道静内農業高等学校における専門教育

本校の令和2年度農場部全体計画にある基本方針は次のとおりである。

地域に根ざした農業教育の実践を基礎とし、GAP・HACCPなど先進的な農業生産に関わる学習活動を取り入れる。また、これらの農業教育を推進する上で、地域農業・地域社会と連携して教育を実践し、国際社会の変化に対応出来る地域産業振興に貢献する人材を育成する。

また、重点目標と実践事項には、「教科等横断的な学習の充実」「地域農業・地域社会と連携した取組の推進」が示されている。地域と共に学校があり、多くの支援や協力が生徒を育てる現状、また、学校が地域に必要とされる人材の育成に尽力していることが目標の設定と内容から伺い知ることができる。生徒の「学び」を深化させ、地域や支援していただいた方々に披露し還元する場を、家庭科の中で実践したい。日々生徒と向き合う中で、生徒が大きく成長する姿を見てもらいたいという思いが次第

に強くなった。本校で展開される専門教育は次の2学科からなる。

#### (1) 食品科学科

1年次に「食品製造」を履修する。総合実習では、「農産加工」「畜産加工」「畜産」を学ぶ。2年次は「食品製造」「食品化学」「食品流通」が全員履修の科目となり、2、3年次の科目「課題研究」では3つの研究班に分かれて調査・研究が展開される。

研究の内容は多岐に渡り、地元の観光も含めた資源を活用した商品開発が行われ、原材料部門では乳牛の飼養管理をもとにした乳製品の加工や、新ひだか町内の小学生を対象とするCOW育スクールなどが行われている。

#### (2) 生産科学科

1年次にある生物活用と総合実習では、野菜・草花の栽培、軽種馬について学ぶ。2年次はコース展開となり、前述の2コースで研究班活動までが展開される。軽種馬コースについては、繁殖・育成と馬利用のコースに分かれての研究がなされる。繁殖部門では、軽種馬の出産から育成、市場への上場までを行い、馬利用部門では、乗馬を介し障がいをもつ人や小学生との連携事業が展開されている。

### 3 科目「家庭総合」教育課程上の位置付けと展開

本校で設定する家庭総合は1、2年で2単位ずつの分割履修である。

1年次に「(1) 人の一生と家族・家庭」「(2) 子どもや高齢者とのかかわりと福祉」から福祉と高齢者の分野、「(3) 生活における経済の計画と消費」、「(4) 生活の科学と環境」から衣生活の科学と文化、住生活の科学と文化、「(5) 生涯の生活設計」、「(6) ホームプロジェクトと学校家庭クラブ活動」からホームプロジェクトを展開する。

2年次は、「(2) 子どもや高齢者とのかかわりと福祉」から子どもの分野、「(4) 生活の科学と環境」から食生活の科学と文化、「(6) ホームプロジェクトと学校家庭クラブ活動」から学校家庭クラブの展開となる。

1年次の「衣生活の科学と文化」、2年次の「食生活の科学と文化」から、農業高校だからこそ取り組むことが出来るものを見つけ、授業の実践を試みた。

#### 4 実践①

### 「静農ランチミーティング(冬)」

このことについては、平成 28 年度と平成 29 年度の2か年においての実践の1回目である。

当初の目的は、本校の魅力ある取組について、本校を支援していただいている方々に「食事会」をもって紹介するというものであった。科目「家庭総合」では高等学校学指導要領解説家庭科編科目「家庭総合」にある(ウ) 食生活の文化にある次の内容に位置付けられる展開と考えた。以下「解説」からの抜粋である。

日常の食事における料理の盛り付け方や配膳の仕方、食器の種類や特徴についても文化的な視点で理解させ、様々な地域や外国の食文化についても関心をもたせる。

これらの要素を踏まえ、特色ある教育活動を展開する「学校独自のもの」を集めて、お客様をおもてなしする計画とした。また、その場を「本校教育振興会総会」に設定させていただくこととした。

#### (1) ステップ1

##### ア 生徒への働きかけ

テーブルセッティング、食前形式、おもてなし料理についての学習と絡め、学校の生産物でおもてなしの授業をしたと考えていることを生徒に投げかけた。生徒からの反応は「是非実践したい」というものであった。

##### イ 農場部への依頼

授業の趣旨を農場部に話し、協力を募った。その後、食品科学科と生産科学科、両学科長から担当教諭に生産物・加工食品等の提供について具体的話を経て、該当授業の実施時期に生産される、野菜や加工品の種類を教えてください。集約した内容から活用できる食材の担当者に協力を仰いだ。

#### (2) ステップ2

##### ア 生徒への働きかけ

本校の授業で学んだことから、「何ができるか」「何を紹介したいか」について、話合いの時間を持った。静農ランチミーティング時期にある「生産物」「加工品」について、食材の担当者と話した結果を提示し、「学校の食材を活用して何ができるか」を探究的に意見を出し合い、メニューや会場作りのための装飾等について、一つ一つ決定していった。

#### 〈 静農ランチミーティング(冬) 教材(抜粋) 〉

##### ・農場から(圃場、温室等)

アイズプラント

ミニトマト

##### ・農産加工部門から

ミニトマトパウンドケーキ※

かぼちゃペースト、生あん

本校産タマネギとニンジンのみじん切り

ベリーラの雫(紫蘇飲料)

※トマトパウンドケーキやアイスクリームについては、農業科の教育課程にある「課題研究」の中の研究班活動で開発・研究されたレシピによるものである。

##### ・畜産加工部門から

アイスクリーム

夏季農場で収穫しフリージングしているラズベリー

ウインナー、ベーコン

##### ・乳牛部門から

生乳

##### ・馬部門から

蹄鉄で作ったクリスマスリースとドリームキャッチャー

##### ・草花部門から

シクラメン、鉢植えのクリスマスツリー

##### ・図書局から

インテリア用の「絵本」

##### ・農場部の先生から

メニュー表掲示のためのオリジナルコルクボードとイーゼルのセット(写真1)



写真1 オリジナルコルクボードとイーゼル

#### (3) ステップ3

メニューの決定を行った。

この回のメニューは次のとおりである。(表1)

～ お品書き ～

◆カボチャポタージュ

(カボチャ・玉ねぎ・牛乳)

◆大根とベーコンのステーキ

(ベーコン・アイSprant)

◆ソーセージパエリア

(ソーセージ・ニンジン・玉ねぎ)

◆デザートミスト

アイコのトマトパウンドケーキ

アイスクリーム、水ようかん

(ミニトマト、ベリー、あん、アイスクリーム、ベリー)

◆お飲み物:ペリーラの雫 (紫蘇)

( )内は本校の生産物

表1 メニュー

各料理をもとに当日の役割分担を決めて、分担ごとに、調べたこと、話し合ったことを一冊のファイルにまとめた。

(4) ステップ4

試作と試食を行った。作り方については、基本の作り方をパワーポイントと資料にまとめ、どのような工夫ができるか、本校のどの食器を使い提供するかなどを相談した。

また、ランチミーティングの会場を被服室と決定し、何が必要か意見を出し合い、話し合った。

前日準備では、テーブルセッティングをした席に生徒全員が着席し、洋食のカトラリーとテーブルセッティング(写真2)を行い、食事提供の際の注意点等を話し合った。



写真2 テーブルセッティング

(5) ステップ5

食事会当日。

2校時から5校時の4時間で行った。食事会メニューの主食は、「家庭総合」の調理実習で学習した「ソーセージパエリア」とした。農産加工部門から提供を受けた本校産玉ねぎとニン

ジンのみじん切りを使い、畜産加工部門で作ったソーセージがその上を飾る。出来たてをフライパンごと会場に運び、お客様の前で蓋を開け盛り付けて提供した。(写真3)



写真3 ソーセージパエリア

スープはカボチャのポタージュとした。1年生が科目「農業と環境」の授業で育てたカボチャを、農産加工部門でペーストにし、フリージングしたものを使った。また、当日の朝に牛舎から提供を受けた牛乳でポタージュを完成させた。カボチャのポタージュ担当班は、自分たちのアイデアで、飾り切りしたニンジンのグラッセをスープの上に浮かべた。



写真4 デザートミスト

デザートミストは、トマトパウンドケーキを一口大に切ったもの、花形に切り抜いた水ようかん、アイスクリームを一枚のお皿にのせ、ホイップクリームで飾り、果樹で作ったベリーソースでスマイルが描かれた。畜産加工部門から提供を受けたアイスクリームは、この年の冬季限定ホワイトチョコレートフレーバーで、3日前にできあがり冷凍庫で冷やしていたため、最初はデイスチャーでくりぬくことができなかった。すると、担当した生徒がアルバイトで得た知識を披露した。固すぎるアイスクリームは、電子レンジに5秒以内入れることで、溶かさず柔らかくすることができるとのこと。生徒の経験を皆で生かし電子レンジを駆使してデザートミスト(写真4)は完成した。

メインディッシュの大根とベーコンのステーキは、試作に時間がかかった。大根が柔らかくなり、尚且つ焦げることなく、完璧な焼き色をつけることを探究し、担当クラス全員で試作をした。調理の際、予想外に難しかったのは、ベーコンを挟むため

の切れ目を大根に入れる作業だった。

練習段階で均等な厚さにならなかったり、切り込みが深すぎて、ベーコンを挟むと大根が上と下に分かれてしまったりと、失敗大根が多数出た。生徒は切れ端を何センチ残すと良いか話し合い作業を繰り返した。

当日は、探究の成果から、ベーコンがしっかりと挟まった完璧な焼き加減の大根ステーキができた。更に同じプレートには、当時温室で作られていたアイスプラントとミニトマトが乗せられ、彩りの美しい一皿が完成した。(写真5)



写真5 大根とベーコンのステーキ

#### (6) ステップ6

振り返りの授業を行った。「静農ランチミーティング」全体を通して、「取組の工夫」「成果」「課題」等をワークシートにまとめた。

生徒は日頃、圃場での生産学習や加工における探究的・継続的な学習活動を積み重ねている。生産物・加工品については、販売会の実習を通し消費者との接点を持つ生徒たちである。生産物・加工品は家庭でどのように消費されるのか、「自ら考え」「自分たちの手で調理し」総括として学習の成果をお客様に披露した。終了後の生徒が自信に満ちた溢れた表情に感じられたのは、生徒が日頃の学習を改めて確認することができたためと考える。

### 5 実践②

#### 「静農ランチミーティング(夏)」

もし次に開催の機会を得ることができるならば、圃場から生産物が届く夏に行きたいとお願いしていた。実践②は、希望が叶った夏開催について紹介したい。

科目「家庭総合」における授業の目標は前回同様、「日常の食事における料理の盛り付け方や配膳の仕方、食器の種類や特徴についても文化的な視点で理解させ、様々な地域や外国の食文化についても関心をもたせる」とした。実践についても『生徒の「学び」を深化させ、地域や支援していただいた方々に披露し還元する場を、教科・家庭の中で実践したい』という理念の下、授業を組み立てた。ステップ1とステップ2については前回と同様に行った。この回は、農場から届く新鮮な野菜を美味しく食べても

られるような「和食のレシピ」をテーマとした。今回は夏季であったため、食材の種類が増えた。前回から追加できたものは以下のとおりである。

#### 〈静農ランチミーティング(夏)追加教材〉

- ・農場から(圃場から)
  - なす ズッキーニ きゅうり 青しそ
  - 食用菊(フリージング) ジュンベリー
- ・農産加工部門から
  - 紅麴味噌

前回同様、生徒に本校産の食材を提示し、当日のメニューについて案を出し合った。

以下はお客様に出した「お品書き」である。(表2)

<p style="text-align: center;"><u>お品書き</u></p> <p>○なすの金平 (本校産なすの金平仕立て)</p> <p>○ズッキーニの酢味噌和え (本校産ズッキーニと和風で)</p> <p>○牛乳豆腐 (牛舎直送牛乳の豆腐に手作り桜塩漬けと添えて)</p> <p>○牛乳ごま豆腐 (手作り牛乳入りごま豆腐の本校産紅麴味噌だれ仕立て)</p> <p>○菊寿司 (本校産食用菊と青じその酢飯)</p> <p>○冷や汁 (旬の胡瓜と冷や汁仕立てで)</p> <p>○杏仁豆腐 (牛舎直送牛乳の手作り杏仁豆腐)</p> <p>○水ようかん (手作り餡と水ようかんで)</p> <p style="text-align: center;">※本日の調理担当は食品科学科年生です</p>
---

表2 静農ランチミーティング夏お品書き

インテリアも前回の「クリスマスバージョン」から、「夏バージョン」に作り替えた。2年生の「人とかかわって生きる」の単元から「子どもとかかわる」の分野において折り紙の実習を行い(写真6)、簾にあじさいとカタツムリが立体的に貼られたインテリアを作成した。各担当ごとにファイルで計画を綴り、当日の流れやレシピの確認を行い、どのような工夫ができるかをまとめた。

前回からの改善点の一つに、「生徒自身がしっかりとメニューの紹介を行うこと」があった。事前に紹介文を推敲し、学校の取組をわかりやすくお客様に伝えることを目的とした。また、本校の畜産加工品であるベーコンとソーセージについては、もっとも美味しい状態で食べてもらう事を考え、お客様の前で生徒が焼いて

お皿にサーブする方法を取り入れた。料理紹介の生徒と料理一  
 ブ担当の生徒は、特に事前確認を入念に行っていた。話合いの  
 中から当日の流れや注意点を綿密にまとめあげ、担当生徒ごと  
 に共有している様子であった。以下は料理紹介のために生徒と  
 一緒に考えた原稿の一部である。

食品科学科2年の〇〇です。  
 食品科学科2年の〇〇です。  
 これから今日のお料理を紹介します。  
 ☆まず最初は菊寿司です。  
 生産科学科3年生が昨年、食べられる花「エディブルフラワー」につい  
 て研究しました。  
 その際、本校産の食用菊が生産されました。  
 今日、食用菊を酢につけ込み発色させて酢飯にしました。  
 ☆次はズッキーニの酢味噌和えです。  
 毎年安定して静農ではズッキーニが収穫されています。  
 今回は加熱せず、ピーラーで薄切りにして、酢味噌に1晩つけ込みまし  
 た。  
 ☆なすの金平です。  
 本校産なすを鯉節で重みを足して、ご飯に合う味付けの金平にしまし  
 た。  
 ☆今回は豆腐の名前がつく料理を3種類用意しました  
 一つ目は牛乳豆腐です。  
 本校牛舎から運んだ牛乳を加熱し、お酢で固めました。  
 上に乗っている桜の塩漬は、今年の春に、食品科学科1年生で花を摘  
 み、塩漬けに加工したものです。  
 山椒なので花びらは少ないですが、濃いピンク色ができました。山椒の実  
 を添えて召し上がってください。  
 二つ目は杏仁豆腐です  
 学校の牛乳とお砂糖でシンプルに作りました。  
 本校の農場でとれた「ジェンベリー」をソースにしました。  
 食後のデザートと一緒にお願いします。  
 三つ目は牛乳ごま豆腐です。  
 手作りのごま豆腐にチャレンジしました。  
 練りごまと、くず粉に本校の牛乳を加え、弱火で丁寧に加熱して、冷蔵庫  
 で一晩冷やし固めました。  
 上にかかっている調味味噌には、農産加工部門で仕込んだ「紅麹味  
 噌」を使用しています 桃色のお味噌をお楽しみください。  
 ☆汁物は「きゅうりの冷やし汁」です。  
 学校で生産している「くろさんご」きゅうりを使っています。ごまをすった中  
 に、だしtp味噌と木綿豆腐を入れて、塩もみしたきゅうりを入れました。夏  
 ならではの冷たいお味噌汁を召し上がってください。  
 ベーコンは本校の畜産加工品で人気商品です。  
 ☆今日は、本校産ミニトマトが赤くなり、収穫ができました。  
 バジルとドレッシングで和えています。  
 フライドガーリックで少し風味付けをしました。

食後に畜産加工研究班で製造している「アイスクリーム」と農産加工部門  
 で作った自家製こしあんの「水ようかん」を用意しています。  
 ごゆっくりお召し上がりください。

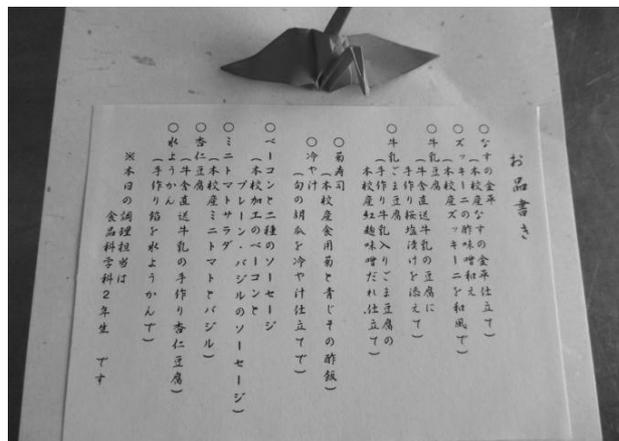


写真6 お品書き

静農ランチミーティング当日は、お客様をおもてなしする席に全  
 員が座り、和の食膳形式の学習と、調理の最終確認を行い、調  
 理を開始した。会場には農場から鉢植えの花がいくつも運び込  
 まれ、文字どおり食卓に花を添えた。



写真7 副菜

上の写真にある副菜は、左から順に「牛乳ごま豆腐」「なすの金  
 平」「ズッキーニの酢味噌和え」(写真7)である。

ズッキーニの酢味噌和えには、ピーラーでズッキーニをスライス  
 する方法を活用した。(写真8)

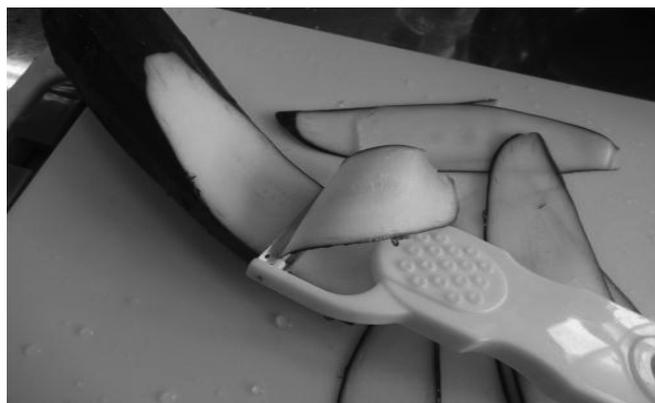


写真8 ピーラーの活用

調理実習においては「調理の基本」の授業で、切り方の名称と方法を勉強する。しかし、ピーラーできゅうりなどをスライスする方法の紹介はしない。

ランチミーティングをととして、既習事項を深めることが可能な場面の一つとなった。

今回の主食は「菊寿司」、汁は「きゅうりの冷や汁」とした。(写真9)今回の食材のなかで扱いが難しかったのは、食用菊であった。担当の先生からフリージングした食用菊を譲り受け、色々と試作を繰り返した。当初はゼラチンで固めたデザートにしたいと考えたが、見た目のきれいさだけが勝ってしまい、食材の風味が生かされない。



写真9 主食と汁

食材本来の素晴らしさを伝えてこそ、食用菊を課題研究のテーマとした生徒に応えることができるレシピであると考え苦戦した。

色々と試作を重ねた結果、菊を冷凍のままさっと湯通しすることで風味が残る酢漬けとし、その酢漬けで酢飯を作ることにした。前日に調理室に集まった生徒と共に菊の酢漬けを作り、当日はご飯を炊いて酢飯を作り、刻んだ青じそを入れる作業を行った。

写真9右の冷や汁は、漬した木綿豆腐にだし汁、すりごまを加えて味噌で調味し、スライスしたきゅうりとみじん切りにしたミョウガが入る冷たいお味噌汁である。薄切りや粗みじん切りなど、既習事項の確認ができる一品である。また、夏開催ランチミーティングにとって冷や汁の選定は、火を使わないため、調理の上では衛生面に細心の注意を払った。



写真10 牛乳豆腐

牛乳豆腐については、牛舎直送牛乳が手に入るからこそその味わいを紹介できるメニューである。美味しいと感じて貰えることが、本校の乳牛が大切に育まれた証明となる。生徒は1年次に、牛乳の酸による凝固実習で牛乳豆腐を作っている。そのため既習事項の反復学習となるが、お客様に提供するという新しい要素が加わった学習となった。

夏にランチミーティング開催が決定した春、1年生の生徒と桜の花の採取に出かけた。この1時間には2つの目標を設定した。1つ目は「生活の中に季節の移ろいを取り入れる豊かさの実践」である。静内農業高校は二十間道路に隣接する最高の立地にある。その時にしか味わうことのできない自然の恵みを生活に取り入れることは、生涯を通じ人生の楽しみになると考えている。もう1つの目標は、この桜を長く楽しむことを模索することであった。桜が咲く限られた日に授業のある食品科学科の生徒と一緒に考え、桜を塩漬けにしてみようとの案がでた。上手に塩漬けにできたら、3月に桜茶にしてみようと計画し、桜の花をとりに行くこととした。学校の敷地内にある摘んでも良い花を摘み、調理室にて塩水できれいに洗い、粗塩につけ込んだ。この時の花をランチミーティングで活用した。実際に食用にするにあたって不安要素はあった。「クマリン」である。多量に摂取すると下痢等の症状がでる成分クマリンが桜には含まれる。最終的に1年生と採取した塩漬けの桜は、ランチミーティングで牛乳豆腐に飾った。本校敷地内にある山椒の実の塩漬けも上にのせた。



写真11 杏仁豆腐と水ようかん

手作りデザートは杏仁豆腐と水ようかんとした。(写真11)牛舎直送牛乳をゼラチンで固めた杏仁豆腐は、生クリームを入れなくても濃厚な口溶けのデザートとなった。農産加工部門から提供を受けた「こしあん」で作った水ようかんを隣にのせ、食用の金箔で飾った。金箔は軽く、他のものにくっつきやすい性質の為、均等に載せる作業に時間を要していたが、爪楊枝を使い後半は器用にのせている様子がうかがえた。また、全体に甘い一皿となるデザートに変化を与えたのは、当日に農場の先生が摘んで届けてくれた木餼の実だった。杏仁豆腐に乗せられた木餼の実は、程よい酸味が全体の味の一つにまとめてくれた。



写真 12 ランチミーティング夏のお膳

お客様の前で焼いたベーコンとウインナーをのせて、2回目の静農ランチミーティングの食卓は完成した。(写真 12)

今回は終了後、まとめの時間と写真撮影を行った。ランチミーティングに出席した本校教育振興会の方から、匿名で全員にエプロンがプレゼントされた。生徒の日頃の活動に感動したとの趣旨であった。食事が終わったその足でお店に行きエプロンを買って、その日のうちにプレゼントとして届けられた。(写真 13)



写真 13 生徒といただいたエプロン

## 6 まとめ

始まりは平成 28 年、教頭先生との期首面談での会話の時間であった。「静内農業高校は凄い。生徒の取組を皆に知ってもらいたい。家庭科で何かできることはあるだろうか。」「何か考えるので是非、やりましょう。」この会話がきっかけで、ランチミーティングの場を設定して頂くことができた。会議の段取りから食事会までの流れを、当時の教頭先生は引き受けてくださり、家庭科教諭は生徒と一緒に、学習と調理に専念できるよう、さまざまな配慮をしてくださった。当時、調理室の食器類が古くなり、数がそろっていないことを聞いた事務長は、足りない食器の購入を快く引き受けてくれた。校長先生は、当日の生徒の為に、前日遅くまで残り、カレーライスを作ってくれた。もっと遡るならば、本校に異動した際にお世話になった先生の一言は、今でも心に残っている。農業高校で生産されるものの最終形は何なのか。家庭科教諭は、この恵まれた環境を生かし何が出来るのか。

われわれ教職員は、一つの学校で退職まで働く機会に恵まれることは無い。配属された学校に誇りを持ち、働く機会を得たことに感謝できるかできないかは、自分自身の取組に大きく左右されると、自己の反省を以て考える。学ぼうと入学する生徒に真摯に向き合い、与えられた環境と自分自身の研鑽で何が出来るのかを熟考することで初めて見えてくるのが沢山ある。自分の取組に限界を感じた時、自分自身を救ってくれるのは、改めて見つめ直す「今、ここにある環境」であり、共に働く人々の情熱や暖かさである。「静農ランチミーティング」を企画するに当たり学校中の方々に協力をいただき、感謝の気持ちが膨らむと共に、ここで今働くことができて誇りに思うことができた。生徒のいきいきとした表情と、積極的な取組がその思いを確かなものに高めてくれる。

## 7 今後の課題

計画があつての授業である。できるのかできないのかわからない状況では、科目の目標を捉えたうえで、年間指導計画にしっかりと位置付けることは難しい。

### (1) 授業として改善すべき点

「静農ランチミーティング」で行ってことは、年度当初にあつた計画に「+α」の形で行った。実施後のまとめは、通常の調理実習と同じまとめのワークシートのみとなっている。少なくとも、食事会の際にアンケートを行い、振り返りの授業で紹介するべきであつたと考える。また、前年度中に企画・立案し、科目の目標に照準を合わせ、「何が出来るようになったか」「どんな力が身に付いたか」を明確にし、可能性を広げるための準備が必要である。多くの人が関わる中、協力と瞬発力で乗り切った「企画」では、いくら生徒が自ら学んでも、課題を解決しながら創造的な活動を展開しても、「授業」としては不十分であり、授業者としての準備は足りていない。連携や協力のもと成り立つ授業については、少なくとも授業の計画を1年以上前に完成させる必要がある。

### (2) 「学びに向かう力」を育む授業への発展

平成 30 年度から、本校では「校内研修」を担当している。普通科、専科それぞれにどのような教育活動が行われているかを知る機会として、平成 30 年度の校内研修においては、授業参観を各教科でクロスすることを試みた。私自身においては、「農業と環境」の授業との連携授業を実施し、公開授業として設定を試みた。「農業と環境」の授業は、食品科学科と生産科学科両学科の1年次に設定されている。学習の到達目標は次のとおりである。

農業生物の育成と環境の保全についての体験的、探究的な学習を通して、農業及び環境に関する学習について興味・関心を高めるとともに、科学的思考力と課題解決能力を高め、農業及び環境に関する基礎的な知識と技術を習得し、農業の各分野で活用する能力と態度を学ぶ。

「農業と環境」の授業において、本校の生産科学科で実施される「かぼちやの栽培」から、栽培管理(収穫)にあたる時期に合わせ、収穫したかぼちやの調理実習を行った。(写真 14)科目「家庭総合」で行った実習の指導案では、目標を次の通りとした。

- ・カボチャの調理法を知る
- ・カボチャの調理・試食を通し、生産者・消費者 両方の側面で生産物と向き合うことができる

調理実習では、カボチャのそぼろ煮とカボチャパイ(写真 15)をメニューに設定した。



写真 14 カボチャ調理実習

本校の機関誌「桜樹」には、1年間を通じての「農業実習の活動反省」を生徒が一人数行書くスペースがある。生徒の活動反省抜粋を紹介したい。

農業の知識がない状態で入学し、初めて栽培したのがカボチャでした。自分達の手で播種から収穫・調理までを行い生産者、消費者両方の立場に立つ事ができました。農業の基礎や難しさも知る事ができました。来年度からは、今年度学んだことを生かし研究班活動を頑張っていきたいです。

生産と消費をつなぐ「思考力」が、次への学習意欲へつながる工夫を再考したい。



写真 15 カボチャパイ

また、科目「家庭総合」の中で「生涯の生活設計」分野を、科目の授業全体へつながるよう計画をしておいた。「生活設計の立案を通して、生涯を見通した自己の生活について主体的に考えることができるようにする」の目標について、「経済生活の分野」の授業を修正した。1年次家庭の経済分野の授業では、前半に消費行動と意思決定、社会の変化と消費生活、消費者の権利と責任、持続可能な社会循環の4つを、後半に経済のしくみを知る、ライフステージと経済計画の2つを設定している。令和元年度は後半の「経済のしくみを知る」と「ライフステージと経済計画」の中に導入として、「22歳一人暮らしの生活費の予測」を設定した。

生活費について考える項目は、「食費」「住居費」「光熱費」「被服費」「保健・医療費」「通信費」「交通費」「教養娯楽費」「交際費」「実支出外支出」「その他」の11費目とした。全生徒が予測した1ヶ月の費目別金額の平均は、次のとおりである。

食費	31,179 円
住居費	55,369 円
被服費	15,794 円
保健・医療費	8,005 円
通信費	17,702 円
教養娯楽費	16,109 円
交際費	21,440 円
実支出外支出(預貯金保険等)	37,365 円

生徒の予測については、次の授業で紹介した。生徒は、級友の予想した金額に興味を示した。322,659 円が1ヶ月に必要なと予測した金額の平均となった。自分が22歳になった時、いくら収入があるかを想像すると、生活費に不足がでると考えた生徒が多かった。その後、「家庭経済と国際経済」「給与明細から読み取る」「私たちの生活を支える社会保障制度」「人生で予測される大きな出費」について学習を進め、最後にもう一度、総務省統計局で出している全国消費実態調査からの費目別の平均金額を提示し、それぞれの費目について考える時間をとった。考えた内容は、1,000 円で買うことができる野菜、2,000 円で買うことができる肉や魚、1ヶ月に必要な調味料等である。また、通信費についてもその内訳は何かを予測し、概ね携帯電話の通信費であろうと考えた。また、被服費については1ヶ月単位で考えるのではなく、年2回の消費を12ヶ月で割って考える等の意見を出し合った。そして改めて、「22歳一人暮らしの生活費の予測」をした。最初に予想した金額と誤差が一番大きい費目は「食費」で、マイナス13,744 円の17,434 円、一番誤差が少なかったのは「保健・医療費」でマイナス3,505 円の4,500 円となった。1ヶ月の生活費の平均は、128,904 円の予想となった。

単元のまとめでおこなった、生徒の振り返りを一部紹介したい。

Q: 将来の「経済生活」について

①主体的に考えることはできましたか

はい 87%

いいえ 13%

「はい」と答えた理由)

自分で稼ぎ生活することをイメージできたから

自分の未来につながったから

「いいえ」と答えた理由)

将来を想像するのは、まだ、難しい

Q:これから身につけたい力は？

- ・先の事を考える力
- ・欲しいものを調べて購入することができる力
- ・想像し考えて生活できるようになること
- ・未来を考える力  
(今だけを考えて後悔しないように)
- ・調理ができるようになる  
(生きるため 健康管理)
- ・行動力(自分で考えて動く力)
- ・何事も全力で(頼まれたら嫌な顔をしない)
- ・コミュニケーション(人に説明できるように)
- ・あるものを活用する能力  
(無駄を無くし、物を大切にすることができる力)

生徒が「学びたいこと」を意識付けし、学ぶべき 学習に「つなぐ」。この単元の次は「住生活をつくる」の学習と、年間指導計画に位置付けている。育んだ「学びに向かう力」を生かし、主体的に住生活を営む力を育てたい。

## 8 最後に

学校全体として、どのような教育活動があり、どの分野で分担や協働することが可能か。また、それによってどのような教育的効果が高められるのか。全体像を可視化し、統合と分業することで1+1を2以上にする「機会」を設定することは大切であり、不可欠であるとする。それを校内研修において設定することができるであろうか。担当者として、これまでの取組の不足に気づかされる。

フィギュアスケートのエレメンツには「コレオシークエンス」というものがあるらしい。プログラムの最中、観客席からの歓声が一際目立つとき、それはジャンプの成功時だけとは限らないようである。その瞬間に解説者から「コレオシークエンス」のエレメンツ名を聞くことがある。キャノン・ワールドフィギュアスケートウェブによると、次のようにある。

コレオシークエンスは、いわば「プログラムの見せ場」。いかに音楽を全身で表現したか、独創的であったか、などが「GOE」で評価される。

つまり技術面といっても、単に難しい技に挑戦すれば良い訳ではない。「難しさ」と「質」の両面をどう追求するかが作戦になる。

難しい技と技を「つなぐ」ことによって、プログラムが完成し、時としてその「つなぐ」が見せ場となることもある。コレオシークエンスが、氷面を十分に活用していなければならないのであれば、氷面を「学校」に置き換えてみてはどうだろうか。大技や既に目玉となっているものだけが学校を作っているわけではない。繰り返される小さな積み重ねがつながり合って、成り立っている。

小・中・高等学校、いずれの学校においても独自に「特色ある教育活動」が展開されている。もともとある「魅力ある教育活動」と、「時代と共に生徒の実態や育成すべき力に合わせた教育活動」がある。それぞれの要素が単独であるならば、「つなぐ」ことによって学校の魅力が一つの作品となり、新たなプログラムが完成し、より生徒を輝かせることができるのではないであろうか。

教科「家庭」で扱われる分野は広い。プロジェクト学習を通じて「主体的に生き抜く力」や「協働する力」が生まれ、さまざまな実習の中で、生活者として技能を伸長し、体験的に生活文化を継承する。

平成 28 年 12 月の中央教育審議会答申に、「予測困難な社会の変化に主体的に関わり、感性を豊かに働かせながら、どのような未来を創っていくのか、どのように社会や人生をよりよいものにしていくのかという目的を自ら考え、自らの可能性を発揮し、よりよい社会と幸福な人生の創り手となる力を身に付けられるようにすることが重要である」の一文がある。

それぞれの学校に設定される教科「家庭」の中で、私たち家庭科教諭は、定められた学習内容をしっかりと成立し、そのうえでどのような工夫ができるのか、幸せな人生の創り手として主体的に生活を創造できる生徒を社会へ送り出すために、どのような授業が展開できるのか。

今後も与えられた環境から多くを発見し、「つなぐ」事を通して、在籍する生徒の3年間の可能性を広げていけるよう教育活動を推進していく所存である。

# 地域連携を軸とした福島商業高校の取り組み

## ～学校存続に向けた実践～

北海道福島商業高等学校 塩ノ入 卓 爾  
白 幡 広 大

### 1 本校の概要

#### (1) はじめに

福島町は、渡島半島の西南部に位置し、町の大部分は山林に囲まれ秀峰大千軒岳や絶景が続く岩部海岸を有する自然豊かな町である。また、北海道初の横綱である第41代横綱千代の山と第58代横綱千代の富士の誕生の地であり、夏には九重部屋の合宿なども行われている。世界最大級の海底トンネルである青函トンネルもあり、北海道と本州をつなぐ地ともなっている。

本校は商業科1間口の単置校であり、令和3年度には創立70周年となる。昭和26年に町立の北海道福島高等学校(普通科)として開校し、昭和40年には道立移管、普通科から商業科へと学科転換し、現在の校名に変更している。平成20年度より地域キャンパス校、平成30年度からは地域連携特例校となっている。

今年度の全校生徒は34名である。昨年度には全商検定1級を9種目取得する生徒を輩出するなど、生徒それぞれが目標に向けて切磋琢磨し、努力を重ねることができる学校である。生徒の進路希望は、地元志向が強く、福島町内や渡島管内に残る生徒が多い。現状として、町の人口減少とともに生徒数減少による学校存続の危機に立たされており、魅力ある学校づくりが大きな課題である。

#### (2) 校 訓

人間尊重 自主創造 信義誠実

#### (3) 学校教育目標

- ・豊かな心を持ち、健康で明るい生徒を育成する。
- ・目標を持ち、自ら創造し実行する生徒を育成する。
- ・規律正しく生き、広く社会に目を向ける生徒を育成する。

### 2 本校の様子などについて

#### (1) 生徒募集

本校は定員割れの状態が何年も続いており、今年度の入学生は、8名(0.2倍)であった。内訳は、福島町内の生徒が5名、町外の生徒が3名であり、特に町内からの進学者の割合が少ないことが数年来の課題である。これまでも

様々な取り組みをしてきたが、状況の好転が見られない。

福島町からの支援を受け、学校案内パンフレットやポスターを作成し管内へ配布を行ったり、中学生体験入学の内容等の工夫・改善に努めている。また、福島町では「福島町中等教育研究協議会」として、中高の連携を深めるため、研究授業の参観をメインとした研究会や教員間の交流を図っているが、商業高校の魅力を伝えきれていない現状である。そのような状況のなか、学校の存続をかけて、中学生や地域に選ばれ、求められる学校づくりを目指し、カリキュラムの検討を進めている。

#### (2) 部活動の活性化に向けて

現在の部活動加入状況は約82%であり、放課後等は多くの生徒が部活動やその他の活動等をしている。未加入の生徒も家庭の事情等により、アルバイトをしている。

本校唯一の商業系部活動「商業クラブ」の生徒は他の部活動と兼部をしている生徒が多く、商業に関する学習や商品開発、各種競技大会への参加等で活躍の場を広げている。運動部については、生徒数の減少と共に大会等への参加が難しくなっており、近隣校との合同チームや個人競技での参加が主となっている。また、中学校の部活動とのミスマッチを解消すべく、令和2年度に「吹奏楽クラブ」「総合文化同好会」を新設した。今後も生徒の要望に応じ新たな部活動の新設を検討していく。

#### ① 運動部

バスケットボール部 女子バレーボール部  
陸上競技部



【バスケットボール部】

#### ② 文化部

商業クラブ 家庭科クラブ 茶華道部  
吹奏楽クラブ 総合文化同好会



【吹奏楽クラブ・総合文化同好会】

### 3 生徒の進路

#### (1) 進路実績

令和元年度卒業生の進路 令和2年3月卒業

	在籍	就職	進学	その他	合計
男子	9	6	3	0	9
女子	14	8(1)	6(1)	1	15(1)
合計	23	13	9	1	23(1)

※女子(1)は就職進学者(進学にカウント)

#### (2) 就職者の地域別内定者数・就職先

	管内	道内	道外	合計	(うち公務員)
男子	6	0	0	6	2
女子	6	2	0	8	3
合計	12	2	0	14	5

- ・株式会社 桜山電気工業(2名)
- ・株式会社 北雄産業
- ・道南うみ街信用金庫
- ・大沼プリンスホテル(2名)
- ・渡島信用金庫
- ・株式会社 トヨタレンタリース函館
- ・函館どつく株式会社
- ・福島町役場(2名)
- ・福島消防署
- ・小樽市役所
- ・陸上自衛隊(自衛官候補生)

#### ① 公務員試験合格者の声(令和元年度卒業生)

##### ア 小樽市役所

議会事務局に所属しており、経済常任委員会の担当書記をしています。委員会の時に書記として記録をしたり委員長の原稿を作ったりする仕事をしています。覚えることがたくさんありますが、1つずつ自分で

できるよう、メモを取ったりしながらやっています。市役所といえば窓口業務を大半の人がイメージすると思いますが、議会は目立つこともないし、直接誰かの役に立っていると実感することは少ないです。しかし、自分の担当している委員会が無事に終了したときや定例会が終わったときは達成感があります。

#### イ 福島消防署

4月から福島消防署での勤務が始まり、6月から9月までの約3ヶ月間、消防学校での研修がありました。高校1年生の頃から消防士を本格的に目指し、3年生でどのような消防士になりたいか、真剣に考えたあの時の自分には想像できなかった毎日です。業務や訓練で失敗が続き、上手く出来ない自分に悔しく思うことが多くありました。しかし弱音を吐きそうになった時に思い出すのは、3年間の検定講習や部活動等に力を注いだ日々です。町民の方や高校の先生方に声をかけていただき、改めて周りの沢山の方に支えられていることを実感しました。

また、訓練のほか事務仕事ではコンピューターを多く使用するため、商業高校で学んだ技術や知識を活かすことができ嬉しく思います。

人命救助という責任は並大抵の努力では果たすことができないと、職場の上司や先輩方の姿から学び、今後は自分がその姿を見せられるよう努めていかなければならないと感じました。自信を持って「私は消防士だ」と胸を張れるよう、今後も努力を積み重ねていきます。

#### (3) 進学者の学校別内訳・進学先

	大学・短大	専門・各種	合計
男子	0	3	3
女子	2	4	4
合計	2	7	9

- ・小樽商科大学(夜間主コース)
- ・函館短期大学(保育学科)
- ・大原簿記公務員情報医療専門学校  
(医療事務・薬局事務)3名
- ・日本工学院八王子専門学校(自動車整備科)
- ・北海道エコ動物自然専門学校  
(動物看護ペットリマナー専攻)
- ・吉田学園情報ビジネス専門学校  
(AIシステム学科)
- ・代々木アニメーション学院(イラスト科)

#### ① 4年制大学合格者の声(令和元年度卒業生)

##### ア 小樽商科大学(夜間主コース)

大学はコロナ対策でオンライン授業のため、日中

の市役所の仕事を終えて自宅に帰ってから2、3コマ講義を受けていますが、仕事で疲れていてもやらなければならないこと、加えて家事も自分でやるため自由な時間がほとんどなく大変です。

先日、前期の単位が全て通っていたことが分かったのでこの調子で仕事と両立し、4年間で卒業できることを目標にしています。

#### (4) 東京アカデミー公務員講習・看護講習

本校は福島町の支援を受け、東京アカデミー主催の公務員講習・看護講習を開講している。令和元年度は1年生から3年生の計10名(うち3年生4名)が年15回受講し、公務員試験合格者(令和元年度卒業生)を5名輩出した。

##### ① 課題

- ・少人数のため、1年生から3年生までが同じ内容を受講している。
- ・基礎学力が定着していないため、理解度に差がある。
- ・途中で進路変更をする生徒が数名いる。



【講習の様子】

#### 4 令和元年度の取り組み

##### (1) 課題研究の各班の取り組み

###### ① 令和元年度は5つの班に分かれ実施

- ・福島町道の駅の活性化を目指す班  
(道の駅班)
- ・福島町、福島商業高校をPRする商品開発班  
2つ(商品開発1班、商品開発2班)
- ・福島町のそば(千軒そば)による町おこしを  
考案する班(調査研究班)
- ・福島商業高校をPRするための作品制作班  
(作品制作班)

###### ② 各班の取り組み

###### ア 道の駅班(テーマ:引き出し、福島町の強み)

###### (ア) 目的

福島町の魅力をより多くの方々に伝えるために福島町の道の駅の活性化について、昨年度の諸先輩方が取り組んできた道の駅の調査・研究を引き継いで行う。

###### (イ) 活動内容

##### ・アイデア会議と商品開発

昨年度福島町役場で行われた、道の駅「横綱の里ふくしま」再整備基本計画策定委員会に参加することを計画していたが、実施されなかった。

・道の駅で販売する新商品の提案・試作・アンケート

##### a.シイタケの炊き込みご飯

(福島町産横綱シイタケを活用)

- ・道の駅にはなかった、新ジャンルの商品かつスイーツ以外の充実と軽食としての手軽さのものを検討。
- ・幅広い年齢層に認めてもらえるような商品の開発。
- ・シイタケの風味が活かされている、他の具材によりシイタケの存在感が薄くなっているのではないかな等の意見をいただいた。

##### b.ソフトクリーム

- ・諸先輩が昨年度実施した道の駅に必要なスイーツ系メニューに関するアンケート結果では、ソフトクリームが人気であった。(178名中ソフトクリームの回答は70名)
- ・ソフトクリームにブレンドする材料を検討し、福島町の特産であるスルメ、シイタケ、黒米をそれぞれ粉末にし、混ぜて試食を実施。

###### a) シイタケアイス

(市販のバニラアイスに混ぜた)

シイタケのプチプチとした食感は良かったが、シイタケそのものの味が薄いこと、ソフトクリームとシイタケが調和しないことがわかった。

###### b) スルメアイス

(ノシイカとサキイカをそれぞれ粉末にしたものを市販のバニラアイスに混ぜた)

スルメの臭さ等はなく美味しいという感想もあれば、スルメの味が強く、口の中でスルメが残るという感想もあった。総合的にはスルメとアイスが喧嘩しているという結果となった。

###### c) 黒米アイス

(福島町産古代米である黒米を使用)

黒米を粉末にしたものを市販のバニラアイスに使用できないため、アイスを作り、粉末の黒米(10g)をお湯になじませたものを加えた。味は飽きのこない和風で、食感もちもち感があり、好評であった。改善点は、色合いがより黒米らしく「黒」が強調される方がよいことであった。そのため再度、黒米の粉末量を20gに増やしたことで、より好評の結果となった。

#### ・福島町のCM制作の提案

来客数を増加させるために、福島町を広報することも大切だと考え、インターネットでも広くPRできるCM制作を考えた。

##### a.内容

福島町の印象を強く残るものとして「方言」を活用することに決めた。絵コンテを作成したが、時間が足りず動画を実際に撮影することができなかった。

※ヒッチハイクをしながら全国をまわる主人公の旅人が偶然たどり着いた福島町で町を歩く女子高生に会う。福島町の良いところを聞いたら、なんとその女子高生の方言やなまりが強く聞き取れず、「続きはWEBで」と福島町のホームページに誘導する。

##### (ウ) まとめ

福島町のPRポイントは限りなくあるということ。町の特産品を活かした新商品の提案に取り組み、高校生の目線から様々な商品案を試作することができた。



【商品開発の試作を作っている生徒の様子】

#### イ 商品開発1班

(テーマ:函館の有名店とコラボ?!商品化で福島をPR)

##### (ア) 目的

福島町と福島商業高校をPRする商品として、全年齢層が楽しめる菓子を開発する。また岩部クルーズ「青の洞窟」をイメージできる青い商品の開発を行う。

##### (イ) 活動内容

###### ・開発商品の試作

日持ちのする焼き菓みに青く着色して開発を行ったが、なかなかうまくいかなかった。

###### ・企業との連携

函館の「五島軒」からアドバイス等の協力をいただき、クッキー生地着色するのではなく、クッキーに青色に着色したホワイトチョコレートでコーティングしたお菓子を完成。

「福島町まちづくり工房」に協力をいただき、パッケージに使用する「青の洞窟」の写真を提供してもらい、パッケージの制作をする。

#### ・販売実習

完成した商品を校内、フェリーターミナルで販売し、購入した方々の年齢層や購入数の調査を行った。

##### (ウ) まとめ

本校において、約10年ぶりの商品化を行えた。また商品化や販売の際には、函館五島軒様、福島町まちづくり工房様、福島町役場様、FMイルカ様、新聞各社等、多くのご協力をいただいた。

開発した商品を実際に市場に出すためには、多くの困難が存在することを実感することができた。



【クッキーの試作の様子】



【完成した商品】

#### ウ 商品開発2班

(テーマ:来たれ商品化!青で始まるお菓子づくり)

##### (ア) 目的

福島町の観光スポットである岩部クルーズをモチーフにしたお菓子を作り、観光客の増加を図る。

##### (イ) 活動内容

###### ・琥珀糖の試作

青が透き通った見た目も非常に美しい菓子(琥珀糖)を作成。福島町の「青の洞窟」のイメージに合った菓子ができた。

###### ・青いパフェの試作

通常のパフェに青く着色したゼリーをのせたものを作成。「青の洞窟」のイメージに合ったパフェができた。

###### ・黒米塩パンの試作

福島町の特産でもある「黒米」を使用したパンを試作した。黒米とパンの相性が非常に良かった。

##### (ウ) まとめ

分量や材料の精査を行い、試作品を作成したが、商品化には至らなかった。また、福島町の特産品を使用した商品開発には様々な可能性があらることが判明した。



【試作の様子】

エ 調査研究班(テーマ:そばで町おこし?)

(ア) 目的

福島町の特産品である千軒そばを用いた新商品作りのために調査、開発を行う。

(イ) 活動内容

・アンケートの実施

千軒そばの知名度等のアンケートを実施し、今後の動きにつなげる。

・千軒そばに合う調味料やレシピの考案

ナンプラーやコーレーグース、イタリアンドレッシング等、様々な調味料を使って試食を行った。

(ウ) まとめ

今までにない新しい視点から千軒そばを改良、宣伝を行うことで新たな観光客の増加につながると考えた。商品化には至らなかったが、調査研究を通して福島町の昔からの特産物である千軒そばの可能性を知ることができた。



【千軒そばのレシピ作りの様子】

オ 作品制作班(テーマ:がんばれワシでっかい空に舞い上がり)

(ア) 目的

福島商業高校をPRするための作品を制作し、作品を町内に常設で展示する。

(イ) 活動内容

・作品内容の選定

福島商業高校校長室にあるワシのはく製をモチーフにしたオブジェとした。

・材料等の検討

福島町海岸に流れ着く流木を原材料にすることに決定(流木アート)。

・作業

- a. 登下校時に、海岸に寄り流木を集める。
- b. 流木についている灰汁を抜き、雑菌等を殺菌するために、集めた流木を煮沸する。
- c. 煮沸した流木を完全に乾かす。
- d. 流木をワシの形にグルーガン・ネジ・クギなどで固定する。

・展示

完成した作品を、福島町内でも人が大勢集まる有名ラーメン店に常設展示をしていただいた。



【完成したオブジェ】

(2) 福島町中等教育研究協議会

福島町では中高連携の取り組みとして「福島町中等教育研究協議会」を実施している。令和2年度で50回目を迎える取り組みである。例年、5月末に総会(事業報告)を開催、11月には中高の授業を参観後、「系統的な教育の実現に向けた各校の在り方について～地域に根差した教育実践を目指して～」と題し、中高の取り組みについての説明、授業の中で見られた工夫について研究協議を行っている。授業参観をする際に以下の視点で参観するよう共通理解を図っている。

【視点】

- ①教科横断的な授業のつくり方
- ②学習習慣の定着について
- ③ICTを活用した授業における授業規律について
- ④基礎・基本の確実な定着について
- ⑤学力差のある生徒への対応と実態について



【研究協議会の様子】

中学校では、ICT機器の整備が進んでおり、Ipadを活用

した授業展開を実践している。本校ではICT機器の整備は十分とはいえないため、今後の授業展開を考えるうえで、非常に参考になっている。今後も継続して連携を深めていきたい。

### (3) 小中高連携事業について

小中高が連携した取り組みとして、毎年秋に福島町内で行われるカントリーフェスティバルで販売実習を行っている。被災地支援の一環として、東北や厚真町などの商品を仕入れ、販売をし、利益を被災地に募金している。高校生は仕入商品の選定、POP作成、会計の担当を務め、小中学生には当日の販売の手伝いをしてもらった。高校生が挨拶の練習や接客の仕方などを小中学生に教えるなど、コミュニケーションを図る大変重要な機会となっている。小中学生もお客様と接することで、緊張感の中にも楽しさを実感している様子が見られた。



【カントリーフェスティバルの様子】

### (4) 販売実習について(津軽海峡フェリー)

令和元年12月8日(日)に津軽海峡フェリー函館ターミナルで行われたクリスマスマーケット(津軽海峡フェリー主催)にて、販売実習を行った。「課題研究」商品開発班1班が制作したお菓子、福島町の特産品である青の洞窟サイダーを出品した。販売中はお客様からの質問への対応等、難しいこともあったが、多くのお客様に購入していただいたことで福島町、福島商業高校のPRにつながったと考えられる。



【販売実習の様子】

### (5) 苫前商業高校との連携授業について

地域連携例校の取り組みの一環として、苫前商業高校と遠隔システムを活用し、各校の課題研究の成果を発表し合った。この発表は本校で実施している課題研究発表会前のリハーサルとしての位置付けである。各校の発表内容の改善と、生徒間、教員間の交流を目的に実施し、各校1班ずつの発表ではあったが、本番さながらの緊張感があった。

また、様々な意見を交換し、他校の様子や取り組み内容を知ることができ、大変有意義な時間となった。



【遠隔システムを使った発表の様子】

### (6) 教科横断的な取り組みについて(貿易ゲーム)

- ・時間:3時間
- ・授業:2年生「世界史」「財務会計Ⅰ」
- ・概要:世界史で学ぶ貿易について、生徒15名を3つの国に分け、他国との貿易を行う。1年次の「簿記」や2年次の「財務会計Ⅰ」で学んだ会計に関する知識を活用し、他国から商品を仕入れるたびに仕訳、総勘定元帳への転記、期末には貸借対照表、損益計算書の記帳を行った。
- ・授業の流れ:3つの国は各国で商品を生産しており、収益を得るには生産した商品や生産に必要な資産を他国へ輸出、もしくは商品を教員の国へ輸出する必要がある。それぞれの国は最初の段階で保有している資産の数、現金などの財政力が異なる。そして他国とのやりとりから時間ごとに金銭の価値が変わり(世界の経済状況は適宜口頭で指示をするため、生徒たちは今後の価値の変動についてある程度の予測が可能)、最終的に利益が一番多い国の勝利となる。
- ・生徒の様子:講義形式の学習に対しては取り組みはするものの集中力が続かない消極的な生徒が多いが、実践的な学習には積極的である。また、協働的な学習にも協力する姿勢がある。この授業で日頃学んだことを活かすことができ「楽しかった」という充実感とともに、1年次の復習等もできたため、理解度が深まり非常に効果的な時間だった。



【授業の様子】

### (7) 実践的な授業について(模擬授業)

- ・時間:4時間
- ・授業:2年生「原価計算」「財務会計Ⅰ」
- ・概要:問題集に取り組む時はグループに分け、班員の中で得意な人が苦手な人に対して教える形で授業を進

めている。しかし、教える側の生徒の負担も大きいため、全員が教える側に立てるように考えた。そこで、ただ教えるのではなく、ICTの活用や人前に立ち、論理的に話す練習も兼ねた模擬授業を行った。

・授業の流れ: 生徒全員に取引と仕訳のみを伝え、解説は自分で作成するよう指示した。その際「口頭での説明だけでは聞き手が飽きてしまう」「話し方のトーン、抑揚なども大事」という2点を伝え、2時間かけて視覚教材や指導案、板書案を作成させる。2時間の発表時間ではランダムに当てられた生徒が教壇に立ち5分以上授業を行う条件で進めた。

また、生徒同士で「分かりやすさ」「伝えようとする意欲」「声の大きさ」等の観点で相互評価をすることで集中して授業に参加した。

・生徒の様子: 夏に1回、その後時期を開けて冬に1回行った。夏に実施したときは、緊張して上手く話せない生徒が多かったが、冬には要領をつかみ上手に授業を展開する生徒が多かった。授業後の感想では「先生の立場になって改めて人に何かを伝えることの難しさを感じた」「日頃の授業をもう少し真剣に取り組まなければいけないと感じた」等の意見が多く出てきたことから、効果的だったと考える。



【生徒による模擬授業の様子】

## 5 令和2年度の取り組み

### (1) 課題研究の各班の取り組み

#### ① 令和2年度は、3つの班に分かれ実施

- ・福島町をPRするための商品開発班  
(商品開発班)
- ・福島町をPRするための作品制作班  
(作品制作班)
- ・販売実習を通して福島町、福島商業高校をPRする班(販売実習班)



【ワールドカフェ方式による意見交換】

### (2) 各班の取り組み

#### ア 商品開発班

(テーマ:新しい情報を広げるために福島町に魅力的な何かを作るためにインパクトのある商品作り)

##### (ア) 目的

福島町をPRするためのインパクトのある商品を開発するために、アンケートを使用し、知名度を調査する。

##### (イ) 活動内容

#### ・商品開発

##### a.パン

連携先企業が見つからないこと、新型コロナウイルス感染症の影響から食品開発は厳しいと感じたことから断念した。

##### b.トイレットペーパー

渡島四町の特色を記載したトイレットペーパーを考えた。しかし、費用面の問題で開発が厳しいと考えたことから断念した。

##### c.琥珀糖

日持ちし、色に特徴を出すことで多くの人の目に留まるような商品を作るために考案した。また、渡島四町をイメージした色味を着色することに成功。それぞれ各町をイメージさせる色にした。

福島町:青 知内町:緑

木古内町:黄色 松前町:赤

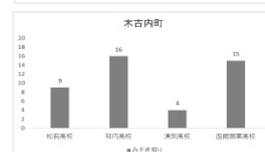
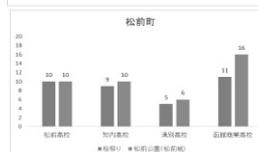
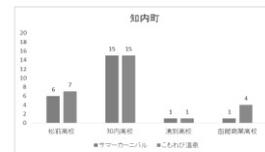
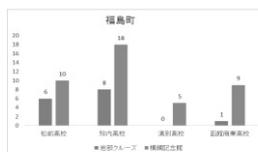
今後も試作を重ね、商品化を実現させていきたい。

#### ・アンケート調査

渡島四町の知名度のアンケート調査を実施。

対象は松前高校・知内高校・湧別高校の教員、函館商業高校流通経済科3年生とした。結果は次の通りとなった。

福島町	施設・イベント名	松前高校	知内高校	湧別高校	函館商業高校
福島町	岩部クルーズ	6	8	0	1
	横綱記念館	10	18	5	9
松前町	施設・イベント名	松前高校	知内高校	湧別高校	函館商業高校
	桜祭り	10	9	5	11
	松前公園(松前城)	10	10	6	16
知内町	施設・イベント名	松前高校	知内高校	湧別高校	函館商業高校
	サマーカーニバル	6	15	1	1
	こもれび温泉	7	15	1	4
木古内町	施設・イベント名	松前高校	知内高校	湧別高校	函館商業高校
	みそぎ祭り	9	16	4	15



【アンケート集計結果】

## イ 作品制作班

(テーマ:福島町のPR)

### (ア) 目的

福島町の未開の地を観光スポット化するために、パンフレット等を作成する。

### (イ) 活動内容

#### ・卓上カレンダー作成

福島町の景色を入れた卓上カレンダーの制作を考案。しかし、福島町で既にカレンダーを制作し、各家庭に無料で配布していることから断念した。

#### ・鹿の角を使ったストラップ制作

野生のシカが落とす角を使ったストラップを制作しようと考案。しかし、既に福島町で鹿の角を使った印鑑を販売していることから断念した。

#### ・釣りマップ(プロトバージョン)

町内では釣りが盛んであり、近隣の町から釣りに来る人が多くいる。初心者向けに地元民が選ぶ釣りスポットを探し、マップを制作することで観光客の増加を狙う。



【マップ掲載用料理の様子】

## ウ 販売実習班

(テーマ:福島町の活性化のためにSNSやポスターを活用し岩部クルーズを知ってもらう)

### (ア) 目的

福島町への観光客の増加を目指し、既存の観光産業の更なる知名度を上昇させるための方法を考える。

### (イ) 活動内容

#### ・渡島4町の特産物を使ったイベント計画

福島町、知内町、木古内町、松前町の4町合同でイベントを行い、知名度の上昇を考えたが、新型コロナウイルス感染症の関係もあることから断念した。

#### ・福島町の岩部クルーズの宣伝

高校生目線でポスターや動画を作成し、近隣の施設やSNSでの宣伝を行うことで更なる観光客増加を狙いとして計画。



【イーゼル制作の様子】

### ③ 今後へ向けて

12月の学習成果発表会に向けて研究を進めていくとともに、各班が福島町に財産を残すことや、一人ひとりが財産(人財)となるよう指導を継続していく。

### (2) 福島町中等教育研究協議会について(令和2年度実施予定)

11月5日に実施予定。今年度は中高合同で授業を計画。

#### ・道徳に関する授業(中1と高2)

郷土の伝統と文化を題材とし、中高での異なる視点での意見交換を行う。

#### ・キャリアに関する授業(中2と高3)

高校生が中学生に職業観に関し、対話形式で実施

#### ・英語に関する授業(中3と高1)

英語でのディベートを実施

昨年度は授業参観と教員間の意見交換を主としていたが、今年度は生徒同士が交流する時間を多くし、相互理解を図るとともに、成長の機会となるよう設定した。

### (3) 町との意見交換

#### ① 「福島中&福島商業高校生徒会役員と町長等との意見交換会」(報告)

開催日時 令和2年7月7日(火)

16:10~16:50

会場 福島町役場2F 健康づくり研修室

報告者 塩ノ入 卓爾

・意見交換会において、本校生徒会執行部5名は、しっかりと提言を話すことができた。町長、副町長、教育長、中学生からの質問についてもしっかりと答えていた。

#### ア 特記すべき内容

##### (ア) 中学校生徒会から

・ポスターやパンフレット等に詳しい情報(説明)を入れて欲しい。

→制服の良さのアピール、商業クラブの活動内容等、魅力を詳しく入れる。

・学校説明の際、堅苦しい方でなく説明等を明るくして欲しい。中学生体験入学に参加した際に面白

い先生がいたので、そのような先生が説明して欲しい。

・グローバル化をもっとアピールして欲しい。オーストラリアの見学旅行だけでなく、グローバル化なので商業で英語教育の強化をして欲しい。

・福島商業高校の部活動について、美術部や吹奏楽部、女子バスケットボール部があれば入学したいと思う中学生がいる。

(イ) 町長及び中学生からの質問「なぜ福島商業高校を中学生のときに進路先として選択したのか？」に対する回答

生徒A:パンフレットに記載されていた検定試験に強いことを知ったから。

生徒B:地元での進学。検定取得が普通科より多くできること。

生徒C:家庭の事情。先輩から商業の魅力を聞き、特に検定の合格者が多いこと。

生徒D:普通科にはない別のことを学べる商業科に魅力を感じたから。

生徒E:地元での進学。検定試験で合格者が多いこと。

(ウ) 福島町のゴミについて、本校生徒からの提言により町長から、高校でも町をきれいにするためのゴミ拾い等のボランティア活動の協力を依頼された。



【町の意見交換の様子】

## ② 地域連携特例校との連携

今年度は苫前商業高校や下川商業高校等との地域連携特例校同士の連携を予定しているが、新型コロナウイルス感染症による年間計画の変更もあり、日程調整がうまくいかず実施には至っていない。実施予定としては①「遠隔システムを用いて、課題研究の中間成果発表会を相互に行う」②「生徒間、教員間の交流を行う」ことである。

## ③ 商業クラブについて

(各種検定対策、商品開発研究)

今年度より多様化する生徒のニーズに応えるため「ワープロ部」から「商業クラブ」へ名称を変更した。

ア 活動内容

・各種競技大会へ向けた練習

ワープロ競技大会や簿記競技大会に向けた取り組みを行っている。

・上級の検定、検定合格に向けた学習

受験者同士で協力し合いながら取り組んでいる。

・商品開発

今年度は昆布ラーメンの商品開発を目標に試作品制作に取り組んでいる。



【商業クラブ員の活動風景】

## ④ その他

新型コロナウイルス感染症による臨時休業に伴い、商業科でオンライン授業を次のとおり2回実施。

・動画配信サイト「YouTube」に簿記、原価計算の教材動画を配信

・ビデオ会議アプリケーション「Google Meet」を使った原価計算の双方向授業

保護者や生徒からは好評の声をいただいたほか、今年度簿記検定の合格者も輩出することができたため、効果的だったといえる。



【実際に配信した簿記の解説動画】

## 6 終わりに

本校の直近の課題は、学校存続である。これまでも様々な取り組みを商業科教員が行い、地域との連携や近隣中学校へのPRを行ってきた。今後は商業科教員が中心となりつつも、より学校組織として全教職員が町や近隣町村との連携を深められる体制を作っていく。また、これまでは学校の魅力として高い資格取得率を打ち出していたが、今一度、資格取得の在り方について見直し、資格取得を通してどのような力を身に付けさせたいかを明確にしておく。

これまでの取り組みを活かしながら地域との連携を密にするとともに時代に即した教育を目指し、渡島西部唯一の商業の専門学校としての魅力ある学校づくりを進めていく。



# 研 究 紀 要

第 59 号

令和 4 年 3 月

北海道高等学校教育研究会



# 高校国語科における「話すこと・聞くこと」の授業実践に向けて

## －先行実践の成果と課題－

苫小牧高等商業学校 山田千春

### 1. はじめに

令和4年(2022年)から、高校でも新学習指導要領が本格実施される。高校国語科については、共通必修科目の「国語総合」(4単位)1科目から「現代の国語」「言語文化」(各2単位)の2科目へ、選択科目の「現代文」「古典」「国語表現」が「論理国語」「文学国語」「古典探究」「国語表現」(各4単位)の4科目へ変更された。これだけでも大きな改革<sup>(1)</sup>だといえるが、さらに、複数の領域(「A話すこと・聞くこと」「B書くこと」「C読むこと」)を持つ全科目において、それぞれの領域の指導時間が単位時間数として明確に示された。<sup>(2)</sup>

中央教育審議会答申において、高校国語科は「教材の依存度が高く、主体的な言語活動が軽視され、依然として講義調の伝達型授業に偏っている傾向にあり、授業改善に取り組む必要がある」<sup>(3)</sup>ことが指摘されていたが、国語ワーキンググループの会議<sup>(4)</sup>の中でも、高校現場にいる委員より、国語科の授業における課題が発言され、そのような高校教育の現場の実態が、今回の学習指導要領改訂に影響を与えたと考えられる(野村2019:16)。実際、我々の目の前にいる生徒が、相手に伝える力が不足し、「話すこと・聞くこと」の指導の必要性を強く感じることもあっても、高校国語科の授業の中で「話すこと・聞くこと」の領域が扱われることは極めて少なかった。そのような意味から、共通必修科目の「現代の国語」において「A話すこと・聞くこと」の指導を20～30単位時間程度扱うと増加して示された意義は大きく<sup>(5)</sup>、今までの高校国語教育が大きく変わろうとする兆しを感じられる。

新学習指導要領には、そのような期待感がある反面、高校教育の現場においては、戸惑いと不安が存在しているのも確かである。それは、今まで高校国語科の授業の中で「話すこと・聞くこと」を扱った経験が乏しく、その領域に関して自信を持って指導している教員は極めて少ないからである。高校国語教育の改善を目指して、今回の学習指導要領でその筋道が示されたとしても、このままでは、その課題を克服することができず、改革に至らない可能性も十分に考えられる。

そこで、現在の指導実績が乏しくても「話すこと・

聞くこと」に関する授業の先行実践を参考にして、自らの授業を組み立てていく研究の必要性があるのではないだろうか。そのため、本稿では、高校国語科における「話すこと・聞くこと」の授業実践の事例を紹介する。さらに、その授業実践の成果と課題を整理し、今後の高校国語科において、「話すこと・聞くこと」の授業をどのように構想すればよいのかポイントを提示していきたい。

では、そもそも、今まで高校国語科の授業において「話すこと・聞くこと」の授業があまり扱われてこなかったのはなぜだろうか。授業実践を紹介する前に、まずは、その理由を整理していきたい。

### 2. 「話すこと・聞くこと」の授業が扱われにくかった理由

今まで高校国語科の授業において「話すこと・聞くこと」が扱われてこなかった理由について、4つのことが考えられる。

第1の理由は、既に指摘されているように、大学入試との関係が考えられる。これは、国語科の授業に限らず、受験科目の授業全体にイえることであるが、多くの高校では大学入試に対応できる教科指導が求められてきていた。よって、大学入試には必要がない「話すこと・聞くこと」の領域は重視されることがなかったであろう<sup>(6)</sup>。まずは生徒への読解指導ありきで受験にも対応し、「書くこと」ですら取り立てて、十分な指導を行ってきたわけではない。(推薦入試等で小論文を必要としている生徒に対しては、個別に「書くこと」について指導をする機会はあったと考えられるが)

第2の理由は、授業秩序の維持が考えられる。特に、大学進学者の極めて少ない高校においては、授業の成立を優先していかなくてはならない学校もある。教師の講義形式でない、生徒の活動的な授業を展開することによって、授業秩序の維持が難しい状況になるケースもある。また、授業秩序の崩壊とまではいなくても、基礎学力不足の問題から、全く文章を書くことができない生徒や、クラス内で「話すこと」が困難な生徒も一定数存在し、授業秩序の維持とは別に、指導困難な場面に陥ることもある。そのような非進学校

の生徒の状況からも、「書くこと」「話すこと・聞くこと」の授業は避けられ、外側から見れば授業らしく見える「読むこと」中心の授業が、教師によって選ばれてきたのではないかと考えられる。

第3の理由は、高校の評価の仕方が考えられる。小学校・中学校においては、観点別学習状況の評価が積極的に取り入れられてきた。今回の学習指導要領の改訂では、中学の国語科も「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」に観点別学習状況の評価項目が変更されたが、それ以前の観点別学習状況の評価項目は、「国語への関心・意欲・態度」「話す・聞く能力」「書く能力」「読む能力」「言語についての知識・理解事項」であった。年度初めに作成する各校の年間指導計画には、観点別学習状況の評価に際して評価規準が具体的に示され、それをもとに観点別学習状況の評価が行われてきた。それによって、中学の国語教員の意識は、「読む能力」以外にも「書く能力」「話す・聞く能力」「言語についての知識・理解事項」にも向けられるようになり、中学国語科の授業は「読むこと」への偏りが緩和されていったのではないかと考えられる。一方で、高校は今まで中学校のように観点別学習状況の評価を積極的に行っている学校は極めて少なく<sup>7)</sup>、定期試験の結果と日常の授業の取り組みによる5段階(学校によっては10段階)の評価・評定のみが行われてきていたので、「読むこと」を中心とした指導のみで授業が完結してしまっていたのかもしれない。

第4の理由として考えられるのは、国語科教員が「話すこと・聞くこと」に関する授業を受けることなく教員になってしまい、指導方法や評価方法、評価規準が明確にされていない「話すこと・聞くこと」の指導に苦手意識をもっているからである(神田2013)。教員自身が高校時代に「読むこと」中心の授業に慣れており、その流れを再生する形で、「読むこと」中心の授業が現在も高校国語科で継承されていると考えられる。

以上、高校国語科において「話すこと・聞くこと」が授業であまり重きをおかれてこなかった理由を整理したが、本稿では、第4の授業に対する苦手意識の改善を目指し、次節では、授業の先行実践を紹介していく。

### 3. 「話すこと・聞くこと」の授業実践

それでは、高校国語科の授業における「話すこと・聞くこと」の授業実践を6つ紹介していきたい。実践1は、「緊張感を減らし、関心や動機付けを高めるといった情動的な側面において工夫を行うことで、比較的取り組みやすい『話し合う』学習を行い(中略)、

『話し合う』力やひいては『話す』力の向上」(関根2009:173)を目指した授業である。授業者が、予め行った生徒へのアンケート調査によると、「話し合う」学習に興味を示さない理由として「話すとき、緊張感や不安感があって話しづらい」ことをあげていたことから、検証授業では一貫して5、6人の小グループで、話し合いを行うという生徒の情意面への配慮が行われていた(関根2009:173)。1学年の国語総合の時間に4回の検証授業が行われている。それぞれの授業の概略を表1に示す。

表1 実践1の指導概略

<b>第1回 小説「羅生門」</b>
「下人の生き方の変化」といった主題の読解について討論、発表する。(5、6人の小グループ)
<b>第2回 「国語表現(スピーチ)」</b>
「夏休みの思い出」について作文を書き、スピーチし、質疑応答をする。(5、6人の小グループ)
<b>第3回 評論「水の東西」</b>
評論を読解し主題である「東西文化の比較」について討論、発表する。(5、6人の小グループ)
<b>第4回 「国語表現(話し合い)」</b>
「電車内のマナー」という記事を読み、マナーについて討論、発表する。(5、6人の小グループ)

出所:関根泰三(2009)『話し合う』力の向上をめざす国語科学習指導『研究紀要』第23号(平成21年度)川崎市総合教育センターのP174、P175より引用。

小グループを編成し、話しやすい環境を作っているだけではなく、教科書教材の主題学習からテーマを設けて「話し合う」学習が展開されていること(第1回、第3回)、高校生が関心を持つであろう時事問題や身近な問題をテーマとして「話し合う」学習が行われていること(第2回、第4回)、スピーチを聞いて疑問点を質問したり、それに対して応答したりと「双方向」の「話し合い」学習が進められていること(第2回)、グループ内での相互評価や自己評価が行われていることなど、「話す」「話し合う」学習に対して生徒の関心・意欲を高める工夫が凝らされていた。その結果、検証授業後の生徒のアンケートでは、「話す」「話し合う」学習に対する生徒の関心が授業前よりも明らかに高くなっていった(関根2009:176)。

実践2は、古典において読みを深め、作者の視点や感性を理解し、かつ、意欲的・自主的に学ぶ態度や力を育成するために、生徒同士のコミュニケーション活動を取り入れた授業である(平川・藤本2016)。対象学年は2学生。教材は、「木の花は」『枕草子』(古典B)で、内容や主題に踏み込んだ問い立てを生徒に考えさせ、ペア、グループで練った後に、代表がグループの問い立てを、クラス全体の前で発表を行っている

る。指導の概略を表2に示す。

表2 実践2の指導の概略

<b>1～3時間目</b>
作者作品についての確認。音読。重要語句・文法事項に留意しながら口語訳をする。作者の視点・文学的素養について理解する。
<b>4～5時間目</b>
生徒1人1人が内容や主題に踏み込んだ問い立てを考え、それに対する解答解説を作成する。
<b>6～7時間目</b>
ペアで問題を交換し問題を解き、相手の解答解説を受け取って自己採点を行う。その後、互いに出題の意図や解答者の感想・アドバイスの順に相互に伝え合う。次に、4～5人の班を作り、その中で問い立てを練り直す。各班の問い立てとその出題の意図を代表がクラスで発表し、生徒は互いの班の発表を聞く。

出所：平川真由美・藤本絢也（2016）『『生徒同士のコミュニケーションを通して、意欲的・自主的に学ぶ態度や力』の育成』『熊本県立教育センター共同研究2016研究紀要パンフレット』45集をもとに作成。

生徒への授業後のアンケートでは、特に「古典の授業の中で、グループ内で課題を考えたり、解決したりする方法を工夫して取り組むことがある」「自分は、新しい古典の問題や課題に出会ったときに、それを解いたり、解決してみたいと思う」「自分は古典の授業を通して、『重要なポイントを見抜く力』が高まっていると思う」などの項目で著しい効果がみられ、古典に対する意欲や重要なポイントを見抜く力が高まっていることがわかる（平川・藤本2016）。この実践は、生徒同士のコミュニケーション能力の向上を主たる目的としたものではないが、ペア、グループでの話し合い活動を行うことで、授業者が生徒に付けさせたいと考えている力を身につけつつあり、「読むこと」の学習に「話すこと・聞くこと」の学習を意図的に取り入れることにより、学習効果をあげている事例と考えられる。

実践3は、国語表現の授業において、「話す力・聞く力」を育てる方法として、民話を活用した授業実践である（喜納2016）。「民話は記録されずとも長い年月の間消えることなく語り継がれたことを考えれば、人々の興味・関心が高く、聴きたいという欲求を満たすものであったらうし、語りたくなる内容を持っていたものだ」という理由から授業者は、「話すこと・聞くこと」の学習に民話を教材として取り入れている（喜納2016）。これは、沖縄の高校での実践であるが、生徒が郷土の文化を大切にし、継承していくという観点から（喜納2016）も興味深い授業だといえる。指導の概略を表3に示す。

表3 実践3の指導の概略

<b>1時間目</b>
沖縄の民話の現状、資料的価値を考え、「民話を聴き、語る」手順を指導する。教師が民話を語り聴かせ、あらすじを生徒が書く。語りに適した発声、話し方を指導し、実演する。
<b>2時間目</b>
1つの民話を4つの場面にわけ、場面わけした内容を班長に伝達。班長が班内で民話を読み上げ、あらすじ、内容の確認。その後、2人ペアになった語りの練習を行う。声の大きさ、抑揚、間の取り方、身振り等の工夫、島くとうば（「島言葉」、沖縄の島々で伝えられてきた言葉）を入れることを留意させながら語りの練習をする。その後、班を入れ替え（4つの場面を語るができるメンバー構成にする）班内で語り、語り終えたら、ワークシートで話全体の内容を確認する。
<b>3時間目</b>
代表の班が全体の前で、民話全体を通して語る。他の生徒は、自分の表現と比べながら民話を聴く。民話の資料的価値を確認し、最後に、聞く力・話す力の大切さを確認するとともに、民話の価値と、語ることの意義を考える。

出所：喜納弘子（2016）「国語表現における『話す・聞く力』の育成－関心・意欲を喚起する為の民話資料の教材化を通して（第3学年）－」前期・離島長期研修員 第60集 研究集録（沖縄県立総合教育センター）をもとに作成。

この実践の成果として授業者は、「生徒のアンケートと感想から民話を聞き取ることへの興味関心を示し、語る活動の生徒の様子からも意欲的に取り組んでいた」「聞き取る力がついた」「物語を話し言葉で表現する力が付いた」という3点をあげ、課題として、「表現を工夫したり島くとうばを入れるために、もっと時間をかけて取り組ませる必要があったこと」「本単元の発展授業として生徒自身で民話を再話する学習に取り組ませること」（喜納2016）の2点をあげている。

実践4は、令和2年度から令和3年度の2年間、国立教育政策研究所教育課程研究指定校事業（高等学校国語）に指定されている北海道七飯高等学校の令和2年度の取り組みである<sup>8)</sup>。「実生活に必要な『話すこと・聞くこと』で育成する言語能力を身に付けるための学習指導及び学習評価の在り方に関する研究」を研究主題として、生徒の実態把握（基礎力診断テスト、アンケート）を実施、分析して、それをもとに指導内容の検討、授業の実践、指導の評価が行われた。令和2年度の取り組みでここで取り上げておきたいのが、早口言葉に挑戦し、発声や滑舌の方法を考える授業である。指導の流れは表4のとおりである。

令和2年度の取り組みとして、「聞くこと・話すこと」についての評価規準を明確に示すことができなかったという課題をあげているものの、動画の活用や自らの話し方を撮影し改善に役立てている点について

は、ICT機器の積極的活用という点で興味深い。ICT機器の活用は、これからの「話すこと・聞くこと」の授業において有効である。また、コロナ禍において、グループ学習や話し合いが安全に進められるように、パーテーションを導入し、グループでの話し合いが行われている点も配慮されている。

表4 実践4の指導の概略

- |  |
|--|
| (1) 歌舞伎役者・声優・アナウンサーなどの動画を見て、気付いたことを意見交換。<br>(2) 動画などで滑舌や発声・呼吸法などを調べ、自分なりの「意識、作戦」を決めて練習。<br>(3) 自撮り動画を取り、自己評価→改善を考える。<br>(4) チームで練習し、相互評価→改善点を考える。<br>(5) チームで動画を撮影し、お互いの良さを交流する。 |
|--|

出所：国立教育政策研究所ホームページ 令和2年度国立教育政策研究所教育課程研究指定校事業研究協議会（高等学校国語）「実社会で必要な『話すこと・聞くこと』で育成する言語能力を身に付けるために」北海道七飯高等学校 ([https://www.nier.go.jp/kaihatsu/kyougikai\\_r02/pdf/20210204PM-nanae.pdf](https://www.nier.go.jp/kaihatsu/kyougikai_r02/pdf/20210204PM-nanae.pdf)) より引用。

実践5は、「キャリア教育の視点から実社会でのコミュニケーション能力を育成するために、言語活動の運用を意識した」（木村 2019:63）授業の取り組みである。授業者は、民間企業で働く社会人を対象に取材を行い、その結果から「実社会でのコミュニケーション能力」については「相手に自分の意思を的確に伝達し、また、相手の意図を丁寧に汲み取り、主張の差異を調整して一定の合意をえること」と定義し（木村 2019:64）、若者の実社会でのコミュニケーション能力の課題については、仲間内でない相手とのコミュニケーションが苦手であることと、相手に対して積極的に質問しようとする姿勢が欠けていることを明らかにした（木村 2019:65）。さらに、先行研究より、インタビューがコミュニケーション能力を育成するにあたり有効であったことから、社会人のゲストティーチャーを招き、生徒3、4名のグループで社会人にインタビューを行っている。表5に授業の概略を示す。

授業者は、実践を振り返り「生徒の様子から、本実践で取り組んだインタビューを計画する授業は、高校生が実社会でのコミュニケーションと向き合ううえでの有効な事例になりうる可能性がある」と述べている（木村 2019:70）。授業を通して課題はあるものの、高等学校におけるキャリア教育を意識した教科の授業実践が少ない中で、授業者は、本実践が「今後の高等学校における教科を活用したキャリア教育の実践に繋がること」を期待していた（木村 2019:72）。

表5 実践5の指導の概略

<b>1 時間目</b>
インタビューを行うために必要な準備や計画について具体的に生徒に考えさせる。その際、実社会（企業）での出来事を想定したストーリーから学んでいく。
<b>2 時間目</b>
グループごとにまとめたインタビュー計画について代表者が発表する。その後、ゲストティーチャーから講評をもらい、さらにインタビューを行う際に重要なポイント（インタビューのポイント）を話してもらう。
<b>3 時間目</b>
社会人のゲストティーチャーをグループで囲み、質問が途絶えないように生徒がインタビューを行い（5分）、「プロフィールには書かれていない意外な一面を探る」ことを行った。インタビュー終了後、「プロフィールには書かれていない意外な一面」をグループで話し合い、発表に備える。
<b>4 時間目</b>
「プロフィールには書かれていない意外な一面」をグループごとに模造紙を使用して発表。また、実社会の中でコミュニケーションをとる際に必要なことや、今後、身につけておくことが大切だと感じたことについても模造紙にまとめ発表した。

※1、2時間目と3、4時間目が連続で実施されている。  
出所：木村誠二（2019）「インタビューを活用したコミュニケーション能力育成のための授業実践研究—高等学校普通科の国語科授業で展開するキャリア教育—」『授業実践開発研究』第12巻（千葉大学教育学部授業実践開発研究室）をもとに作成。

実践6は、「聞くこと」の能力を分類し、先行実践等を参考にして、それらの能力が測れる「聞くこと」の評価テストを作成し、評価テスト実施後、評価方法を検証したものである（神田 2013:182）。「話すこと・聞くこと」の学習活動が高校で活性化していかない理由として、「聞くこと」に関わるテストが存在しないことを指摘し（神田 2013:173）、その活性化を目指し、先行研究等を参考に評価テストの作成を試みている。授業者は「聞くこと」のなかでも特に「推測・確認・修正」<sup>9)</sup>しながら聞く力を養うことを主眼とし、先行研究を参考にして「推測・確認・修正」の能力を表6のようにさらに細かく分類している（神田 2013:177）

次に、先行実践を参考に表6の個々の項目を測ることができるリスニング評価テストを作成し、勤務校で実施している（神田 2013:178）

全体的なリスニング評価テストの正答率は、[確認]「②必要な情報を選んで正確に聞くことができる」91.3%、[確認]「⑤メモを取り、思考を整理しながら聞くことができる」92.4%と高く、[推測]「④話の内容が不足している点を考えて聞くことができる」72.5%、[確認]「①聞きながら自分の意見をまとめることができる」77.5%と低かった。また、(表

6) の個々の項目ごとに各設問が作成されているので、生徒自身が自分の「聞くこと」の能力を把握することも可能である(神田 2013:181)。授業者は、「聞くことの能力の分類」(表6)の仕方に改善の余地がある点や、より正確で客観的な評価となるようリスニング評価テストの作成を今後の課題として述べている(神田 2013:183)。

表6 「聞くこと」の能力の分類

<p><b>1 推測</b></p> <p>①事実と意見を区別して聞くことができる。</p> <p>②論理の展開を予想しながら聞くことができる。</p> <p>③既に持っている情報や他の情報との関係を考えて聞くことができる。</p> <p>④話の内容の不足している点を考えて聞くことができる。</p> <p>⑤相手の立場、場所、機会に応じて聞くことができる。</p> <p><b>2 確認</b></p> <p>①聞きながら自分の意見をまとめることができる。</p> <p>②必要な情報を選んで正確に聞くことができる。</p> <p>③話の主題や要旨をとらえて聞くことができる。</p> <p>④主張の妥当性、または主張を支える根拠の信頼性を判断しながら聞くことができる。</p> <p>⑤メモを取り、思考を整理しながら聞くことができる。</p> <p><b>3 修正</b></p> <p>①話の内容を自分の生活や意見と比較しながら聞くことができる。</p> <p>②話し手の立場や話の内容を考えて批判的に聞くことができる。</p>
---

出所：神田恵美子(2013)「高等学校における『聞くこと』の指導の活性化を目指してーリスニング評価テストを通じてー」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要別冊』20(2)、P178より引用。

#### 4. 先行実践から学ぶ事

以上の先行実践から学ぶ事は、1つ目にクラス全員の前で「話す」だけではなく、ペア・グループ・クラス全体と様々な形態を取り入れて「話すこと・聞くこと」の学習が行われている点である(実践1・実践2・実践3)。これはクラス全員の前では緊張して話すことができないが、ペアやグループであれば、緊張感が和らぎ話しやすくなるという生徒の情意面に配慮し、小グループの学習形態を採用していたり(実践1)、小グループに留まることなく、班長などの代表生徒になるがクラス全体の前でも「話すこと」の場面を最後に設定することによって、小グループで取り組んでいた自らの活動を振り返らせる機会を作っている(実践2・実践3)。中でも、実践3の沖縄の民話を活用した授業については、4つの場面ごとに聞いていた民話が最終段階で1つの民話へと完成するという展開になっており、生徒の「話すこと・聞くこと」の活動を大いに活性化させる工夫がなされていた。

2つ目は、読解指導を深めていくために「話すこと・聞くこと」の活動を重視している点である。実践1の

「羅生門」「水の東西」や実践2の「木の花は」は、事前に読解指導や語句・文法や現代語訳の解釈が行われた後に、作品の主題と関連性のある問題を個人に考えさせ、ペアやグループで「話し合う」学習活動が展開されている。特に、古典に対して興味関心が低い傾向にある生徒でも、ペアやグループでの話し合いで、自らの問い立てを練り直したことによって、作品への理解が深まり、古典に対する親しみを持つようになっていた。

3つ目は、教科書教材だけではなく、生徒が主体的に取り組める自主教材を導入している点である(実践1・実践3・実践4・実践5)。高校国語科は、教科書教材への依存度が高いと指摘されているが、「話すこと・聞くこと」の授業に関しては、自主教材が比較的取り入れやすいのかもしれない。そのような特徴を活かしつつ、指導している生徒の実態も踏まえながら、生徒が関心を持つテーマを見つけ、教材をよく練り計画的に指導されていた。中でも、沖縄の民話を活用した授業(実践3)では、郷土文化の良さを発見し、それを大切に継承していこうとする心を育成することが可能な教材であり、北海道も地域独自の題材を教材化することができないかどうかなど、地域の素材を積極的に取り入れる視点を与えてくれる。

4つ目は、学外のゲストティーチャーの活用などキャリア教育を結びつけて実践していることである。学校の中で、学外の方と話すことを設定することはあまりないし、ゲストティーチャーが一方向的に講義することはあっても、生徒と対話をすることはほとんどない。それを、インタビューとして対話を実現させたこと自体に意義があると考えられる。また、国語科として「話すこと・聞くこと」の指導のみならず、キャリア教育とも関連づけながら実践している点は、横断的な学習の例(国語科と進路指導もしくは総合的な学習)としても興味深いのではないだろうか。

5つ目は、ICT機器を活用して自らの話し方を評価したり振り返ったりしている点である。「話すこと・聞くこと」の評価は、観点を絞り、迅速にかつ的確に判断しなくてはならない(神田 2013)が、ICT機器を活用し話し方を録画することによって、教師も生徒も客観的に時間をかけて評価や自らの話し方について振り返ることが可能となる。現在、高校教育にも普及しつつある1人1台端末を積極的に活用することにより、「話すこと・聞くこと」の学習が、より充実していくのではないかと考えられる。そのような可能性を実践4は示してくれているといえる。

6つ目は、聞くことを客観的に評価できるリスニング評価テストを作成した点である。生徒の聞き取りについて、評価規準を設定することが難しい中で、聞く

ことを詳細に分類化し、過去のリスニングテストを参考にリスニング評価テストを作成した点、それを採点したら自らの聞くことの改善項目が明らかになる点は、国語科の「話すこと・聞くこと」の領域だけに留まらず、生徒の学習活動全般においても活用していくことができる。「聞くこと」の能力の分類やより客観性のあるリスニングテストの作成など、さらに改善を加える必要性を授業者も課題として指摘しているが、高校国語科のリスニング評価テストの先駆的な研究であるといえる。

以上が、「話すこと・聞くこと」の先行実践における成果である。次に課題を述べ、「話すこと・聞くこと」の授業を構想する上でのポイントを整理していきたい。

## 5. 「話すこと・聞くこと」の授業を構想する上での課題

先行実践から考えられる課題の1つ目は、「話すこと・聞くこと」の指導を年間指導計画の中でどのように位置づけていくのかということである。今回取り上げた先行実践は、生徒の事前アンケートと事後アンケートを比較すると「話すこと・聞くこと」に関心が高まり、その教材の深い理解に繋がっているという効果がみられた。しかし、その次の「話すこと・聞くこと」の学習活動にどのように関連させていくのか、あるいは過去に行ってきた「話すこと・聞くこと」の学習活動とどのように結びつけるのか。その辺の関連性がみえにくい。「読むこと」「書くこと」の学習とも関連づけながら、単元や年間を見通した指導の位置づけを行う必要があるのではないかと考える。

2つ目の課題は、実践4の北海道七飯高等学校の取り組みの課題としてあったように、評価方法や評価規準の検討である。この難しさが「話すこと・聞くこと」の学習が活性化していかない理由でもあるが、リスニング評価テストを作成した実践6のように、「話すこと」についても先行事例や文献検討を重ねながら、方法や規準を模索していくしかないと考える。

3つ目の課題は、生徒の実態に即した「話すこと・聞くこと」の実践である。先行実践の多くは、対象となる生徒に対してアンケートを行い、まずは生徒の実態把握に努め、それに適した授業内容を組み立てている。従って、先行実践を参考に授業を行う際は、絶えず、目の前の生徒の実態に即しながら修正や変更を加え実践していく必要があるだろう。

4つ目は、生徒同士の関係性の形成を支援する取り組みの必要性である。「話すこと・聞くこと」の活動は1人では成り立たず、相手がいて初めて成り立つ。山元ら(2008, 2009)は、コミュニケーション能力の

発達を考える上で、関係性の形成という視点を持たなくてはならないことを指摘している。筆者の身近にいる生徒を見ていると気が合う少グループ内の仲間としかコミュニケーションを取らない傾向にあり、中には、人との関わりを持ちたがらない生徒もいる。そのような現状の中、学級全体の話し合いで合意を形成していくにはどのようにすればよいのか。「話すこと・聞くこと」に関する技術的な指導だけではなく、生徒同士の関係性を築くための教師によるサポートが求められてくるところである。

## 6. おわりに

高校国語科の授業改善を願って、あまり蓄積のない「話すこと・聞くこと」の授業実践を取り上げ、検討を行ってきた。しかし、本稿では、時間的な制約から、それを十分に集約することができていない。また、先行実践を踏まえて、筆者自身が授業を行い、それを検証するまでには至らなかった。そのような意味で、本稿の完成度は決して高くはないが、今後、「話すこと・聞くこと」の授業を構想する上での留意点は、ある程度示すことができた。

補足として、筆者の勤務する学校は、正確には高校ではなく、高等専修学校という学校種である。高卒者が進学する専門学校と同じ専修学校であり、高校と同じく中卒者が進学する後期中等教育機関である。北海道有朋高等学校と1970年(昭和45年)より技能連携<sup>®</sup>を行い、本校、卒業と同時に高卒資格も得ることができる。本校に在学する生徒の実態から、「話すこと・聞くこと」よりも、まずは「読解」や「言語の知識」を身につけさせる必要があると考え、そのことに重点をおいて授業を行ってきた。そのような筆者自身の反省から本稿の執筆に至っている。次回機会を見て、筆者自身の「話すこと・聞くこと」の授業実践と検証も含めて報告していきたい。

## 注

- (1) 幸田は、「高等学校国語教育史上、ここまでの大幅な科目構成の変更はない。最大の変更点は、共通必修履修科目が、性格の異なる2科目に分化したことである」(2019:2)と述べている。
- (2) 改定前は、共通必修履修科目「国語総合」において、「話すこと・聞くこと」「書くこと」の授業時数が示されていたが、今回の改定では、複数の領域を持つ全科目でそれぞれの領域の授業時数が明確に示されている。ただし、「古典探求」は、読むことの1領域のため授業時数は示されていない。
- (3) 文部科学省ホームページ「資料3-2 幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指

導要領等の改善及び必要な方策等について（答申案）第2部」のP122より。（[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/053/siryo/\\_icsFiles/afiedfile/2016/12/12/1380468\\_3\\_2.pdf](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/053/siryo/_icsFiles/afiedfile/2016/12/12/1380468_3_2.pdf)）

(4) 文部科学省ホームページ「教育課程部会国語ワーキンググループ（第1回）議事録」（[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/068/siryo/1383625.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/068/siryo/1383625.htm)）

(5) 野村（2019:18）は、「現状では『話すこと・聞くこと』が全国の多くの高校においてほとんど実現していないという認識に立てば、1年次だけでも『話すこと・聞くこと』の学習が徹底できればまずは一歩前進といった見方もできるかもしれない」と述べている。

(6) 高等学校において、「話すこと・聞くこと」の実践がなかなか広がっていかない理由として、神田（2013:173）は高等学校国語の定期テストや大学入試で「聞くこと」に関するテストが存在しないことを指摘している。

(7) 今回の学習指導要領改訂に伴って、高等学校でも生徒指導要録に評定と観点別学習状況の評価を記載することになった。文部科学省ホームページ「新高等学校学習指導要領と学習評価の改善について」（[https://www.mext.go.jp/content/20202012-mxt\\_kyoiku01-100002605\\_2.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20202012-mxt_kyoiku01-100002605_2.pdf)）44ページから46ページ参照のこと。

(8) 国立教育政策研究所ホームページ 令和2年度 国立教育研究所教育課程研究指定校事業「実社会で必要な『話すこと・聞くこと』で育成する言語能力を身に付けるために」北海道七飯高等学校（[https://www.nier.go.jp/kaihatu/kyougikai\\_r02/pdf/20210204PM-nanae.pdf](https://www.nier.go.jp/kaihatu/kyougikai_r02/pdf/20210204PM-nanae.pdf)）

(9) 実践6では、若木常佳の「聞くという情報処理過程」の中で示された「直面する情報から得られないものを推論によって理解する」という活動を「推測」する、「理解した情報について検討を行い、正しい、あるいは必要と判断」する活動を「確認」する、「修正スキーマを構築」する活動を「修正」とそれぞれ捉え、「聞くこと」の能力の分類を行っている。（神田2013:176-177）

(10) 技能連携制度のこと。望月哲太郎（1968年）『高等学校技能連携制度の解説—指定申請・連携措置の手引き—』第一法規出版、10ページ参照のこと。技能連携制度は、高等学校の定時制の課程または通信制の課程に在学する生徒が、文部大臣（現在は都道府県教育委員会）の指定する技能教育施設で教育を受けている場合、高等学校の校長が、一定の条件のもとに、当該技能教育施設における学習を当該高等学校における教科の一部の履修とみなすことができる制度である

（学校教育法第45条の2。現在は、同法第55条になる）。筆者の調査では、技能連携を行っている高等専修学校で取得した専門科目の単位については、高等学校の単位として認定し、普通科目の単位については、技能連携をしている高等学校へレポート提出と試験によって、単位が認定され、高等専修学校卒業と同時に高等学校卒業資格が得られる仕組みになっている。

## 参考文献

神田恵美子（2013）「高等学校における『聞くこと』の指導の活性化を目指して—リスニング評価テストを通じて—」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要別冊』20（2）、pp.173-183

喜納弘子（2016）「国語表現における『話す・聞く力』の育成—関心・意欲を喚起する為の民話資料の教材化を通して（第3学年）—」前期・離島長期研修員第60集 研究集録 沖縄県立総合教育センター

木村誠二（2019）「インタビューを活用したコミュニケーション能力育成のための授業実践研究—高等学校普通科の国語科授業で展開するキャリア教育—」『授業実践開発研究』第12巻（千葉大学教育学部授業実践開発研究室）、pp.63-72

幸田国広（2019）「高等学校国語科の改訂はどう受け止められているか（特集 変わる高校国語）」『早稲田大学国語教育研究』39、pp.1-12

関根泰三（2009）「『話し合う』力の向上をめざす国語科学習指導」『研究紀要』第23号（平成21年度）川崎市総合教育センター、pp.173-178

野村耕一郎（2019）「変わる[か]高校国語：すべての選択科目の『内容』を取り上げる工夫の必要性（特集変わる高校国語）」『早稲田大学国語教育研究』39、pp.13-21

平川真由美・藤本絢也（2016）「『生徒同士のコミュニケーションを通して、意欲的・自主的に学ぶ態度や力』の育成」『熊本県立教育センター共同研究2016 研究紀要パンフレット』45集

山元悦子・稲田八穂（2008）「コミュニケーション能力を育てる国語教室カリキュラムの開発—発達特性をふまえたコミュニケーション能力把握に立って—」『福岡教育大学紀要 第1分冊 文科編』(57)、pp.59-76

山元悦子（2009）「コミュニケーション能力の発達に関する研究—小学5年生における認知・思考の発達特性—」『福岡教育大学紀要 第1分冊 文科編』(58)、113-128

## 謝辞

実践1は川崎市総合教育センター、実践2は熊本県立教育センター、実践3は沖縄県立総合教育センターのそれぞれの担当者の許可を得、実践5、実践6につ

いては、大学の担当者の方を通じて執筆者の方に本論文への掲載許可をいただきました。実践4については、北海道七飯高等学校の校長先生より本論文への掲載許可をいただきました。北海道七飯高等学校における令和3年度の研究内容や成果についても、今後、自らの実践の参考にさせていただきたいと思います。掲載に当たっては、筆者からの突然の連絡にも関わらず、快く掲載を許可していただき、関係者の皆様には感謝申し上げます。

本論文執筆を機会に、日々の授業実践におけるより一層の研鑽を目指していきたいと思います。

# 「主体的・対話的で深い学び」という名の幻想

北海道北広島西高等学校 教諭 畠 師 広 光

## はじめに

主体的・対話的で深い学びを実践するために、あなたは、なにかしているだろうか。ペアワークを取り入れてみた？ グループ学習を積極的に取り入れて話し合っている？ 自分で調べたことをみんなの前で発表させた？

はっきり言おう。その善意だけなら無意味に終わる。それどころか、その善意は有害でさえある。

この冒頭を読んでピンときた人は少なくないだろう<sup>1</sup>。筆者はこれまで勤務校で少なからず上記の実践を行ってきたことを恥ずかしながら告白しておこう。授業改善という名のもとに、アクティブラーニングという名のもとに、生徒の為に良かれと思って善意を積み重ねてきたことになる。これについては、すでに拙論『進路多様校における世界史という名の知的冒険<sup>2</sup>』『進路多様校におけるアクティブラーニングという名の知的冒険<sup>3</sup>』『進路多様校における日本史という名の知的冒険<sup>4</sup>』で詳しく述べているため、本稿では触れないこととしたい。

少しだけ時計の針を戻してみよう。今からおよそ10年前、2010年代前半にアクティブラーニングが関心を集め始めた。2012年には、中教審の質的転換答申のなかで、アクティブラーニングがはじめて明示化されたことで、その後は大学で、次第に高校現場でも一般化して広まった。大手書店の教育書コーナーには、アクティブラーニング本が平積みされ、私が偶然手にした一冊は、小林昭文『アクティブラーニング入門<sup>5</sup>』であった。表紙には「アクティブラーニングが授業と生徒を変える」とあり、「全ての高校教員必携！」と書かれている。読者賢者に改めて説明するまでもないのだが、アクティブラーニングの定義は、以下のようなものである。

「一方的な知識伝達型講義を聴くという(受動的)学習を乗り越える意味での、あらゆる能動的な学習のこと。能動的な学習には、書く・話す・発表するなどの活動への関与と、そこで生じる認知プロセスの外化を伴う」<sup>6</sup>。

その後、2010年代後半には、高校現場で試行錯誤しながらアクティブラーニング型の授業が展開されていった。公開授業や研究会へ行けば、そのほと

んどが4～6名のグループ形態が前提であり、生徒同士が顔を突き合わせていた。筆者の勤務校でも、教室を覗くと多くの授業でグループ学習が行われ、これまでの授業、いわゆる講義型の授業と比べれば見違えるほど生徒が積極的に授業へ参加しているように見えなくもなかった。しかし、当然ながら次第に欠陥が出始めてくる。船守は「実際に試してみると、手応えの面で不安を感じる教員も少なくない。協働学習が十分に効果を上げているか、イマイチ定かではないのである。学生にグループ学習はさせるが、単なる雑談に終わっているのではないか？」

思った以上に学生の議論のレベルが低いままに終わってしまう。議論を活性化しようとして教員が介入しすぎると、学生の主体性が育まれない。学生はこれで何を得たのか？ 一方通行の授業の方が得るものが多かったのではないか？ このまま協働学習を続けて良いのか？<sup>7</sup>と声をあげ、アクティブラーニングの学習法に一石が投げられる。その後、平成28(2016)年12月の中央教育審議会答申を踏まえ、平成30(2018)年3月に学習指導要領が改訂された。改訂の基本方針の中で、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の推進が明示され、各高等学校において生徒が卒業までに身に付けるべきものとされる資質・能力を育成していくために、どのようにしてこれまでの授業の在り方を改善していくべきか考えることが求められた。生徒一人ひとりに社会で求められる資質・能力を育み、生涯にわたって探究を深める未来の創り手として送り出していくことが重要とされ、これまで行ってきたアクティブラーニングの視点に立った授業改善<sup>8</sup>として、「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指すはこびとなった。

それにしても、この「主体的・対話的で深い学び」というフレーズを理解するのはなかなか難しい。いま筆者の手元にある『高等学校学習指導要領解説』には、学びの視点について以下の説明がある<sup>9</sup>。

・主体的な学びについては、児童生徒が学習課題を把握しその解決への見通しを持つことが必要である。そのためには、単元等を通した学習過程の中で動機付けや方向付けを重視するとともに、学習内容・活動に応じた振り返りの場を設定し、児童生徒の表

現を促すようにすることなどが重要である。

・対話的な学びについては、例えば、実社会で働く人々が連携・協働して社会に見られる課題を解決している姿を調べたり、実社会の人々の話を聞いたりする活動の一層の充実が期待される。しかしながら、話し合いの指導が十分に行われずグループによる活動が優先し内容が深まらないといった課題が指摘されるところであり<sup>10</sup>、深い学びとの関わりに留意し、その改善を図ることが求められる。また、主体的・対話的学びの過程でICTを活用することも効果的である。

・これらのことを踏まえるとともに、深い学びの実現のためには、「社会的な見方・考え方」を用いた考察、構想や、説明、議論等の学習活動が組み込まれた、課題を追及したり解決したりする活動が不可欠である（以下略）。

いかがだろうか。わかるような、わからないような、解釈の仕様によってはいろいろな含みがあるような気がしてならないが、これでは解説になっていないだろう。岡崎勝は「新しい学習指導要領の解説や説明書に私自身がもつ違和感が何かと言えば、それは、『分からないのに、分かったつもりになっている』教育言説である。『主体的対話的そして深い学び』というのは、本当は誰も知らないのだ。もしアクティブラーニングから由来しているこの『主体的対話的そして深い学び』というものを理解できたと思っただら、それは主体的でもないし、対話的でもない、深い学びでもないのではないかと思うのだ<sup>11</sup>」と述べており、筆者はこの意見に賛同したい。岡崎の言うように、われわれ教員の多くは「分からないのに、分かったつもりになっている」し、分からないのに、分かったようにふるまっていないか。分からないことは、分からないと言う勇気をもとう。その姿勢は授業においてもそうだし、生徒へ対しても正直に向きあうことが大切であろう。言葉そのものが実質を失っては、状況はますます混沌とし、教員にとっても生徒にとっても本質的な学びは実現されない。

## 1 見えてきた現実～公開授業&校内研修会より～

どうも見切り発車的ではじまった感の強い「主体的・対話的で深い学び」であるが、学習指導要領改訂とともに、なんとか自分なりに解釈して、試行錯誤しながら実験的に授業改善をしていかなければ話しが先に進まない。われわれ教員の多くは、これまでのアクティブラーニング型授業をなんらかの形で取り入れてきたわけであるから、今さら授業形態を大きく変える必要性はそれほど感じなかったはずで

ある。そもそも「主体的・対話的で深い学び」の解釈について絶対的な正解はないわけだし、生徒の発達段階や学習状況を踏まえたうえで、各教科・科目の工夫次第で、十分に対処できるはずである。それなのに、「主体的・対話的で深い学び」というフレーズを意識しすぎてしまい、見当はずれな授業展開に持って行ってしまっておかしなことになる。学校によっては、新学習指導要領に対応した事前の研修等で、ある程度の方向性をもって年間指導計画の作成や授業改善を進めていたと思うが、数としては少数だろう。多くの学校では組織的・継続的に研修を進めるなど昨今の学校現場の過酷な勤務環境を考えれば至難の業である<sup>12</sup>。おそらくは、年に数回の公開授業を実施したうえで、「主体的・対話的で深い学び」をテーマに合評会や校内研修を行っている学校が多いのではないだろうか。筆者は勤務校において、昨年度まで教務主任を担当していたこともあり、授業改善を目的とした10月の公開授業と11月の校内研修会をつなげて情報の共有化を試みた。「主体的・対話的で深い学びにつなげる授業改善に取り組み、生徒の学びに還元する」のが、その年の教務部の重点目標の1つであったからである。筆者自身が中心となって企画しているのだが、この時点で筆者は前述した岡崎の意見を支持しているのだから、企画とはいうものの気持ちは軽い。校内研修会は以下のような流れで進められた。

・事前に、公開授業時における学習指導案、参観者による記録と感想を冊子に綴じて配布。

・授業公開者（国語、数学、理科、英語、体育、音楽、英語+地歴公民）は5分間でプレゼンを行う。

・プレゼンは要点をしばり(1)授業で工夫していること、心掛けていること、大切にしていることは何か(2)授業終了後の教科合評会で話題に上がったことは何か(3)今後の授業の改善点は何か。この3点を軸に全体へ話す（当日の時間節約と一元化を図るため、筆者が事前に用意したパワーポイントのスライドに要点を入力してもらった）。

・当日参観者からのコメント、授業担当者（プレゼン）への質問、必要に応じて各教科へ質問する。

・最後に研修のまとめと今後の観点別評価について教務部から全体へ説明する。

これを放課後の約1時間で行う。研修というよりは、限りなく報告会である。部活動指導や進学指導など、放課後に校内研修を用意しても意外と参加率が上がらないという話しは多忙な学校現場において日常化している。しかし、本校における今回の校内研修は教員全員が参加している。企画そのものは別に斬新なものではない。それでも普段はなかなか見

ることのない他教科の取組や、プレゼンを聞くだけでも良いという気楽さから放課後の貴重な1時間を差し出したのかもしれない。公開授業を行った各教科の教員が、全体の場合であらためてプレゼン (=発表) するというのも、これまでありそうでなかったが、たまたま報告者が20代の若手から50代のベテランまで幅広く出揃ったのは聞いている側も楽しめたのであろう。職業柄、報告者は話し出すと実に軽快に話しをする。5分間では話したいことの半分も話せないだろうが、時間の制約上これは致し方ない。企画側もこのあたりは承知のうえで、4分経過した時点で手持ちのペルを1回鳴らす。夢中で語る報告者を横目に、5分経過した時点でペルを2回。ここで大抵の報告者は、プレゼンのまとめに入り、次の報告者へ順を譲るのであるが、なかには6分経過のチャイム連打まで語る強者もいた。筆者は司会進行をしながら、報告を聞いていたのだが、どの教科も実によく工夫された授業を実践されていることに感心した。筆者の勤務校は、小・中学校の学習で躓いた生徒が毎年多く入学してくる。学び直しを軸に基礎・基本の徹底に力を入れているのだが、入学者の学力層は年々低下しており、学習意欲の衰退、勉強に対するモチベーション<sup>13</sup>自体を見失っている傾向は感じられる。どの教科においても、教科書の内容を理解させることは至難の業であり、そうすると教員側の教材研究、学習内容の精選と工夫、詰まるところ、難しそうに思える教科書の内容をどのようにして興味・関心を持たせるかが勝負所になる。学習することが苦手な、いわゆる進路多様校に勤務したことのある教員であれば、ここが腕の見せ所であることは百も承知のことであろう。英語の報告者からは、授業で工夫していることのキーワードの中に、「わかりやすい」「楽しい」「『なぜ英語が必要か』の話」「『なぜ英語が上達しないのか』の話」「脱線話」「超基礎文法」が挙げられており、教科書からのアプローチも大事であるが、英語に苦手意識を持っている本校生徒を教員側に引き込もうとする姿勢に頭が下がる。「主体的・対話的で深い学び」の理念や解釈どうこうよりも、目の前にいる一人一人の生徒へ臨機応変に対応することが大事なのは言うまでもないことである。すべての報告が終わってから、質疑の時間を設定したが、その多くは学習が苦手な生徒もしくは学習意欲が低い生徒に対して、どのようなアプローチが有効であるのか、評価はどうするのかといった質問であった。なかには、生徒に基礎的な知識がないのにペア学習やグループ学習で話しあわせても効果がないという意見や、基本的な単語や用語を覚えることを優先させているという意見もあった。確かに、

本校生徒の現状だけを考えれば、基礎学力向上に特化することが最優先であるし、現実問題として毎年100人前後が大学・短大へ進学するわけである。その多くは推薦や総合型(AO)入試で合格する。大学へ入学後、学力不足で授業について行けない、結果として退学したという話しは毎年のように大学側から報告される。そうになると、まずは知識注入に全力を、という考えに及ぶのは当然であろう。本校では残念ながら少数派であるが、一般受験を視野に入れている生徒にとって、教科の知識がなくてはまったく話しにならない。筆者は世界史と日本史をほぼ毎年担当しているのだが、実際のところ、道内に限らず全国の私大の多くは知識、言ってしまうえば語句の暗記だけで十分に合格点に達することが出来る。さすがに国公立2次試験ともなると、知識だけでは太刀打ちできないと思いがちであるが、実はそうでもない。もちろん大学受験のために、毎日の授業をしているわけではない。しかし現実には、生徒も教員も受験を意識した授業を共有しているところがあるのかもしれない。

## 2 大学入試問題で問われる能力

大学の目的は「学術の中心として、広く知識を授けるとともに、深く専門の学芸を教授研究し、知的、道徳的及び応用的能力を展開させること」<sup>14</sup>である。つまり、大学は学問をより深く探究する機関である。そうすると、ここでも「主体的・対話的で深い学び」の実現が必要とされるだろう。大学へ入学する前提として、高校3年間ではさまざまな教科、科目の基礎的・基本的な知識を十分に身につけていることが必要である。知識が獲得されたうえで、論理的な「思考力・判断力・表現力」が求められることも周知のとおりである。共通テストでは見送られたものの<sup>15</sup>、国公立大学の2次試験を中心に記述式問題を出題しているのも、採点者にわかりやすく答案を仕上げること、知識を整理して表現すること、これを「対話的で深い学び」と言うこともできるだろう。平成26(2014)年、中央教育審議会からの答申によって始まった高大接続改革は、高校生が大学へ進学した後もこれまで学習した経験値を活用し、より深く学ぶことを目指していると思われる。そうすると、それに見合った入試問題が各大学で作成されているはずである。実際はどうだろうか。筆者の担当科目である日本史で検証してみたい。

2021年度北海道大学を例に考えてみよう。構成は大問が4問、出題形式は記述と論述が中心で選択は小問1題のみであった。大問論述の内訳は、大問1が70+50+40+40=200字、大問2が60+50+20+20

+80=230字、大問3が40+30+25+50=145字、大問4が40+40+30=110字、すべて足すと685字程度で、2020年度の750字程度からやや減少している。また、2019年度以前は100字以内を求める論述があったが、2021年度に関しては大問2に見られる最大で80字である。初見史料のリード文を読み、どのようなことが「曲事」として非難されているのかを論述するのだが、リード文と注釈を手掛かりにしながら、相応の知識と文章の理解力があれば標準的な問題である。大問2では、1179年平清盛による後白河院法皇の院政停止と鳥羽殿への幽閉について、天皇家の長とその臣下が直接対立した点で注目されており、当時、清盛を非難して謀叛人の如く扱う公家がいなかった点も解釈が分かるとリード文で示したうえで、「なぜ公家たちは清盛を非難しなかったのだろうか。公家たちの解釈は、大きく二通りあると考えられる。その二通りの解釈を、それぞれ簡潔に述べなさい」とある。これを60字程度でまとめることになる。筆者はこちらの方が良問であると思う。つまり、出題者から適切な「問い」が提示されているのではないか。シンプルに考えると答えは以下ようになる。「清盛が怖かったから」「後白河法皇が気に入らないから」。意味としてニュアンスは伝わるだろうが、まさかこのまま答案に書くわけにもいかないので、論述にふさわしい文章に書き換える思考が試される。「法皇を幽閉するという行動に出た清盛の軍事的威圧を恐れたため」「後白河法皇の延暦寺への対応が恣意的で、その姿勢に懐疑的であったため」と書けるレベル、つまり表現力が問われているのであり、読み手である採点者に適切に伝えることが出来るかが試されている。また、大問1では、「文章の中から、その理由を最も適切に示した部分を40字以内で書き抜きなさい」という問題があり、これは歴史的思考力というよりはリード文をしっかり読めば、解答できる国語力を問う問題であろう。北大日本史の論述では、用語解説型も見られる。大問2の「知行国制度について50字以内で説明しなさい」、「得宗とは何か、20字以内で説明しなさい」。大問3の「日朝修好条規の内容を、50字以内で説明しなさい」。大問4の「二十一ヵ条の要求について、その内容を40字以内で説明しなさい」。このような問題は、教科書や用語集の記述をそのまま解答すれば十分であり、知識のみで対応できる。受験生にとっては、取り組みやすいシンプルな設問であり、しっかり学習していれば書けるようになっている。実は北大日本史に限らず、既得の知識を整理さえすれば安易に書いてしまう問題が多いという事実は承知のとおりであろう。新しい教育課程や歴史総合のような新しい科目を目

前にする中で、知識や暗記を軽視しがちな授業を行ってはならないし、そもそも暗記と理解は車の両輪のようなものであるから、一問一答など基本的な問題集も積極的に活用したうえで、授業内では避けがちな演習時間もときには必要なのである。一方で、北大日本史の中にも新課程に対応したような問題も見られる。2020年度出題の論述には「中世後期以降になると、キリスト教宣教師や朝鮮使節など、外国人が残した日本観察記録をいくつも確認することができる。こうした外国史料は、日本の史料と比べてどのような長所や短所があると考えられるか。50字以内で説明しなさい」とある。筆者が思うに良問である、と同時に受験生の記述答案はさまざまであったのではないだろうかと推測する。日ごろの授業内で史料を取り扱うことがあったとしても、このような視点で生徒が考えることはないし、大学入試で見かけるような類いの論述問題ではない。これは知識だけでは即答できない問題であるから、出題者の意図、メッセージを読み取らなければならない。実は同様の問題が、北大日本史2016年度にも出題されていた。「建造物や遺跡が世界文化遺産として登録されることでどのような利点、及び欠点が生じると思うか。あなたの考えを、それぞれ簡単に述べなさい（字数指定なし）」。筆者はこれも良問であると思う。受験生からすると対策が取りにくい傾向の問題ではあるが、作成者の視点は良い。法隆寺の建設に関するリード文が示されており、前問では「文化財保護法」を解答させている。このような良問を毎年出題するのは大変であろうが、今後求められていくタイプの問題であると言えよう。北大日本史に関していえば、思い込みの的外れな論述を書くのではなく、あくまでも教科書に書いてある表現をベースにそのまま解答として求められている問題が多い。論述ではあるが、高得点が可能な用語解説型の問題もこれにあてはまる。一方で、リード文を手がかりとした読解力や初見史料への対応力など、いわゆる「思考・判断・表現」が問われている問題もあるが、このタイプの問題は、現状では少数である。問題作成者の力量が今後も問われるであろう。

### 3 最近の授業実践より

筆者は令和3(2021)年10月28日、本校3年5組の生徒を相手に研究授業を行った。当日は、石狩教育局主査をはじめ、本校地歴公民科の教員を中心に15名ほどが参観し、普段は学年で一、二を争うほどの圧倒的なパワーを持つ生徒達も若干緊張気味であった。この日の単元名は「戦後の世界秩序」<sup>16</sup>である。前時までに戦前の内容を終え（この日に備えて多少

無理して進度を調整したことを告白しておこう。とは言うものの、例年11月と12月に戦後史を、教科書でいうと最後の30ページ程度を取り扱うので、進度的に大きな狂いは生じていない、やれやれようやく戦後に入れるな、という感じだろうか。

ところで、いつまでが「戦後」なのか？「戦後」はずっと続くのか？これが本時における生徒への「問い」<sup>17</sup>である。実にシンプルな「問い」であるために、意識しなければ見過ごしてしまうのではないか。予想される生徒の解答は「日本が関わる次の大きな戦争が起きるまで」と言ったところか。実際、生徒の大多数はそうのように考えていた。では、次の大きな戦争が起きるまでは、戦後80年、90年、100年、150年…と続くのだろうか。この疑問を投げかけるとたちまち生徒は閉口する。毎年8月15日が近づくと、各メディアで戦後〇〇年特集が組まれるが、時間の経過とともに戦争の記憶は薄れてくるわけで、平成生まれ、ましてやこれから入学して来るであろう令和生まれの生徒には、戦後という言葉の意味すら正確にはわからない。昭和世代の教員が、大正、明治と遡っても当時の感覚などわかることがないのと同じで、今の高校生に昭和の事象をイメージさせることは相当難しくなっている。ところで、いつまでが「戦後」なのか？という「問い」にはいくつかの解釈があることを生徒に明示する。昭和31(1956)年の『経済白書』に「もはや戦後ではない」の一文があることは多くの生徒が知っていた。戦後10年ほどで、日本はもはや戦後とはいえないほど立ち直ったのかと思いがちだが、実はそうではない<sup>18</sup>。

日本が生産量の回復に努めている間、欧米は生産性を大きく向上させた。戦災からの復興後への危機感や不安が垣間見られるのである。次に、昭和40(1965)年8月の佐藤栄作首相による沖縄訪問の際「沖縄の祖国復帰が実現しない限り、戦後が終わっていない」というコメントを資料で紹介する。また、1989年の冷戦終結が昭和時代の終わりとして重複し、また55年体制の終焉やバブル崩壊の前後であることから、戦後の終着点と見ることも提示する。どこまでが戦後かを考える視点は、他にももちろんあると思うが、これら複数の見方や資料を提示しながら、生徒に考えさせる授業を行った。このレベルの「問い」が本校の生徒にとって適切なかどうかは判断が難しい。もっとも本時の授業の「問い」に正解は存在しない。「問い」に対して自分なりの考察ができていくかどうか、評価の観点となっている。さまざまな歴史の見方や考え方ができるだけである。研究授業という緊張感ある雰囲気の中で行われたため、生徒はいつも以上に集中し、よ

く頑張っていた。合評会では、生徒同士で意見交換の時間が少しでもあればよかったという指摘があった。確かにペアワークやグループワークという手法もあったが、今回はそこまでの時間的余裕がなかった。50分という制約の中で、最初の10分程度は前時の内容をアウトプットするため、テキストの演習問題を生徒が解答する時間。その後、本時の「問い」を提示したあと、前述したとおりの展開内容をテキストと板書も交えて25分程度、残った10～15分ほどで降伏文書調印からGHQの占領政策、五大改革指令の内容について、テキストを参考にしながら要点をまとめる。アメリカは日本を反共の防壁とするため、1948年に占領政策を転換させたことを説明。ここでチャイムが鳴って終了。限界である。もちろん他にも授業展開の方法はある。同じ単元を扱うにしても、筆者よりも優れた実践を行うことができる教員は五万といるはずである。大切なのは、目の前にいる生徒を観察し、臨機応変に授業を展開していくことだろう(筆者の研究授業では、五大改革指令の場面で、協調外交で以前登場した幣原喜重郎のエピソードを覚えていた生徒が、クラス全体に説明してくれた!)。それでは、今回筆者が行った実践を冒頭に述べた「主体的・対話的で深い学び」に当てはめてみるとどうだろうか。あらかじめお断りしておくが、筆者はこの日の授業のために何か特別に力をいれたわけではない。前述で示した「主体的・対話的で深い学び」の定義で比較してみよう。学習課題を把握しその解決への見通しを持つことは出来たであろうか? 把握はしたかもしれないが、解決への見通しを持つことは相当レベルが高いのではないか?

学習内容・活動に応じた振り返りの場面を設定し、児童生徒の表現を促すことはできていたのか? 確かに授業のはじめにテキスト演習をしながら前時の復習は行った。いつまでが戦後か考察はしたであろうが、生徒の表現を促すという感じではないだろう。対話的な学びについてはまずグループやペアワークという手法は入れていない。というより、これまで数年にわたって検証<sup>19</sup>した結果、年間を通じてグループやペアで活動する場面よりは、授業前半は教科書と板書を用いた講義型をベースとする。後半はオリジナルテキストを活用し、生徒一人一人の演習時間を確保することが現状としては学習効果が高いと筆者は判断している。基礎知識なくして、学力の向上など望めない。対話的というのであれば、資料と対話する場面は意識していきたい。最終的に深い学びになっているかどうかは、授業者自身の学びの深さで判断できる。授業に参加した一人一人の生徒にとって、何かしら得るものが一つでもあればそれで良い

と筆者は考えているし、楽しかったと思ってくれるのが一番である（少なくとも「歴史嫌い」にはさせたくないものである）。

#### 4 なぜ歴史を学ぶのか～生徒のコメントから～

いかなる優れた授業実践も生徒にとって有用でなければ深い学びもなにもあったものではない。筆者は、歴史の授業を日々受けている生徒を対象に、授業や時事に関するコメントを書いてもらっている。どの学校でも授業改善を目的としたアンケート<sup>20</sup>を実施していると思うが、そこまで大げさなものではなく、項目もとくにない。年度初めには、これまでの学習事項を確認する目的もあるのだが、毎年必ず「なぜ歴史を学ぶのか」を生徒達に考えてもらい、コメントを書いてもらっている。200字程度であるが、どれも自身の言葉で真剣に書かれており、ここでいくつか紹介したい。

「歴史は現代に至るまでの人類の争いや進化をまとめたものであって、人間の成長の過程を見ることができるので、人という生き物の思考がどのようなものなのかを知ることができる。昔の失敗した事例も学べるため、今に生かすこともできる。さらなる進化をとげるには、これまでの歴史を学ぶことが必要だと思った。」

「歴史を学ぶ意味は、過去の反省点やそれから学べる教訓を見つけることにある。第二次世界大戦での日本の行動や、核爆弾による悲惨な過去などを忘れさせてはならない。また、過去の偉人達を通して今に生かせることはないかを学ぶことも歴史を学ぶ目的だと思う。」

「私たちが歴史を学ぶ目的は、過去の出来事を学び、よりよい未来をつくり、世界平和につなげるためだと考えています。私たちが歴史を学ばずに生きていたら、戦争を繰り返してしまう。過去の失敗をしっかりと学ぶことが世界平和への第一歩につながるような気がします。」

「自分が住んでいる国のことを知るためと、過去の失敗や成功を学んで生かしていくためだと思う。例えば、戦争などもう二度と起こしてはいけないということは理解できる。それなのになぜ戦争をしてしまったのか、残虐なものであったかを忘れてはいけないから歴史を学ぶのだと思う。」

「歴史を学ぶことの意味は2つあると思う。1つは、過去の日本が行ってしまった過ちからなぜ失敗したのかを学べるから。そしてどうしたら成功できるのかと考えることができるから。2つ目は、自分の国の過去から現在までを知ること、未来への視点が広がると思うから。」

いかがだろうか。取り上げたコメントの他にも紹介したいのは山ほどあるが、限られた枚数のため割愛する。毎年200名ほどの生徒を相手に世界史か日本史を受け持つことになるが、生徒は自分なりによく考え、しっかりと表現している。普段はおとなしく口数が少ない生徒であっても、文章やコメントを書かせるとこちらが驚くほどの内容であることが多い。「なぜ歴史を学ぶのか」<sup>21</sup>という大人でも難しいテーマに対し、真剣に取り組んで回答するだけでも立派である。筆者は一通り読んだ後、主要なところにアンダーラインを引いたり付箋をつけたりする。次の時間に全員分のコメントを淡々と読むことが多い。こちらから特にコメントはしない。生徒は黙って聞いている。クラスメイトがどのような考えを持っているのか、耳を澄ませているのである。ときどきこのような場面を設定するのも大切であり、他者の考えを共有する貴重な時間であろう。

#### おわりに

この原稿を書いている令和3(2021)年11月中旬、コロナ禍<sup>22</sup>はまだ終わる気配はない。前年3月前後に境に、高校の状況は一変した。当時、筆者は入学者選抜業務を担当しており、対応に追われた。3月2日からの政府による全国一斉休校要請もあり、卒業式の行事縮小など現場は混乱していた。高校入試は前日の会場公開と面接試験は中止となったが、学力試験は粛々と実施された。新年度に入ってから状況がよくなることはなく、紙ベースの学習計画表や課題プリントを各教科で作成し、生徒の自宅へ郵送した。感染リスク抑制のため、4月、5月は教員も自宅研修扱いとなる日があり、全員が顔を合わせる事がなくなった。6月に入りようやく学年ごとの分散登校が可能となる。生徒の学習課題を回収し、評価に加えた。7月に中間試験を実施し、3年生の仮評定をなんとかつけ終えるものの、これまで欠いた授業時数を取り戻すべく短縮7時間授業が猛暑の教室で連日続く。学校祭は中止となり、夏休みも大幅に縮小。卒業生に聞くと、大学の授業はずっとオンラインで行われており、入学式から一度もキャンパスへ足を踏み入れていないという。夏休みが明けてもニュースは連日感染者数の報告が続く。筆者は授業の合間に札幌、北広島、千歳市内、長沼、南幌、追分町内の中学校を訪問し学校説明を実施した。学校行事は延期もしくは中止が相次ぎ、年間計画の見直しや調整などしているうちに、多忙感と疲弊が身に染みてくる。コロナ対策で校内の消毒や教室の換気など環境にも気を遣う。気力と体力の消耗。授業準備も万全にはほど遠くなる。冬休みも当然のよう

に縮小され、年が明けると入学者選抜業務が本格化する。発熱、頭痛など感染症予防による出席停止の生徒を対象に授業補充を実施。このようにして1年が流れ、令和3(2021)年度を迎えた。5月下旬から6月中旬まで再び家庭学習期間に入り、筆者の勤務校でもついにオンライン授業が本格化する。何を隠そう(別に隠すほどでもないが)私はアナログ人間である。接続やらパソコン用語を言われてもさっぱりわからない。教室にクロムブックを持って行き、教わったとおりに接続したはずなのに画面が映らない。職員室まで走り、この手の問題がわかりそうな若手教員(筆者の勤務校に所属する20、30代教員は実に真面目で親切である)を呼ぶ。すぐに接続されて(同じことをやっているはずなのにどうしてだろう)、画面上に生徒の顔が映る。出欠を確認するためにコメント欄に出席番号と名前を入力してください。マニュアル通りに言ってみる。本当に繋がっているのだろうか?とっていると、先生声が聞こえません。ミュートになっていませんか、とたまたま気づいたコメント欄に入力されている。分散登校のため、本来40人いるはずの教室に半分しかない日があったり、残りの半分が隣の教室にいたり、この状況下では当たり前なのかもしれないが、こんな感じで学力云々言われてもなあ、という気になってくる。事後のアンケートによると、大半の生徒は家庭にタブレット端末やパソコンがないため、スマホの小さな画面で黒板の字を見ていたので限界があることが判明。スマホの容量もあるから、長時間連続して使用するのは不可能(生徒の要望もあって、講義の合間に演習を入れることで一度退出してもらい、時間を決めて再度画面に入ってもらった)。さらにプリンターもないので、課題や資料を印刷することは不可能。他の高校でも同じようにオンライン授業を実施していると聞いたが、手探りということもあるのだろう、「とにかく忙しい」の声が多数。夏休みに同教科の研修が実施され、他校の教員と話しを交わしたのだが「主体的・対話的で深い学びとか、問いとか観点別評価って言われてもね…。必要なのはわかる。が、追いつかないのである。疲労困憊。

先日、筆者が参加したセミナーでは「100メートル競走(従来のセンター試験)から障害物競走(共通テスト)へ競技種目が変わったことに意外と気づかれていない」という指摘もあった。新教育課程の全面実施にあたり、越えなければならないハードルは高いが、オンライン授業やハイブリッド型の導入で、本質を見失ってはいないだろうか。なんとなく、意味もわからず「主体的・対話的で深い学び」を取り入れたところで、それは幻想に終わるだろう。授業

の価値はそんなことで決まるのではない。

最後に、私事になりますが、この論文を故人である恩師竹内睦泰先生に捧げます。私が教壇に立ち、未来を担う生徒達へ日本史の授業を教えるきっかけになったのは、高校2年の冬休みに竹内先生に出会えたことです。

#### <主要参考文献>

1 斎藤幸平『人新世の「資本論」』(集英社、2020)の中で、温暖化対策をしていると思い込むことで、真に必要なとされているもっと大胆なアクションを起こさなくなってしまうと警鐘を鳴らしている。

2 拙論『研究紀要』52号(北海道高等学校教育研究会、2015)。

3 拙論『研究紀要』53号(北海道高等学校教育研究会、2016)。

4 拙論『研究紀要』54号(北海道高等学校教育研究会、2017)。

5 小林昭文『アクティブラーニング入門』(産業能率大学出版部、2015)

6 溝上慎一『アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換』p7(東信堂、2014)

7 主体的学び研究所編『主体的学び4号』p4(東信堂、2016) 船守美穂は「協働学習との今日的付き合い方」の中で、多様な事例をあげた。

8 アクティブラーニングの形態、手法については、柞磨昭孝が広島県立安芸高校の授業観察をもと5つに分類して提示し、教師が指導内容や学校の実情に応じてアレンジできる。筆者も試行錯誤しながらさまざまな形で実践したが、本校の生徒に対しては結果的に講義型と知識活用型を併用したユニット型が最も効果的であったことは拙論『研究紀要』54号で述べたとおりである。

9 文部科学省『高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説地理歴史編』p15(東洋館出版社、2019)

10 これまでのアクティブラーニングにおける授業法や解釈について、さまざまな誤解や失敗事例があったことを想定させる。亀倉正彦は『失敗事例から学ぶ大学でのアクティブラーニング』(東信堂、2016)の中で、失敗事例を通じて学んできたことの一つに形式主義に陥る危険性を指摘しており、最近の教師が多忙であることを十分に理解したうえで『アクティブラーニングを実践せよ!』との大号令がトップから下り、当の教員本人がその必要を認めていなかったらどうなるだろうか。下手をすれば、あまり意味の無いグループワークを30分ほど学生にさせるかもしれない。その結果、講義していれば学べるはずだった知識がもし『犠牲』になれば、それはある

種の機会損失といってもよい。これは典型的な形式主義の罠である」という。

11岡崎勝「先生、学校はどこへ行くんでしょうか？ スティーブン・キングに聞いてください！」(『現代思想』4月号第48巻第6号p169 青土社、2020)

12藤川信治「コロナ禍における教職員の過酷な勤務環境」(『現代思想』4月号第49巻第4号p108-p125 青土社、2021)に詳しい。

13富田一彦『キミは何のために勉強するのか 試験勉強という名の知的冒険2』(大和書房、2012)を参照されたい。生徒は授業中になぜ寝るのか、について興味深い記述がある。考えられる可能性は二つ。一つは初めから勉強そのものに興味が持てないこと、もう一つは、真剣に聞こうとしても、授業内容が理解できないことであるという。「これも、さらに分ければ三つの原因が考えられる。その一。授業内容が難しすぎる。その二。授業内容が簡単すぎる。その三。難易度ではなく、教師の話が下手すぎる」とあり、富田は「子どもの実力を上げるのに適切な情報を適切な形と適切なタイミングで与えていくことが、教師の最大の務めである」と主張する。

14学校教育法52条

15吉田弘幸「共通テストは如何に在るべきか」の中で、記述式あるいは論述式で解答させることには意味があるとしながらも、共通テストにおいては①10万人単位で受験する試験の採点は物理的に不可能であること②公平・公正・適正な採点が不可能であること③既に多くの大学が個別試験で記述式問題を出題していることを理由に不必要であると主張し、そもそも共通テストは無用であり、各大学が当該大学のアドミッションポリシーに従って、大学の責任において自律的に実施すべきであるという。(『現代思想』4月号第48巻第6号p94-p101 青土社、2020)

16笹山晴生ほか『高校日本史改訂版』p299(山川出版社、2020)

17筆者は令和2(2020)年1月24日、札幌西高校で開催された「北海道から歴史教育を考えるフォーラム」第3回例会において「歴史総合科目の『問い』を『入試に使わない』高校で授業するとしたら？」を報告している。当時はそもそも「問い」とは何かの段階であった。本校のように大学一般入試を必要としない、いわゆる進路多様校では、生徒に対して難しいことを要求しすぎているのではないか(本来であれば大学に入ってから学ぶような内容の「問い」という疑問があった。調べてみると、「問い」にもいろいろあることがわかり、「なぜ」「どのような(に)」「あなたは」「背景には」「比較して」「理由は」「違いは」「意義は」「影響は」「関係性は」「評価は」「変化は」「必

要なのは」「根拠は」「考察してみよう」「説明してみよう」などが例である。生徒へ提示する際には、現実的な「問い」と非現実的な「問い」(目の前にいる生徒にとっては明らかにハードルが高い「問い」)を授業者が見極めなければ授業はうまくいかない。教室の生徒が「よし、やってみよう」「考えてみよう」「楽しいかも」と思えるような「問い」の設定が授業者に求められる。

18『経済白書』には、「戦後の一時期に比べれば、その欲望の熾烈さは明らかに減少した。もはや『戦後』ではない。我々はいまや異なった事態に直面しようとしている。回復を通じての成長は終わった。今後の成長は近代化によって支えられる。…」とあり、経済成長がわが国の国家目標となっていることがわかる。

19拙論『研究紀要』52～54号(北海道高等学校教育研究会、2015-17)に詳しい。

20本校では、筆者が教務主任を担当した平成31(2019)年度から授業改善を目的とした「授業アンケート」を年2回実施している。生徒がこれまでの学習を振り返りながら、どのような授業を望んでいるか自由にコメントでき、集約した結果は教員間で共有し、生徒にも公表している。令和3(2021)年2月実施分までは、筆者が全校生徒の自由記述欄すべてに目を通した。生徒の意見として多かったのは「考える時間や発言する時間がほしい」「復習や練習問題を解く時間がほしい」「わかりやすい、丁寧な授業にしてほしい」「楽しい授業にしてほしい」「グループ学習の時間を増やしてほしい」など。なかには「板書が書き終わってから説明してほしい」「テスト範囲はもう少し早く教えてほしい」「生徒の気持ちを理解してほしい」「優しく接してほしい」という訴えもあり、教員側が日ごろの授業で見過ごしている点も指摘されている。これとは別に、筆者と同じように授業内でアンケートを行い、授業改善を試みようとしている教員もいる。

21読者諸賢は承知のとおりであると思うが、リン・ハント『なぜ歴史を学ぶのか』(岩波書店、2019)があり、歴史を学ぶ目的とは何かが提起され、いくつかの解法が提示されている。

22赤田圭亮「コロナ禍の学校から『GIGAスクール構想』を考える」(『現代思想』4月号第49巻第4号p126 青土社、2021)にコロナ禍における詳細な現場報告がある。授業にどうICTを組み込んでいくか、オンライン授業の現状に奮闘する教員と学生の現状が報告されている。

# 未来を拓く公民科教育の創造

～「深い学び」に迫る「授業づくり」～

市立札幌新川高等学校 川 瀬 雅 之

## 1. はじめに

これまで本会の研究紀要に於いて紹介した、公民科の「指導演」に基づく実践交流の成果を踏まえながら、公民科教育の今後について、その課題と期待を、具体的な実践事例等をあげながら、明らかにしたい。

本稿の内容構成は、以下の柱立てとする。

1. はじめに
2. 未来を拓く
3. 「学びの時代」
4. 「授業づくり」と「授業改善」
5. 公民科教育の実際
6. 教師の専門職性
7. むすびに

## 2. 未来を拓く

### (1) 「公共」の誕生

新学習指導要領（平成30年告示）において、公民科の科目構成の見直しが行われた。公民科の必修科目が「現代社会」から「公共」へと再編成され、「政治・経済」「倫理」も選択の探究科目となった。

「現代社会」の諸課題を捉え考察し、選択・判断するための手掛かりとなる概念や理論を、古今東西の知的蓄積を踏まえて習得するとともに、それらを活用して自立した主体として、他者と協働しつつ国家・社会の形成に参画し、持続可能な社会づくりに向けて必要な力を育む共通必修科目としての「公共」を設置し、選択履修科目として「倫理」及び「政治・経済」を設置する。「現代社会」については、科目を設置しないとなった。

### (2) 「現代社会」と「公共」の違い

岡山大学の桑原敏典氏は、「現代社会」は、個から社会に向かう、思考・判断を重視し、現代社会研究、社会問題探究に取り組んできた。「公共」は、社会か

ら個に向かう、議論・発信を重視し、社会形成、国民育成科目としての役割を担う。」とまとめている。

しかし、2020年8月に北海道内の高等学校（全定含む）・中等教育学校を対象に、北海道高等学校政治経済研究会が実施し、140校から回答を得たアンケート調査結果では、「公共」を、公民科として全く新しい科目であるという認識に立っている教員が、半分にも満たないという状況が明らかとなった。さらに、「現代社会」と変わらない科目、という認識も28%であった。

### (3) 「公共」への期待

「現代社会」にかわって、新たに設置された「公共」には、次の3つのことが期待されている。

第1は、リアルな「現実社会の諸課題」を取り上げることで、現実社会における複雑な課題を把握し、協働的に問題解決する力や情報を吟味する力を引き出し伸ばすことが期待されている。その際、「政治的中立性」に配慮しながら、「リアルな政治との対話」を進めることも指摘されている。

第2は、具体的な「学習課題（主題）」を設定することによって、既習事項や他教科科目における学びを活用し、「探究」活動を展開することが期待されている。具体的な「問い」（「学習課題（主題）」）に取り組むことにより、「覚える」から「考える」への学びの転換が図られ、深く考える力の育成を目指した教育が展開できると考えられている。

第3は、多様な学習活動を展開し、診断的・形成的評価の観点から、「指導と評価の一体化」を図ることによって、生徒の学習意欲を高め、自らの学びを「自己調整」して、主体的な学習を継続させていくことが期待されている。「評価」の工夫により、「考える」ための「メタ認知」、自分の理解状態を自己診断できる力の育成も期待できると考えられている。

### (4) 「18歳成人」への対応も

「18歳成人」への対応については、当然のことな

がら、特定の一教科だけで対応することは難しく、高校教育全体として取り組むべきものである。

その上で、「主権者として、持続可能な社会づくりに向かう社会参画意識の涵養やよりよい社会の実現を視野に、課題を主体的に解決しようとする態度の育成、現代社会に生きる人間としての在り方生き方の自覚の涵養」が期待され、これらも公民科の「授業改善」の成果として求められている。

それは、教育基本法及び学校教育法に規定されている「公共の精神に基づき、主体的に社会の形成に参画し、その発展に寄与する態度を養うこと」が、公民科における「学び」の究極の目標であり、「公民としての資質・能力の育成」と密接に関わるものであるためと考える。

### 3. 「学びの時代」

#### (1) 学力観の転換

「学力」については、知識の習熟（暗記・再生）に重きを置く「従来型の学力」から、知識を活用し、自ら課題を解決していく能力としての「確かな学力」への転換が、さらに教育の在り方としても、知識伝達を主軸とする「勉強」や「学習」としての「教える（Teaching）」から、多面的・多角的な考察や深い理解を図る「探究」につながる、深く考える力の育成をめざした教育、つまり「学ぶ（Learning）」へ、大胆な転換が求められている。

#### (2) 「深い学び」の本質

「むずかしいことをやさしく、やさしいことをふかく、ふかいことをおもしろく、おもしろいことをまじめに、まじめなことをゆかいに、そしてゆかいなことはあくまでもゆかいに」これは、劇作家の井上ひさし氏の言葉である。この言葉は、「探究」の学びの本質を、「深い学び」の本質を、簡潔に言い当てている。

この言葉からは、主体的に学ぶ学習者の視点に立った、「学びの過程」とその先の学習者の満足げな笑顔が伝わってくる。学ぶことが「ゆかいなこと」につながっていく過程を、「授業」としてつくり上げていくことが、「深い学び」への第一歩であると私も考える。

#### (3) 「育成する資質・能力」の具体化

新学習指導要領においては、これまで以上に、育成する資質・能力について、具体的な例が示されている。

例えば、諸資料から「主体的・対話的な深い学び」に必要となる情報を、適切かつ効果的に調べる技能として、新高等学校学習指導要領解説公民編の「公共」では、次のように記されている。

「第一に、倫理的主体、法的主体、政治的主体、経済的主体などとして活動するために必要な社会的事象等に関する情報を収集する技能。第二に、人間と社会の在り方についての見方・考え方を働かせて、収集した情報を適切かつ効果的に読み取る技能。第三に、読み取った情報を効果的にまとめる技能。これらの技能は、情報化が進展する中で社会的事象等について考察するとき求められる力、すなわち、関連のある資料を様々な情報手段を適切かつ効果的に活用して収集し、かつ考察に必要な情報を合理的な基準で適切に選択し分析するとともに効果的にまとめる力を意味している。」（「高等学校公民編」p31）

このように具体的に例示された「育成する資質・能力」を踏まえて、どのような授業を創っていくのか。さらに「授業改善」の工夫とその実践が、教育現場に期待されている。

### 4. 「授業づくり」と「授業改善」

#### (1) 「現実社会の諸課題」の教材化

リアルな「現実社会の諸課題」を取り上げることで、現実社会における複雑な課題を把握し、協働的に問題解決する力や情報を吟味する力を引き出し伸ばすことをめざして、2021年10月30日に投開票が行われた衆議院選挙を教材化し、勤務校の1年「現代社会」において、次のような授業を行った。特に「政策選択」という点について、力点を置いた授業実践である。

##### 1) 取り組みの流れ

① 10/31に投開票が行われる2021年衆議院選挙の機会を活用し、その前後に、各党の「公約（政策）」を参考資料としながら、次に示す2時間の学習活動を展開する。

② 課題シートNo.1「選挙公約（政策）の比較分析と選択」  
課題：2021年衆議院選挙の各政党の公約（政策）を分析し、支持する政策を選択してみよう

ア) グループ内で、各党の「公約」に関する配布資料を参照し、意見交換しながら、分野・領域ごとに、各自が最も重要で優先すべきだと考え、支持する「政策」を、一つ選択する。各党の「公約」に参考となる選択肢がない場合には、各自の考える「政策」を記入する。

イ) 各自で選択する「政策」を、グループ内で統一させる必要はない。結果として一致しても可。

ウ) グループ内での意見を参考としながらも、あくまでも、各自の考えに基づいて選択する。

エ) 選択した理由・根拠を、例えば「課題として…の状況にあるので、…する必要があると考える

から」というように、出来る限り具体的かつ根拠となる事実を示しながら、選択した理由・根拠を簡潔に説明する。

オ) 各自が選択した「政策」に近い「公約（政策）」を掲げている政党を、資料等を参考にしながら、分野・領域ごとに、一つ選択する。「該当なし」でも良い。また、すべてを一つの政党に統一する必要はない。

③課題シートNo.2「選挙結果の分析」+「今後の取組」  
課題：2021年衆議院選挙の結果をふまえ、今後の政治の動きについて、考えてみよう

ア) 選挙前の授業で配布した各党の「公約」に関する配布資料を参照しグループで意見交換しながら、今回の選挙に勝利した政党の「公約」と、各自が最も重要で優先すべきだと考え支持した「政策」を、比較する。

イ) 比較の方法としては、各自で選択した「政策」との「相違点」を、出来る限り具体的に抽出する。

ウ) 各自の選択した「政策」と一致している場合については、その実現に向けて、今後の政治の動きについて期待する点や注目したい点、また一致していない場合については、その違いに留意しながら、今後の政治の動きについて注目すべき点について、簡潔に説明する。あくまでも、各自の考えを、まとめる。

エ) ウ)の分析と投票率などの今回の選挙結果をふまえて、今後、自分が有権者となった際に、どのような考え方や姿勢で選挙に臨もうと考えるか、各自の考えを、簡潔に述べる。

④エ)の課題で生徒は、今後有権者として選挙に積極的に参加する意欲、また今後の政治の動きに注目し、自らの判断で政策等を吟味する考えを示していた。

⑤1枚目の課題シートによる授業の後に、実際の投票（10/31）が行われた。2枚目の課題シートによる授業は、その選挙結果を踏まえての取組となった。実際の選挙を挟んで2時間の授業展開。

⑥2時間の授業展開ののち、『私たちが拓く日本の未来』を12月末まで教室内に置き、その後の授業において適宜その内容等について補足説明等を行う。

2) 評価等について

①「課題学習」として、課題シートの提出、並びにその課題達成状況を「加点」方式で成績評価する。

②指導計画内の位置づけとしては、特設の学習単元として、同時期に8クラス一斉に実施。

3) その他

配布資料は、課題シートNo.1については「日本経済新聞」と「時事通信社」によってまとめられた各政党の選挙公約一覧。課題シートNo.2については読売新聞

コラム「拝啓 有権者の皆さんへ」（2021.10.30）

(2) 教材開発の視点

教材開発の視点については、次の4点がある。

①政治、経済などの側面を総合的・一体的に捉える。

②診断的評価の観点から、知識・理解や読解力など、生徒の「学力」の実態把握を図る。

③多様な学習形態を展開し、必要な「情報」を整理させ、論理的な課題解決を追究させる。

④具体的な課題解決の方策として、その根拠の正当性、実現可能性等を構想させる。

(3)「学習課題（主題）」としての「問い」の設定

「主体的・対話的で深い学び」について、方式化された授業の方法や技術ではなく、授業改善の考え方として捉えるべきことが議論されてきた。これまで言語活動の充実などの形で教科を超えて図られてきた学習活動の改善が、引き続き「社会的な見方・考え方」を働かせる中で、公民科ならではの「問い」として設定され、社会的な事象等に関わる課題を追究したり解決したりする活動が取り入れられることによって実現することが求められている。」（「高等学校公民編」p16）

これは、新学習指導要領や『解説』の作成における議論にまで言及する、踏み込んだ説明であり、「学習を設計する」「学習活動の改善」の視点、さらに「授業改善の考え方」として、「主体的・対話的で深い学び」を認識し、実践に結び付けていくことが求められている。

「社会的な見方・考え方」を働かせる中で、公民科ならではの「問い」を設定すること。特に、学習者が主体的に、その「問い」に向けて学習活動を展開することが、重ねて強調されている。このような授業実践の蓄積が、現場に求められている。

(4)「主体」としての学習意欲の喚起

習得した概念などの知識や、中学校までの公民分野、新たな必修科目の「公共」で身につけた選択・判断の手掛かりとなる考え方を活用し、「現実社会の諸課題」の中から、「学習課題（主題）」を自ら設定し「探究」活動に主体的に取り組みせるためには、学習者の学習意欲を高め、主体的な学びを導く「動機づけ」や「立場の設定」、学習活動に参加する基礎としての「足場」づくりが必要であると考え。

また、探究・構想の過程で、考察・構想したことを説明し、異なる意見や主張と出会い、相互に刺激し合いながら議論する、多様な「学びの場」を、学習集団の規模や活動形態などを意図的に変化させながら、段階的に用意することが「深い学び」を促すものと考え

る。「ラーニング・ピラミッド」などからも読み取れるように、受動的な学習形態よりも、能動的な学習形態の方が、学習の定着率は高く、一方的に「教授される」よりも「互いに、教え合う学び」の方が、学習効果は高いはずである。「ともに学ぶ喜び」の創造を、ぜひ目指したいものとする。

奈須正裕氏が「探究課題の解決を目指した学習活動を通して、より妥当性の高い本質的な概念的理解へと自己更新していく」と指摘されている。まず更新する前の自分の考えを形成させ、次に他者との出会いと対話の場を設け、質疑や議論を通して異なる考えに触れ、自分の考えを問い直し、「妥当性の高い本質的な理解」へと自ら更新させていく。この「自己更新」という視点・過程も、学習意欲を喚起し、授業改善を図る上で大切であるとする。

#### (5)「指導と評価の一体化」形成的評価の工夫

多様な学習活動を展開する中で、まず、学習前の生徒に対して「診断的評価」を工夫し、既習の知識や考え方の実態把握を行い、単元の「学習課題(主題)」に取り組む学習過程において「形成的評価」を重ね、最終的にどのような学習の成果が見られたのかを見取っていく「総括的評価」を行う。

授業展開の過程で、学習の達成状況を、生徒と教師、生徒同士が相互に確認でき、学習の手応えとしての自己効力感を感じながら学習意欲を高め、生徒が各自の学びについての「自己調整」に取り組み、成果としての変容を達成し、学力の「自己更新」をすすめていく。

このような「学びのプロセス」が、「評価」に関する基本的な展開であるとする。

診断的・形成的評価の観点から、学びの「見直し」を立て、学習過程における「指導と評価の一体化」を図り、さらに、総括的評価の観点から、「振り返り」の場を設けて、一連の学習活動を通して獲得し変容した自らの資質・能力を「評価」させることで、「考える」ための「メタ認知」、自分の理解状態を自己診断できる力の育成が期待できると考える。

学習したことの意義や価値を実感し、学習状況を把握する観点から、単元や題材など内容や時間のまとまりを見通しながら、評価の場面や方法を工夫して、学習の過程や成果を評価し、指導の改善や更なる学習意欲の向上を図り、資質・能力の育成に生かすことが求められている。

また、「指導と評価の一体化」を図る中で、評価結果が評価の対象である生徒の資質・能力を適切に反映しているという、学習評価の妥当性や信頼性が確保されることも必要である。

評価の具体的な方法としては、形成的評価(診断的・形成的・総括的評価)、観点別評価、評価規準と評価基準、ルーブリック、ポートフォリオ、チェックリスト評価、観察評価、ワークシート評価など、評価方法の工夫と研究が、様々に提起されている。国立教育政策研究所から『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料』も発行されている。「授業改善」とともに、一層の研究が重要であるとする。

## 5. 公民科教育の実際

### (1)「主権者教育」の中核として

「主権者教育」と「政治的中立性」については、教育現場にあってこれまでも、様々な取組が試みられ議論されてきた課題の一つである。その在り方について考える上で、ドイツの「ボイテルスバッハ・コンセンサス」は、示唆を与える。ナチスの独裁を招いた過去を教訓とし「関与しないことが中立性を守ることではない。むしろ、関与しないことによる弊害の方が大きい、我々は「未来を築く主体者」に対する責任を果たす必要がある」として確認され、定められている。

日本学術会議の政治学委員会が2017年に出した提言「高等学校新設科目「公共」に向けて～政治学からの提言～」(2017年2月3日)の中に、「(2)リアルな政治学習と「政治的中立性」の担保」という項目があり、次のような内容の提言が行われている。

「教師の影響によって、特定の政治的立場を注入することは問題であるが、逆に「中立性」を「非政治性」に矮小化してしまうことは、生徒の政治的な「思考力、判断力、表現力」(学校教育法第30条第2項)の育成といった点からみて、百害あって一利なしである。判断力の芽を摘み取り、態度表明を自制する空気をつくってはならない。そこで教える側にとって重要なことは、教授内容を十分に研究・準備し、扱う問題に関する認識の確かさ(真実性)、情報源・方法の確実性(クレディビリティ)・信頼性(リアライビリティ)、専門性を高め、リアルな社会的・政治的問題に関する多様な立場や視点から教材・情報を集め、生徒たちに提供することである。教師は、賛否が分かれるテーマでは、個々の生徒を自身とは異なる意見にさらし、「公的争点分析アプローチ」という価値のジレンマ状況、個別事例と一般的原則の関係を意識させた上で、生徒個々人の可塑的な意見の形成をリードしつつ、生徒自らが自身の立場を離れた上で、その意見の理由づけをすることを促す。こうした作業こそが、教師あるいは教授内容に「政治的中立性」を担保させ、生徒が先入観から解かれ、対象と「距離」をとりつつ、自由に自分なりの意見や判断を持つことの意義を理解

させることにつながるであろう。」以上が、日本学術会議の提言内容である。

「「中立性」を「非政治性」に矮小化してしまうことは、生徒の政治的な「思考力、判断力、表現力」（学校教育法第30条第2項）の育成といった点からみて、百害あって一利なしである。」との指摘には、真摯に向き合う必要があると考える。

## (2) 「指導計画」としての展開例

計画した授業実践を「年間指導計画」の中に、どのように位置付け、限られた授業時数の中で展開するか。この点も、実際の授業づくりに取り組む上で、重要な課題としてある。次は「現代社会」の一例である。

### 1) 経済分野に入る前の9月はじめの指導計画

①現1年生はコロナ禍の臨時休業等のために、経済分野について、中学校社会科公民分野で十分な学習が行われていない点を考慮して、経済分野の全体像が把握しやすいように学習内容を精選する。その際、2年次以降の「政治・経済」との学習内容の接続、配分等も考慮する。

②主に、経済分野が出題範囲となる第3回定期考査にむけては、基本的な知識・理解の定着を促す。また、限られた授業時数の中で効果的な学習をめざして、定期考査後に経済分野での学習を活用した「課題探究学習」を、グループ学習等を取り入れて展開する。学習の「振り返り」「応用」の場として経済学習のまとめを図る。

③「課題探究学習」の具体は、道内の事例として、HAP（北海道エアポート）の「マスタープラン」を参考資料として取り上げ、北海道がかかえる現実的な諸課題も理解させながら、「北海道の活性化に向けた事業投資プラン」を学習課題として課し、雇用創出につながる北海道の活性化、産業振興、事業展開等を構想させる。

### 2) 第3回定期考査後の指導計画

①考査については「現代思想」を中心とする倫理分野と経済分野が出題範囲となっており、答案返却の解答解説の際、今回の「課題探究学習」に「活用できる」経済分野の基本的な知識・理解の定着を促す。  
→市場のしくみ（需要と供給）、企業の活動（利潤の追求）、金融機関の働きなど、事業投資計画を構想する際に活用させる

②定期考査後に経済学習のまとめとして、経済分野での学習成果を活用した「課題探究学習」を、グループ学習等を取り入れて展開する。北海道の具体的な事例を活用しながら経済学習のまとめを図る。

③「課題探究学習」の具体は、道内の具体的な事例として、道内7空港を民営化し運営管理するHAP（北

海道エアポート）の30年後に向けた「マスタープラン」を参考として取り上げ、北海道が抱える現実的な諸課題も理解させながら、「北海道の活性化に向けた事業投資計画」の企画・構想・発表を学習課題として課す。

→「事業投資計画」としては、「市場における需要」を喚起し、持続的に「利益」を生み出し、雇用創出につながる「北海道の活性化、産業・地域振興」の事業投資計画（端的に表現すると「もうかる」事業投資計画）を構想させる。

→この「課題探究学習」については、「内部経済」に焦点を絞る。空港経営は「派生需要」としての特徴を持ち、HAPの経営戦略やHAPの蒲生社長から生徒へのメッセージをうけて、北海道全域の現状を見渡し、「市場における需要」を生み出す（「もうかる」）事業投資計画をグループ学習で考えさせ、その発表に対して、事業アイデアの創意工夫の程度、「経済効果」（需要喚起の程度）、計画の実現可能性などを、消費者・投資家の視点から、生徒間の「相互評価」（「投票」方式）をさせる。

→グループは、事前レポートの内容等を参考にしながら、教師から指示して編成する。グループ数は、5～6人の7グループとする。発表時間は、各グループ質疑応答も含め5分間以内。

→発表に際して、グループで作成したワークシートから、投影するスライドをPDFデータとして事前に取り込み、投影しながら発表する。生徒全員が、消費者・投資家として支持する計画に、シールを添付する方式で「投票」し「相互評価」させる。

### ④授業展開（6時間構成 2単位で3週間をかけ実施）

- ・課題説明（学習課題、取組手順等の指導）資料提示（HAP関連、メッセージ映像）グループ編成
- ・グループ内で「需要を喚起する事業アイデア」の意見交換
- ・ワークシート作成・発表準備①→発表時に投影するスライドとなるシート含むワークシート作成
- ・ワークシート作成・発表準備②→発表用シートのPDFデータ化する
- ・全体発表 各グループ5分間発表後1人1票の「投票」方式で、各計画に対する「相互評価」。
- ・「振り返り」（「シート」による学習のまとめ）

### ⑤評価、「課題」への取組状況等を「パフォーマンス評価」として「加点方式」で後期の評価に加える。

→評価基準の骨子：①ワークシートの完成度②「発表」の実際③「投票」結果④「振り返りシート」取組

### (3) 「パフォーマンス評価」の工夫

「公共」においても、課題学習の方法の一つとして、レポートや小論文などを課して、資質・能力の育成に結びつけていくことが期待される。

表現活動や表現物などの実績や成果をもとに評価する「パフォーマンス評価」として、これまで小論文の指導（個別の添削指導を含む）において「評価の工夫」として取り組んできた概要を、事例として紹介する。

#### 1) 小論文指導の「目的・ねらい」

①生徒に「学習課題（主題）」をしっかりと自己認識（メタ認知）させる。

②課題学習として実施する小論文を通して、既習の知識や概念を適切に活用できる「学力」を育成する。

#### 2) 小論文指導の「目標」

①生徒の「考えや意見」「主張」「抱負」等を、抽象的な感覚の段階から掘り下げ、「語彙」を拡充し、身近な動機（きっかけ）、根拠・論拠にもとづいて表現させ、具体的かつ確実なものとして本人に認識させる。自分が言いたいことをメタ認知させる。

②課題の分量（文字数等）を満たし、設問の意図を把握、課題文等を読解（活用）、必要不可欠な要素を選択（判断）し、指定された形で表現できる力を育成。

③文章表現した事柄の「要点」を口頭で簡潔に説明できる力を身につけさせる。

#### 3) 小論文指導の具体的な方法

①小論文は「相手」を想定し、問われた課題について、論理的に「相手」との「対話」を進めるためのものという理解を促す。

②「設問」や提示された課題文、資料・データ等についての読解力と論理的な思考力・対話力が重要。課題として提示された「設問の条件」を過不足なく満たすことに留意させる。

③「7W5H」は、提示された課題文、資料・データ等から「課題」を明確にするための視点。必要な「情報」を抜き出し活用させる。

When (いつ) Where (どこで) Who (誰が) Whom (誰に)  
What (何を) Why (どうして) Which (比べて)  
How to do (どのように) How much (いくらで)  
How many (どのくらい) How long (いつまで)  
How about (どう捉えているか)

④独りよがりにならないように、小論文の「採点のポイント」などを意識して「推敲」させる。

- ・課題文・資料・テーマを読み取れているか。
  - ・課題の要求や出題意図を正確に理解できているか。
  - ・問題意識、問題発見や問題解決があるか。
  - ・論理的か。論旨の一貫性、筋が通っているか。
  - ・課題に対する知識や教養が、どの程度あるか。
- 推薦入試では、学部・学科に関するテーマについての知識が評価される場合が多い。

・自分の考えが明確に述べられているか。自分の主張に、具体的な資料・根拠がつけられているか。自分の主張に対する反論とそれに対する再反論が書かれている小論文は評価が高い。

・前向きで、まじめで、積極的な人物か。

・字数に過不足はないか

・誤字・脱字がなく、漢字や送り仮名は正しく使えているか。読点（、）などが正しく表記されているか。文章の構成、文体（ですます調）、用語が適切か。

・原稿用紙の使い方に誤りはないか。

#### 4) 小論文指導における教師の役割

①生徒に対して、「対話の相手」となる。

②「教えて、考えさせて、揺さぶる」の指導の流れ。  
まず的確な課題の指示と適度な情報を教える。その際、情報を与えすぎないこと。次に考えさせて、「教えたこと」を確認させ、「教えられたこと」を活用して問題解決させる。自分の理解の状態を自己診断。自己診断した内容を表現させる。さらに生徒が誤解しがちな、又は誤解している点を指摘し揺さぶる。既習事項や関連事項の応用・発展を促し、試行錯誤による技能の向上、もう一工夫ができないか問う。

③学習活動のまとめとして、生徒には常に「進路の目標（志望）」「将来への夢・抱負」など、将来の進路実現に向けた取組みを意識させる。

#### 5) 生徒と対面しての具体的な指導方法

①「設問の意図」（何が求められているのか）を生徒自身に説明させ、「出題者の意図」等の把握を生徒自身に自己認識させる。曖昧な説明の場合には「なぜ」「どうして」「何が」を繰り返して追求し掘り下げる

②次に示す「問いかけ」を行い、「分析」させる。

Q1：設問（課題）に答えているか？

→文字数を満たし、誤字脱字がなく、その他内容要件の充足は当然として、「要約」要求、「縮約」要求、「テーマ把握」要求、「論点・争点提示」要求、事項抽出」要求、「根拠提示」要求、「意見表明」要求などに答えているか？出題者の求めている課題に、過不足なく答えているかを問う。まず量的な充足度を生徒とともに確認し、次に質的な完成度を問う。

Q2：設問への「解答」（生徒の発想・思考）が具体的である（説得力がある）か？

→抽象的な表現に対して、生徒の答えに「なぜ」を5回繰り返して掘り下げさせる。キーワードから「連想」又は「系統樹思考」で関連事項の拡充を図ってやる。一般的な「常識」の範囲から脱皮させる。

→「借り物の意見」を指摘し、身近な体験に根ざした

内容・表現を考えさせる。

→「自分の解答」を獲得させる

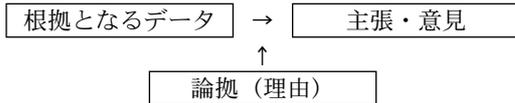
Q 3: 「語彙」が適切に使用されているか?

→基本的な知識量とその理解の深さを確認させる。

「わかったふり」「素朴な(あいまいな)理解」を許さず「明解な理解」(簡潔に口頭で説明できるレベル)を生徒に対して要求する。抽象的な語彙を的確に使用できるようにアドバイスする

Q 4: 文の構成が論理的であるか?

→要素分析:



論拠内容が「根拠データ」と「主張・意見」をつなぐ役目をする。(ツールミンモデル)

→論理構成:

・三段論法

「 $A \rightarrow B, B \rightarrow C, \text{ゆえに } A \rightarrow C$ 」

・対偶「 $\bar{B} \rightarrow \bar{A}$  ならば  $A \rightarrow B$ 」

・○結論が先 ×起承転結

・接続詞の使い方

・主体の統一(係掛け)

・結論(主張・意見)の明確さ

→文章表現:

・設問の文章に続けて読んだときに、自然な文章となるか生徒自身に確認させる。

○○は何か? → (○○は) △△である

・指示語の多用がないか。「これ・それ・あれ」が何を示しているかを確認させる。

・原稿用紙の使い方 / 文末表現の統一 / 引用箇所  
の適切さ 他

Q 5: 提出期限までに完成できるか?

→「課題」である以上、提出期限内に完成させる

一連の学習活動とその指導は、確かに時間と手間のかかるものであるが、生徒一人ひとりの学びを深化させ、「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」を柱とする資質・能力の育成を図るものとする。

(5) 公民教育の「フレームワーク」

2020年1月に開催された日本公民教育学会科研報告会において、岡山大学の桑原敏典氏は、「公共」を核とする小・中・高一貫の公民教育の「フレームワーク」についても、構想を提起された。それは、「自立した主権者としての公共性の獲得過程」として、中学校社会科において「公共的な空間の理解＝公共性の自覚」、中学校社会科において「公共的な議論の必要性の理解＝公的領域と私的領域の区別」、高等学校公民

教育「公共」において「公共的な議論に参画するための資質・能力の育成」、高等学校公民教育「倫理」、「政治・経済」において「専門的な知識の批判的修得による自立的な思想形成」、そして、「18歳＝自立した主権者としての自覚と資質・能力」という構想であった。

小・中・高一貫の公民教育を意識し、校種間連携を図ること、具体的に、1年先行して新学習指導要領のもと展開されている中学校社会科の学習内容について、主たる教材である「教科書」に目を通すことが必要である。地理・歴史・公民分野に分かれる中学校社会科の学習内容を、詳らかに把握した上で、教材の取扱いについての吟味とともに、高等学校段階の課題を焦点化したい。率直な感想であるが、中学校の「教科書」の変革は、すごい。必見をおすすめする。

## 6. 教師の専門職性

(1) 「思考しないことが、凡庸な悪を生む」

ハンナ・アーレントの言葉である。考えるという営みを失ったその先に、全体主義が絶対的な「悪」を設定することを指摘するとともに、「分かりやすい政治思想や、分かったつもりにさせる政治思想を拒絶し、根気強く討論し続けることの重要性」を説いている。

前掲の「政治的中立性」に関連する日本学術会議の提言にある「教える側にとって重要なこと」を実践する教師は、この言葉を、忘れることは出来ない。

(2) 「反省的実践家は行為しながら考える」

「技術的合理性」に基づく「技術的熟達者」から「行為の中の省察」を中心概念とする「反省的実践家」という専門家像への転換を指摘したドナルド・ショーンの言葉である。

教育学者の佐藤学もショーンの『専門家の知恵』を翻訳するなかで、教師の在り方について「専門家の学びは「経験」から学び、「経験」と「理論」を結びつけて「見識」を形成することにある。その最も重要な基礎となるのが「事実」(経験と出来事)から学ぶことである。教室の細やかな事実や出来事を「発見」し「驚き」を感じる事ができる能力が、そしてこの難解な探究を愉しむ事ができる能力が、専門家として教師に求められている。」と語っている。

(3) 「自ら学ぶ教師」として

「教育は人なり」である。どんなに高邁な理想を掲げても、その理想に向けて実践力を発揮する教師がいなければ教育は成り立たない。また「自ら学ぶ生徒」の傍らには必ず「自ら学ぶ教師」がいる。まず教師一

人ひとりが矜持を持ち、主体的にその持ち味と力量を伸ばしていくことが重要である。

教育の場である学校は、人間関係を築く場であり、人間関係を築くことはまさに社会を築くことである。未来を拓くことに通じる。学びを通して、人間関係を築く力を育むことが、教育に求められる不易なる課題の一つであると考えている。

## 7. むすびに

札幌旭丘高校初代校長の梶浦善次氏は「理想の学校」として、「格調高い学問の場所」「明朗な学校」「機能的な学校」「教育界への奉仕」をあげている。また、教師について、「堪能的な教師であるよりも、自らが探究的なものとして、生徒を刺激する」とも語っている。

教師も生徒も一体となって探究する学校、学問することに喜びを持つ雰囲気のある学校。私もそれをめざし、日々の授業実践に取り組んでいきたいと考えている。

# 「数学って何のために勉強するの？」を考える

北海道釧路江南高等学校 今野 嵩弘

## 1 テーマについて

どの教科においても、何らかの場面で「何のために学ぶのか」という、学ぶことの意義について考えさせられる場面があると思われる。これまでの自分自身の経験の中では、授業内での何気ない会話や、教育系の学部への進学を目指す生徒との面接練習、志望理由書のやりとりの場面が主である。

普段、数学を通して生徒と接する中で、多くの質問や疑問については、定理の証明や数値計算によって明確な解答を導くことで、ある程度納得してもらえが、「数学って何のために勉強するの？」という疑問に対して納得させられるような返答ができるかは、いつも手探りである。

今回、自身のこれまでの授業を振り返るとともに、学ぶ意義や数学のよさを再確認しながら、改めてこの疑問について考えていきたい。

## 2 授業スタイルの変遷

数学を通して生徒と関わるようになってから10年が経とうとしているが、授業スタイルは大きく分けて以下の3通りに変化させてきた。

- ①教科書の例題を解説→練習問題の演習→自作の手書きプリントで追加演習
- ②グループワークによる自作授業プリント演習・学び合い→解答・解説の板書
- ③自作授業プリントの個人演習20分→学び合い(グループ・ペア等の指定なし)→解答の板書

初任校での4年間は①の流れで授業を組み立て、教科書による問題演習に加え、自作プリントでの類題演習を通してスモールステップを実感させながら、内容の理解・定着を図っていた。

2校目に異動後、約2ヶ月程度は①のスタイルで通したものの、演習に時間がかかるとともに、授業者の説明が上手く行き届かない場面が増えたように感じ、アクティブラーニング型の授業を目指して、②のようなグループワークを中心とするスタイルに変化させた。授業者による教科書の例題解説を省き、新出事項に関しては穴埋め形式で生徒自身に主体的に考えさせ

ることで、生徒が受け身になってしまう時間を限りなく減らし、活発な学び合いのもと、全員が参加している実感を得られる授業に近づけることができた。特に、学び合いによる相乗効果は大きく、「教える側」は他者に分かりやすく教えるために、内容の正確な理解に努めるようになり、教科書を読み込むことや、授業者への質問を通して、原理原則の理解を深めるようになった。「教わる側」は自身が抱く疑問を他者に正確に伝わるように質問することで、数学を通して質問力を向上させるとともに、意欲的に学習に取り組むようになった。

**② 三角比【文ノ篇】**

【図1】 次の空欄を埋めよう。

右図のような、傾斜角 $30^\circ$ で、地点A、B間の距離が500mのリフトがある。

このとき、地点A、Bの標高差は  m である。

また、「地点A、B間の距離」と「地点A、Bの標高差」について、 $\frac{\text{標高差}}{500} = \frac{\text{ }}{\text{ }}$  が成り立つ。

このことは、 $\angle A = 30^\circ$  とする **【図1】** の直角三角形における角が  であることを表しており、この角をサイン または  といひ、 $\sin 30^\circ = \frac{\text{ }}{\text{ }}$  と表す。

一般的には、【図1】のような直角三角形ABCにおいて、**【図1】** に示すために各辺を  で割り、

【図2】 を導くことで、 $\sin 30^\circ = \frac{\text{ }}{\text{ }}$  を考える。

【図1】

【図2】

また、**【図1】** の直角三角形における **【図1】** を、コサイン または  といひ、 $\cos 30^\circ = \frac{\text{ }}{\text{ }}$  と表す。

同様にして、 $\sin 45^\circ = \frac{\text{ }}{\text{ }}$        $\sin 60^\circ = \frac{\text{ }}{\text{ }}$   
 $\cos 45^\circ = \frac{\text{ }}{\text{ }}$        $\cos 60^\circ = \frac{\text{ }}{\text{ }}$

### 【授業プリント（穴埋め形式）】

その一方で、年間を通してグループワークに「依存」しすぎてしまった結果、「教える側の生徒」と「教わる側の生徒」が固定化されてしまい、自力で解き進める思考力や、根気強く考えることで得られる粘り強さや達成感などを引き出すという観点が希薄になったように感じた。

「集団」と「個」、「対話」と「思考」のバランスをどのように保つかが課題として浮かび上がり、「何のための」グループワークなのかを再考し始めた中、コロナ禍となり3校目へ異動。対面でのグループワークに制約がかかったこともあり、「依存」からの脱却を目指して③のスタイルへ移行した。

それまでの、グループワークを主体とした「対話的で深い学び」の良さを残しつつ、個の粘り強さを引き出すために、授業開始から20分間はデジタイマーによる計時のもと、個人で授業プリントに取り組みせ、そこでの思考を持ち寄った学び合いにつなげることで、質問や対話内容に深化が見られるようになった。

この一連の流れは、「説明書や攻略本を読む前にまずプレイしてみる」→「行き詰まったら友人や攻略本に頼ってみる」→「クリアできて楽しい」→「次のステージへ」という、「ロールプレイングゲームで遊ぶ際の自然な流れ」に近く、意欲的かつ前向きな学びのサイクルが確立されつつあると実感している。

今後の課題として、生活や社会とのつながりを実感できるような取り組みを盛り込みたいと考えているものの、自分自身の引き出し不足により、満足のいくものは程遠い状態であるため、日常のさまざまな場面で、授業に生かせる題材を収集するためのアンテナを持ち、生徒にとって身近なもの結びつけられるよう工夫していきたい。

### 3 授業における留意点

- ① グループワークにおけるグループ編成
- ② 授業者＝コーディネーター（教え込まない）
- ③ 教科書の使用方法
- ④ 振り返りシートの活用

グループワーク主体の授業では毎時間、グループを組み替え、マンネリ化しないよう配慮した。グループの構成は男女混合4人1組を基本とし、3人1組のグループを混ぜる場合もあった。1組5人以上にした場合、対角の座席の生徒に距離ができてしまい、学び合いに向かないと判断したため、4人でグループを組めない場合は必ず3人1組を採用した。

学び合いにおいては「授業者に質問すべきかどうか」という判断の部分についても議論の内容に含ませたいため、机間巡視をこまめに行うことで、授業者に声をかけやすい雰囲気を作るとともに、全体の状況を的確に把握しながら、授業者が教え込む場面を作らすべきかどうかについて、臨機応変に判断することも大切になると思われる。「知りたい」という思いから自発的に行動したときが最も知識を吸収しやすいタイミン

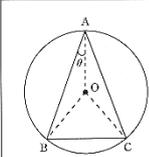
グであると考えため、基本的には「教え込み」の場面を作らず、授業ではコーディネーターの役割に徹するよう心掛けている。

教科書については、授業プリントにおいて新出事項の語句や公式の証明を穴埋め形式にすることにより、生徒自身が自分のタイミングで「攻略本に頼ってみよう」と判断する機会を与えるツールとして有効に活用できており、学び合いの中でも教科書を用いる場面が見受けられる。加えて、教科書を読み込む機会の増加や質の向上も見受けられ、公式を使用する際に必要となる細かな条件の理解や、新出語句の定着にもつながっている。

授業終了時には振り返りシートを配付し、内容の理解度を確認するための問題、ルーブリック風の自己評価、理解度に関する自由記述の3点について取り組みせ、次時まで提出させている。教え込みを行わないため、授業の理解度や、学び合いで解決しきれなかった内容を確認する材料として自由記述欄は有効であり、文章化をもとにしたアウトプットを通して、日常的に記述力の向上を図ることができた。

② 三角比【文ノ篇】 ( )組 ( )番 氏名( )

①  $AB=AC$ 、 $\angle BAC=2\theta$ である二等辺三角形ABCが半径1の円Oに内接しているとき、この三角形の底の長さLを $\theta$ を用いて表せ。



② それぞれ当てはまる記号に○をつけてください。

	振り返りシートの確認事項について	授業での学び合いについて
S	式変形の過程や慣れぬ表現まで丁寧に記述しながら解答を書くことができた。	考えや疑問を上向きな声で相手に伝え、共有しながら理解を深めることができた。
A	慣れぬ表現まで丁寧に記述しながら解答を書くことができた。	考えや疑問を相手に伝えながらも自分の得意な思考を伝えることができた。
B	自分で解答を書くことができた。	考えや疑問を相手に伝えながら問題解決に努めた。
C	上記以外	他者の発言に耳を傾けることができた。

③ 今回の授業プリントの内容で理解すべき点はそのような部分から、自らの理解度を交えながら記述してください。

### 【振り返りシート】

#### 4 やってみたい遊び① (yogeometry)

オイラーの多面体定理を実感させる遊びとして、爪楊枝とグルーガンを用いた工作 yogeometry (ヨージオメトリー) に取り組みせした。

元ネタは第110回数学教育実践研究会での神奈川県

藤沢市立第一中学校元校長大野寛武氏による講演であり、yogeometryはyoge（爪楊枝）+ geometry（幾何学）からなる造語とのこと。



【yogeometry 作品例】

実施に際しては、40人学級にも対応できるようにグルーガンを20本用意し、4人1組のグループに2本ずつ配付。延長コードも数本必要となるが、グルーガンの電圧は低いため、ブレーカーの心配は不要と思われる。

グルーガンの使用に際する火傷への注意喚起や「爪楊枝の両端同士をつなげる」というルールをはじめ、制作した立体のスケッチ、頂点・辺・面の数、立体の強度について記載するワークシートを配付し、自由に作らせることにした。

☆yogeometryの世界☆

【yogeometry】…yoge（爪楊枝）+ geometry（幾何学）

【Caution】

① グルーガンは熱くなるため、ヤケドに十分注意すること。

② グルーガンは上向きで使用すると逆流して故障の原因となるため、下向きで使用すること。

③ 溢れ出したグルーが机に付着した場合、すぐに除けるとヤケドするため、グルーが冷めて固まってから取ること。

④ グルーガンは連続して1時間以上使用すると故障の原因となるため、使用後は速やかにコンセントを抜くこと。

**Mission** ① 制限時間40分まで一人一つ以上の立体を完成させよ。② 最もできるのは爪楊枝の両端同士のよ。

② それぞれが作成した立体をグループで共有し、下表を埋めよ。

【立体の形（図示）】

①	②	③	④	⑤
⑥	⑦	⑧	⑨	⑩

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩
頂点の数										
辺の数										
面の数										
立体の強度										

【yogeometry ワークシート】

立方体や正四面体をベースに、ビルや家のような形の立体を作る生徒が多くなったものの、独創的な形を考案する生徒も一定数出てきたため、十分な数のサンプルをもとに、クラス全体で互いを賞賛し合いながら考察する姿勢を引き出すことができた。

【生徒の主な感想】

- ・人によって作るものや爪楊枝の使い方がさまざまで面白かった。
- ・強度を増すためには斜めの支えが大切だということが分かった。
- ・オイラーの多面体定理は知らなかったし、考えたこともなかったので、これを発見した人はすごいと思った。
- ・数学の内容が建物の設計やデザインに用いられていて興味深かった。
- ・何をやるにも計画的に先のことを見通して行動する必要があると改めて感じた。

また、上記の感想から、数学を題材に、ものづくりの感性や先を見通した計画性など、人生をよりよく生きるための引き出しを増やす活動にできたと感じている。一般的に「主要教科」と呼ばれる教科の授業において、小学生の頃に体験した図工のような要素が入る場面は決して多くはないため、生徒にとってはそのような観点でも新鮮味があり、作業に没頭することで得られる充実感や達成感を味わえるという点でも、有意義な時間となった。

5 やってみたい遊び②（フラッシュ2次不等式）

不等号の向きや等号の有無に応じて解答が多岐に渡る2次不等式。教科書に掲載されている解のパターンを丸暗記しようとする生徒も少なくないため、2次関数のグラフの状況を瞬時にイメージして、反射的に解を導けるようにすることで、「数学＝解法の丸暗記」という考えから脱却させたいと考えた。そこで、「反射的に」という部分から「フラッシュ暗算」をヒントに、PowerPointで問題が一瞬だけ表示されるように設定した「フラッシュ2次不等式」を作成し、単元の終盤で取り組ませた。

第16問 ★★★★★

(x - 5)(x - 7) < 0

【フラッシュ2次不等式】

問題の表示時間は0.5秒から開始し、5問ごとに0.1秒ずつ短縮。フラッシュ暗算と比較すると、一度に目に入る情報量が多いため、表示時間が0.2秒ともなると、図のような問題でも難易度が高く感じるようになる。終盤には、因数分解されていない形や、右辺が0ではない形の問題も混ぜたため、出題傾向の変化に混乱しながらも、楽しんで取り組む生徒が多かった。

答え合わせについては再度、画面に問題を提示し、不等号の向きや等号の有無、数字や符号の読み取りの正確性などについて、互いの解答を比較しながら確認する姿勢を自然と引き出すことができた。

ゲーム感覚で取り組めることに加え、問題が一瞬しか表示されないことから、全員が自然と画面に集中し、教室全体が良い緊張感に包まれるとともに、思考の瞬発力の向上を図ることができたと感じている。

他にも、「2次方程式」「三角比」「三角関数」を題材にしたものを作成し、知識の定着がある程度進んだ各単元の終盤で扱うことにより、瞬発力の向上や解法の丸暗記防止を意識させた。授業者としては、単元に応じた最適な遊びを考える中で、生徒の思考のプロセスを想像・分解することにより、「生徒目線に立った授業準備」の大切さを改めて実感する機会となった。

## 6 やってみたい遊び③（2次不等式カルタ）

2次不等式の解を反射的に導けるようにさせるための工夫として「フラッシュ2次不等式」の他に、「2次不等式カルタ（下図）」を作成した。



【2次不等式カルタ（左上：問題山札）】

遊び方はカルタと同じ要領で、問題が書かれた山札から1枚をめくり、その問題の解となる札を取るというものである。4人1組（または3人1組）のグループで、他者との競争の中で行うことにより、「素早く正確に解を導く」という意識を高めることができた。

また、「お手つき」かどうかの判定もグループ内で行うため、全員で問題と解法を共有しながら学び合えるという点で、非常に有効なツールであると感じた。

さらに、問題と解の山札を逆にして遊ぶこともでき

るため、「解から問題を導く」という逆方向の思考をさせられるという点でも、使い勝手の良いツールである。

現状では問題が因数分解されている形のもの（易）と、因数分解されていない形のもの（難）の2種類を作成済みであり、グループや難易度を変更しながら授業1時間で最強決定戦を行う、または、講習開始時のウォーミングアップのツールとして使用している。

実力が近い者同士でグループを組むことにより、数学で遊んでいるということを忘れるような、本物のカルタ同様の盛り上がりが見られ、このような部分からも数学のよさや、学びの可能性のようなものを再発見できたと感じている。

## 7 やってみたい遊び④（数学ジグソー法）

異なる内容について学習した後、それを持ち寄り紹介し合いながら、ジグソーパズルを完成させるように全体像を浮かび上がらせる学習法である「ジグソー法」を簡素化し、ゲーム化した上で独自に名付けたものが「数学ジグソー法」。

数学Iの「図形と計量」の単元を題材に、問題文カードと図形カードの組み合わせによるセットを2種類、問題文カードのみのセットを3種類作成した。



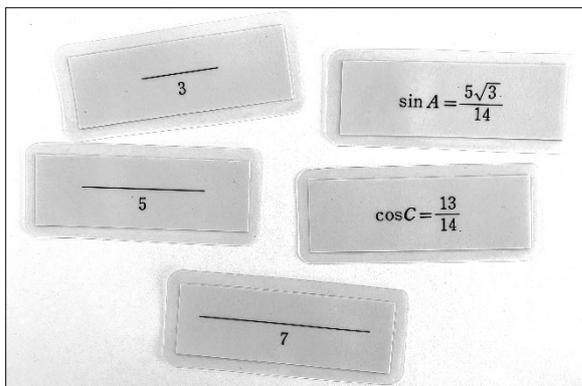
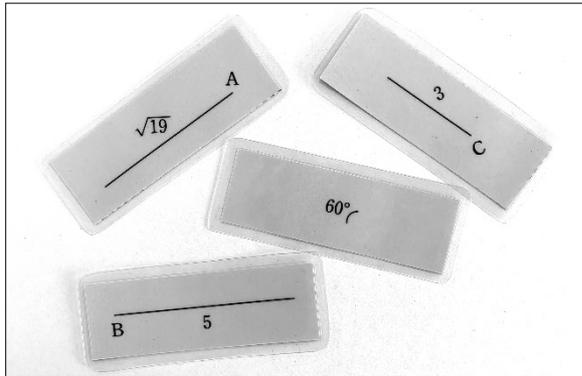
【数学ジグソー法 問題セット】

遊び方は、グループ内で手札の枚数が均等になるように分け、「自分の手札を他者に見せてはいけない」というルールのもと、口頭で手札の内容を共有しながら問題を解決するというものである。

数学を得意としない生徒でも、問題文を共有する場面では必ず発言する機会があり、問題解決のプロセスをグループ全員で考えることにより、応用問題に取り組む際に大切な「順序立て」や「情報の細分化」を自然と身に付けられるという点で、この遊びは有効であると考えている。

実際に行ってみると、問題文を共有するだけでも大いに盛り上がり、解法を考える際には真剣に意見交換の様子が見受けられ、メリハリのあるグループワークのもと、三角比の活用を楽しんでもらえたと感じている。

現在、他の単元での応用には至っていないものの、単元終盤の発展問題に根気強く立ち向かわせるための1つの方法として有効であると感じるため、今後、レパートリーを増やしていきたい。



### 【数学ジグソー法 図形カード】

【問題①】 図形カード4枚 +  
めんせきをもとめよ

【問題②】 図形カード5枚 +  
さいだいかくのさいん

#### 【問題③】

- ・ $\triangle ABC$ は鈍角三角形である。
- ・点 $O$ は $\triangle ABC$ の外接円の中心である。
- ・ $\triangle ABC$ において、 $a = 7$ である。
- ・ $\triangle ABC$ において、 $b = 3$ である。
- ・ $\triangle ABC$ において、 $c = 8$ である。
- ・円周率を $\pi$ とする。
- ・三角形の面積=底辺 $\times$ 高さ $\div 2$ である。
- ・円の半径を $r$ とするとき、円の面積 $=\pi r^2$ である。
- ・円の半径を $r$ とするとき、円周の長さ $=2\pi r$ である。
- ・弧 $BC$ と弦 $BC$ で囲まれた図形のうち、大きい方を「甲」とする。
- ・弧 $BC$ と弦 $BC$ で囲まれた図形のうち、小さい方を「乙」とする。
- ・「乙」の面積を求めよ。

#### 【問題④】

- ・手元には「500 mのロープ」と「測ルンです3」がある。
- ・「測ルンです」をのぞくと、目線の高さからの仰角を測定することができる。
- ・「測ルンです3」は「測ルンです2」よりもバッテリーが15%長持ちする。
- ・目線の高さは160cmとする。
- ・「北海道タワー」から500 m離れた地点でのタワーの先端を見上げる仰角は $35^\circ$
- ・「北海道タワー」の周囲1 kmは何もない平地で、標高は一定である。
- ・ $\cos 35^\circ = 0.82$ とする。
- ・ $\tan 55^\circ = 1.43$ とする。
- ・①「北海道タワー」の高さを求める方法を説明せよ。
- ・②「北海道タワー」の高さを求めよ。
- ・解答は小数第2位を四捨五入すること。
- ・解答の単位は「メートル」とする。

#### 【問題⑤】

- ・地点Aと地点Bの標高は同じである。
- ・地点Bと地点Cの標高は同じである。
- ・地点Cは山頂から真下にある。
- ・山頂を地点Dとする。
- ・地点Aから山頂を見上げるときの仰角は $30^\circ$
- ・地点Aと地点Bは直線距離で1 km 離れている。
- ・ $\angle ABD = 45^\circ$ である。
- ・ $\angle BAD = 75^\circ$ である。
- ・ $\sqrt{6} = 2.45$ とする。
- ・地点Aと山頂の標高差を求めよ。
- ・解答は小数第1位を四捨五入すること。
- ・解答の単位は「メートル」とする。

### 8 やってみたい遊び⑤ (定期試験予想問題を作る)

定期試験が間近に迫る度に、「どの問題出ますか?」「対策プリントないんですか?」などの声がかかるため、「学びに向かう意識が高まっているタイミングである」と好意的に捉えるとともに、その意欲を逆手に取り、予想問題を作成させることにした。ただし、自由に作成させた場合、教科書や問題集の問題を抜き出すだけの作業になってしまうと推測したため、「4択問題」という制限を設けることで、思考の要素を盛り込んだ。

【問題】 2次関数  $y=x^2-x$  の値域が  $0 \leq y \leq 6$  となるような定義域は…

- ①  $-1 \leq x \leq 3$       ②  $0 \leq x \leq 3$   
③  $-2 \leq x \leq 0$       ④  $-2 \leq x \leq 1$

実際の定期試験において、このような問題を出題したことがあり、正答率が芳しくなかったため、生徒たちの脳裏には4択問題の印象が強く残っており、スムーズに作業に移行できていた。

選択肢の作成にあたり、正答だけではなく、間違いやすいものを3種類推測する必要があるため、計算過程の細分化や、自身の知識の再確認にもつながり、必然的に学びは深いものとなった。また、「方程式」と「2次方程式」、「放物線」と「2次関数のグラフ」のような言葉の使い分けについて考えるきっかけにもなり、問題文の情報を注意深く読み取る意識付けにもつながった。

【問題】2次関数  $y=f(x)$  において  $D < 0$  であれば…

- ①実数解をもたない
- ②ただ1つの実数解をもつ
- ③異なる2つの実数解をもつ
- ④実数解をもつ

実際に、生徒が作った中にはこのようなものがあり、表現しようとしているニュアンスはくみ取れるものの、惜しくも問題としては成立していないため、クラス全体で共有し、どこを直せば問題として成立するかを考えさせることで、細部にまでこだわり、納得するまで徹底的に突き詰める大切さを実感させることができた。

問題作成を通して、解答者に何を問い、何を思考させたいかを考える視点を持つことで、多くの情報の中から、重要となる部分を自分自身で判断する目を養うことにもつながったため、数学に限らず幅広い場面で活かせる力の向上に貢献できたと感じている。

### 9 やってみたい遊び⑥(身近な容器の容積を求める)

数学Ⅲ「積分法の応用」の単位において、回転体の体積を学習し終えた段階で、身近にある容器の容積を求めるグループワークを行った。

高校数学の終盤まで学習を進めてきたことにより、生徒たちは問題解決に活用できる多くの知識を身に付けた状態であり、アプローチの引き出しが増えたことでさまざまな問題を俯瞰できるようになっているため、小学校で学習した「体積の算出」について、高校3年の集大成の時期に俯瞰させ、問題解決に向けて「どのようなアプローチを選択すべきか熟考すること」を最大のねらいとして設定した。

題材にしたのはコンビニでも購入可能な飲料の容器であり、算出に際しては定規、スマートフォン(電卓、グラフアプリ)の使用を許可した。

工夫次第では積分を使用せずに近似値の推測が可能であるが、積分を用いた回転体の体積の算出を学習して間もなかったため、結果的に5つすべてのグループ

がアプローチの中に積分を盛り込む形となった。

スマートフォンの使用方法については、容器の形状をより正確に把握するために、ライトで照らす工夫を考えるなど、高校生ならではの発想に驚かされた。グラフアプリの使用については、残り時間との兼ね合いで使用を断念せざるを得ないグループがあったものの、2次関数や三角関数を用いて容器の形状に近い曲線を探す発想はすばらしかった。



【スマートフォンで容器を照らす様子】

解答の確認については、実際に容器に水を注ぎ、計量を通して目に見える形で容積を実感させることで、全員で互いの活動を称え合う姿勢を自然な形で引き出すことができた。



【計量による答え合わせの様子】

また、商品開発において、企業が容器の形状に込めた意図についても考えさせることで、数学が世の中で活用されているということや、そこに「人の思い」が含まれていることも実感させることができた。

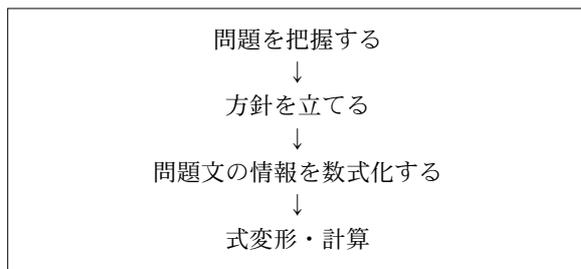
授業後、生徒から「楽しかった」「今度は別の容器でやりたい」「解き直しのために余った容器をください」など、前向きな声が多く挙がり、知識の組み合わせ方を考えながら、問題解決に向けて協働的に取り組むことの面白さも体感させることができたと感じた。

「高校数学を生活と結びつけて実感させること」が自分の中で大きな課題であったため、非常にシンプルな題材を通して、深い思考のもと、数学と生活の結びつきを感じることにつながられたという点で大きな収穫となった。今後も、生活の中で小さなアンテナを持ちながら、授業に生かせる題材を拾い、生徒とともに数学を楽しむ時間を共有していきたい。

## 10 「数学って何のために勉強するの？」を考える

「全員が分かる授業をしたい」という理想のもと、いかに分かりやすく教える（教え込む）かを第一に考えていた初任校での授業準備の経験は、今となっても大きな財産となっており、この基盤が現在の学び合いを中心とする授業作りを支えている。

授業スタイルの変化に伴い、「数学の問題を解けるようにさせる」という「結果」の部分だけに着目するのではなく、「数学を通して主体的・協働的に思考させる」という「過程」の部分にも目を向けられようになったことにより、「数学を学ぶ」「数学で学ぶ」ということには「よりよく生きるための力」を幅広く身に付けられる点で、大きな意義があると感じられるようになった。また、数学の問題を解く際の思考の流れを簡単に分けると、以下のようなプロセスを辿ることが多く、この順序立てて物事を考える「論理的思考」を磨くという点でも、数学の学習は大きな役割を果たしている。



状況に応じて公式や式変形を使い分けることや、先を見通して最適なアプローチを考えながら問題解決に向かうことは、日常生活において、自分自身がそれまでの人生で培った知識や経験をもとに、最善の選択を考えながらよりよく生きようとすることに似ており、直接的に数学の知識を使わずとも、数学的思考は無意識的に使われているため、このような観点からも数学を通して思考することは尊いと感じられる。

証明問題や大学入試問題のような発展問題では、完答するまでに多くの手順を踏むことが求められるとともに、1つのミスも見逃さない注意深さや正確性を要するため、想定される数多くのアプローチを相対的に比較し、「避けるべきアプローチ」を選択しないよう注意しながら解き進めることを通して、物事を多角的に見る視点を持つことにつながる。また、「相対的に比較する」という視点を持つことにより、先入観や自己中心的（絶対的）な思考に囚われず、さまざまな考え方を許容できる、心のゆとりを持つことにもつながると考える。

解答に「美しさ」を求めるという点においても、心のゆとりや視野を広く持ち、客観的な視点から物事を見ることの大切さや、受け手を思いやる気配り・心配

りについて考える良い材料となる。しかし、生徒から受ける質問の中で少なくないのが、解答の形式についてのものであり、教科書や問題集の模範解答と自分の解答を比較して形（見た目）が異なる場合、誤答を疑って即座に質問が飛ぶ。異なるアプローチでも最終的に「同じ解答」に辿り着くという数学のよさや面白さを伝えている一方で、正答の形（見た目）が1つではないという矛盾のようなものが生じることにより、混乱を招いてしまう点についてはいつも反省させられる。解答に辿り着くまでの工程が多いにも関わらず、1つのミスも許されない厳しさが原因により、数学から距離を置く生徒が少なくない中で、ようやく辿り着いた解答に「美しさ」まで要求するのは非常に酷であるが、このあたりの感性を大切にできる許容を持たせられるよう、今後も状況を見ながら根気強く伝えていきたい。



【容積を求めさせた容器】

先に記述した飲料の容器の形状が単純な円柱ではない理由として、凹みを作ることにより、飲む際に一気に口に流れ込むのを防ぐ目的があり、この凹み具合を決定する際にも、数学が密接に関わっている。ここには、「消費者に安心・安全で心地よい商品を届けたい」という「人の思い」が詰まっており、自分の知識や技術を使うことで「自分以外の誰かを幸せにする」という、働く意義にもつながっている。実際に働く上で、数学の知識を活用する場面が訪れるかどうかは不透明であるが、パティシエが円形のケーキに巻くフィルムの長さを測る際や、美容師がパーマ加工を施すためのカーラーの大きさを決定する際に円周率を用いた計算を必要とするなど、「数学の活用を求められる場面」の実例を授業者として1つでも多く挙げられるようにすることで、「社会で直接生きる数学」についても、実感できる授業作りにつなげていきたい。

今回、「数学を学ぶ意義」について改めて考える中で、職業・実生活での直接的な使用や、思考力・判断力・表現力などの名称がついた力の向上に限らず、学ぶ過程を通して多くのことが得られると再確認できたため、これを糧に、今後も遊びを交え、「楽しめるもの」として数学を提供しながら、生徒と学び続けていきたい。



# 小規模校の特性を生かした数学科の取り組み

北海道阿寒高等学校 山上 祥吾

## 1 はじめに

### (1) 本校の現状と課題

本校には現在53名の生徒が在籍している。筆者が赴任した平成25年度の全校生徒は110名で、一問口が完成する平成26年には84名となり、生徒数は減少傾向にある。約半分が町内の中学校(阿寒中と阿寒湖中)から、もう半分は旧釧路市内の中学校から進学した生徒たちが通学している。生徒は比較的に大人しく真面目な性格が多い一方で、中学校段階に不登校を経験したり、学習内容の定着が未熟だったりする傾向も見られ、学習に対してマイナスイメージを持つ生徒が多い。

そうした生徒の様相から、わかる授業の実践や進学・就職・資格取得などといった教育的ニーズに対応した幅広い教育課程を展開している。特にT.T.や基礎基本の定着のために単位数を増やした授業、遠隔授業配信センター(北海道有朋高等学校 通称T-base)からの配信授業と地域連携協力校(釧路湖陵高等学校)による出張授業、2つの国立公園をフィールドにした地域の人材や環境を生かした教育(地域巡検や自然体験活動)などが特徴的である。また、地域にある学校としての役割が大きくあり、地域の人材や学習機会を設けた教科横断的な授業(幼稚園交流、防災教育や地域学習)などにも力を入れている。

小規模で落ち着いた学校生活の中で、「一人一人を大切に、豊かな心の育成をめざす」という学校教育目標のとおり、教師が在籍している生徒一人一人に日々関わりあひながら成功体験を積み重ねさせ、教育活動を展開している。そうした成果もあってか、道内の国公立大学をはじめとする4年生大学進学から、地元就職までの進路多様化にも対応できている。

### (2) 小規模校の特性と本校の強み

本来、小規模であることはネガティブな面に目が向きがちである。しかし、一般に小規模校の学習指導では、「小規模性を基盤にした間接指導・相互学習指導・習熟度別指導・個別指導・グループワーク等を組み込むことが容易」<sup>\*1</sup>などメリットもあり、こうした面を教師や生徒が理解することは重要である。

また、在籍している生徒たちは落ち着きのある性格の持ち主で、面倒見の良い生徒も多いことから、普段から生徒が教え合ったり、相談したり、補完し合ったりする

というような生徒同士のナチュラルサポートができる集団である。

さらに、例えば、町内の園児と遊びを通して交流する幼稚園交流では、保育計画を立案して、園児の前で説明したり、絵本を読んだり高校生として振る舞うことができる。つまり、立場や場面を適切に設定すれば、きちんと高校生としての役割を果たすことができる。

### (3) 主体的・対話的で深い学びの実現へ向けて

新しい学習指導要領では、生徒の「知識及び技能の習得」「思考力、判断力、表現力等の育成」「学びに向かう力、人間性の涵養」を目指す資質・能力とし、「言語環境の整備と言語活動の充実」、「見通しを立てたり、振り返りたりする学習活動」、「コンピュータや教材・教具の活用」などをはじめとする「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善」が求められている。

ところが、前述したように本校の生徒は入学段階から学習に対してマイナスイメージを持つことが多い。授業はおとなしく聞いているが受け身な姿勢で、継続した学習習慣が身につけていない。例えば、公式は暗記と考えており、そのときはわかったとしても知識と知識の結びつきが弱く断片的な理解に留まっている。このような生徒たちにくらわたりやすい説明を用意したとしても、生徒から主体的に取り組んだり、こうなるのはなぜだろうという疑って考えたりする場面がなければ、新しい学習指導要領で求められている主体的・対話的で深い学びの実現の実現は難しいと感じている。また、成功体験を積み重ね、何より学ぶことは楽しいことだという認識を生徒自身が持つことが重要である。

そこで、1-(2)で述べたように、小規模校の学習指導の利点を活かしながら授業の構造・形態や内容を見直し、生徒が生き生きとした状態で体系的なつながりを意識しながら学べるような授業の展開を考察した。

## 2 数学科での取り組み

### (1) 選択授業「数学Ⅱ」による授業改善

本校の授業の中でもさらに少人数で行われていることから、選択授業からの授業改善を試みた。授業の構造・形態や内容が見直しやすく、効果も見えやすいと考えたからだ。

教師の説明から問題演習という従来の流れ(表1)か

ら、先に生徒が教科書の内容理解（つまり予習）と教え合い（相互の発表）を行ってから教師が足りないところを補足説明する流れ（表2）への転換を行った。アメリカ国立訓練研究所（National Training Laboratories）によれば、教師から生徒への一方的な講義（Lecture）よりグループディスカッション、さらに誰かに教える（Teaching Others）の方が、学習定着率が高いとされている。<sup>\*2</sup> このラーニングピラミッドという理論が正しいかどうかは別にして、反転授業<sup>\*3</sup>なども参考にしながら生徒の主体的な活動を意図して、知識と知識を結びつけた体系的な理解をさせるために、生徒に説明させる場面を多く設けた。

もちろん、はじめて学習する難解な定理・法則については教師の説明から問題演習という従来の流れ（表1）で進めることもあるが、既習事項と関連が深いものについては生徒に互いに説明させ合い、理解を深めることにした。例えば、二項定理や内分点・外分点、微分・積分の考えなどは教師が説明し、2直線の関係（平行条件と垂直条件）や三角関数の相互関係は生徒に互いに説明させ合う。（表3）

小単元	時間	小単元	時間
剰余の定理 ※教師による説明 ※問題演習	1	剰余の定理 ※教師による説明 ※問題演習	1
因数定理 ※教師による説明 ※問題演習	1	因数定理 ※教師による説明 ※問題演習	1
高次方程式（因数分解による解法） ※教師による説明 ※問題演習	1	高次方程式（因数分解による解法）※グループ活動 高次方程式（因数定理による解法）※グループ活動	1
高次方程式（因数分解による解法） ※教師による説明 ※問題演習	1	高次方程式（因数分解による解法）※発表 高次方程式（因数定理による解法）※発表	1
まとめ	1	まとめ	1

従来の授業（表1）

改善後の授業（表2）

	教師が説明	生徒が説明
方程式・式と証明	パスカルの三角形 二項定理 複素数の演算 解と係数の関係 剰余の定理 因数定理 証明	乗法公式 因数分解の公式 整式の除法 分数式の計算 解の公式 判別式 高次方程式の解法
図形と方程式	内分・外分点の座標 重心の座標 座標を用いた図形の性質の証明 点と直線の距離 円の方程式 3点を通る円 円の接線の方程式 2つの円の位置関係 軌跡 線形計画法	2点間の距離 直線の方程式 2直線の関係 円と直線の共有点の座標 円と直線の共有点の個数 領域
三角関数	一般角 弧度法 三角関数のグラフ 三角関数を含む不等式 加法定理 三角関数の合成	三角関数の定義 三角関数の相互関係 三角関数の性質 三角関数を含む方程式

教師が説明するか生徒に説明させるかの分類（表3）

## （2）本科目の教育課程上の位置づけ

本授業は選択授業の数学Ⅱ（2年次2単位、3年次2単位の合計4単位）である。受講者は毎年4名～8名程度で、主に4年生大学や看護・医療系の専門学校への進学者向けに開講している。途中の進路変更や生徒のモチベーションなども相まって、本科目を利用して受験するという生徒は実際には少なく、センター試験（現在の大学入学共通テスト）の受験者数の実績もあまり多くはない。どちらかというとなら数学Ⅰの復習+αといった最低限の教養科目としての位置づけである。しかし、「学びに対して向上心を持って学生生活を送って欲しい」という筆者の願いから、「学び方を学ぶ機会」あるいは「友人らと共同的に学ぶ機会」として、本授業の受講を勧めている。本校から意欲的に学び、上級学校へ進学するための登竜門として位置づけている。

## （3）授業の流れ

本授業（グループ発表）の流れを以下に示す。

ア 準備 ※原則1時間

▼生徒は2～4人（受講人数が毎年変化するため、班の人数はそれを2つに分けたものである。）の班を編成する。

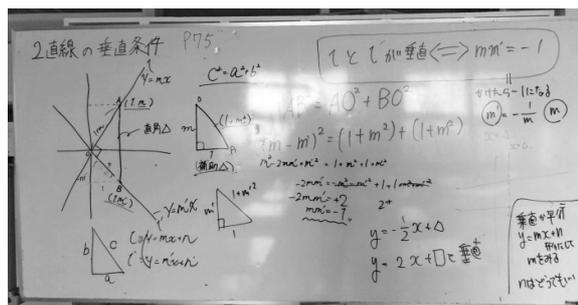
▼できるだけ近い領域2つを割り振り、難易度が入れ替わるように前半と後半交代しながら役割分担する。

▼教科書を読み解きながら個人で考えてみる個人思考。

▼理解が深まったら（または行き詰まったら）班員の中で解き方や考え方を共有したりする。

▼板書計画を立てる。担当箇所を決める。（発表のための準備）

▼教師に質問しても良い。



生徒の板書例

イ 発表 ※原則1時間

▼説明には目安時間20分を設定し、20分×2＝40分

▼説明が終わったら問題演習などして解答を確認する。必要に応じて生徒に質問させ、受け答えまで生徒が担当する。

▼残り時間、10分で教師からの補足説明を行う。



グループ発表の様子

#### (4) 生徒の役割

このような授業の中では、生徒の役割の変化を自覚しなければならない。普段は教師の説明をよく聞き、板書を書き写し、出された問題（課題）に取り組むことになる。

これに対して、本授業ではまず課題が何かを理解し、ペンを動かしながら課題解決に向けてアプローチを考える（個人思考）。ある程度理解が進んだり、逆に行き詰まってしまったりしたとき、友人同士で課題を共有し、考え方の共通部分や相違点を見つけ、ポイントを整理する（グループ活動）。

学習指導要領上の言葉を借りるのであれば、「何ができるか（知識・技能）」「できることをどう使うのか（思考力・判断力・表現力）」「よりよい解法はどれか（学びに向かう力・人間性）」ということである。

最初は数学の内容以前に「今日のめあて」が明確でない生徒もいるかもしれないが、回数をこなすことでできるようになる。

#### (5) 教師の役割

生徒の役割が変化するのと同時に、いつも説明中心となる教師の役割も変わってくる。第1に主な仕事は生徒の思考などの場面の記録と観察をすることである。いつだれがどのように発言したか、どこで計算を間違ったか、説明の言葉遣いは正しいかなどメモを残したり、ビデオで記録したりする。補足説明の際には個人名を出しながら、良い発言を拾いながら説明すると生徒も思考の過程を振り返ることができる。

第2に、生徒と生徒をつなぐファシリテーションである。生徒が聞いてきたことに反応はするが、この個別指導の際にも必要最低限のサポートになるように我慢したい。例えば、生徒同士に解決できそうな場合には「（Aという生徒に）Bはどう考えているか聞いてみたら？Bはわかっているみたいだよ。」「既習事項の時はどのように計算したかな？」などここでも生徒同士の関わりをつくるように工夫する。単純に答えを教えるのではなく、「この値がこうなったらどうなる？まず2や3で考えてみると…」「この公式の利点ってな

んだらう？覚える必要はあるかな？」「この解法以外に解法はないの？」「今何までできていて、何が課題なんだらう？」「既習の学習事項では、どのように計算していたかな？」など生徒が思考するのに必要な助言する。生徒が教科書以前のことでつまづいたり、逆に教科書外のことを発見したりすることも想定して柔軟な対応が求められる。

第3に生徒に主体性を意識させつつも、教師が授業の主導権を握るということである。すべて生徒に任せてあるということではなく、あくまでも主体性を育むのであって、あくまでも授業のペース配分、展開の仕方、ルールづくりの責任は教師にある。その一方で、生徒たちにはすべて自分たちが自主的に行っていると思わせることも大切である。

第4にルール重視ではなく思考を重視した学習環境の整備である。例えば、自然クラスの授業ではノートは回収し、授業中のノートがとられていなければ減点などが考えられる。しかし、本授業では「自分で必要だと思ったことだけをノートに書く」という生徒たちが思考・判断・表現しやすい環境作りを行っている。話し合いを効率よく行うために座席を自由に組み替えられるような教室を利用し、ホワイトボードを2面用意した。また、必要に応じてタブレットやスマートフォンの利用を許可してICTの活用（Desmos, GRAPES, GeoGebraなど）を促したりする。

さらに、不足することが予測できれば必要な資料等を提示する。具体的には数学Iでの既習事項に関する資料である。生徒が必要だと考えるものはできるだけ用意した。また、思考・判断・表現に力を注ぐのであればそれにつながる作業（例えば単に公式をノートに書き写す作業）は省くなど、時間短縮も工夫の1つであると考えられる。

#### (6) 具体的指導場面「整式の除法」

##### ア 教師による導入場面<5～10分程度>

導入場面では、第1に「整式の加法・減法・乗法についてはすでに学習済みであること（数学I）」、第2に「今回の目標は整式の除法（割り算）を考え、商と余りを求めること」、第3に「整数の割り算の計算方法を思い出しながら計算を考えるとよいこと（具体的に何をどうまでは説明はしない）」などを確認してから個人思考やグループ活動に取り組みさせた。この他に補足事項があれば追加したり、班員の入れかえ時期にはグループ分けを行った。

##### イ 個人思考・グループ活動の場面<30～45分程度>

個人思考の場面では、自分のノートやワークなどに問題を解きながら問いの内容（「何ができるようになれ

ばいいか) を考えさせる。グループ活動の場面では、わかった生徒とわからない生徒の交流が始まる。「最高次数の係数をそろえるまではわかるけど、なぜ引くの? (なぜ符号が変わるの?) 」といった生徒なりの疑問をぶつけ合わせたり、説明をさせたりする。中には連立方程式の加減法と混同し、「足しても引いてもいいんじゃない? 」などという生徒もいる。教師は基本的に助言せず、聞かれたら答えるというスタイルをとった。グループの話し合いが活発化しなかったり、誤った方向に流れたりするようであれば、多少のフォローアップをする。必要に応じてあまり理解していないようであれば「整数のときはどんな計算方法だったっけ。(かけてひくことの繰り返しの確認)」という声かけ、逆によく理解しているようであれば、「何をもって余りとなるのだろう。(計算の終わりはいつどこで判断できるか)」「ある次数をあけて計算するときって整数だとどのような場面かな。」などと問いかける。

例えば、新しい学習指導要領(解説)では、次のように記載されている。

多項式の除法や分数式の四則計算の方法について既に学習した数や式の計算と関連付け多面的に考察して理解し、簡単な場合について計算をすること。(ア(イ)、イ(ウ))

多項式の除法や分数式の四則計算の方法について理解し、簡単な場合について計算ができるようにする。ここでいう「簡単な場合」とは、分数式の分母の次数が二次程度までのものことである。指導に当たっては、数の計算の場合と対比するなどして多面的に考察することが大切である。

例えば、 $x^2+5x+8$  を  $x+2$  で割る除法の計算は、小学校で取り扱った  $158 \div 12$  の筆算の計算と関連付けて、その方法を考察する。また、多項式の除法の計算結果を式で表す方法についても、整数の除法の場合の表し方と関連付けて考察する。

$\begin{array}{r} x+3 \\ x+2 \overline{) x^2+5x+8} \\ \underline{x^2+2x} \phantom{+8} \\ 3x+8 \\ \underline{3x+6} \\ 2 \end{array}$ <p>商 <math>x+3</math> 余り <math>2</math>  <math>x^2+5x+8=(x+2)(x+3)+2</math></p>	$\begin{array}{r} 13 \\ 12 \overline{) 158} \\ \underline{12} \phantom{0} \\ 38 \\ \underline{36} \\ 2 \end{array}$ <p>商 <math>13</math> 余り <math>2</math>  <math>158=12 \times 13+2</math></p>
---	---

学習指導要領解説における指導の例

### ウ 発表・教師の補足説明場面<20分×2+10分程度>

「イ」で話し合ったことなどを中心に、生徒が別な職員に説明する。例題を全体説明のあと、問題を何問か解いて質問を受ける。質問に対する答えはできるだけ生徒にさせる。両方の発表が終われば、生徒の補足説明となる。この指導場面では商と余りを求めるに固執しすぎて、計算結果から(整式)=(割られる式)×(割る式)+余りとなり、 $A(x)=B(x) \times Q(x)+R$  と表現できることや表現することの良さなどについて触れられないことが多いので、教師から説明をする。

## 3 成果

主に授業者の生徒に対する授業中の観察(発言やノート、板書、他の生徒との対話など)と授業アンケート(本校独自、年1~2回実施)から本授業改善を通して得られた成果を以下に示す。なお、授業アンケートについては受講者数が少ないため、自由記述欄を、テキストマイ

ニングなどを用いて分析した。

### (1) 生徒のつまずきの把握

第1に、本授業改善の成果として生徒がいろいろところで小さなつまずきが生じ、それが理解を妨げていることわかった。特にちょっとした勘違いによる計算ミスや教科書の記載されている記号表現などでつまずいていることが多い。教科書の内容理解の際、行き詰まっていた場面や間違いやすかった場面の例を以下に示す。こうしたつまずきや疑問を持っているのは本校生徒だけではなく、どの高校のどの生徒にでもありえる。

### 生徒のつまずきの例

#### ア 式と証明 分数式の計算

$\frac{x-1}{x+2}$  を  $x$  で約分する

#### イ 図形と方程式 直線の方程式

$y=ax+b$  (中学校までの表記) から  $y=mx+n$  への変化  
 「なぜ  $a$  が  $m$  になったの?」

「2点を通る直線の方程式があるんだったら、3点通る直線の公式はどうなるの?」

#### ウ 図形と方程式 2点間の距離

「 $AB^2$  は  $A$  も  $B$  も2乗するの?」

#### エ 図形と方程式 2点を通る直線の方程式

「 $y$  は  $2x+1$  は  $x$  の傾きが2…」(どうやらこの生徒によると  $y$  にも傾きがあるらしい)

$l: y=mx+n$  って  $l$  対  $y=mx+n$  ってこと? (2:3 というような)

#### オ 三角関数 三角関数の相互関係

問題文の「 $\sin \theta, \cos \theta$  ( $\sin \theta$  と  $\cos \theta$ )」と「 $\sin \theta \cos \theta$  ( $\sin \theta \times \cos \theta$ )」を混同してしまう

### (2) 「思考・判断・表現」の場面の表出

第2に、生徒がどのような「思考・判断・表現」をしているのかがわかりやすくなったことが挙げられる。特に、ペーパーテストによる記述のみでは難しかった解答にいたる過程があきらかになりやすく、教科書以外の解法を考えるなどの場面が目立った。教科書とは違ったアプローチで解答を進めようとしたり、「この解答より、こっちの方法の方がいいと思う」というように解答を比較する生徒の様子があったりした。時間に余裕があれば生徒自身が問題を作成する場面も設定した。

生徒の思考の例

**ア 式と証明 高次方程式の解法**  
 $x^3 = 1$  や複2次式  $x^4 + x^2 - 5 = 0$  のタイプも因数定理を使って因数分解することにより、解くことができるのではないかと？ 因数定理が好きなので、こっちの方が楽かも。

**イ 式と証明 等式の証明** または **三角関数 三角関数の性質**  
 $A = B$  の証明を教科書は  $A$  を  $B$  にすることによる証明方法だったが、 $B$  を  $A$  にすることはできないか。

例  $\tan \theta + \frac{1}{\tan \theta} = \frac{1}{\sin \theta \cos \theta}$

i) 教科書の解答  

$$\tan \theta + \frac{1}{\tan \theta} = \frac{\sin \theta}{\cos \theta} + \frac{\cos \theta}{\sin \theta} = \frac{\sin^2 \theta + \cos^2 \theta}{\sin \theta \cos \theta} + \frac{1}{\sin \theta \cos \theta}$$

ii) 生徒と教師がともに考えた解答  

$$\frac{1}{\sin \theta \cos \theta} = \frac{1}{\sin \theta} \times \frac{1}{\cos \theta} \times \frac{\cos \theta}{\cos \theta} = \frac{\cos \theta}{\sin \theta} \times \frac{1}{\cos^2 \theta} = \frac{1}{\tan \theta} \times (1 + \tan^2 \theta) = \frac{1}{\tan \theta} + \frac{\tan^2 \theta}{\tan \theta} = \frac{1}{\tan \theta} + \tan \theta$$

**ウ 図形と方程式 2点を通る直線の方程式**  
 点  $(x_1, y_1)$  と点  $(x_2, y_2)$  を通る直線の方程式は  
 $y - y_1 = \frac{y_2 - y_1}{x_2 - x_1} (x - x_1)$  とかいてあるが、  
 $y - y_2 = \frac{y_2 - y_1}{x_2 - x_1} (x - x_2)$  や  $y - y_1 = \frac{y_1 - y_2}{x_1 - x_2} (x - x_1)$   
 してもよいのではないかと？

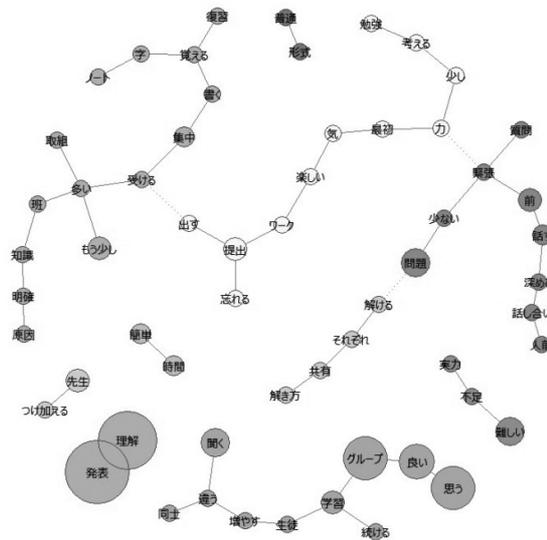
**エ 図形と方程式 1次方程式の表す図形**  
 $y = -\frac{3}{4}x + \frac{1}{2}$  と  $3x + 4y - 2 = 0$  は同じ直線を表しているが、 $3x + 4y - 2 = 0$  と表す方がきれいだと感じた。

(3) グループ学習・発表が理解を深める

テキストマイニング<sup>\*4</sup>を用いて、授業アンケートの自由記述から作成した共起ネットワークによれば、グループ学習・発表を通して、「理解が深まった」と回答する生徒が多かった。理由としては、生徒同士の対話の中でわかっていっただけになっていたことの理解が深まったことや、人前で話す（または話す準備をする）過程で頭の中の整理ができたこと、問題（出題）の意図がわかったことなどが挙げられた。発表の際には取り扱う問題も生徒たちに選ばせる。このため、解きながら問題の違いについて理解し、「プラスの場合とマイナスの場合を出題しよう」や「 $y = ax + b$  の直線の方程式を

求める問題と  $x = c$  で表された直線を求める問題はぜんぜん違うね」など問題の構成に気づく生徒の姿もあった。

また、前述のことから、「グループ学習・発表をして良かった」「続けた方がいいと思う」「普段は聞く一方だったが授業が楽しくなった」「自分たちで授業を行う際には、（誰かがやらないといけないという責任感が生まれるので）集中して授業を受けることができた」など肯定的な意見があった。



授業アンケートから作成した共起ネットワーク

(3) 学習時間の増加

「一人で考えることができない場合でも）友達と考える場面が増えた」「自分で理解するために授業時間外での勉強時間が増えた」など授業が終わった後や発表前の休み時間、家庭での動画（YouTube など）を使った予習など学習時間の増加が認められた。家庭での動画を見て学習に取り組んだ生徒に、なぜこのような取り組みをしたのか尋ねてみると、「課題を出されたから」という義務感よりは「自分がやらないと授業が進まなくて他の人に迷惑がかかるから」というような責任感の方が強いと話した。

(4) 表現の工夫

繰り返し発表を行って行く中で、説明内容を工夫・改善する生徒の姿が見られた。「教科書が省略されすぎ」であることに気づき、わかったつもりをなくすために、「教科書のとおり」や「普通に計算すると」などのように説明を省略せず、自分が納得いくまで行間を埋めようと粘り強く努力する生徒の育成に役立てられたと説明できる。また、中学生向けの体験入学の機会には、中学生が本授業を見学するのに合わせ、授業の内容が理解できるように展開図を用意して理解を助けるように工夫するなどの場面も見られた。「人にどう教えたらわかりやすいかなどを考えるようになった」とする生徒も

いた。

#### (5) 積極性

発表を通して、「積極性が増した」や「人前で緊張しなくなった」との回答も得た。生徒によれば「ここは私が発表(担当)するというのを、自信を持っていえるようになった」という。緊張が邪魔をして、うまく説明ができない生徒でも「何回か取り組んでいくうちにできるようになった」というのである。また、少数派の意見ではあるが、「班への貢献を(しようとしたが)できなかった。」「もう少し他の人の助けになりたかった(けどできなかった)。」「などというような授業全体へ貢献したいという気持ちが表れたことも事実である。

#### (6) 教師側の学び

前述のように(1)生徒のつまずきや(2)の思考が表面化されたことで、授業の中では教師が生徒に気づかされることも多い。例えば、教師の予想外のところでつまずきを抱えていたり、公式を自分の言葉でとらえたりすることができるなどである。学年ごとにカラーも違い、完全分業制で分担することもあれば、緻密に板書計画を用意する生徒、準備不足のため言葉巧みにやたらと説明する生徒、一人の数学が得意そうな生徒に押しつけようとする生徒、オリジナルの問題を作成する生徒、過去の学習内容(数学Ⅰ)などの教科書を引っ張り出してきて読み込む生徒など様々だ。

## 4 課題

### (1) 聞く側の利点

前述したように頭の中を整理し、人前で話すことで理解を深めたり、積極性が増したりすることで、話す側の利点がある。これに対して、「先生の説明する時間を増やして欲しい」「発表形式より、普通に教えた方がわかりやすい」などという否定的な意見もあり、聞く側の利点に関する記述が少なかった。数学を得意としている友人にわからないところを聞いたりするとわかりやすく説明してくれるので理解できる。その一方で、数学を苦手としている人も含めた全員が役割分担をするという今回の説明では、わかりにくい説明になっていて生徒の理解を深められなかった場面もあったことを示している。これらには生徒に任せきりになるのではなく、生徒同士の発表の後に教師の補足説明や訂正をすることや教師の意図や計画の重要性も読み取ることができる。

「発表することで自分が担当した所はしっかりと理解することができた。(が担当していないところの理解は薄い)」との指摘もある。例えば、「教師の授業での説明より、友人らの授業の方がわかりやすい」などという記述が得られるように、生徒の発表(説明)の質の向上が課題となる。

### (2) 学習内容の難しさ

そもそも学習内容自体そのものが難しいという記述もあった。また、発表等の活動を通してその場の理解を深めたからといって、例えばペーパーテストでの記述が飛躍的にできるようになったというわけではない。そのときは理解できていたとしても、テストのときに頭が真っ白になるという生徒は少なくない。ペーパーテストで解答を記述するには、当日までに記憶を保持しなければならないし、スピード感を持ってミスなく計算する計算力も必要となる。そうした力をつけるには普段の授業も大切であるが、テスト前の時間をかけた家庭学習や振り返りを含めた粘り強い復習なども重要になってくる。

### (3) 答えのみを求めている生徒

「遠回りしたような感じがちょっとわかりにくいです。」「めっちゃ簡単にできるやり方(だけ)を教えてください。」「眠くなった。」など本授業に否定的な意見もある。これらには数学は正しい答えを出す科目である、公式はそのために暗記すべきものという間違った認識をもっている生徒が一定数いて、それをぬぐい切れていないことを表している。

## 5 まとめ

### (1) 本授業を振り返って

本授業改善では、グループワークと発表を通して主体的に活動できる場面と自ら考えたり、表現したりする場面の提供ができた。また、学習機会の増加や教科書外の解答を作れるようになるなど学習に前向きな効果も得られ、新しい学習指導要領で示されている資質・能力の育成とともに本校生徒の課題解決のヒントを得ることができた。

下級生が上級生の授業を見学しながら自分の選択科目を決定する科目選択オリエンテーションにおける感想では、「先輩たちが自分で授業をつくっている」「とても楽しそうだ」という感想を得ており、生徒が客観的に見ても楽しく授業を受けている様子がわかる。

### (2) 今後の展望

一方で、課題はまだ山積している。こうした授業を行うとペースが保てないため、「進度が遅くなる」などの否定的な考え方もある。確かに何の工夫もなくただ生徒に丸投げしても本授業は成立しない。実際には主導権は教師側が握りつつも、生徒が主体的に活動している実感させることが大切である。例えば ICT の活用により資料の提示や記録の負担を軽減することができる。決まり切った板書などは Google classroom などに記録を残せば、いつでもどこでも確認することができる。(図 3・4) 今後は ICT の活用が生徒の活動時間をつくるカギとなるだろう。



Googleclassroom (図3)



いつでもどこでも記録内容を確認できる (図4)

ICTの活用等の取り組みにより、生徒が学校でしかできない取り組み(グループワークや発表など)とそうでないものを切り離し、授業で何をすべきか考えて行かなければならない。また、2-(5)で示したように今後教師の役割も変化していくことが予測される。生徒が知らない新しいことを教えていくだけではなく、視点をかえる助言をしたり、生徒と一緒に悩んで考えたりしていくことが今後教師に求められる。あくまでも授業は生徒のためである。生徒が学びで得た気づきやわかったという喜びの瞬間は何事にもかえることはできない。

現在、本校数学科では選択科目で得られた上記のような取り組みの成果を参考にして、そのエッセンスを必修科目(自然クラスの授業)でも取り入れている。どんなに小さい集団でも学力差はあるという前提に立ち、数学を苦手としているから教師が一から十まで懇切丁寧に説明するというもともたらしい考え方を捨て、適切な距離感で指導していきたいと考えている。

## 6 参考文献

- ※1 玉井康之 ほか(2013),「～教育活動に活かそう～へき地小規模校の理念と実践」, 教育新聞社
- ※2 「ラーニングピラミッド」, National Training

## Laboratories

- ※3 芝池宗克 ほか(2014),「反転授業が変える教育の未来—生徒の主体性を引き出す授業への取り組み」, 明石書店
- ※4 末吉美喜(2019),「テキストマイニング入門—Excel と KH Coder でわかるデータ分析」, オーム社



# 効果的なアクティブラーニングとICTの活用に関して

北海道札幌西高等学校 佐藤 誠

## 1 はじめに

学習指導要領の理科の目標として、『自然の事物・現象に関わり、理科の見方・考え方を働かせ、見直しをもって観察、実験を行うことなどを通し、自然の事物・現象を科学的に探究するために必要な資質・能力を育成する』とある。近年では様々な教育手法があり、生徒が自主的に学習し、その知識や技能を深化させることができる。

その中で効果的なアクティブラーニングとICTの活用に関しての事例をいくつか紹介する。地学を題材にしているが、他の教科や科目でも十分に応用は可能である。

また、地学では、地球規模の広い現象からその地域特有の現象が存在し、普遍性だけでなく特異性も広く学習することができる。その中で自然環境とその恩恵や災害などの日常生活や社会との連携について議論し、その能力と態度を育てる必要がある。地域の特性を幅広く生かした、系統的な学習ができないかと考える。

## 2 効果的なアクティブラーニングの活用例

### (1) 活用例1 主体的で系統的な学習

「地学基礎」における火山の単元で、学習指導要領では、『火山活動や地震に関する資料に基づいて、火山活動と地震発生の仕組みをプレートの運動と関連付けて理解すること』と記されている。

中学校までの学習とリンクさせると、火山分野では大部分を理解していることが多い。そのため、教員側が教科書に沿って一つ一つ丁寧に解説しなくても、ある程度の知識や現象に対する理解が出来ている。それを前提に以下の①～④までの流れで授業を行った。

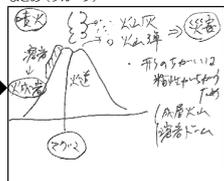
#### ①一般的な学習内容の確認（事前学習）

火山について事前に持つイメージやキーワードを列挙させ、グループ毎でまとめさせ、メタ認知とする。高校地学基礎で学習する内容の多くを本校生徒は予備知識として持っていることがわかった。

【火山について】  
キーワード（個人）

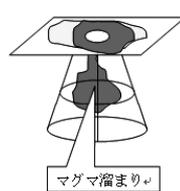
マグマ  
噴火 → 噴出物  
火山の形 → 成層火山  
粘性のちがひ、かわらな  
るため、エピソード

まとめ（グループ）



#### ②一般的なモデル実験

印象材を活用したマグマの粘性と火山の形を再現する実験を行った。その中でタブレットを活用し、噴火の様子や火山の形を写真や動画で撮影し、共有することで、様々な火山の形態について考察させた。



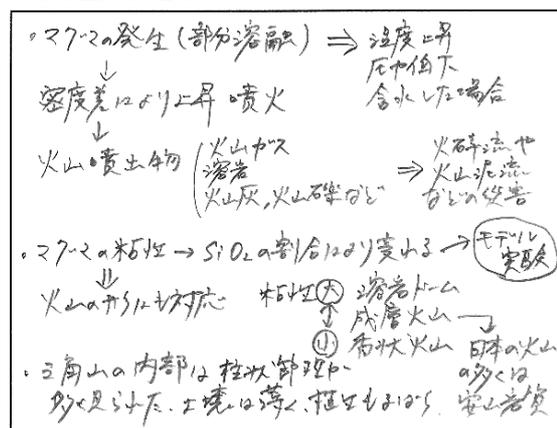
#### ③地域の自然との比較

本校近隣にある三角山（標高311m）付近にある岩石や露頭の観察を通し、火山であった痕跡などを考察させる。その際に生物基礎で学習した植生や遷移についても観察でき、その要因や関係性についても考察させた。本校では1年次の段階で、三角山での巡検を行っている。

#### ④まとめと評価

一般的に高校で学習する知識や理解だけでなく、身近な自然を中心に議論することで、その成り立ちだけでなくそれを取り巻く自然環境がどのように関わっているのかを生徒自身が考え、主体的な学びに繋がると考える。単元のまとめとして生徒自身で整理させると、知識が繋がり、地学現象の本質的な理解にも繋がっていると考えられる。

単元（火山）のまとめ



(2) 活用例2 観察・実験での探究的な活動

近年では教育手法として多くのものがあるが、今回は知識構成型ジグソー法（東京大学CoREF）を参考に、独自にアレンジしたものである。

通常のジグソー法の狙いが人種の融合など児童生徒の関わり合いの促進にあったのに対し、知識構成型ジグソー法の狙いは関わり合いを通して一人一人が学びを深めることにある。明確な問いを設定して、学習の前後で問いに対する回答を二回求めるなどの特徴がある。

それを前提に以下の①～④までの流れで授業を行った。

- ①全体への課題を提示する。
- ②課題について個人で考える。
- ③各自が実験を行い、結果を班で持ち寄る
- ④班で意見を交わし、最後は個人で結論を出す。

①全体への課題を提示する。

課題を『地球内部が層構造をしている理由や形成過程を考えよう。』とし、現時点でそれぞれの生徒が持っている知識をまずは確認した。

②課題について個人で考える。

地球が地殻・マントル・核の層構造に分かれており、それらが岩石や金属（鉄）でつくられていることは、理解しているが、なぜそのような状態になっているのかまでは理解していない。

地球の層構造とは・・・何で出来ているのか  
どうしてそうなったのか

地殻 - 岩石  
マントル - 岩石  
外核 - 鉄  
内核 - 鉄

最初に鉄の惑星が形成、  
その周囲に岩石が覆ったと  
考えられる。

③各自が実験を行い、結果を班で持ち寄る

層構造が密度差によるものだと、考えさせて様々な岩石の密度を測定し、それを密度順に並べ替えると、地球を構成している物質が表面から中心に向かい、密度が増加していることに気付く。

密度 花こう岩 < 玄武岩 < かんらん岩 < 鉄  
(地殻) (マントル) (核)

生徒一人がそれぞれの岩石について調べ、それを班で共有する過程で知識構成型ジグソー法の手法を取り入れ、生徒の学びを深めることを目的としてい

る。積極的に意見を出すよう促し、何を課題にしているかを念頭に入れ議論させている。

岩石の密度測定

$$\text{密度}[\text{g}/\text{cm}^3] = \frac{\text{質量}[\text{g}]}{\text{体積}[\text{cm}^3]}$$

手順1 岩石をひもで結び、質量を量る  
深成岩でやってみましょう。

結び方は自由  
・容器の形状  
・余ったひもは切る

はかりが600gまでなので、200gを超える岩石は不可

手順2 容器に水を約300mL入れ、質量を量る

この差が岩石の質量  
129g  
(手順1の確認)

手順3 岩石を沈め、質量を量る

手順4 岩石を水の中で完全に吊す

- ・岩石を容器に当てない。容器の形状を考える。
- ・岩石は完全に水の中に吊す

410g - 361g = 49g  
水の密度を1g/cm<sup>3</sup>とするとこの分が体積49cm<sup>3</sup>となる。

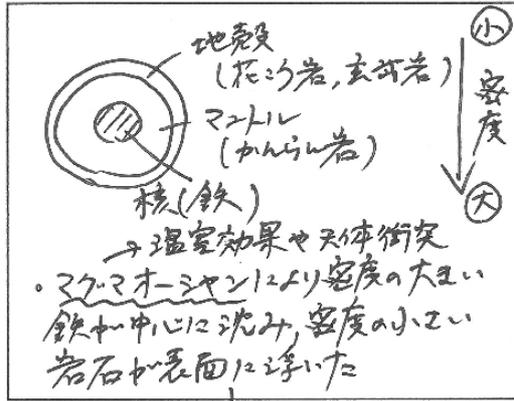
$$\frac{129}{49} = 2.63(\text{g}/\text{cm}^3)$$

花崗岩の場合

④班で意見を交わし、最後は個人で結論を出す。

地球の層構造について理解し、なぜそのようなになっているかをグループで考えさせる。その中でマグマオーシャンが関係していると考えられるグループもみられた。多くのグループでは、もともと金属の惑星があり、衝突・合体をする小惑星が岩石質であるため周囲に付帯したと考えることが多かった。

個人で結論を出す場合が難しい時は、近くの生徒同士で、プリントを見せ合いながら相談することは可にしている。



まとめとして、結論や科学的な考察は行ったが、生徒が学習の中で、なぜだろうと気付き、どうすれば解決するのか探究的な要素も含まれている。実験や観察のテーマや設定を少し変えることで、従来の定番実験がアクティブなものになったり、探究的なものにすることができると考える。

### 3 効果的なICTの活用例

多くの学校でICTが活用され、ネットワークを含めて大規模な整備が進んでいる。実際に以下のような活用例は実践されている先生方も多いと考える。すべてを変えるわけではなく、自身の授業スタイルの中で少しずつ取り入れ、生徒の学習に還元したいと考えている。また、自身の授業改善に繋げたいと考えている。

#### (1) 活用例1 動画の作成と視聴

昨年度は多くの授業が休講となり、通常の対面型の授業ができなくなった。各家庭で自学自習できるようにと動画を作成しYouTube等にアップしていた先生方も多い。

私自身も地学基礎の教科書1冊分のプリントとその解説動画を作成した。No.1～No.30までの全30回分あるが視聴回数は回を重ねるにつれて下がっている。現在は、自学自習用として1冊にまとめ生徒に配布し、特に課題とはしていないが、教科書を読んで自分で書き込み、動画の解説もみられる参考書のような形で使用している。

また、動画を作成し編集、アップと作業行程が多いことなど完成までに少し時間がかかることもあることや、生徒が視聴しどれだけ理解出来ているかなども未知数な点も考慮して考えたい。

最近ではオンラインで授業自体をそのまま配信し、離れた場所でも授業や講習を受けられるシステムも少しずつ浸透してきている。対面型、オンライン型、その両方(ハイブリット型)、様々なケースに合わせて

使い分けていくことも必要である。

地学基礎 自学自習用	No.14	
---------------	-------	--

★教科書P65～P69の内容  
第2節 地層と地質構造 1

A 地層  
水流などで運ばれた砕屑物が海底などに堆積すると、堆積物の上面はほぼ[1]になる。このような堆積作用がくり返されて砕屑物が積み重なると、堆積物は水平な境界面で区切られた板状の層を形成する(図11)。これを[2] ]といい、その境界面を[3] ]という。1枚の地層は上下2つの層理面に挟まれている。

■地層累重の法則■  
地層は順次上方に堆積していく(累重していく)ので、古い地層が下位に、新しい地層が上位に重なる。変形や逆転がない地層では、常にこの関係が成り立つ。これを[4] ]という。また、複数の地層が堆積した順序を[5] ]という。地球の歴史の中で起きたいろいろなできごとの前後関係は、層序に基づいて解明されてきた。

Point  
左の図は、基本的な地層の図です。地層累重の法則は、基本的にすべての問題で成り立っています。「地層の逆転はないとする」ということが書いてあれば、下が古く、上が新しいということになります。まれに逆転があるとしたら、褶曲などが関係してきます。その時は地層の年代や、示準化石などから判断しましょう。

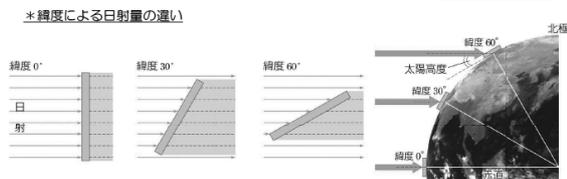
#### (2) 活用例2 授業プリントの解説

私自身の授業はプリントをベースとしており、プリント毎に提出させ、確認をしている。また、授業では、パワーポイントを使用しながら説明しているが、生徒によっては図が見にくかったり、わかりにくかったりする。そこで、その資料をネットで閲覧できるようにプリントにQRコードをつけ、いつでも復習できるような環境をつくっている。

最初は、復習用の補助として考えていたが、欠席した生徒や自学自習用としても活用でき、いつでも自分のペースで学習できる利点も出てきた。

地学基礎 授業プリント	No.32	2年 組 番 氏名
----------------	-------	--------------

★地球の「補給」-収支(教:P121～P123 図:P176～P177)  
●太陽定数  
太陽放射のエネルギーのごく一部が地球に届く。この時、太陽光に垂直な1m<sup>2</sup>の面が1秒間に受ける太陽放射エネルギーを[1] ]といい、[2] ]である。



### プリント解答

●太陽定数  
太陽放射のエネルギーのごく一部が地球に届く。この時、太陽光に垂直な1m<sup>2</sup>の面が1秒間に受ける太陽放射エネルギーを[1 太陽定数]といい、[2 1.37 kW/m<sup>2</sup>]である。  
1370 W/m<sup>2</sup>

\*緯度による日射量の違い  
太陽光を垂直に受け取る面積を考える

高緯度ほど受け取る日射が少ない

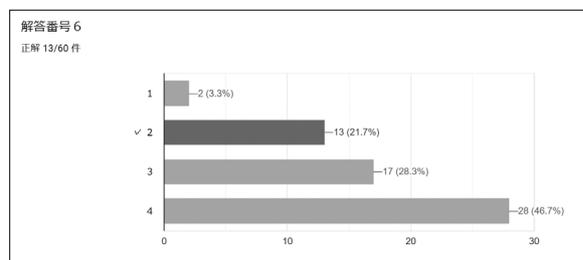
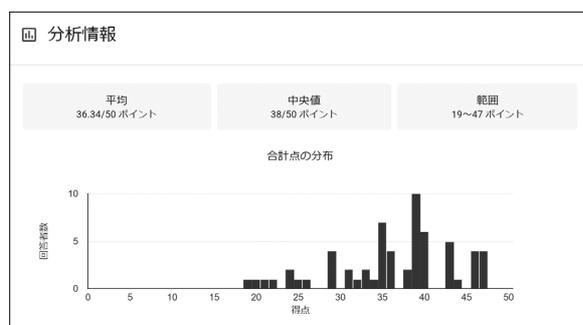
### (3) 活用例3 演習問題での正答率分析

Googleなどのフォーム機能(テスト用)を用いて、共通テストのような択一式の演習問題の正答率を分析している。生徒は問題を解き、各自のスマホでQRコードを読み取り、フォームに入力する流れである。

#### ①リアルタイムで分析ができる

平均点や正答率がリアルタイムで出てくるので、どの問題を苦手としているかなど、説明する時間を判断することができる。

例えば、問題演習の際に解説を最初から同じペースでやっていくと時間が足りなくなることがあるが、正答率の低い問題から順に説明したり、ほぼ全員が出来ている問題は説明を省くなど、効率よく授業を行うことが出来る。今までは、生徒が解ける問題と解けない問題は、教員の感覚や経験的なものであったが、数値として出てくるので、教員側も理解しやすい。



#### ②授業改善に繋がる

これは解けるだろうと思っていた問題の正答率が意外に低かったなど、教員側の認識を改めることで授業改善にも繋がると考える。実際に正答率の低い問題が解けない理由として正しく理解出来ていないことが多い。私自身も今までの教え方を少し変えて、より生徒が理解しやすい手法を分野によって考えて授業を行うことができる。

#### ③生徒の復習にも活用

一問毎に正答率を出すことで、どの問題がみんなできないのか、どの問題をみんな解いているのかの指標になる。特に取りこぼしている問題などがすぐにわかり、何を復習しないといけないのか、生徒自身が考えて、効率の良い学習をすることができる。また正答率の低い問題を中心にまとめて復習できる

のも効果的である。

### 4 参考文献

- 1) 文部科学省 高等学校学習指導要領(平成三十年度告示)
- 2) 文部科学省 高等学校学習指導要領解説(平成三十年度告示)「理科編・理数編」
- 3) 地学基礎改訂版 啓林館
- 4) 高等学校地学基礎 数研出版
- 5) 協調学習 授業デザインハンドブック 第3版 知識構成型ジグソー法を用いた授業づくり 東京大学 CoREF
- 6) アクティブラーニングが授業と生徒を変える 小林昭文
- 7) アクティブラーニングと教授学習パラダイム変換 溝上慎一
- 8) マグマの地球科学 火山の下で何がおきているか 鎌田浩毅
- 9) マグマダイナミクスと火山噴火 鍵山 恒臣
- 10) 火成岩とその生成 久城 育夫、荒牧 重雄
- 11) 三つの石で地球がわかる 藤岡換太郎
- 12) 岩石学概論(上・下) 記載岩石学 周藤 賢治、周藤 賢治

# 令和4年度から始まる新学習指導要領の趣旨を踏まえた授業実践

～「話すこと[やり取り]」の指導と評価におけるICT活用～

北海道札幌国際情報高等学校 佐々木 康 希

## 1 はじめに

令和4年度の高校1年生から、我が国の高校教育には2つの大きな変化が訪れる。1つ目は高等学校学習指導要領（平成30年告示）（※以下、新CS）が年次進行で実施されること、2つ目はGIGAスクール構想により、生徒1人1台端末の運用が開始されることである。本稿では、変化の激しい時代に対応し、北海道の高校英語教育が抱える課題を解決するための方策の一つとして、『「話すこと[やり取り]」の指導と評価におけるICT活用』を提案する。

第1部では主題の設定理由を述べる。第2部では実際のICTを活用した「話すこと[やり取り]」の指導と評価の事例として、英語ディベートの立論から反論の場面に焦点を当て、新CSの目標達成に資する具体的な実践方法を紹介する。

外国語科の本稿で扱うディベートは、外国語科の必修科目となる「英語コミュニケーションI」で実施できる簡易的な形式である。また、思考力・判断力・表現力の育成等を図るとともに、ICT活用による指導と評価の効率化を図り、発信力の強化を目標とした「論理・表現I」や、英語科における必修科目「総合英語I」の目標にも準拠した内容を意識して作成した。各校の実情に合わせて、幅広くご活用いただけると幸いである。

### 1.1 背景

中央教育審議会「令和の日本型学校教育」の構築を目指して（答申）（令和3年1月26日）では、2020年代を通じて日本の学校教育が実現すべき2つのポイントとして、①新CSの着実な実施、②学校教育を支える基盤的なツールとしてICTの活用が必要不可欠であることが示された。

1つ目のポイントである新CS高校外国語科の目標は以下の通りである。

外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動及びこれらを結びつけた統合的な言語活動を通して、情報や考えなどを的確に理解したり適切に表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力を育成すること

この目標を達成するために、4技能5領域を総合的に扱う科目群（英語コミュニケーションI・II・III）及び、発信力を高めるための科目群（論理・表現I・II・III）が設置され、ディベートやディスカッションといった統合的な言語活動による実践が注目を集めている。

4技能5領域別論文数の比較では、「話すこと[やり取り]」に関する論文の数が他の4つの領域と比べて少なく、実践・研究の余地があることが伺える。【図1】

【図1】 4技能5領域別論文数の比較

4技能5領域別論文数の比較 (2021年11月現在)	CiNii Articles 日本の論文検索サイト		NDL Online 国立国会図書館オンライン	
	英語	英語 高等学校	英語	英語 高等学校
下記の領域に加えた 検索ワード				
聞くこと	95	10	74	11
読むこと	199	11	152	18
<b>話すこと[やり取り]</b>	<b>23</b>	<b>3</b>	<b>11</b>	<b>1</b>
話すこと[発表]	18	5	14	4
書くこと	177	23	160	19

次に、2つ目のポイントである我が国のICT活用状況について述べる。OECDのPISA2018調査では、『学校の「外国語」の授業でICT機器を「使っていない」と回答した生徒の割合』が67.0%と参加国中最下位で、外国語・英語の学習にICTが十分に活用されていない現状が浮き彫りとなった。

令和元年度「英語教育実施状況調査」結果（文部科学省）によると、全国の高校生の英語力向上と、生徒の言語活動中心の授業（75%以上）及びICT活用には相関が認められている。本道を含む全国の英語の授業で、新CSの趣旨を踏まえた生徒の言語活動中心の授業と、生徒の英語力向上に資するICTの積極的な活用が求められている。

なお、新CSではICTの活用について、以下のとおり具体的な指針が記されている。

生徒の興味・関心をより高めるとともに、英語による情報の発信に慣れさせるために、キーボードを使って英文を入力するなどの活動を効果的に取り入れることにより、指導の効率化や言語活動の更なる充実を図るようにすること

※本稿における「言語活動」とは、「実際に英語を使用して互いの考えや気持ちを伝え合う」活動、「知識及び技能を活用して、思考力、判断力、表現力等を育成

するために取り組ませるもの」（「小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック」文部科学省 2017）とする。

## 1.2 北海道の現状と課題

ここでは、新CSの趣旨を踏まえた言語活動とICTの活用を推進するにあたり、関連する北海道の高校英語教育の現状と課題を整理する。

まず、言語活動の実施状況について述べる。令和3年度北海道英語教育改善プラン（道独自調査）によると、道立高校では78.7%の教員が授業時間の半分以上の時間を言語活動に費やしているものの、生徒の英語力の向上に必ずしもつながっていないことが課題である。解決の方策としては、生徒が思考する活動や、言語活動を行うための目的や場面、状況を適切に設定するなど、言語活動の質を向上させることが挙げられる。

また、同調査によると、パフォーマンステストは9割以上の道立高校で実施されているが、未だ1割弱の学校で実施されていない。全ての高校において生徒の英語力の向上につながる妥当性のあるパフォーマンス評価を行うことと、業務の効率化が必要である。

次に、本道の英語教育におけるICTの活用状況について述べる。令和元年度英語教育実施状況調査結果によると、教師によるデジタル教材等の活用は96.7%と進んできてはいるものの、生徒が言語活動にICTを活用する割合は全項目で60%に満たない。

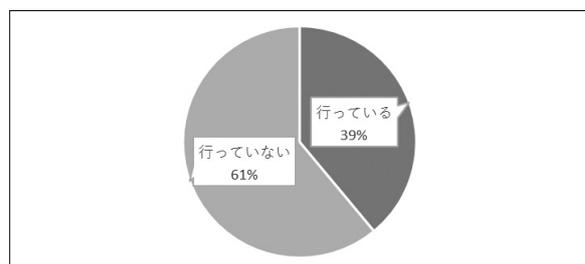
課題解決の方策として、教師によるICTの活用を、指導と評価の場面で推進することと、生徒が一人一台端末を個別最適な学び、協働的な学びに活用し、英語力の向上につなげていくことが挙げられる。「外国語の指導におけるICTの活用について」、「StuDX」（文部科学省）や「未来の教室」（経済産業省）などで紹介されている全国のICT活用事例も課題解決の一助となるであろう。

## 1.3 ICTの活用に関するアンケート結果（教員）

※回答数38（「話すこと [やり取り]」に関する主な回答を抜粋）

ここで、参考として全道（一部他都府県を含む）の英語教員を対象に実施したアンケート結果を紹介したい。

『授業でICTを活用した「話すこと [やり取り]」を行っていますか？』



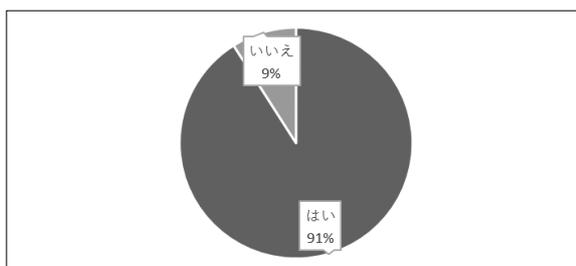
「行っている」と回答した方のみ  
ICTを活用した「話すこと [やり取り]」を行うメリットは何ですか。（主な回答）

- ・生徒同士で同時に複数のやり取りができ、時間が浮く
- ・提供可能な情報量の多さ、効率的な教材作成
- ・画像等を見せ合いながらペアでやり取りができている
- ・授業の効率化と学習者の理解のしやすさにつながる
- ・即興性がある
- ・音声や画像、動画の提示が容易である

「行っている」と回答した方のみ  
ICTを活用した「話すこと [やり取り]」を行うデメリットは何ですか。（主な回答）

- ・機械トラブルに時間を取られることがある
- ・携帯端末を持っていない生徒に対するフォローの工夫
- ・目が疲れる
- ・機材数の制約により利用したくてもできない時がある

『今後「話すこと [やり取り]」にICTを活用したいと考えていますか？』



## 1.4 札幌国際情報高校 概要及びICTの整備・活用状況

本校の概要及びICTの整備・活用状況等は以下のとおりである。（令和3年11月現在）

### ○教育目標

「世界の人々から尊敬されるグローバルシチズンとしての日本人の育成」

### ○学科（間口数） 在籍生徒数 953名

普通科（2）国際文化科（2）理数工学科（1）  
グローバルビジネス科（3） ※各学年8クラス

### ○以前から活用されていたICT関連の設備等

- ・CALL教室（PC42台、プロジェクタ2台）
- ・iPad 生徒用160台 [40台×4セット] 教員用10台
- ※セルラータイプ、外付けキーボード付き
- ・貸出用 可動式プロジェクタ、投影用スクリーン
- ・ヘッドセット（マイク付きイヤホン）※BYOD 併用

### ○GIGAスクール事業で整備されたICT関連の設備等

- ・教員用Chromebook70台
- 各教科等で次年度以降に向けて活用
- ・全教室に校内LAN（令和3年5月から運用開始）
- ・次年度新入学生は1人1台端末 ※学校推奨端末を予定

## ○英語の授業における ICT の活用状況

### Google Classroom【学習管理・授業】

- ・Slide（授業準備・一斉授業）
- ・Forms / Spreadsheet（単語テスト、アンケート）
- ・Jamboard（アイディアの共有など）
- ・Meet（分散登校中の学びの保障）
- ・Drive（クラウド上での教材管理、共有）

### ロイロノート【学習管理・授業】

- ・瞬時の情報共有（写真、動画、URL、テキスト等）
- ・課題提出（家庭学習、音読音声や動画の提出）
- ・シンキングツール（Graphic Organizers、協働学習）

### その他

- ・AI ドリルアプリ（語彙・文法の予習・復習等）
- ・音声読み上げ機能（英米など国や地域別の発音）
- ・Zoom（講演、海外交流、学びの保障）

## ○国際交流における ICT 活用状況

### 海外（姉妹校等）との交流

- ・アメリカ、ロシア、カナダ、中国、NZ、タイ等
- ・同時双方向型のオンライン交流やグループ交流
- ・Flipgrid、YouTube：限定公開動画交換  
（時差対応も可能）

### グローバル事業

- ・イベント参加（オンライン交流会など）
- ・Hokkaido Study Abroad（留学生との交流など）

### 〈QR①〉国際情報高校HPオンライン交流



## 1.5 ICT 活用に関するアンケート結果（生徒）

今年度、新型コロナウイルス感染症対策のため、分散登校期間中に生徒の学びの保障を目的としてオンライン（Zoom、Google Classroom、ロイロノート等）を活用した取り組みを行った。その振り返りとして、本校1年普通科及びグローバルビジネス科 [計 160 名] を対象に今年度7月に以下のアンケートを実施した。  
（主な記述を抜粋）

「よりよい学習のために、オンラインを活用した取り組みについての感想を記載してください」（自由記述）

- ・離れていても、クラスの中にいるような雰囲気ですべてを受けることができた
- ・とても音声クリアで発音も聞きやすかった
- ・対面授業に近い形でペアワークやグループワークを行うことができてよかった
- ・何の問題もなく授業をうけることができた
- ・実際の対面の授業よりも、画面上の相手のほうが話しや

すく、しっかり伝えられた

- ・回線が悪いときはチャットでやり取りできた
- ・音声や動画の課題提出がしやすかった
- ・グループで協働作業するのは楽しくやる気がでた
- ・学校にいるときよりも自由に発言できる
- ・離れている人同士でペアワークができたのがすごい
- ・教材が画面上に出てくるのは便利だが、スマホだと画面が小さくて見づらかった
- ・コロナ対策が出来ているし、普段マスク姿しか見ていない友達の顔を見て沢山話することができて嬉しい
- ・音声や動画を繰り返し聞いたり見たりすることができるので、理解しやすかった
- ・今の時代、オンライン授業は当たり前だと思う
- ・これから対面になってもまたやりたい

## 2 「話すこと [やり取り]」の指導と評価及び ICT 活用例

### 2.1 概要（科目目標・単元目標・単元の評価基準）

本稿では、1 学年の普通科及び商業科（グローバルビジネス科）の「コミュニケーション英語Ⅰ」で行っている ICT を活用した英語ディベートの実践を紹介する。パフォーマンステストは、「話すこと [やり取り]」のディベートの立論から反論の場面を扱う。設定した単元目標及び単元の評価基準は以下の通りである。

### 英語コミュニケーションⅠ 目標（1）

#### 「話すこと [やり取り]」イ

社会的な話題について、使用する語句や文、対話の展開などにおいて、多くの支援を活用すれば、聞いたり読んだりしたことを基に、基本的な語句や文を用いて、情報や考え、気持ちなどを論理性に注意して話して伝え合うことができるようにする。

※論理性に注意するとは、できる限り論理の矛盾や飛躍がないよう、理由や根拠を明らかにするなどして、論理の一貫性に注意することである。※参考：高等学校学習指導要領（平成 30 年告示）解説外国語編

### 単元名 「英語ディベートにおける立論への反論」

#### 単元の目標

日常的な話題や社会的な話題について、使用する語句や文、対話の展開などにおいて、多くの支援を活用すれば、ディベートの活動を通して、聞いたり読んだりしたこと（相手の立論）を基に、基本的な語句や文を用いて、情報や考え、気持ちなどを論理性に注意して話して伝え合うこと（反論）ができる。

※本稿で扱うディベートとは、賛成または反対の立

場を明確にして、自分の立場や考えにより妥当性や優位性があることを述べる活動であり、ペアで意見をやり取りしたり、グループでルールに従って議論したりするなど、様々な方法で行うことが可能である。やり取りの目的や話題、生徒の習熟の程度などに応じて、適切な方法や形式を設定しながら、生徒に賛否両方の立場を経験させることなどを通じて、当該の話題について多様な観点から考察する力を育成することにもつなげることができる活動である。参考：高等学校学習要領（平成30年告示）解説外国語編

〈QR②〉MEXT Channel「授業で行う英語ディベート」シリーズ（文科省公式YouTubeチャンネル）



単元の評価規準		
知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
・賛成・反対の意見を論理性に注意して話して伝え合うために必要な表現を理解している。 ・日常的话题や社会的な話題について、賛成・反対の意見を論理性に注意しながら話して伝え合う技能を身に付けている。	自分の意見を、相手によりよく理解してもらえるように、日常的话题や社会的な話題について、対話や説明などを聞いたり読んだりして、相手の意見に応じて、賛成・反対の意見を論理性に注意しながら話して伝え合っている。	自分の意見を、相手により良く理解してもらえるように、日常的话题や社会的な話題について、対話や説明などを聞いたり読んだりして、相手の意見に応じて、賛成・反対の意見を論理性に注意しながら話して伝え合おうとしている。

本事例では、上述の単元の目標を達成するために、年間（複数単元）を通して各単元の学習内容と関連させながら、「話すこと[やり取り]」の指導と評価を行う。1つの単元で必ずしも五つの領域の全てについて評価するのではなく、年間を通してバランスよく指導されることを前提としている。

## 2.2 英語ディベートの土台作り：帯活動の例

生徒がディベートを通じて、上述の単元の目標を達成することを目指し、帯活動として授業で段階的に取り組むことができる言語活動を3つ紹介する。これらの活動は従来から多くの高校で行われてきているが、ディベートにもつながる取り組みであることを生徒に伝え、目的や場面、状況等を意識して取りまわせることによって、外国語の目標の達成に資する効果的な言語活動となるであろう。（※以下の◆の項目はICT活用のポイントを示している。）

### (1) Small Talk / English Salon

様々な話題についてペアやグループで質疑応答を行うことで、議論することに徐々に慣れさせ、「話すこと[やり取り]」を即興で行う力を育成するための活動。教科書の

内容等を活用しながら、生徒の興味・関心等に応じて様々な日常的话题や社会的な話題に触れさせていくことを意識する。生徒の実情に合わせて、準備時間や1人あたりの活動時間等を調整することが可能である。

◆活動に必要な単語・表現や形式などを予め生徒に示したり、モデルとなるやり取り動画を共有する。

〈QR③〉English Salon



### (2) Listening / Notetaking / Summary

話された内容についてメモを取り、ペアやグループで復元・再生する。ディベートでは相手の立論を的確に聞き取って理解する力や、立論を受けて論理的に自らの反論を述べる力を育成することをねらった活動。

◆リスニング音声を生徒の端末に配信することで、生徒は要旨のメモをとって要約を伝え合うために、音声を必要に応じて繰り返し聞くことができる。

〈QR④〉Dictogloss



### (3) Essay Writing

教科書に関連する問い（賛成・反対に意見が分かれるもの）等について、ペアやグループでやり取りした内容をもとに、立場を決めて論理性に注意しながら意見や考えを1パラグラフで書く活動。ディベートの立論、反論、サマリー、ジャッジなど様々な場面の導入や振り返りの際に「書く」活動を行うことで思考力・判断力・表現力を育成する。

◆モデルの共有や、生徒の作品の提出を瞬時に行うことができる。エッセイを書く前に生徒同士で意見や考えを共有する場面や、書いた後に論理的な構成を確認したり、内容の比較・検討を行ったりする際にICTを活用している。

## 2.3 英語ディベートを行う上での留意点

河野（2021）によると、高校生が英語ディベートを行う上で大切なことは、**人格批判を決してしないこと**、**差別的な発言に注意すること**、**相手と言い争うのではなく、第三者（ジャッジ）を説得することに集中させること**である。これらのことを生徒に繰り返し指導することで、生徒同士が安心して建設的な議論をするための土台作りができる。

## 2.4 英語ディベートの指導例（立論・反論・総括）

ここでは、上述の帯活動に加えて、実際に英語ディベートを行うために必要となる3つの段階の指導例を示す。

### (1) 立論：主張の提示

- ・論理的な立論を書く力
- ・聞き手に分かりやすく話す力

### (2) 反論：立論の分析

- ・相手の立論を聞いてメモを取る力
- ・質疑応答をする力
- ・メモをもとに、要約して話す力
- ・即興で自分の意見や反論を述べる力

### (3) 論点整理：双方の主張の比較

- ・双方の立論・反論を比較する力
- ・双方の論点を整理して述べる力

### (1) 立論：主張の提示

英語ディベート指導の最初の段階は立論である。立論では、論題に対して肯定・否定のいずれかの立場に分かれて、それぞれの立場を支持する理由を述べる。ここで重要なのは、”It is good because I like it./It is bad because I don't like it.” というような主観による主張ではなく、なぜ賛成/反対なのか、客観的で説得力のある論理的な立論の型的確な表現を用いて述べることである。

### 立論の言語活動①：立論の型「AREA」の習得

ここでは、論理的に立論を述べるために AREA という型を紹介する。AREA とは、Assertion (主張)、Reason (理由)、Example (例)、Assertion の頭文字からきている。AREA ではまず主張が明確に提示され、R はなぜそう言えるのかという根拠を具体的に述べられる。E は根拠を補足する Example、Explanation、Evidenceなどを述べる。最後に再び主張を繰り返して一貫性のある立論が完成する。

立論の型をある程度学んだあとは、複数回、同じ立論を話す練習を繰り返すことで AREA の型を身につけ、意識することなく自らの立論を主張できるようになることを目指す。この活動は、反論や要約の型を身に付けさせる際にも応用できる。

※複数の中から生徒の興味・関心の高い論題を選ばせたり、立論の準備時間や話す時間を生徒の実情に応じて調整したりすることは効果がある。

- ◆ AREA の型や有効な表現を提示する。
- ◆ 立論に必要なブレインストーミングを行う。
- ◆ 音声認識機能などで自分の英語を確認する。

### 立論の言語活動②：論理性に注意する

三人一組(肯定側・否定側・ジャッジ)のディベート活動を学校で行う際、どちらの主張がよりよいのか第三者(ジャッジ)が評価できないことがある。そこで、賛成・反対に分かれて議論する前に、同じ立場で立論を行い、どちらの立論のほうがより論理的で説得力があるかをジャッ

ジに比較させる活動を行うことが効果的である。立論のポイントとして、根拠、具体性、関連性などを生徒に意識させると良い。

- ◆ 録音された自分やクラスメイトの立論を繰り返し聞き、論理や表現を比較・分析・評価する。

### (2) 反論：立論の分析

ディベートでは、反論を通じて互いの立論の優劣を分析・比較をしたりして議論を深める。しかし、筆者の経験では、授業で生徒に反論を行わせると、お互いの立論をぶつけ合うだけで、議論が平行線をたどって深まっていけないケースがあった。このような反論は、Indirect Refutation (相手側の論証を無視した反論) と呼ばれ、「話すこと [やり取り]」が行われていないことが多い。こういった事態に陥らないためには、相手の論証部分に反論する技術 (Direct Refutation) を生徒に身につけさせることが重要である。

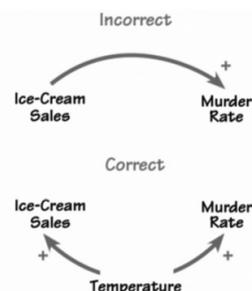
論証とは、主張が正しいことを証明することだが、主張の正しさの証明には「主張」「根拠(事実・データ)」とその間にある「(隠れた)前提」からなる「三角ロジック」と呼ばれる構造をなしていることが必要である。アメリカで実際にあった”Ice cream leads to more murder.” というニュース [図2] を例にとると、「殺人率が上昇しているのはアイスクリームの売り上げが上がっているからである」という「主張」には矛盾がある。

[図2]

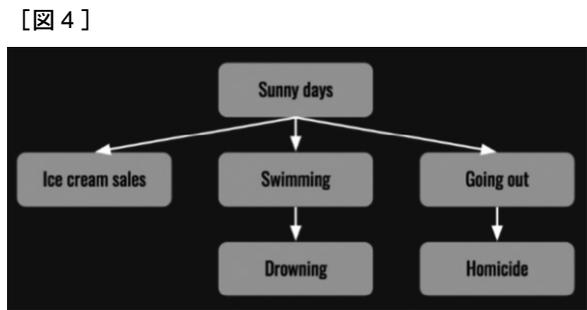


「アイスクリームの売り上げが上がる」こと(事実1)と「殺人率が上がる」こと(事実2)のどちらにも関連があるのは、実はここで述べられていない「気温が高くなっているから」という「隠れた前提」である [図3]。

[図3]



そのため、「気温が上がると海水浴客が増え、その結果溺れてしまう人が増加する」こと、「天気が良いと外出する人が増え、その結果殺人が増加する傾向がある」という2つがそれぞれ論証される必要がある【図4】。



ディベートの反論では、相手の立論で述べられる「主張」と「根拠（事実）」だけでなく、その間にある「（隠れた）前提」に着目することも大切である。

次に示す型を用いることで、生徒は相手の論証のどこに矛盾点があるのかを示しながら論理的に反論することができるようになる。

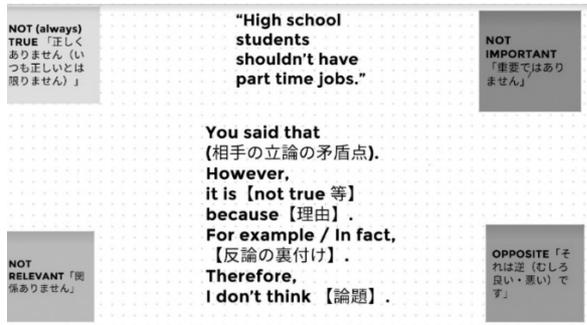
**反論の型：C-AREA**

C-AREAは前述のAREAに、Confirmation（相手の立論の確認・要約）やCitation（引用）のCを加えたもので、これにより相手の立論のどこに対する反論なのかを聞き手（ジャッジ）に明確に示すことができる。【図5】

C: They said that 【相手の立論の矛盾点】.
 A: However, it is not [(always) true / important / likely to happen / relevant] .  
 R: This is because...  
 E: For example / In fact, 【反論の裏付け】.  
 A: Therefore, their point does not stand.

※ディベートでは、ジャッジである第三者に向かって主張することから、反論する相手を they と呼ぶことも多い。

【図5】 反論の型の提示例（授業で使用した Google Jamboard）



**反論の言語活動①：論理矛盾の指摘**

教員が1～2文程度の立論（矛盾点が含まれているもの）を提示し、生徒はペアやグループになってその立論の

論理矛盾を指摘する反論を考え、発表する。ここで教員が提示する立論は、主張のみ、もしくは主張と根拠のみの単純な構成にして、生徒が反論につながる論理矛盾を指摘しやすくすることがポイントである。

○例1：All people love comic books or novels.

教員が例文を示し、この文のどこに論理矛盾があるかを生徒に話し合わせる。生徒AはC-AREAの型を活用して、次のような反論を述べた。（原文のまま）：

“They said that all people love comic books or novels. However, it’s not true. This is because some people don’t like reading books. In fact, I know a lot of people who don’t like reading books. And I don’t like it too. So, they cannot say all people love it. Therefore, the point does not stand.”

○例2：He played his best game of soccer because he was wearing his lucky boots.

生徒Bの反論（原文のまま）：

He said that I played my best game of soccer because he was wearing his lucky boots. However, it’s irrelevant. This is because shoes have nothing to do with winning. For example, no matter what shoes he wears, in the end, it’s all about his soccer skills. Therefore, the point does not stand.

- この活動で、教師が行う配慮は次のものが考えられる。
- ・様々な切り口から論理矛盾を指摘できる立論を提示する。
  - ・立論の提示から反論するまでの時間を適宜調整する。
  - ・立論を「聞き」反論を「話す」形式は即興でやりとりする力を育成するために行う。
  - ・立論を「読み」、反論を「書く」形式も適宜行い、じっくり比較や分析に取り組みさせる。
- ◆反論の型の他に、有効な表現を個人の端末に提示するなどして、必要に応じて活用させる。
- ◆デジタルホワイトボードの付箋機能などを活用し、反論に必要なブレインストーミングを行わせる。
- ◆録音された自分やクラスメイトの様々な反論を共有し、比較・分析・評価などに活用させる。

**(3) 比較 / 論点整理 (Comparison / Summary)**

ディベートをまとめる際や、ジャッジとして肯定側・否定側のどちらが優れているのかを総合的に判断する際は、AREAの型や比較のための基準例を活用しながら論点整理を行う。ジャッジを行う際は、偏見や先入観で判断しないこと、よい点と改善点のどちらも伝えることに留意すると良いだろう。

① AREA を使った比較の型

A: Our argument is superior to their argument in terms of A.

R: This is because...

E: For example,...

A: Therefore, in terms of A, our argument is superior to their argument.

※ in terms of A: A の観点において

この表現を使うことで「基準」を明確にし、肯定側・否定側のどこを比較しているのかがより分かりやすくなる。

②論理的な比較のための基準例 (Criterion)

数量 (Quantity) : どちらがより数・量が多いか

重要性 (Importance) : どちらがより重要か

可能性 (Probability) : どちらがより実現しそうか

対象 (Target) : より重要な対象・人はどちらか

期間 (Term) : 影響がある期間が長いのはどちらか

規模 (Scale) : より規模が大きいのはどちらか

緊急性 (Emergency) : より喫緊の問題はどちらか

(4) パフォーマンステストの実施

本稿では、2人1組(肯定側・否定側各1名)で相手の立論に対する反論を1度ずつ行う簡易ディベートを採用し、「話すこと[やり取り]」のパフォーマンステストとして、「肯定側立論→否定側反論」及び「否定側立論→肯定側反論」の部分を評価に活用した。

①簡易ディベートの流れ(例)

エ 簡易ディベートの具体的な流れ

Stage	
① 肯定側立論 Affirmative Constructive Speech (1 min.)	"We will now begin the debate with the Affirmative Constructive Speech for 1 minute." ～立論～ "Thank you."
② 否定側立論 Negative Constructive Speech (1 min.)	"We will now hear the Negative Constructive Speech for 1 minute." ～立論～ "Thank you."
準備時間 Preparation time (1 min.)	"We will now have a 1 minute preparation time." "Preparation time has ended."
③ 否定側反論(アタック) Negative Attack (1 min.)	"We will now hear the Negative Attack Speech for 1 minute." ～反論～ "You said that ~, however it is not (true / important / effective) because..." "Thank you."
④ 肯定側反論(アタック) Affirmative Attack (1 min.)	"We will now hear the Affirmative Attack Speech for 1 minute." ～反論～ "You said that ~, however it is not (true / important / effective) because..." "Thank you."

簡易ディベートを通して深まった自分の考えを論理性に注意して文脈にまとめさせるなど、まとまった文章を書き起こすことも考えられる。

②評価方法: パフォーマンステスト

日常的な話題や社会的な話題について、相手の立論に対して反論した上で、自分の意見を適切な理由や根拠とともに述べる。

③論題: High school students shouldn't have part-time jobs.

④実施方法

- 1 教員・ALTをジャッジに見立てて、簡易ディベートを実施する。
- 2 授業で扱った論題を三つ程度用意し、その中から一つを選んで提示する。
- 3 立論は評価者である教員・ALTが提示する。
- 4 評価の場面は、「相手の立論に対する反論(アタック)」とする。
- 5 JTEとALTが分担して評価を行う。

⑤採点基準

ウ 採点の基準

○ 「思考・判断・表現」についての三つの条件

条件1: 相手の立論を理解し、論点を整理(要約)して述べるができること。  
条件2: 相手の立論の論点を受けて、自らの反論を一つ述べていること。  
条件3: 自らの反論を裏付ける例や説明が一つ示されていること。

	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
a	・立論に対し、語彙・表現を適切に使って反論している。 ・聞き手に分かりやすい論理的な構成や音声等で立論に対して反論している。	三つの条件を満たした上で、関連した情報や考えなどを適切かつ論理的に話して伝え合うやり取りをしている。	三つの条件を満たした上で、関連した情報や考えなどを適切かつ論理的に話して伝え合うやり取りをしようとしている。
b	・立論に対し、多少の誤りはあるが、理解に支障のない程度の語彙・表現を使って反論している。 ・多少分かりづらい点はあるが、立論に対して聞き手が理解できる構成や音声等で反論している。	三つの条件を満たして話して伝え合うやり取りをしている。	三つの条件を満たして話して伝え合うやり取りをしようとしている。
c	「b」を満たしていない。	「b」を満たしていない。	「b」を満たしていない。

この例では、ディベートにおける、反論(アタック)に重点を置いた採点の基準を設定している。

⑥生徒の発話と採点結果の例

【教員: 肯定側立論】

I think that high school students shouldn't have part-time jobs. This is because students should concentrate on schoolwork. During their school years, they should study as much as they can, because after they graduate, they won't have much time to study.

〈QR⑤〉ディベート(肯定側・立論)



【生徒A: 否定側反論】

① You said that students should focus more on school work because they won't have much time to study. ② However, it is not true because many of high school students in Japan go to university. ③ So, they have much time to study even after graduating from high school. ④ For this reason, I don't think that high school students shouldn't have part-time jobs.

※「採点の基準」に沿って、全ての観点で「a」と評価した。(採点基準により、④の結論部はここでは評価しないこととしている。)

【生徒 B：否定側反論】

① I believe that it's good for students to have part-time jobs. ② Part-time jobs can give them a chance to think about their future jobs. ③ They may realize the types of work they are good at. ④ This will help them when they look for a full-time job in the future. ⑤ For this reason, I don't think that high school students shouldn't have part-time jobs.

※「採点の基準」に沿って、全ての観点で「c」と評価した。  
(採点基準により、肯定側立論に対しての反論になっていないと評価した。)

※本生徒については、再度「思考・判断・表現」の三つの条件を確認させ、条件に合わせた論理的な反論ができるよう、録画したパフォーマンステストの場面を実際に示すなどして振り返りの機会を設定した。条件をクリアするために必要な練習を行わせた上で、他の論題で評価の機会を設定するなどした。

〈QR⑥⑦〉ディベート(否定側反論・生徒C・D サンプル音声) ※評価練習等にご活用下さい。



【教員：否定側立論】

I think that it is good for students to have part-time jobs. There is a good point about working part-time. This is because students can experience things that they can't learn at school by working. For example, they may learn how to communicate with adults and how to speak politely.

【生徒 C：肯定側反論】

① You said that students can experience things that they can't learn at school. ② For example, speak with adults. ③ But, it is not true because students can speak with teachers. ④ Of course, teacher is adult.

※「採点の基準」に沿って、全ての観点で「b」と評価した。  
(採点基準により、多少の誤りや分かりづらさを含んでいと評価した。)

◆「話すこと [やり取り]」の指導と評価における ICT の活用例

○ディベートを動画で示し、ねらい(目標)を確認する

- ・ALTによる立論のモデルや、立論から反論のやり取りのモデルを全体で共有する。
- ・音声で配信し、生徒は立論の要旨を聞き取ってメモをまとめたり、反論を行ったりする練習に活用する。

・授業外でも必要に応じて視聴できるよう、共有フォルダに保存する。

→必要に応じて生徒個人が繰り返し視聴し、伝わりやすい発話や音量、速さや態度などの振り返りに活用できる。

○賛成または反対のグループ内で論点整理を行う

・デジタルホワイトボードソフトの付箋機能を使って、意見や主張を整理する。(個別→協働)

→紙の付箋よりも効率的で、対話の過程の振り返りが可能である。

○アウトラインや原稿を協働で作成する

・文書作成ソフトを使用して個人で立論を作成し、教員からのフィードバック等を参考にしてペアやグループ等で分析根拠の質と量を高めたり、共同編集機能で立論を作成したりする。

→ネットワーク環境で端末を活用することで、場所や時間を問わず協働作業を進めることができる。

○生徒がパフォーマンスを録画し、教員(評価者)にデータで提出する

・教員は提出された動画を「採点の基準」に照らして事後に評価する。

・生徒は活動のねらいについての自己評価や相互評価に活用する。

→一斉にパフォーマンステストを実施することにより、大幅に時間を削減することができる。

→記録した動画を複数の教員で視聴して評価基準や改善点の確認を行うなど、指導の振り返りや生徒へのフィードバックにも活用することができる。

→動画や音声、文書など様々な媒体をデジタルで保管し、ポートフォリオとして振り返りや評価に活用することができる。

5 終わりに

本稿では、第一部にて、いよいよ次年度から始まる新CSの実施とGIGAスクール構想による1人1台端末の運用開始という2つの大きな変化を踏まえて、本道の高校英語教育の現状や課題について考察を述べた。

第一部 まとめ

(1) 次年度の高校教育の大きな変化

○新学習指導要領の実施

- ・4技能5領域を総合的に扱う科目群「英語コミュニケーションⅠ・Ⅱ・Ⅲ」
- ・発信力を高めるための科目群「論理・表現Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」  
⇒ディベートやディスカッション(統合的な言語活動による実践)が注目

○GIGAスクール構想による1人1台端末の運用開始

- ・学校の「外国語」の授業でICTを「使っていない」と回答した生徒の割合は参加国中最下位(OECD)
- ・全国の高校生の英語力向上と「生徒の言語活動中心の授

- 業（75%以上）」「ICT活用」には相関あり
- 北海道・全国の英語の授業で求められていること
    - ・生徒の言語活動中心の授業展開
    - ・生徒の英語力向上に資するICTの積極的な活用
  - (2) 本道の高校英語教育の現状と課題
  - 授業時間の半分以上の時間を言語活動に費やしているが生徒の英語力の向上に必ずしもつながっていない
    - ⇒『言語活動の質の向上』：思考力・判断力・表現力を育成する言語活動の充実
    - 目的や場面、状況を適切に設定
  - パフォーマンステストはすべての学校・科目で必須（いまだ1割の学校では実施されていない）
    - ⇒英語力の向上につながる妥当性のある評価をすること、ICTも活用し、業務の効率化を図ること
  - ICTの活用状況：先生だけでなく、生徒が個別最適な学び・協働的な学びに活用することが重要
    - ⇒先行事例に学ぶ、生徒とともに使う
    - オンラインとオフラインの良いところを使い分ける

第二部では、解決の方策の一つとして、英語ディベートを通じた『「話すこと [やり取り]」の指導と評価におけるICT活用』の実践事例を紹介した。

## 第二部 まとめ

(3) 英語ディベートを通じた『「話すこと [やり取り]」の指導と評価におけるICT活用』の実践

- ・「コミュニケーション英語Ⅰ」での実践⇒すべての学校で行うことができる
- ・英語ディベートの「立論⇒反論」場面でのやり取り
- ・単元目標の達成のためにICTを効果的に活用する
- ・学習指導要領の目標⇒単元目標⇒指導と評価の一体化（パフォーマンステストの実施）
- ・ディベートの土台は年間を通じた帯活動でつくる  
【Small Talk・Dictogloss・Essay Writing】
- ・効果的にディベートを行うには【立論・反論・論点整理】が重要
- ・教育としての英語ディベートの意義を生徒に理解させる（人格批判×、勝負に固執×）
- ・立論：AREA、同サイドで論理に意識を向けた立論・比較の練習
- ・反論：三角ロジック、C-AREA、論理矛盾の指摘
- ・比較：論点整理：AREA、Criterionの活用
- ・パフォーマンステスト：【立論⇒反論】場面の「話すこと [やり取り]」を評価、Rubric活用、ICTで効率化

○「話すこと [やり取り]」⇒英語4技能及び技能統合型の言語活動の軸となる領域

○英語ディベートやICT活用自体は目的ではないが、生徒1人1人が主体的・対話的で深い学びを実現し、Society5.0と呼ばれるこれからの社会をしなやかに生き抜く資質・

能力を育成するための有効な手段

新CSの趣旨を踏まえた指導と評価×ICT活用で生徒の英語コミュニケーション能力育成を

“No One Will Be Left Behind”

本研究はまだまだ始まったばかりだが、今後も先生方や生徒たちと楽しみながら実践していきたい。

## 参考文献・資料

- Council of Europe (2018). CEFR Companion Volume with New Descriptors.
- Howard P, Elizabeth R. H, Matt. K (2012). Using Technology with Classroom Instruction that Works 2<sup>nd</sup> Edition.
- 文部科学省 (2018) 高等学校学習指導要領 (平成30年) 外国語編英語編
- 文部科学省 (2018) 高等学校学習指導要領 (平成30年告示) 解説外国語編英語編
- 文部科学省中央教育審議会 (2021) 「令和の日本型学校教育」の構築を目指して (答申)
- 国立教育政策研究所 (2019) OECD 生徒の学習到達度調査 (PISA) ~ 2018年調査補足資料~生徒の学校・学校外におけるICT利用
- 文部科学省 (2019) 令和元年度英語教育実施状況調査
- 文部科学省 (2017) 小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック
- 北海道教育委員会 (2021) 令和3年度北海道英語教育改善プラン及び道独自調査
- 国立教育政策研究所 (2021) 「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料高等学校外国語 (令和3年8月)
- 北海道教育委員会 (2021) 令和3年度高等学校教育課程編成・実施の手引共通教科外国語・専門教科英語
- 文部科学省 (2020) 外国語の指導におけるICTの活用について
- 松本茂 (1996) 頭を鍛えるディベート入門. ブルーバックス
- 松本茂, 鈴木健 (2008) 英語ディベート理論と実践. 玉川大学出版社
- 河野周 (2021) 中学・高校英語ディベート入門. 三省堂
- 文部科学省 (2021) MEXTChannel「授業で行う英語ディベートシリーズ」 (文部科学省公式YouTube Channel) ※筆者制作 (文部科学省専門職在職時)



〈QR⑧〉文部科学省 外国語教育ホームページ



〈QR⑨〉佐々木康希（2022）「話すこと〔やり取り〕」の指導と評価 事例動画（YouTube 限定公開）

※配信動画の録画、録音、静止画でのキャプチャ取得等は禁止します。



# プロジェクトマネジメントの視点を取り入れた スクールプロジェクトの実践

—北海道札幌北高等学校 家庭クラブの取組から—

北海道札幌北高等学校 松本 奈巳

## 1. はじめに

家庭クラブとは、自分の家庭や校内外の課題解決について、家庭科で学んだことを活かし、取り組む組織のことを指す。学校によって異なるが、学科・学年・部活動等の単位で構成され、4つの基本精神（創造、勤労、愛情、奉仕）を柱として、研究活動やボランティア活動、交流活動を展開している。家庭クラブの活動を推進するための全国組織として、全国高等学校家庭クラブ連盟があり、加盟することで、全国大会につながる研究発表大会に参加が可能となる。現在、全国連盟ならびに北海道高等学校家庭クラブ連盟に加盟している道内の高校は本校を含め13校あり、支部大会や全道大会で研究発表を行い、交流を深めている。研究発表は、ホームプロジェクトの部と学校家庭クラブ活動の部の2部門に分かれており、ホームプロジェクトは自分の家庭を、学校家庭クラブ活動（以下 スクールプロジェクト）は校内や地域の課題をそれぞれ見だし、創意工夫しながらその解決に向けた実践に取り組んでいく（図1）。



（図1 学校家庭クラブ活動とホームプロジェクトの実施方法）

この家庭クラブの指導に、本校に赴任して初めて当ることになった。前任校が農業高校であり、実習部の一教員として農業クラブ活動のプロジェクト学習にも携わっていたため、研究活動の進め方やアプローチの手法など、多くのことを重ねて学ぶことに恵まれた半面、研究活動を進める上でのアイデア発想や思考ツールの活用、活動に対する評価の充実、プロジェクトの管理など、新たな課題に対応する方法を模索していた。そのような時期に、藤女子大学との高大連携により、上記の解決につながるプロジェクトマネジメントにおける実践的なスキルを研究活動に取り入れる機会

を得ることができた。

本稿では、プロジェクトマネジメントの視点を組み込んだ本校家庭クラブの研究活動（スクールプロジェクト）の取組を報告するとともに、生徒が主体的に進めていける研究活動のプロセスについて共有できる場にしたと考えた。

## 2. 本校の概要

本校は本年、創立120年目を迎え、校訓は、昭和55（1980）年に定められた「寛容 進取 良識」。学びのプロフェッショナル、意味や価値を創り出す人材の育成を目指し、視野を広げる体験と探究を重視している。平成28年度から文部科学省「教科等の本質的な学びを踏まえたアクティブ・ラーニングの視点からの学習・指導方法の改善のための実践研究」、令和2年度からは国立教育政策研究所教育課程研究指定（総合的な探究の時間）を受け、ALの視点を取り入れた実践及び資質能力の育成を生かしながら、組織的に実践研究を進めている。

## 3. 本校家庭クラブの歩み

1950（昭和25年）、本校は現在の校名に改称され、男女共学制となった同年に、道内初となる家庭クラブを発足させた。その後、その名称をFHK（Future Homemakers of Kita Senior High School）とし、家庭科を履修している生徒と執行部員（1～3年の希望者）で構成。校内では外局の位置づけで、通称FHK執行部として、ホームプロジェクトを中心とした研究活動、調理の知識・技術を楽しく身につけることを目的としたお料理講習会、ホテルでのテーブルマナー講習や、北高雛にちなんだ歴史あるお汁粉サービスといった社交的活動を中心に活動してきた。

しかしながら、活動を全体で共有する難しさが年々増すなど、運営上の課題が内外から出てきたこともあり、平成30年から部活動として再編し、研究活動を基軸としながら、地域とつながり活動の幅を広げている（写真2）。



(写真2 こども食堂での食事提供)

研究活動については赴任して2年間、ホームプロジェクトで家族の健康・生活改善を中心に取り組んでいたが、3年目に新たに入学してきたのが、地域に出て活動の幅を広げたいという気持ちを持つ生徒達であった。バイタリティにあふれる彼らの強い意向で、研究活動はスクールプロジェクトで進めていこうという流れになり、現在に受け継がれている。

#### 本校家庭クラブ研究活動の概要

～2017年 ホームプロジェクトで  
家族の健康・生活改善を主とした取り組み

2018年～ 学校家庭クラブ活動で、「食」を中心とした校内外の地域課題に取り組む内容へ



2019年 “Be happy with “gohan”  
～食環境の充実を目指して～  
(要旨) 高校入学後の食生活の変化や地域の抱える食の問題点を「共食」という課題に焦点化し、校内や地域への情報発信や、共食を進める活動に取り組んだ。「共食」の場の提供から家庭での実践へとつなげるお料理講習会や、共食レシピの立案・発信、こども食堂でのボランティアや食事提供、そこで提供した献立をコンテストに出品する等、多くの実践に取り組んだ。

(家庭クラブ全国大会 第4位入賞)

2020年 “Take action, Make a healthy life!”  
～「食」を楽しんで「食」行動を変えよう～  
(要旨) 前年度からの課題である「食行動の変容」と「健康的な食事の楽しさや大切さを伝えたい」という想いを形にするため、自己効力感を伴う体験や成果に結びつける活動に取り組んだ。こども食堂との連携では「料理ができる」という自信と

スキルを身につけてもらうことを目的に、一緒に料理をする機会“わくわくキッチン”を企画した。また、健康的な食行動に働きかけるため、食生活改善推進員協会との連携などにも力を入れた。

(家庭クラブ全国大会 第3位入賞)

2021年 “Share a happy stay home time!”

～今だからこそ、自分で作る楽しさを！～

(要旨) 新型コロナウイルス感染症影響下で、人と一緒に食事をとることが制限され、内食が見直されている今だからこそ、家庭で料理をする楽しさや面白さを再認識してもらう良い機会だと考え、SNS (Instagram、YouTube) やクックパッドによる情報発信、食品ロスをなくし、簡単に調理可能なミールキットレシピの作成に取り組んだ。校内での実践活動では、家庭で「食の楽しさ・大切さ」を共有してもらうことを目的に、生徒がレシピを立て、料理をする活動を展開した。生徒やその家族から前向きな意見や感動をもらい、やりがいを感じる事ができた。

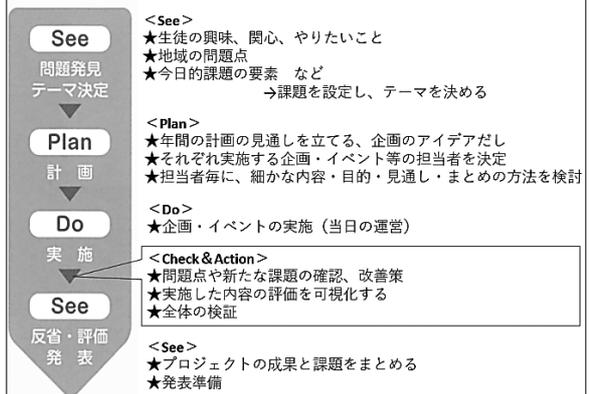
(家庭クラブ全国大会 第3位入賞)

#### 4. 研究活動の実際・課題と高大連携のきっかけ

##### 4.1 PDCA サイクルとその実際

ホームプロジェクトもスクールプロジェクトも「See (問題発見・テーマ設定) → Plan (計画) → Do (実施) → See (反省・評価・発表)」の流れを進めていくが、実際の活動は更に細分化されたステップを踏む必要がある(図3)。

細分化すると・・・



(図3 PDCA サイクルと実際の研究活動)

ホームプロジェクトでは、該当する生徒の家庭の協力の下で進めていくため、タスクが複数になっても、個人レベルで消化できる部分があるが、スクールプロジェクトでは、複数のタスクを部員全員で把握し、進捗状況を確認していく作業が必要になってくる。そのため、研究全体を見通しながら企画の立案やスケジュールリングを適切に進めていくマネジメント能力が必要

であり、かつ客観的な評価指針などが明確でなければ、生徒も多くにわたる実践内容の消化に追われ、研究成果も総花的な実践結果の羅列になりかねない。

そこで、研究活動の一連のプロセスにマネジメントの視点を組み入れることで、「生徒主導」かつ「持続可能」なサイクル（理論）として形作ることができれば、生徒は自ら課題と自分達の思い・やりたいことを関連付け、のびのびと研究活動に取り組めるし、研究活動をとおして生徒の自己効力感を高め、高校卒業後も様々な場面で生かせるスキルになると考えた。同時期に、藤女子大学人間生活学部人間生活学科プロジェクトマネジメント専修が提供する出張講義「知って得するプロジェクトマネジメント」（当時）があることを知り、担当する和田雅子先生に連絡をしたのが平成30年のことである。

#### 4.2 プロジェクトマネジメントとは

「ある一つの目的のために業務推進組織ができ、その目的を達成したら消滅する業務」をプロジェクトと定義し、そのプロジェクトがうまく進行していくよう様々な管理を行い、成功に導き、完了させることをプロジェクトマネジメントという。ビジネスの場面で活用される知識体系であるが、藤女子大学人間生活学部人間生活学科プロジェクトマネジメント専修では、この知識基盤に企画立案、ワークショップ、教育分野の知識など実践的な取組を融合させており、本校家庭クラブの課題とも重なる部分が多く、高大連携のスムーズなスタートにつながった。

#### 4.3 研究活動上の課題

このプロジェクトマネジメントの視点を、本校家庭クラブで取り入れるにあたり、生徒の進捗状況や活動の評価時期、顕在化するであろう問題に対して効果的に介入できるタイミングで和田先生に入ってもらえるように、その都度相談をしながら取り組んだ。特にプロジェクトマネジメントの内容を反映させ、解決につながった内容は以下の4点である。

##### 1) 課題設定の方法

本校家庭クラブでは2018～2020年の3年間、スクールプロジェクトで「食」に関する研究活動に取り組んでいる。生徒の興味関心が一番強かったことがその要因であったが、それと地域課題をつなげる難しさがあった。特にスクールプロジェクトが開始された初年度については、生徒のやりたいことを中心に動き出してしまったこともあり、中間反省時には生徒と共に「何のためにこのプロジェクトを始めたのか」という本質を確認する時間を多く取ることとなった。

小さな地方の町村部であれば、地域課題が明確であ

ることが多く、そのアプローチ方法をより具体的に考え、成果を導き出せば良いのだが、札幌市となると、問題の所在も多岐にわたり、課題を導き出すのが難しい。多くの問題が潜在的に存在する中から、導き出したい成果を描き、そこからどのように課題を設定し、解決に向かうための活動をいかに立てるのが、家庭クラブの生徒にとっても大きな壁となっていた。

##### 2) 活動の検証と評価

生徒は一生懸命活動に取り組むが、活動自体に満足してしまい、何を持って成果とするのか、またその評価指針をどのように設定するのかということを見失いがちであった。そのため、活動の立案段階でそれらを意識できるようにすること、また成果を数値化し、可視化することによって活動の成果を客観的に把握する方法を知りたいと考えていた。

##### 3) 活動の立ち上げ方／企画立案

年度初めにスクールプロジェクトを立ち上げる際には、前年度の反省やこれまでの活動を引き継ぎつつ、新たな視点を取り入れることが求められる。また、生徒は「問題を見つけ出す」ことは得意だが、それを解決するための方法（企画）を考えるのは、生活体験や経験の場が大人と比べて少ないこともあり、時間がかかっていた。「食」という同じ枠組みの中で、プロジェクトを深化させるだけでなく、その背景や根拠も明確にしていく方法がないかと模索していた。

##### 4) プロジェクトの管理

前述したが、スクールプロジェクトでは複数の活動を手分けして進めていく。しかしながら、各活動ですべきことをピックアップしても抜け落ちてしまったり、誰かがやってくれるだろうと他人任せとなってしまう、大事な場面で手つかずの業務が発覚することがかなりあった。また、自分の担当する活動については把握しているものの、他の活動の進捗状況を確認していなかったため、人手が足りなくなったり、活動自体に大きな負荷がかかる時期ができてしまったこともあった。

## 5. プロジェクトマネジメントの視点を取り入れたスクールプロジェクト～その具体的な取組と成果～

### 5.1 実施形態

講義は計5回。座学とワークで、時間は放課後の90分を使い、場所を本校被服室で実施した。限られた時間で最大限の学びが得られるよう、和田先生も講義の内容を工夫してくださったこともあり、本校生徒も集中して取り組んでいた（写真4）。なお、講義やその内容を受けた活動の検討等の際には、横造紙、マジック、付箋、ホワイトボードを活用し、できるだけ生徒が自分達の思考を「自由に」「素早く」「気兼ね

なく」表現、共有できるようにしている。

### 高大連携の概要

回	実施日	内容
1	R1. 6. 19	●プロジェクトマネジメントについて －プロジェクトの立ち上げ、企画 ●課題設定の方法について －問題分析・目的分析・比較検討
2	R1. 11. 8	●活動の検証・評価 －活動の振り返りと評価の5項目
3	R1. 11. 29	－ミッション、ビジョン、コンセプト
4	R2. 4. 26	●研究テーマの方向性を導き出す －アイデア発想「そもそも・たとえば・つまり」理論
5	R2. 11. 5	●活動の検証と評価Ⅱ －ミッションプロファイリング －スコープマネジメント －タイムマネジメント



(写真4 プロジェクトマネジメント初回講義の様子)

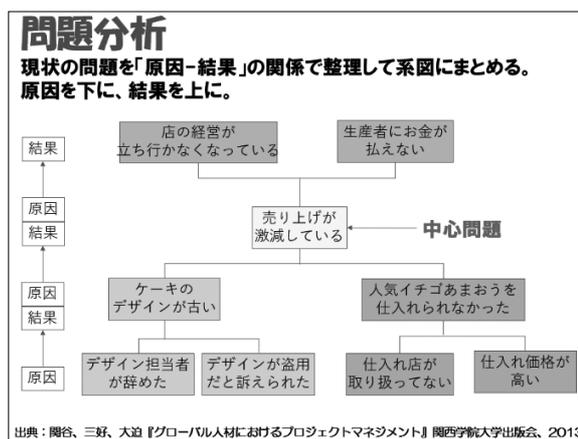
## 5. 2 実施状況

### 1) 課題設定の方法⇒問題分析・目的分析

スクールプロジェクトの初年度は、「食環境の充実」というテーマは決まっていたものの、どのように課題を絞り、どこからアプローチしたらよいか決めかねていたことから、「問題分析・目的分析」に取り組むことになった。これは、中心となる問題から導き出された原因と結果を整理し、系図にまとめながら思考をブレイクダウンしていくことで、高校生にも理解しやすく、すぐに実践可能で自分たちの研究に反映しやすい手法であった。

#### ①問題分析

例えば、「ケーキショップのいちごショートケーキの売上げが激減している」という中心問題から、その原因を下層に分析していく。「ケーキのデザインが古い」「人気イチゴあまおうを仕入れられなかった」と展開していき、さらにその原因として、「デザイン担当者が辞めた」「デザインが盗用だと訴えられた」「仕入れ店が取り扱っていない」「仕入れ価格が高い」ということを挙げていくことで、下層にいくほど具体的な問題の原因が示される(図5)。

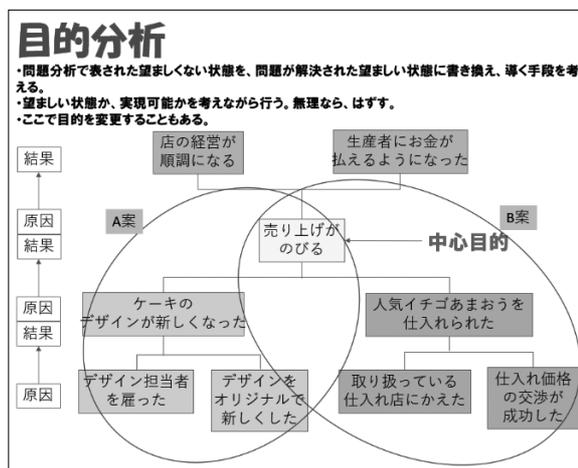


(図5 問題分析の例)

逆に最下層から原因→結果をたどっていくと、「仕入れ価格が高い」その結果として「人気イチゴあまおうを仕入れられなかった」、その結果として「売上げが激減している」、その結果として「店の経営が立ち行かなくなっている」、「生産者にお金が払えない」という、問題から浮かび上がった原因とその結果を一連の流れで可視化できるのが大きなポイントである。

#### ②目的分析

問題分析の各項目を、目的が達成された状態に変換することを目的分析という。先の例でいくと、「売上げが激減している」という中心問題を、『売上げが伸びる』という中心目的に変え、下層・上層の問題分析の各項目も、同様に言い換えていく。それによって、問題が解決された状態が図示されていることになる(図6)。



(図6 目的分析の例)

以上の説明を受けた後、ウォーミングアップとして、普段の学校生活の中から中心問題を設定し、ツリーをつくる練習を行った(図7)。生徒らしい中心問題で、盛り上がりながら、この手法についての理解を短時間で深めることができた。



自立発展性の5観点あり、この5観点からこれまでの活動の成果を視える化し、評価した。

表12 評価の5項目

評価項目	基本的視点	応用的視点
妥当性	プログラム目標がプログラム目標として意味があるかを検討する。	要素となるプロジェクト、各活動の間での連携（関連性）はどのように、またどれほど取られていたか。実施者間にプログラムとしての認識はあったか。
有効性	プログラム目標は中間目標によって達成されたか、あるいは達成される見込みであるか検討する。	要素となるプロジェクト、各活動で最もプログラム目標に効果のあったものは何か。また反対にほとんど貢献しなかったプログラムはどれか。また相乗効果はあったか。
効率性	実施過程における生産性。投入が中間目標にどれだけ転換されたか。投入された資源の質、手段、方法、時期の適切度を検討する。	要素となるプロジェクト、活動、投入に、無駄な重複はなかったか。または各事業の実施の順序は適切だったか。同じ投入または成果を共有するなど、効率性を高めるような工夫はあったか。
インパクト	プログラムが実施されたことにより生ずる直接的・間接的な正負の影響を検討する。計画当初に予定されなかった影響や効果も含む。	要素となるプロジェクト、各活動で、特にインパクト（正負）の大きかったものは何か。反対にインパクトのなかったプロジェクト、活動はどれか。
持続性／自立発展性	プログラムが終了した後もプログラムによってもたらされたインパクトや便益が持続するかどうかを検討する。	特に持続性が低く、またプログラム全体の持続性に影響を及ぼすようなプロジェクトまたは活動はどれか。

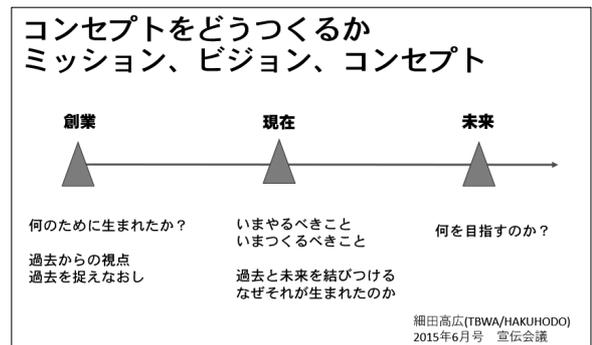
（關谷武司「グローバル人材に贈るプロジェクトマネジメント」）  
 下記に示したデータ（図13）は、ポスター制作、お料理講習会、地域への発信、子ども食堂との連携等、生徒がテーマに基づいたこれまでの活動を評価の5項目で数値化した結果である。活動の成果を客観視できる点と、例えば個々で「これは効果があったかも（なかったかも）」と漠然と考えていたことを、視覚で共有できる点が良かった。ここから、地域の特色を生かした取組に発展させる必要性が課題として見えてきた。

評価(数値)の高い活動										評価(数値)の低い活動									
評価項目	校内	地域	校外	合計	比率	評価項目	校内	地域	校外	合計	比率								
ポスター制作	5	5	5	15	95%	ポスター制作	5	4	4	13	82%								
お料理講習会	5	3	4	12	75%	お料理講習会	5	2	3	10	62%								
地域への発信	4	3	4	11	68%	地域への発信	4	2	3	9	56%								
子ども食堂との連携	3	2	3	8	50%	子ども食堂との連携	3	2	2	7	44%								

（図13 評価の5項目集計結果）

②次のビジョンとコンセプトづくり

次に、最初に自分達で確認したミッションから、次のプロセスに向けて、縮小感がなく、選択したという意図が伝わるように、ビジョンをどう描くか、というワークを行った。まずは、ミッション・ビジョン・コンセプトについて確認し、それを自分達の活動に当てはめるとしたらどうなるかを考えた。評価が可視化されていたことから、課題もつかみやすく、予想以上にスムーズに話し合いは進み、今後の活動の大枠として、以下のことを共有し、具体的な活動内容と成果を測る指標も設定し、後半の活動を進めていった（図14）。



- 〔ミッション、ビジョン、コンセプト〕
1. ミッション：食環境の充実を目指す
  2. コンセプト：みんなと一緒に楽しく食べる！
  3. ビジョン：地域と校内で具体的なアクションを起こし、日々の食事を楽しく、美味しく、幸せな時間にしていく

対象	実践項目	出した成果	成果を測る指標	具体的内容
1	地域：第1回「北海道食の魅力発信料理コンクール」高校生大会への応募、参加 校内：子ども食堂	・地域の食をフルート料理で魅力を伝える ・多くの参加者に出発できる ・今後の活動（私生活でも）に活用 ・来た人を楽しんでもらう ・地域との関わりを深める ⇒食育の大切さを伝える	・本選への出場 ・本選でのPR活動（フットトラクターの配布/取組） ・本選後のメディア露出	①フрут料理考案 ⇒1月末に応募 ②本選に向けての準備
2	地域：お料理講習会 校内：ポスター（ポスター）啓発	・皆に共食の楽しさを伝える ・家庭でも実践してもらおう ・みんなに食について知ってもらおう ・私たちの活動を広める	・アンケート ・家族からの感想 ・クイズワード作成（アンケートつける） ⇒それで見学人を増やす ＆見たことの確認	①アンケート（つづいてみたくなかたなど） ②つしぽ（つづいて…出来たらアレンジ） ⇒先輩何人なのか

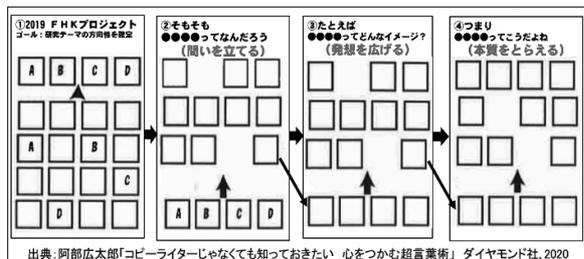
（図14 次のビジョンとコンセプトづくり）

3) 活動の立ち上げ方/企画立案⇒アイデア発想

スクールプロジェクト2年目、先輩達のプロジェクトを受け継ぎながら、自分達の今年度の取り組みを描くことが難しく、生徒の強い希望で和田先生にお願いした。

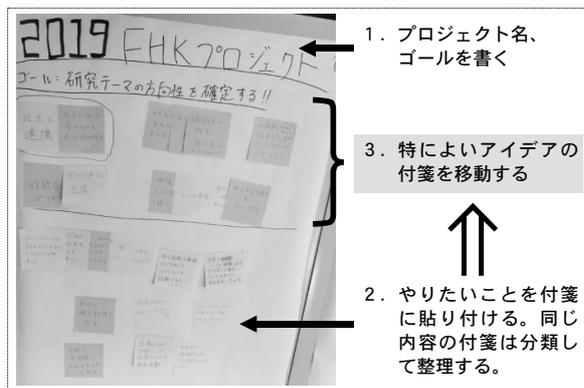
そこで、講義をしていただいたのが、アイデア発想の手法である。アイデア発想の仕方は、本来のプロジェクトマネジメントの領域ではないが、生徒がプロジェクトを進める上で、大きなウエイトを占めていたのが“新たな活動（企画）を考えること”だったため、

それもマネジメントの一部とした方が、今後のプロジェクトをスムーズに進行させることにつながると考えた。そこで、自分の“経験”から、“本質”をみつけたし、そこから“企画”を生み出す「そもそも・たとえば・つまり理論」を活用したワークを展開していただいた。これは、電通のクリエイター阿部広太郎氏が提唱するアイデア発想の方法を、和田先生が応用したものである(図15)。



(図15 そもそも・たとえば・つまりシート)

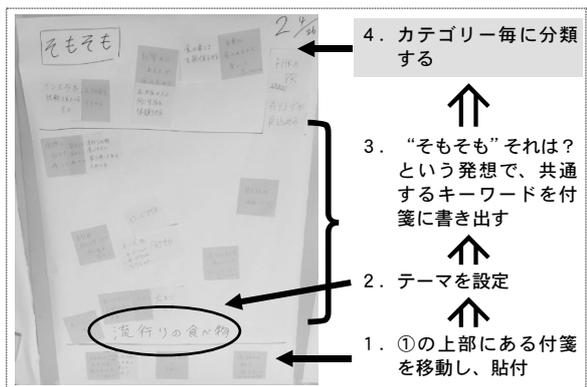
①プロジェクト名の決定とゴールの確認、アイデアだしまず、最初の模造紙に、プロジェクト名を「2019FHKプロジェクト」、目指すゴールとして「研究テーマの方向性を確定する」と書き出した。そして、模造紙の下部に、やりたいこと、やるべきと思ったことを付箋に書き、貼り付け、カテゴリー毎に分類し、そこから特に良いと思ったアイデアの付箋を選んで上部に移動させる。生徒達が移動させた付箋には「地域との交流・連携」「模擬店やイベント出店」「流行のものをつくる」「SNSでの発信」などが挙げられた。



②「そもそも」で問いを立てる

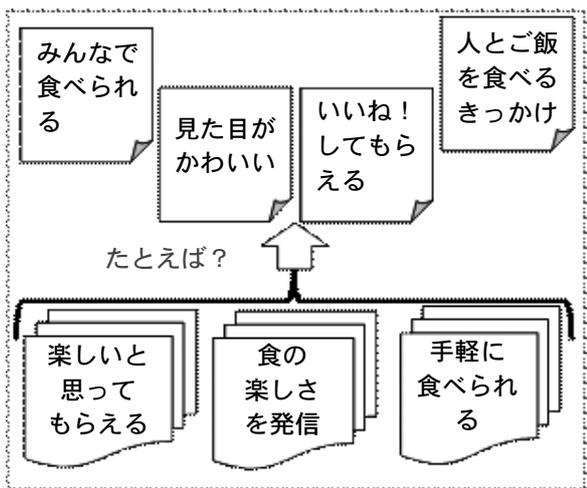
①の模造紙で上部に移動した付箋を、②の模造紙の下部に貼り、その付箋からテーマをつくり、共通となるキーワードを考え、付箋に記入していく。生徒が設定したテーマは『流行りの食べ物』。では、“そもそも”それは、何なのか、どんなものなのかを考え、付箋に書き出す工程は、『流行りの食べ物』に対して生徒なりに問いを立てることにつながる。付箋には「美味しい」「広まりやすい」「タピオカ・チーズ系」「実際につくってもらえる」「見た目がかわいい」などといったことが書かれ、問い立てから広げたイメー

ジを、再度集約・分類することで、最終的に【食の楽しさを発信】【手軽に食べられる】【楽しいと思ってもらえる】といったカテゴリーにまとめた。



③「たとえば」で発想を広げる

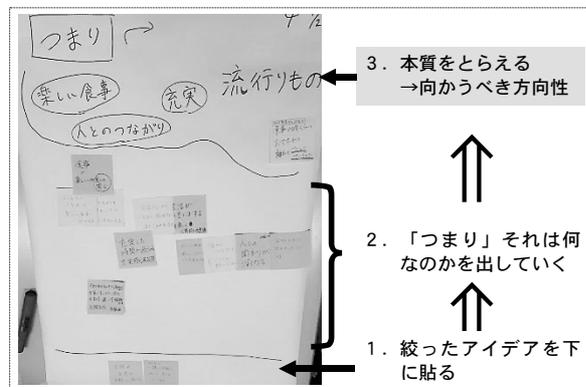
②の「そもそも」模造紙で上部に移動した付箋を、3枚目の模造紙の下部に置き、「たとえば」という切り口で、広がるイメージをどんどん付箋に書き出していく。生徒は「たとえば→手軽な食べ物って、みんなで食べられるよね」「たとえば→見た目がかわいい食べ物って、食べても楽しい」「たとえば→食の楽しさって、みんなで食べられることかもしれない」、「たとえば→食が楽しいと、人とご飯を食べるきっかけにつながるかもね」、「たとえば→食の楽しさを発信したら SNS でいいね！がもらえる！」などと、どんどん付箋を貼り付けていく。これまでの自分の経験やシチュエーション等から思い浮かんだ多くの「たとえば」が出てくることで、様々な視点が得られ、その後の「つまり」を導きやすくなる。



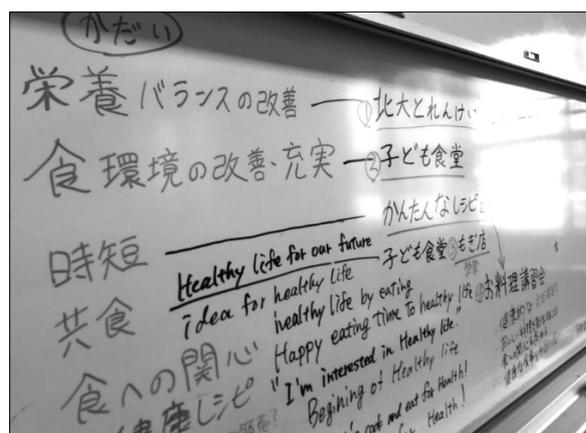
④「つまり」で本質をとらえる

最後は、「つまり」で本質を再定義する。③の「たとえば」で上部に移動した付箋を集約し、4枚目の模造紙の下部に置く。生徒はそこに、【家族や友達と手軽に食べられる】【みんなと一緒に食べて食べることができる】という付箋を置いた。そこから、これまで広げた思考を絞り込み、「つまり」というこれから向

かうべき方向性を出していく。生徒は「食事＝楽しい⇒食への関心」「心身共に健康」「充実した時間が過ぎせる」「人との関わりが深くなる」「誰かとつながる」という付箋を貼り付けてゆき、最終的に「つまり」で残されたワードは【楽しい食事】【充実】【人とのつながり】となった。



以上のことから、「継承したいこと」「(こんな風な地域・社会になってほしいという)自分達の願い」「今年度やりたいこと」がこの手法で明らかになり、生徒間で共有できたことから、「人の役に立ち、健康的な食事の楽しさや、食の大切さを伝えたい」という自分達の想いを確認し、『活動による行動の変化』を明らかにしながら、地域とつながり、想いを実現するという活動方針を立てることができた。また、貼られた付箋の中から、様々な企画・アイデアが出てきたので、それをグループ化し、諸課題とつなげることで、目的を実現するための具体的な取組へもつなげることができた(写真16)。



(写真16 2019年スクールプロジェクトの具体的な活動内容)

#### 4) 活動の検証と評価II⇒ミッションプロファイリング

2度目の全国大会に向けての中間反省。「食」に関わるテーマに2年連続で取り組んでいることになるが、その取り組みを、

- ・2年間の全体像の中で、どのような位置とするのか
- ・自分達の取組が客観的になっているか
- ・どのような構想の上で、活動が成り立っているか

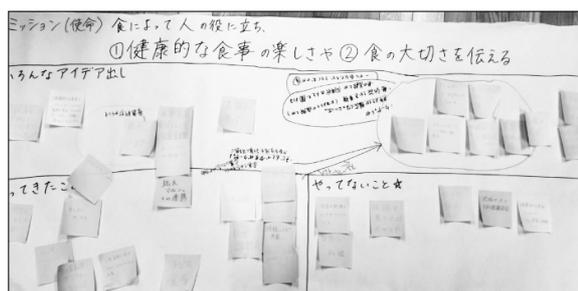
・これからの方向性

等を俯瞰しながら、次のアクションへつなげるステップにするために、ミッションプロファイリングという手法で中間反省を行った(図17)。ミッションプロファイリングとは、事業戦略を分析して、ゴール像を描き、現状との差から、ゴールを目指すシナリオを描くプロセスのことをいう。先輩から引き継いだスクールプロジェクトを今後どう展開していくか、ということを考える上で、必要なステップとなった。

ワーク1 模造紙+フセンで作業 家庭クラブの活動の全体像を把握しよう=中間評価	
ミッション(使命) これだいい?	食によって人の役に立ち、①健康的な食事の楽しさや ②食の大切さを伝える いろんなアイデア出し(たくさん) ※今までの活動も入れる ※実現可能性は無視
やってきたこと	やってないこと
やってないことのうち、いまずぐやってみたいこと	やってないことのうち、いまは保留にすること

(図17 ミッションプロファイリング作成資料)

この年度の生徒は、1年次からプロジェクトマネジメントの講義・ワークを受け続けているため、基礎的な知識を基に比較的スムーズにこの手法に取り組むことができた(写真18)。



(写真18 生徒が作成したミッションプロファイリング)

上記模造紙を完成させた後、別の模造紙で「やってないことのうち、今すぐやってみたいこと」「やってないことのうち、今は保留にすること」の付箋を動かすことにより、今後の活動も整理された。

この手法によって、受け継がれてきたミッションを改めて確認することができ、自分達のゴールを新たに設定、そのゴールに到達するための具体的な実践活動を計画し、研究活動の再構築をすることができた。

## 5) プロジェクトの管理

⇒スコープマネジメントとタイムマネジメント

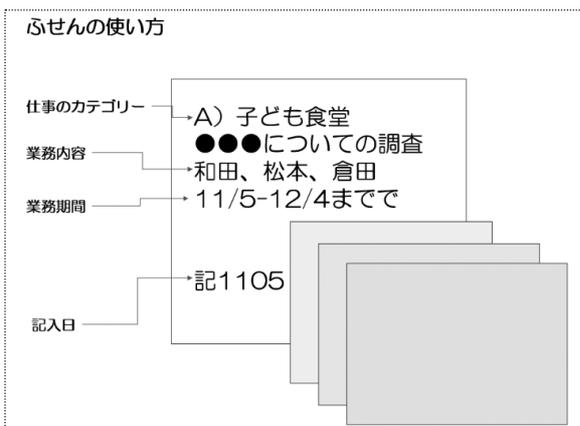
続けて、プロジェクトの管理を行うため、「スコープマネジメント」と「タイムマネジメント」の作成に取り組んだ。ビジネスの場合は、WBS (Work Breakdown Structure) でプロジェクト活動に必要な全作業を、管理可能な単位まで断層に分けて分割し、ガントチャート (スケジュールを時系列にあらわしている表のこと) でプロジェクトのスケジュールや進捗状況を共有するため、緻密かつ高度に管理される。家庭クラブの活動においては、もう少し緩やかに進捗状況が共有でき、活動内容や今後の予定をひと目で俯瞰することで、業務の取りこぼしのないように進めていくことに重点を置いた (図 19)。

「スコープマネジメント」とは、プロジェクトの最終目的を達成するために、①必要なすべての作業・資源を分析、②必要な資源を確保、③確実に実施するという3項目を行う業務プロセスで、「タイムマネジメント」とは、やるべき作業を明確化・細分化・断層化する、いわゆる作業の見える化である。

模造紙+フセんで実践  
スコープの洗い出しをしてみよう、作業スケジュールをつくってみよう

スコープ (作業範囲、作業の特定)

WBS	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8
AAAAA										
BBBBB										
CCCCC										



(図 19 WBS の作成方法)

以前は月ごとの予定表をつくり活動を進めていたが、各担当が今、何をしているかを把握することや、月がまたがるような長いスパンの活動の確認に困り感を抱いていた生徒にとって、この手法は理解しやすく、すぐに取りかけられる内容だったため、あつという

間に WBS を作成し、運用を始めた (写真 20)。



(写真 20 実際に作成したスコープ+タイムマネジメント)

新たな業務が発生したら付箋を貼り付け、終わった業務は外していく。終わっていない業務もひと目で確認できることから、これまでよりも一層、達成感やプロジェクトのコントロールができるという成功体験を得ることができるようになった。これによって、PDCA サイクルがより回しやすくなり、多くの活動が重なる時期であったが、生徒主導のコントロールで有意義に進めていくことができた。

## 6. 北海道 PM セミナーへの参加

この高大連携の取組は、2020年7月に Zoom によりオンラインで開催された日本プロジェクトマネジメント協会北海道セミナーで和田教授とともに発表した。本セミナーは、日本プロジェクトマネジメント協会が会員向けに主催しているイベントであり、参加者もビジネス関連の方がほとんどである。Zoom 開催による参加のしやすさもあったのか、参加者が約 180 名もあり、教育現場で活用されるプロジェクトマネジメントの実践について多くの形に興味関心を持っていただける機会を提供できた。以下に、参加者からいただいたコメントを記載する。

### 〔参加者からいただいた主なコメント〕

- ・家庭クラブをとおしてプロジェクトマネジメント (以下 PM) を体験、実践されていることに驚きました。どんな場面にも PM が使えることをあらためて理解できました。
- ・PM の思考を、高校生の授業に取り入れた取り組みは、大変素晴らしいと思います。ある意味正解がない、事前に準備されていない授業は教えるのが大変だと思いますが、生徒にとっては大変意義のある体験だと思います。
- ・高校生が部活で PM を実践。難しかったと思います。高校生活を振り返ると、年間行事で文化祭などクラス単位で PM が適用できそうなものがあります。教育の一環で取り入れてもよいかも。
- ・就業経験がない学生や生徒に対して、PM を教え

ることは非常に困難なことであるが、身近な課題をテーマに取り上げて、知らず知らずのうちにPMの実践を積むという取組みは、他の都府県でも十分に参考となる内容だと感じた。特に高大連携で取り組まれたことが素晴らしい。

## 7. 今後に向けて

この2年間の高大連携によって、プロジェクトマネジメントの視点を取り入れたスクールプロジェクトの進め方を活動に反映できたことで、自身の思考や取組が整理され、新たな課題も見えてきた。

これまでをスクールプロジェクトにおけるプロセスの整備とするならば、これからは、そのプロセスをよりよく活用するための「コミュニケーションの充実」「情報やデータの効果的な管理・共有方法」に力を入れていきたい。せっかくプロセスが整備されても、それを進めていく生徒同士や顧問、学校と外部の連携機関との間でのコミュニケーションが不十分だと、問題点や不安材料が解消されないまま企画が進行したり、責任の所在が分からなくなったり、ミスが重なるなど、スクールプロジェクトの進捗のみならず、その質にも大きく影響する。そして、部活内、外部との連携機関との間でコミュニケーションをうまくマネジメントするには、得られた情報やそこから作成したデータなどを、適切に管理し、全員で共有することも必要不可欠な要素と考える。今後も、高大連携を継続しながら新たな課題の解決に取り組みたい。

## 8. おわりに

本稿は藤女子大学家庭科・家政教育研究会 家庭科・家政教育研究第14号、15号内の授業実践報告で、同大学 和田先生と共同執筆した内容を、高校側の視点から加筆したものである。この場をお借りして、和田先生に改めてお礼を申し上げたい。

この数年間で、スクールプロジェクトにおいて生徒の成長を大きく感じられるようになったのは、この高大連携による取組に加え、本校での学習活動も大きな影響を与えていると感じている。授業では各教科においてICTの活用やアクティブラーニングの視点が入り入れられ、総合的な探究の時間では、1,2年次の課題研究において自分達の興味のあるグループに分かれ、ポスター発表までを行うが、その過程で思考ツールやクリティカルシンキング等の思考の技法を、ワールドカフェやワークショップ等で対話の技法を、そしてプレゼンテーションやポスターセッション、レポート作成等で発表の技法を習得・活用することができるようになることで、様々な力を身につけていく。

このような積み重ねにより、生徒はこちらからの指

示がなくても、自分たちで工夫しながらスクールプロジェクトを進めていけるようになってきている。例えば、考えをまとめたい時には思考ツールを活用し、内容を整理していく。個人で考えるよりも、複数で意見を出し合った方が、様々な視点や考え方が得られることを経験から理解している。分からないことや知りたいことがあれば、外部機関へ自分たちでアポをとり、足を運ぶ。自分たちの実践をどんな表現にしたら、より伝わりやすいのかをプレゼンテーションに生かすことができるようになってきた。

今回の取組を振り返り、校内外の様々な刺激やアプローチが、生徒の資質・能力（コンピテンシー）の育成につながっていることを、改めて認識することができた。コンピテンシーは数値化されにくい力であるが、例えばスクールプロジェクトという切り口では、生徒に実感を伴いやすいと考える。今後もカリキュラムマネジメントの視点を持ちながら、生徒の成長につながる機会の提供や取組の充実に努めたい。

### 【注】

図1 全国高等学校家庭クラブ連盟パンフレット『学校家庭クラブ活動 理解を深めるために（平成29年度版）』より

図5、6、8、14、17、19、表12 和田雅子先生作成（PMAJセミナー2020資料／高大連携資料（2018～2019）より

### 【引用・参考文献、資料】

藤女子大学家庭科・家政教育研究会（2019）

『家庭科・家政教育研究 第14号 プロジェクトマネジメントを生かした高大連携の取組み～藤女子大学出張講義と北海道札幌北高等学校家庭クラブの活動～』

藤女子大学家庭科・家政教育研究会（2020）

『家庭科・家政教育研究 第15号 日本プロジェクトマネジメント協会北海道セミナーを終えて』北海道PMセミナー2020 資料

『参加者アンケート』

全国高等学校家庭クラブ連盟

(<https://kateikurabu-renmei.jp/>)

近藤克則（2018）

『研究の育て方 ゴールとプロセスの「見える化」』

西村克己（2019）

『これ以上やさしく書けない プロジェクトマネジメントのトリセツ』

阿部広太郎（2020）

『コピーライターじゃなくても知っておきたい心をつかむ超言葉術』

# 「生徒の特性などに対応した教育内容・指導方法の工夫・改善について」

～カリキュラムマネジメントについて～

北海道札幌琴似工業高等学校 全日制課程 情報技術科 藤村 洋之

## 1 はじめに

本校は昭和38年(1963年)4月に開校し、令和3年で創立58年となります。また、情報技術科については次のように変遷しています。

昭和45年4月 新設学科「電子科」1期生入学  
 平成8年8月 「第二級陸上特殊無線技士」国家資格試験免除認定校となる  
 9年11月 「情報技術科」へ学科転換決定  
 10年4月 情報技術科第一期生入学

この研究の観点は、主体的・対話的で、思考力・判断力・表現力を育成するための教育活動を、学校全体のPDCAサイクルに取り込み、どのようにカリキュラムマネジメントしていくかです。具体的な実践は下記のとおりです。

- (1) 授業アンケートによる授業改善。
- (2) 単元配列表による、学科内の授業計画と教科横断的な指導の工夫。
- (3) コロナ禍におけるインターンシップ・出前授業・出張型企業説明会をとおして、学習に対する意欲と関心を高める。
- (4) 「観点別評価」に対する理解と対応。

上記の実践を通して、教育の目的や目標を達成し「目指す生徒像」に近づけるよう教育活動をどのように改善するか検討します。

## 2 学科教育目標

- (1) 情報技術に関する基礎的・基本的な知識と技術を習得させ、新しい技術に柔軟に対応し貢献できる能力を育てる。
- (2) コンピュータ、エレクトロクス、通信分野の設計・製作・操作・保守などに従事できる能力を育てる。
- (3) 情報通信技術者としての職業観と環境に配慮する広い視野を持ち、工業技術の諸問題を主体的・合理的に解決する態度を育てる。

## 3 卒業生進路状況（令和2年度情報技術科卒業）

就職者 39名 その他 1名  
 進学者 31名

## 4 教育課程表（令和4年度入学生）

教科	科目	1年	2年	3年	合計
国語	現代の国語	2			2
	言語文化	2			2
	論理国語		2	2	4
地歴	地理総合	2			2
	歴史総合			3	3
公民	公 共		2		2
数学	数 学 I	4			4
	数 学 II		4		4
	数 学 A			2	2
理科	物理基礎		2		2
	化学基礎	2			2
	生物基礎			2	2
保体	体 育	2	2	3	7
	保 健	1	1		2
芸術	音 楽 I	2			2
外国	英語コミュニケーション I	3			3
	英語コミュニケーション II		3	2	5
家庭	家庭基礎		2		2
工業	工業技術基礎	3			3
	課題研究			3	3
	実 習		3	3	6
	工業情報数理	3			3
	電基回路	3	2		5
	電子回路		3		3
	通信技術			3	3
	ハードウェア技術		3		3
ソフトウェア技術			3	3	
コンピュータシステム技術			3	3	
計		29	29	29	87

## 5 「カリキュラムマネジメント」の実現

学習指導要領に従い、次の6点にわたって教育活動

を改善します。

(1) 「何ができるようになるか」

学校教育目標で、「どのような人間を育てるか」があり、具体的な目標に重点目標があります。さらに具体的に「目指す生徒像」を教育課程委員会に提案し、職員会議で決定することにより、カリキュラムマネジメントの指標になればと考えます。

[決定した「目指す生徒像」]

- ①未来の社会をつくる技術をもつ生徒
- ②知識やスキル、学んだことを使いこなせる生徒
- ③身につけた知識・技術を社会に貢献できる生徒

(2) 「何を学ぶか」

教育課程表（令和4年度入学生）の変更点は下記の通りです。

①選択科目廃止

選択科目の廃止は下記の2点が大きな理由です。

- a 進路希望に応じた選択科目となっていない。
  - ・各学科、教科での目標はあるが全体のものになっていない。
  - ・選択群が一つで生徒の多様な進路希望に応えるのが難しい。
- b 一部の科目に履修希望が集まり、調整が難しい。

②平成30年度入学生と比較しての単位数増減。

1年 英語1単位増、工業1単位減

2年 数学1単位増、社会1単位減

英語1単位増、家庭1単位減

3年 工業1単位増、社会1単位増、

選択2単位廃止。

a 普通科の単位増単位について

大学へ進学して困らないよう英語と数学の単位数を増やす。

b 3年情報技術科専門科目1単位増について

「電子回路」 3学年2単位廃止

「通信技術」 3学年1単位減

「ハードウェア技術」 3学年2単位廃止

「コンピュータシステム技術」 3学年3単位増

「ソフトウェア技術」 3学年3単位増

プログラミング教育が大切になってくるため、選択科目だったソフトウェア技術を必修とします。

③単元配列表（資料1）を作成し、科内での授業改善や教科等横断的な視点で教育内容を考える材料とします。

a 単元配列表作成の経緯

2019年度：教務で作成。

2020年度：各教科・科目でシラバス、年間指導計画を作成後、各学科、各学年ごとに入力し完成。

2021年度：入力しやすいように工夫しています。

b 単元配列表の利用

現在は利用しきれていませんが、今後、この表をもとに専門教科での年間指導計画の工夫（特にコンピュータシステム技術、ソフトウェア技術、通信技術、ハードウェア技術などのコンピュータ関係の科目）が必要なことはもちろん。普通教科との横断的な指導に役立てていく必要があります。

(3) 「どのように学ぶか」

インターンシップ、出前授業、出張型企業説明会など、本校職員以外からの指導を通して、生徒のモチベーションを高め、学ぶ姿勢を確立する。

①令和2年度1・2学年インターンシップ

a 目的

- ・社会人としてのマナー、礼儀作法、コミュニケーション力を実践する。
- ・仕事をすることの楽しさ、厳しさを体験し、働くことの理解を深める。
- ・進路意識の向上を図り、進路実現に向けて自分自身を見つめなおす。

b 体験先

- ・1年 (株)ノーザンコムテック、不二建設(株)、(株)森重機工業、北海航測(株)、菱照エンジニアリング(株)、(株)児玉興健、(株)大石建設、寿機械(株)、石上車輛(株)、北海道ホンダ販売(株)、(有)アスク・スポーツ、(株)花井組、日測技研(株)、西田労務経営事務所、(株)エフビーエス北海道ニチレキ工事(株)、北海道エネルギー(株)、(株)トーホーエンジニアリング、TSUCHIYA(株)北海道支店、医療法人社団デンタルクリニック大通、(株)エル技術コンサルタント 以上20社
- ・2年 アクティブ(株)、(株)LIC、アイ・ティ・エス(株)、(株)トータルデザインサービス、(株)フィーリスト、北第百通信電気(株)、札幌制御システム(株)、(株)メディアマジック神田通信機(株)、ビットスター(株)、菱照エンジニアリング(株)、(株)ノーザンコムテック 以上11社

c 日程 1年令和2年10月20日～21日

2年令和3年2月1日～2日

- d 通 勤 直接出勤、終了後現地解散
- e 持ち物 誓約書・健康チェックシート、就業体験アンケートなど
- f 保 険 インターンシップ賠償保険加入、怪我等は、日本スポーツ振興センターにて対応



(写真は札幌制御システム㈱のインターンシップ)

## ②令和2年度 情報専門学校出前授業

- a 目 的  
高専連携により、AIの企業動向やAIプログラミングの体験を行うことによって、生徒の専門意欲を高め、職業観の育成や就職・進学の意識付けの一助とする。
- b 講 師 北海道情報専門学校 2名
- c 日 程 令和2年12月16日2時間 3年  
令和2年12月17日2時間 2年
- d 内 容 AI講話・AIプログラミング体験



(写真は情報専門学校出前授業の様子)

## ③令和3年度 出張型企業説明会 in 琴似工業高校

- a 目 的  
複数の企業の採用担当者が本校へ来校いただき、学内で企業の魅力や、やりがい等を紹介する生徒向けの説明会で、コロナ禍で大規模な説明会の開催が難しい中、地元企業への就職を希望する生徒に対し、企業との出会い

の場を創出する。

- b 参加企業  
北札幌電設㈱、セコム㈱北海道本部、橋製氷㈱、㈱テクノスアラゼン、北海道エネルギー㈱、㈱真紀設備設計事務所、セーフティガード警備㈱

以上7社



(写真は出張型企業説明会の様子)

- c 日 程 令和3年6月29日
- d 参加生徒  
1校時 情報技術科3年希望者 15名  
2校時 情報技術科2年A組全員 38名  
3校時 情報技術科2年B組全員 36名

(4)「子ども一人一人の発達をどのように支援するか」授業アンケート(資料2)により授業改善に役立てる。

### ①授業アンケート(資料2)の経緯

- a 令和元年度 全学科3学年 3学期実施
- b 令和2年度 全学科全学年 3学期実施  
情報技術科については1、2年  
全学期実施
- c 令和3年度 情報技術科1、2年全学期実施  
予定

### ②内 容

- a 記述しやすいようにする。
  - ・スマホ入力(マイクロソフトフォームズ使用、スマホで入力できない生徒は紙に記述)
  - ・結果は学期ごとに比較できるよう記載する。
- b アンケート結果について
  - ・担任には、全科目の結果を報告する。
  - ・各教科担当者には担当クラスのみ配付する。
  - ・後からまとめやすいようにする。  
(1科目1枚でアンケートを作成するなど。)

(5) 「何が身についたか」

観点別評価により、学習評価を充実させ、学習意欲の向上をはかる。

①「実習」における「観点別評価」について

専門科目「実習」の「観点別評価」に対する理解と対応が十分に進んでいるとはいえない状況にあります。

本校情報技術科のレポート指導は、その内容を期日までに手書きでまとめ、担当職員から講評をもらうことにより、学習内容を定着させることを第一の目標として指導してきた経緯があります。評定は、態度・技術・レポート内容・レポート提出状況・理解度など総合的に判断し評価しますが、1つでもレポート未完了のものがある場合は、評定「1」となりレポート提出の重要性を指導してきました。過去に、レポート未完了のため評定「1」が付き原級留置となった生徒がいます。

近年は、担任の手厚い指導もあり怠学によりレポート未完了の生徒はいなくなりましたが、学年末に不登校となり履修は完了しているがレポート未完了のため、評定「1」で原級留置となる生徒をどのように評価し、指導するかが課題となっています。

②評価のポイント

a 履修について

(過去) 全ての実習テーマを行わなければ、修得を認めないため評定「1」とする。

(改善) 全ての実習テーマを履修させるが、欠席時数が20%を超えないときは、そのことにより評定「1」とはしない。

b 修得について

(過去) 全てレポートを完了していないと評定「1」となる。

(改善) レポートを全て完了していなければ、評定「1」だが、数個の場合は評定「1」とはしない。

c 3観点について (資料3-1と資料3-2)

3つの観点で評価し、それぞれ重ならないこと。

○主体的に学習に取り組む態度

○知識・技能

○思考力・判断力・表現力

d レポートの提出期限と講評の重みを高く評価する。(資料3-3と資料3-4)

e レシートの作成 (資料3-5)

3観点の点数を表にしたものです。

(6) 「実現するために何が必要か」

単元配列表・授業アンケート・観点別評価・インターンシップ・出前授業・出張型企业説明会とその他今まで行ってきた行事、レポート指導、資格取得指導を行いながら、目指す生徒像へ向けてのカリキュラムマネジメントが少しずつイメージできた気がします。

【今後必要なことを記載します】

①コンピュータの科目を多くしたので、それぞれ別に考えていた指導計画を連携する。

「工業情報数理」 1年

「ハードウエア技術」 2年

「通信技術」 3年

「ソフトウェア技術」 3年

「コンピュータシステム技術」 3年

②単元配列表を利用して普通科との横断的な指導が必要であるかを検討していく。

③授業アンケートにより何を改善できてきたのかを研修する。

④各行事の時期と内容の検討

⑤観点別評価のスムーズな利用

6 おわりに

日常の教育実践から課題を把握し、解決することは日々の忙しさを考えると難しさを感じます。

特に観点別評価は、教職員全体でその理解をし、対応していくことが大切ですが、全体で研修する時間を取るのが難しいため、学科の中で、実習と座学を同じものさしで評価できるよう研修し、最終的に普通科目と同じものさしで評価できるよう準備が必要です。

そのような展開ができる実践的指導力を身につけることが今後の課題です。

【資料】

資料1 単元配列表 (2019) 情報技術科1年

資料2 授業アンケート

資料3-1 評価表

資料3-2 実習確認試験

資料3-3 評価の重み

資料3-4 評価結果

資料3-5 レシート

【資料1 単元配列表 (2019) 情報技術科1年】

北海道札幌琴似工業高等学校 令和元年度 単元配列表 (1学年 情報技術科)												
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
行事	対面式 定期健康診断	生徒総会・社行会	芸術鑑賞	琴工祭	ロボット競技大会 北科大 高大連携	生徒会役員選挙	学校見学会 秋季体育文化大会	2年見学旅行	ジャパンマイコン カーラー北海道	スキー授業 1年宿泊研修	スキー授業	進級認定会議 春季休文
進路	進路指導委員会① 進路保護者説明会	進路指導委員会②	進路指導委員会③	求人受付 進路指導委員会④	進路指導委員会⑤ 就職応募書類完成	進路指導委員会⑥ 就職試験解禁	進路指導委員会⑦					
考査	基礎力診断テスト	数学単元テスト	1学期末テスト		学力テスト		2学期中間考査	2学期期末考査		学力テスト	学年末考査	学力向上 テスト
資格試験	基本情報技術者	危険物試験① 工事担任者①	第二種電気工事士 (筆記)	第二種電気工事士 (技能)			第二種電気工事士 第一種電気工事士 (筆記)	工事担任者② 危険物取扱者③	第二種電気工事士 (技能)	危険物取扱者④	消防設備士試験 特殊無線技士 (1陸)	
LHR	交通安全講話 ケイタイ安全教室	学校祭DVD視聴	学校祭担当者決め	学校祭準備	秋季体育大会 選手選出	後期IR役員選出			宿泊研修に向けて	宿泊研修	春季休文選手選出	新年度に向 けて
科の取 組み	卒業生講話					インターンシップ 出前講座			課題研究発表見学	大学出前授業	進路 ガイダンス	
国語総合 (4)	「世界は一つのクラスルーム」「ものづくり」「羅生門」 歴史的仮名遣い 文語動詞の活用 「見のそら寝」(宇治拾遺物語) 他				「ブックトーク」「水の東西」訓詁のきまり・格言 「漁夫の利」「虎の威を借る狐」「コインは円形か」 「万葉集」「古今和歌集」「新古今和歌集」				「旅する本」 「春暁」「送元二使安西」「春望」 「日本の自然と生活」 「おくのほそ道」			
地理A (2)	世界地図の特徴を知ろう・国家の領域と領土問題など 国家をこえた結びつき・人「もの」資本で結びつく世界など さまざまな環境のなかで暮らす人々など				世界的視野から見た気候・生活文化を支える産業の地域性など 東南アジア・ヨーロッパ・ロシアと周辺諸国の暮らしを学ぶなど 人口問題・食糧問題・資源エネルギー・環境問題 地球的課題への取組と国際協力				地図をもって生活しようなど 日本の自然と生活 自然災害に備えた暮らし			
数学I (4)	式の計算(乗法公式・因数分解など) 実数(絶対値・平方根など) 1次不等式・2次関数				2次方程式と2次不等式 三角比 三角形への応用(正弦定理・余弦定理など)				三角比への応用 (平均値・中央値・偏差・分散・ 標準偏差・相関表など)			
化学基礎 (2)	化学と人間生活 物質の構成 物質の構成粒子				粒子の結合 物質と化学反応式 酸と塩基の反応				酸化還元反応			
体育 (3)	体力づくり運動 器械運動(マット運動) 武道(柔道)				体育理論 球技(バレーボール ハードル走 サッカー)				野外活動(スキー) 体育理論			
保健 (1)	(私たちの健康のすがた 健康のとらえ方 健康と意思決定・行動選択 健康に関する健康づくり 生活習慣病とその予防 食事と健康 運動と健康 休養・睡眠と健康)				(喫煙と健康 飲酒と健康 薬物乱用と健康 現代の感染症 感染症の予防 性感染症・エイズとその予防 欲求と適応機制 心身の相関とストレス ストレスへの対処 心の健康と自己実現 交通事故の現状と原因 交通社会における運転者の資質と責任 安全な交通社会づくり)				(応急手当の意義とその基本 心肺蘇生法 日常的な応急手当)			
音楽I (2)	校歌練習・暗唱テスト・歌唱 楽典(アルトリコーダーの扱い方・演奏方法 曲練習) 鍵盤楽器・演習 演奏技術の習得				楽典・リコーダー合奏に向けてグループ演奏発表・評価 オカリナの作成・演奏 日本の芸能の歴史と和楽器の扱い方・演奏曲練習				西洋音楽史について 各時代背景について 作曲家について 人物像について 代表曲について 鑑賞			
コミュニ ケーション 英語I (3)	基礎力診断(S+V, S+V+C, S+V+O 時制 S+V+O+0, S+V+O+C 不定詞) 基本事項の確認(3人称単数現在 現在形の疑問文 否定文・命令の表現 人称代名詞 不定詞代名詞接続詞の基本 過去形 未来 不定詞の3用法 学力的診断(完了形 比較表現)				学力的診断: 関係代名詞(主格・目的格・所有格・wh a t) It is ~ (for...)+to不定詞 It is ~that... S+V+O(=現在分詞 原形不定詞) 関係副詞(when, why, how) 分詞構文の働きと意味 分詞構文の否定 現在完了進行形 現在完了形の受け身				仮定法過去 仮定法過去完了 wishを用いた 願望を表す表現 as if+仮定法過去 仮定法の慣用表現 部分否定/二重否定など			
工業基礎 (3)	実習ガイダンス 抵抗の直並列回路・オームの法則・C言語・半田付けの練習 直列抵抗器の実験・ホイーストブリッジ・C言語・製作実習				分路器の実験・キルヒホッフの法則・C言語・製作実習 情報技術検定演習				制御実習			
情報技術 基礎 (3)	産業社会と情報技術 コンピュータの基礎 コンピュータシステム				プログラミングの基礎 コンピュータ制御の基礎				情報技術の活用			
電気基礎 (3)	直流回路 (電気回路の電流と電圧・電気回路の計算・抵抗の性質・消費 電力と発生熱量・電流の化学作用と電池)				電流と磁気 (磁石とクローンの法則・電流による磁界・磁界中の電流に働く力)				静電気 (電荷と電界・コンデンサ)			

【資料2 授業アンケート】

◎情報技術基礎

A 授業の印象(雰囲気)はどうでしたか。(複数回答可) 該当する番号に○をつけてください

- |              |            |          |
|--------------|------------|----------|
| 1 たのしい       | 2 とてもよく分かる | 3 集中できる  |
| 4 テストが大変     | 5 興味がわく    | 6 質問しやすい |
| 7 説明がよく分からない | 8 難しすぎる    | 9 眠たくなる  |
| 10 質問がしにくい   | 11 落ち着きない  | 12 うるさい  |
| 13 時間が足りない   | 14 もっとやりたい |          |
| 14 その他       |            |          |

I 授業進度(スピード)はどうですか。(1つ選んでください)

- |            |           |         |
|------------|-----------|---------|
| 1 ちょうどよい   | 2 もう少し早く  | 3 もっと早く |
| 4 もう少しゆっくり | 5 もっとゆっくり |         |

ウ あなたが授業に臨む姿勢はどうでしたか。(1つ選んでください)

- |              |              |
|--------------|--------------|
| 1 意欲的に参加している | 2 真面目に参加している |
| 3 あまり集中していない | 4 意欲が持てない    |

その理由

E 授業の中で将来の自分に役立ちそうだったことや授業を改善してもらいたいところを書いてください。

スマホ入力画面

**情報技術科1年A組アンケート**

これは授業改善のために利用するものです。この記載により成績に影響するようないざいありません。また、必ず教員担任に報告しますので、目方で強いている事を正直に書いてください。よろしくお願ひします。 ...

\* 必須

国語総合(藤原先生)の授業について答えて下さい。

5. 授業の印象(雰囲気)はどうでしたか。(複数回答可) \*

たのしい

とてもよくわかる

集中できる

テストが大変

興味がわく

質問しにくい

【資料3-1 評価表】

令和2年度 第2ローテーション 電子製図2 1学年

評価表		テーマ	電子製図2	班	FALSE	FALSE	FALSE	FALSE	FALSE
情報技術科1年 組		氏名							
主 体 的 に 学 習 に 取 り 組 む 態 度	1 基本的心構え (3つ〇はA3点 2つ〇はB2点 1つ〇はC1点 〇がない場合D0点)								
	①事前の持ち物チェックをし、忘れ物がない。								
	②実習服を正しく着用している。								
	③積極的に実習に取組み、片付け清掃もきっちりやる								
2 レポート(提出期限) (A~D×3)									
①実習2日後の朝に提出				A					
②実習終了後1週間以内に提出				B					
③②の後に提出				C					
④提出しない				D					

思 考 力 ・ 判 断 力 ・ 表 現 力	3 実験実習 (4つ〇はA3点 3つ〇はB2点 2つ以下〇はC1点)								
	①協力して理解しようとしている								
	②JIS規格など細かな約束事がある事を理解している。								
	③基本的なCADソフトの使い方を理解している。								
	④簡単な図面を描く事が出来る。								
	4 レポート(講評期限)								
	①実習のあった週に完了				A				
	②実習のあった日から2週間以内に完了				B				
	③②の後に完了				C				
	④完了しない				D				
	5 レポート(内容)								
	①丁寧に見やすく記載している。				A				
	②もれなく記載されている。				B				
	③未完成提出				C				
	④未提出				D				
	6 レポート(講評内容)								
①質問内容を理解し的確に応答できる。				A					
②何回か講評を受けに来ることにより理解した。				B					
③先生に教えてもらいながら講評できた。				C					
④講評が終わらなかった。				D					

知 識 お よ び 技 能	5 テスト(各テーマ25点満点×4テーマ=100点)								
	① 24点以上 A (10点)			点 数					
	② 20点以上 B (8点)								
	③ 10点以上 C (3点)				A				
④ 1点以外 D (1点)			B C D						

【資料3-2 実習確認試験】

【直列抵抗器(倍率器)の実験 実習確認テスト】

情報技術科1年 組 番 氏名 \_\_\_\_\_

1 次の文の ( ) に適切な語句を入れなさい。(各2点)

[実験の目的]

電圧計(可動コイル形計器)の内部(①)の測定法を習得し、さらに直列抵抗器(倍率器)の働きを理解し、電圧計の測定範囲を拡大する方法を実験により確認する。

[直列抵抗器とは]

JISC 1102(直動式指示電気計器)は、(②)年に大幅な改訂が行われた。電圧計の測定範囲を拡大するために計器に直列に入れる抵抗のことを(③)という用語を用いていたが、この改訂で(④)に変更された。

この節の実験に使用されている直流電圧計の構造の名称は、以前は可動コイル形計器であったが、永久磁石可動コイル形計器に変更された。また、直流を表す一記号は、(⑤)記号に変更された。

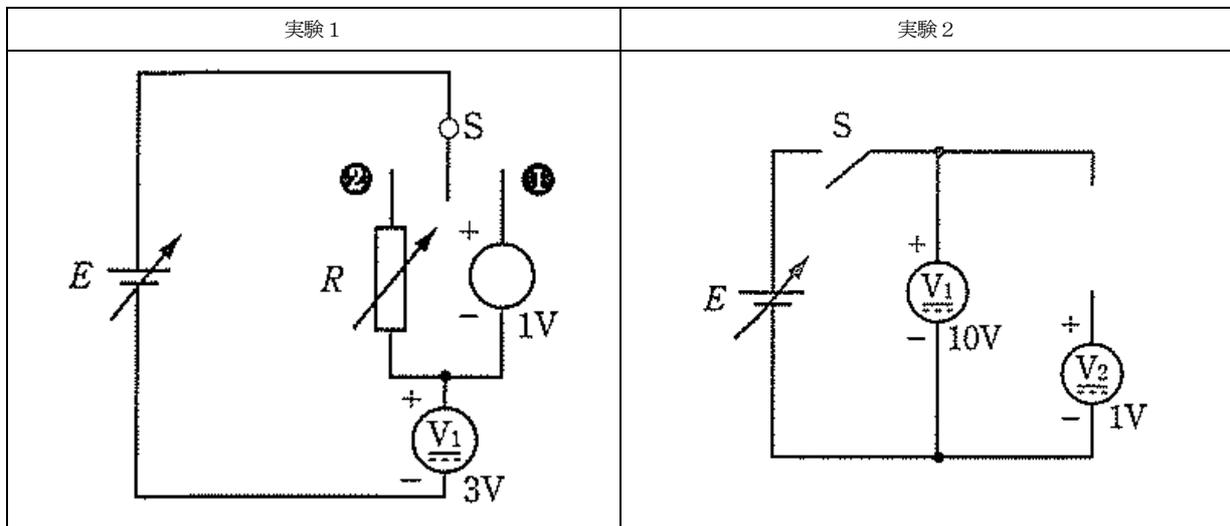
2 ①~④は何を表しているか。(各2点)

$$\textcircled{1} \quad \varepsilon_0' = \frac{V_M - V_T}{V_F} \times 100 \quad \textcircled{2} \quad m = \frac{V}{V_v} = \frac{r_v + R_m}{r_v} \quad \textcircled{4} \quad R_m = r_v(m - 1)$$

(③)

(①) ( ) (②) ( ) (③) ( ) (④) ( )

3 次の回路図を完成させなさい。(各2点)



4 5V、内部抵抗10kΩの電圧計がある。これを300V用にするには、いくらの直列抵抗器を接続すればよいか求めなさい。(3点)

【資料3-3 評価の重み】

令和2年度1学年

観 点	観点項目	評 価	得 点		合 計
			オリエン テーショ ン	ローテー ション	
主体的に 学習に取り 組む態 度	基本的心 構え	A	10	10	40点 満点
		B	5	5	
		C	2	2	
		D	1	1	
	レポート提 出期限	A	30	30	
		B	15	15	
		C	6	6	
		D	1	1	
思考力 判断力 表現力	実習実験 内容	A	10	10	ローテ ーショ ン 50点 満点 オリエ ンテー ション 60点 満点
		B	5	5	
		C	2	2	
		D	1	1	
	レポート講 評期限	A	20	20	
		B	10	10	
		C	4	4	
		D	1	1	
	レポート内 容	A	20	10	
		B	10	5	
		C	4	2	
		D	1	1	
	レポート講 評内容	A	10	10	
		B	5	5	
		C	2	2	
		D	1	1	
知識及び 技能	テスト	A	なし	10	10点 満点
		B		8	
		C		3	
		D		1	

令和3年度第2学年

観 点	観点項目	評 価	得点	合計
			ローテーション	
主体的に 学習に取り 組む態 度	基本的心 構え	A	10	40点 満点
		B	5	
		C	2	
		D	1	
	レポート提 出期限	A	30	
		B	15	
		C	6	
		D	1	
思考力 判断力 表現力	実習実験 内容	A	10	50点 満点
		B	5	
		C	2	
		D	1	
	レポート講 評期限	A	20	
		B	10	
		C	4	
		D	1	
	レポート内 容	A	20	
		B	10	
		C	4	
		D	1	
知識及び 技能	レポート講 評内容	A	10	10点 満点
		B	8	
		C	3	
		D	1	

- ・ 左は現在2年生が1年生だった時で、右は現在の2年生の評価の重みです。
- ・ 大きな違いは紙テストを行って、知識及び技能を評価した1年時とそれをしなかった2年時の評価です。

【資料3-4 評価結果】

令和2年度1学年

令和3年度2学年1学期

10段階評価		A組人数	B組人数
10	95点以上	4	3
9	90点以上 95点未満	17	14
8	85点以上 90点未満	11	13
7	80点以上 85点未満	3	3
6	70点以上 80点未満	1	2
5	55点以上 70点未満	2	1
4	50点以上 55点未満	1	
3	47点以上 50点未満		
2	30点以上 47点未満		
1	30点未満		
合計		39名	36名
10段階評価平均		8.26	8.28
5段階評定平均		4.41	4.39

10段階評価		A組人数	B組人数
10	95点以上	1	5
9	90点以上 95点未満	28	22
8	85点以上 90点未満	5	3
7	80点以上 85点未満	4	5
6	70点以上 80点未満		
5	55点以上 70点未満		
4	50点以上 55点未満		
3	47点以上 50点未満		1
2	30点以上 47点未満		
1	30点未満		
合計		38名	36名
10段階評価平均		8.68	8.61

評価入力画面

The screenshot shows an Excel spreadsheet titled '観点別評価1\_AB組.xlsx'. The main data area is a grid with columns for student IDs (A-BO) and rows for classes (1-6). Each cell contains numerical scores for various evaluation criteria. On the right side, there is a summary table with columns for '評価' (Evaluation), '評定' (Rating), and '数' (Count). The summary table shows a total count of 36 students and an average rating of 5.96.

3観 点	主体的に学習に取り組む態度				思考・判断・表現				知識・技能				総合 総合的な観 点		
	学びの見直しをもって粘り強く取組、自らの学習活動を振り返って次につなげるとい う、主体的な学びの課程の実現に向けて いるかどうかという観点				理解して実験実習を行っているか。レ ポート提出期限は守れるか。考察を通し て理解を深めることができるかという観 点				実験実習で使った用語や内容を理解し、 表現できるかという観点						
	1学期	2学期	3学期	学年	1学期	2学期	3学期	学年	1学期	2学期	3学期	学年			
1	40点満点												1学年		
2	(2学期インターンシップにより50点満点)												平均 評定		
1班	38.8	49.3	35.0	41.0	43.8	45.0	42.3	43.7	3.3	1.0	8.0	4.1	85.4	4	イン ター ンシ ップ の評 価が 高い
3	38.8	47.8	40.0	42.2	46.3	50.0	41.3	45.9	2.0	1.5	8.0	3.8	90.5	5	イン ター ンシ ップ の評 価が 高い
4	38.8	49.3	32.0	40.0	43.5	48.3	37.7	43.2	5.0	0.3	8.0	4.4	86.5	4	イン ター ンシ ップ の評 価が 高い
5															
6	36.3	44.6	32.3	37.7	39.8	31.7	41.7	37.7	2.5	0.5	8.0	3.7	80.2	4	主 体的 に学 習に 取り組 む態 度が 高い
7	40.0	50.0	40.0	43.3	41.8	46.7	48.3	45.6	2.5	1.5	9.0	4.3	93.0	5	レ ポ ー トと 取り 組む 姿勢 の努 力が 必要
8	40.0	49.2	35.0	41.4	34.0	25.3	38.7	32.7	5.0	0.5	9.0	4.8	77.2	3	イン ター ンシ ップ の評 価が 高い
9	36.3	50.0	27.3	37.9	43.0	44.0	34.7	40.6	3.0	1.5	4.0	2.8	84.6	4	主 体的 に学 習に 取り組 む態 度が 高い
10	40.0	47.5	35.0	40.8	44.8	40.0	43.3	42.7	3.8	0.8	9.0	4.5	86.7	4	思 考判 断表 現力 が高 い
11	38.8	50.0	40.0	42.9	43.8	50.0	48.3	47.4	4.3	1.5	9.0	4.9	91.7	5	主 体的 に学 習に 取り組 む態 度が 高い
12	37.5	47.5	35.0	40.0	38.5	41.7	50.0	43.4	3.0	1.0	8.0	4.0	88.1	4	主 体的 に学 習に 取り組 む態 度が 高い
13	38.8	50.0	40.0	42.9	44.0	48.3	50.0	47.4	3.3	1.0	9.0	4.4	91.3	5	主 体的 に学 習に 取り組 む態 度が 高い
14	38.8	48.3	40.0	42.4	48.0	50.0	50.0	48.3	2.5	2.0	8.0	4.2	95.1	5	主 体的 に学 習に 取り組 む態 度が 高い
15	40.0	50.0	40.0	43.3	44.8	50.0	50.0	48.3	3.8	2.5	8.0	4.8	95.1	5	主 体的 に学 習に 取り組 む態 度が 高い
16															
17	37.5	45.3	38.3	40.4	42.5	41.3	50.0	44.6	2.0	1.0	9.0	4.0	91.0	5	思 考判 断表 現力 が高 い
18	40.0	49.3	40.0	43.1	50.0	50.0	50.0	50.0	4.3	4.0	9.0	5.8	95.8	5	知 識技 能が 高い
19	40.0	50.0	40.0	43.3	42.5	48.3	50.0	46.9	1.5	1.0	9.0	3.8	91.9	5	主 体的 に学 習に 取り組 む態 度が 高い
20	38.8	48.5	40.0	42.4	42.5	50.0	48.3	46.9	2.5	2.8	9.0	4.8	92.8	5	主 体的 に学 習に 取り組 む態 度が 高い
21	40.0	48.5	40.0	42.8	37.8	45.0	45.0	42.6	2.5	0.3	9.0	3.9	90.2	5	知 識技 能が 高い
22	34.0	50.0	40.0	41.3	38.3	39.7	44.0	40.6	2.5	1.0	8.0	3.8	89.0	4	主 体的 に学 習に 取り組 む態 度が 高い
23	32.8	48.5	40.0	40.4	38.3	46.7	43.3	42.8	7.3	3.3	8.0	6.2	89.8	4	知 識技 能が 高い
24	38.8	49.3	40.0	42.7	43.0	45.0	44.0	44.0	2.5	1.0	9.0	4.2	89.6	4	主 体的 に学 習に 取り組 む態 度が 高い
25	40.0	49.3	40.0	43.1	44.3	48.3	46.7	46.4	4.3	1.5	9.0	4.9	93.7	5	主 体的 に学 習に 取り組 む態 度が 高い
26	32.8	50.0	40.0	40.9	34.3	45.7	44.0	41.3	2.5	2.8	9.0	4.8	86.8	4	主 体的 に学 習に 取り組 む態 度が 高い
27	32.8	49.2	40.0	40.6	37.8	44.0	43.0	41.6	2.5	1.5	9.0	4.3	87.7	4	知 識技 能が 高い
28	38.8	50.0	40.0	42.9	39.3	45.0	45.0	43.1	2.5	1.5	9.0	4.3	91.1	5	主 体的 に学 習に 取り組 む態 度が 高い
29	29.3	47.7	33.3	36.8	31.5	34.7	41.3	35.8	2.0	0.3	7.0	3.1	81.3	4	主 体的 に学 習に 取り組 む態 度が 高い
30	40.0	50.0	40.0	43.3	46.3	48.3	45.0	46.5	6.8	4.0	9.0	6.6	93.6	5	知 識技 能が 高い
31	29.0	41.0	38.3	36.1	33.3	33.3	46.7	37.8	2.0	0.3	10.0	4.1	77.8	3	1学 期良 くな かつ たが 後半 です ます ず
32															
7班	32.8	40.3	40.0	37.7	36.8	36.0	46.7	38.8	4.3	1.5	10.0	5.8	86.2	4	レ ポ ー ト
34	16.8	44.7	33.3	31.6	22.8	16.3	48.3	29.1	3.0	1.5	10.0	4.8	62.7	3	
35															
36	40.0	48.5	40.0	42.8	43.8	38.3	46.7	42.9	3.8	0.5	8.0	4.1	88.4	4	主 体的 に学 習に 取り組 む態 度が 高い
37	38.8	46.0	40.0	41.6	47.5	39.0	46.7	44.4	2.0	1.0	9.0	4.0	90.4	5	
38	40.0	44.5	40.0	41.5	45.5	41.7	46.7	44.6	3.8	1.0	9.0	4.6	91.0	5	直 並列 回路 の抵 抗
39	37.5	37.0	40.0	38.2	48.8	43.3	48.3	46.8	2.5	2.8	9.0	4.8	90.5	5	C言 語
40	40.0	40.2	40.0	40.1	44.3	38.3	48.3	43.6	3.8	1.0	9.0	4.6	89.6	4	C言 語
41	37.5	46.8	40.0	41.4	43.0	39.0	48.3	43.4	3.3	1.0	9.0	4.4	86.1	4	C言 語

# 本校におけるマーケティング分野の取り組み

～地域の活性化を目指して～

北海道士別翔雲高等学校 佐々木 惇 二

## I はじめに

令和2年度、令和3年度の2年間商業部会「教科研究助成」の指定を受け、本校総合ビジネス科では、マーケティング分野に関連した科目を中心に研究することを決定した。

このたび、研究紀要へ執筆させていただく貴重な機会を与えられたことから、総合ビジネス科の現在の取り組みと共に、この2年間の取り組みについてまとめることとする。

研究指定期間は、コロナウイルスが世界的な流行となり、当初予定していた内容とは大幅な変更を余儀なくされた。また、授業や行事、部活動等の学校生活の形態の変化に加え、マスクの着用、行動制限、タブレットの配布、オンライン授業など、取り巻く環境が大きく変わり「新しい生活様式」に移行していく状況であった。今までできていたことができなくなる一方で、GIGAスクール構想の加速や学校生活を見直すことで新たに挑戦できることが増えたと感じている。時代の過渡期だからこそ、生徒の「主体的対話的な深い学び」を実践できるのではないだろうかと考え、生徒や外部講師、学科教員と何ができるか話し合い、工夫・改善をしながら進めていくことができた。

当学科としても、この研究指定を機に授業内容を見直すこととし、新しいチャレンジを行える環境に変化している。新学習指導要領に準じながら、本校総合ビジネス科の特色を確立していきたい。

## II 学校概要

本校は、昭和16年開校の北海道士別実科高等女子校の流れを汲む北海道士別高等学校と、昭和34年開校の北海道士別商業高等学校という伝統ある2校を基盤に、地域の大きな期待を担い、平成19年に開校した全日制普通科・総合ビジネス科の学校である。現在は普通科3間口、総合ビジネス科1間口計349名が在籍している。

校訓「一步前へ」のように、生徒が学習や部活動、奉仕活動などの諸活動に存分に向き合い、自分自身を前進させ進路活動で成果を出せるよう、「家庭や地域から信頼される学校づくりを目指し、生徒一人ひとりの限りない可能性を開花させる質の高い教育活動を実

践する」ことを念頭に、時代や情勢に対応した教育に取り組んでいる。

## III 総合ビジネス科

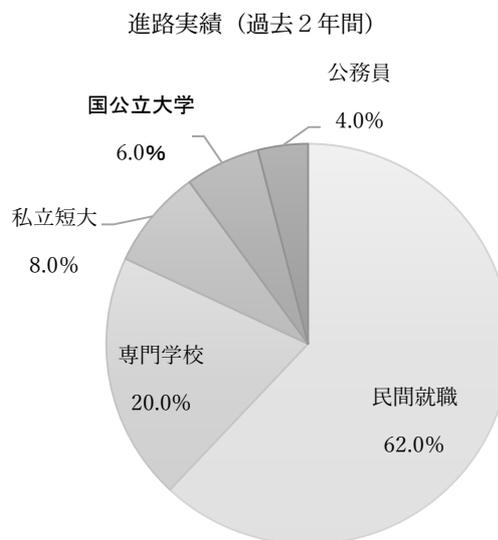
### 1 学科目標

「知っている」だけでなく「知っていてできるようになる」ことを目指している。各科目の授業や検定の取り組み、地域連携などが、どのような力を育み、自分の将来に繋がるかを考えさせながら指導を行っている。

### 2 生徒状況

現在、総合ビジネス科は1学年18名、2学年11名、3学年25名の生徒が在籍しており、市内や近隣市町村からの入学生である。また、学力層は決して高くないが、高校に入学し、何かを変えたいという意思を持った生徒が多数みられる。過去2年間の進路実績は図1の通りである。

【図1】



【主な進学先・就職先】

国公立大学	
・小樽商科大学	(1)
・釧路公立大学	(2)
私立大学、短期大学	
・東京農工大学	(1)
・北星学園大学短期大学部	(1)

- ・國學院大學北海道短期大学部 (1)
- ・旭川大学短期大学部 (1)
- 専門学校 (10)
- 地方公務員 (2)
- 民間就職
  - ・サービス業 (12)
  - ・事務 (8)
  - ・生産工程 (4)
  - ・建設・採掘 (2)
  - ・専門的技術的職業 (2)
  - ・販売 (2)

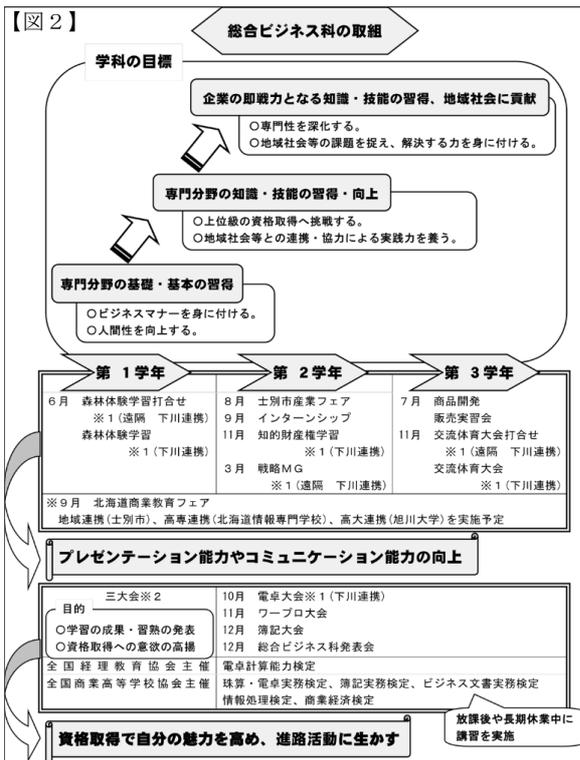
### 3 学科の取り組み

#### (1) 概要

従来の総合ビジネス科の取り組み概要は、図2の通りである。令和2年度より新たな企業等との地域連携を始めた。

※1 本校は下川商業高校との地域連携協力校となっている。

※2 電卓、タイピング、簿記の知識・技術を発表する場となっている。



#### (2) 令和2年度地域連携

①第3学年「水郷公園PRプロジェクト」

(協力：士別市役所)

②第2学年「天サイダーリニューアルプロジェクト」

(協力：羊と雲の丘観光協会株式会社) 【写1】

【写1】R2.12.20 『北都新聞』

#### (3) 令和3年度地域連携の取り組み

①第3学年「クッキーデザイン考案プロジェクト」

(協力：株式会社武士) 【写2】

②第3学年「新商品開発プロジェクト」

(協力：士別サフォーク研究会) 【写3】

③第2学年「天サイダーリニューアルプロジェクト」

(協力：羊と雲の丘観光協会株式会社) 【写4】

④第1学年「おやき考案プロジェクト」

(協力：珈琲淹REFINED朝日店 他)

【写2】



【写3】 R 3. 7. 23 『道北日報』



【写4】



#### 4 学科の課題とその解決方策

学科の課題のひとつに「身に付けた知識・技術を活用する場面が少ない」ことがある。今回の取り組み以前は、天サイダーの販売促進を目的とした活動を行っていた。それは、商業教育フェアと士別市産業フェアなどの参加である。コロナによる影響で、これらの活動を行えない状況となった。目標である「知っている」だけではなく「知っていてできるようになる」ことも実践の場がなくなり、達成することが難しい状況となった。目標を達成するために、学科では新しい地域連携の在り方を協議し、士別市の課題発見や市内企業が苦手としている情報発信の強化を軸に地域へ提案することを実践の場とした。そこで「身に付けた知識・技術を活用し、知識・技術の定着を図るとともに、それが実社会において必要な力であることを実感することで、主体的で対話的な深い学びの実践ができるのではないか」と考え、今までより多くの実践の場を提供できるよう「提案型の地域連携」を開発することとした。

#### IV 水郷公園PRプロジェクト

##### 1 はじめに

私は、平成29年度から令和2年度まで、3学年で「広告と販売促進」を担当した。この科目は、「財務会計Ⅱ」との選択科目であり、比較的学力が低い生徒が集まる科目であった。また、教科書範囲が終わる頃には、進路活動も終わり勉強に身が入らないという課題があった。そのため、生徒が主体的に取り組む実践的な内容を行うことが、深い学びとなると考え、「マーケティング」や「広告と販売促進」で得た知識を活用できる場として、令和元年度に「勝手に企画書プロジェクト」を実施した。これは、「生徒のアイデアを企業に売り込もう」というものである。

この取り組みは、学科の課題を解決する案のひとつとなり、反省点を踏まえて令和2年度に取り組む提案型の地域連携である「水郷公園PRプロジェクト」へと繋がる。

##### 2 取組内容

令和2年度、コロナ禍で販売実習や学校行事がなくなった3年生に、進路活動や将来に生かせる経験値を高め、郷土愛を育み、街を支える人材を育てることを目標として取り組んだ。

前年度の「勝手に企画書プロジェクト」から、生徒とコロナ禍で実現できそうな企画を検討し、市へ提案を行った。その結果、「翔雲生が自らモデルとなり、HP(図3)や広報紙で使用できる写真を撮り、広報の手伝いをして欲しい」という内容で「つくも水郷公園(士別市内で一番大きい公園)のPR活動」を依頼していただいた。市が発注者、本校が受注者となり、依頼された仕事を形にしてプレゼンテーションするという授業展開を行った。

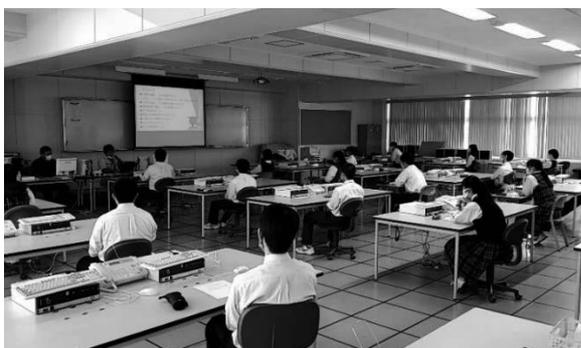
##### 授業内容の流れ

- ①士別市からの依頼説明
- ②テーマの検討  
(どのようなテーマで水郷公園をPRするか)
- ③撮影【写5】
- ④プレゼンテーションの作成、報告会【写6】  
(コンペ方式)

【写5】



【写6】



【図3】

	<p>アスレチックや水遊び場、パークゴルフ場、キャンプ場もあり子どもから大人まで楽しめる公園です。</p>
	<p>場所 土別市東7条北9丁目</p> <p>利用期間 4月下旬～10月上旬</p> <p>交通アクセス 道央自動車道土別ICから車で15分 ※詳細は位置図参照</p> <p>主な遊具及び施設 すべり台、ブランコ、ターザンロープ、複合遊具、健康遊具、花時計</p> <p>駐車場 西側駐車場 90台程度 東側駐車場 70台程度 キャンプ場駐車場 10台程度</p>
	<p>▶つくもビーチ（水遊び場）</p> <p>営業日 毎日（6月中旬から9月下旬まで）</p> <p>営業時間 【6月・9月】 9時30分～16時30分 【7月・8月】 9時30分～17時30分</p> <p>注意事項 水の中には小石が散乱していることがありますので、サンダル又はビーチサンダルを履いてください。但し、外靴での使用は禁止です。</p>

【取り組みを終えた生徒の感想】

- 小さい子供がこんな風に遊んでほしいと思う写真や様々な年齢の方が使いたいと思えるような写真をイメージして撮影してみました。撮影当日は時間通りに進めることができなかったが、イメージした写真を撮影できてよかったと思いました。
- 発表する準備では、写真を選ぶのに時間がかかり原稿にあまり時間がさけなくて思ったように説明

することができなかった。

- このPR活動を通して、自分の地域の魅力をより繊細に感じ取ることができました。
- 発表する際に限られた時間の中でいかに相手に地域の魅力を伝えられるかを試行錯誤していく中で私にはまだまだ地域のことについて知らないことがあるのだと気づき、もっとたくさん地域の魅力を探したくさんの人に伝えられるようにしたいと思えるとても良い活動でした。
- この活動で協力性や積極的に行動をするという力を身に付けることができた活動となりました。そして、このPR活動で学んだことをこれから将来に役に立てていきたいと思いました。
- 写真がどのように使われるのかを見守ってきたい。

3 まとめ

コロナウイルスの対策をしながらの取り組みとなった。全体で約800枚の写真を撮り、その中から厳選してどのような意図で市のPRに使ってもらいたいかをプレゼンテーションした。

担当者からは、「意欲的に取り組んでもらい感謝している。これを広報誌やHPに活用し、市のPRに繋げていきたい。」と総評をいただいた。

コロナウイルス感染拡大の影響で、計画していた取り組みの半分程度となってしまったが、生徒からは「地域の魅力を繊細に感じることができた」などの感想があり、地元地域への興味関心を持たせ、意義のある取り組みができたと考える。

V 天サイダーリニューアルプロジェクト

1 はじめに

天サイダーは、平成27年度に地域活性化を目的として本校、土別市役所、地元企業である日本甜菜製糖株式会社と共働して、「天塩川の水と土別産砂糖・ビート（甜菜）オリゴでつくったサイダー（通称：天サイダー）」を開発し、12月に販売開始となった。

その後、平成28年度から令和元年度まで、地域行事にて天サイダーの販売促進活動を続けていた。

2 計画と準備

対象学年は令和2年度、私が担任となった1学年と3年計画で行うこととした。プロジェクトを始めるにあたり、まずは知識と技術をしっかりと身に付けさせるため1学年で履修となる「ビジネス基礎」の授業で「マーケティング」の基礎知識や学習内容を補足することとした。

この取り組みで、重視していたことは2つある。

1つ目は、「生徒の主体性を尊重する」ということである。生徒が自ら出した、意見を基に企画を進めることで、責任感や達成感などの経験を積ませたいと考えた。

2つ目は、流通過程での「広告と広報活動」の体験学習である。商品の導入期、成長期には様々な仕掛けがあり、その手段の一つをこの取り組みを通して学べる。また、士別市の課題である情報発信に則した提案を行う意図もあった。

最終的には、企画から広告、販売までのすべての過程で生徒に意見を求め、取り入れることで、主体的に行動できる人材の育成を計画した。

#### 【授業イメージ】

1年目：マーケティングの知識・技術を身に付ける。

→教科授業の中で培う。

2年目：身に付けた知識・技術がどのように実社会で使われているのかを実践を通して理解する。その際に企画、提案、実行、反省の流れを意識して取り組む。

→外部講師による講演や地域イベントに参加し、地域についての理解を深める。

企画の計画、立案、広報活動、販売実習、決算、次年度に向けた課題の明確化

3年目：2年目の反省を活かし、発展的な取り組みを行う。

→広報活動の強化、販売地域の拡大

### 3 目標とする力

この取り組みを通して、主体性とともにも生徒に次の力が身に付くことを目指した。

#### (1) 「問う力」

私は、教職に就く前に10年ほど営業職として働いていた。その経験から感じたことは「ビジネスの場において、様々な事象に「なぜ？」と問い、その疑問に答えや理由を見つけられる能力は、圧倒的に求められる強い力」ということである。その能力が高い人は、根拠に基づいた言動ができ、信頼できる人であると実感した。商業教育の目標の中に即戦力の人材を育てることとあるが、この問う力が即戦力につながる力ではないかと考えている。

#### (2) 「振り返る力」と「過去から学び、改善する力」

企業経営のPDCAサイクルを実習を通して学びながら、上記の力が身に付くことを目標とした。なお、生徒に分かりやすく伝えるため2つの目標として提示した。

授業では振り返りシートを使用し、単元ごと

に、どう改善していくかを考えさせた。振り返りによって、良い点と悪い点を明確にし、次のステップで改善するよう声掛けを行っている。

#### (3) その他の力

このプロジェクトによって、企画力、論理的思考力、コミュニケーション能力、発信力が向上し、郷土愛が醸成されると考えた。

### 4 取り組み内容

#### (1) 企画検討

最初に、地域のPRを3年間行うことを前提に話し合いを持つこととした。広告と販売促進での取り組みを提示した上で、士別市の改善点を出し合い、その中で自分たちが地域をPRするために何ができるか話し合った。結果として、「発売から5年経ち売れ行きが落ちてきた天サイダーをリニューアルし、『先輩方の思いを繋げていく』、『翔雲生=天サイダー』という認識が浸透しているのをそれを使うメリットは大きい。」と生徒から意見があがり、商品改良に動き出した。

その後、市役所担当者との話し合いを重ね、天サイダーリニューアルプロジェクトが発足した。

#### 【生徒から出た士別市の改善点】

- ・過疎化、少子高齢化
- ・農業の担い手不足
- ・特産品が少ない
- ・JR・バスの本数が少ない
- ・JR・バスの運賃が高い
- ・アピールポイントが一辺倒
- ・おしゃれなお店が少ない
- ・暑くて寒い
- ・建物ばかり新しくなっていく
- ・自分たちにメリットが少ない
- ・遊べる場所が少ない
- ・飲食店が少ない
- ・立地が不便
- ・町のことが知られていない
- ・マイナーな町である

#### (2) 企画決定と説明

「天サイダーリニューアルプロジェクト」には、様々な経歴を持つ、地域おこし協力隊（以下、協力隊）の3名とともに進めることとなった。彼らの存在はとても大きく、生徒にとっては年齢も近く親しみやすいメンバーであり、ビジネスを学ぶ上で良き手本となっていた。

協力隊には、過去の職歴や士別市を発展させていく想いなどについて、高校時代に学んだことがどの

ように活かされているかを取り入れながら説明いただいた。生徒たちは授業で学んだ知識が社会に出てどのように活かされるかに興味を持ち、真剣に話を聞いていた。

【写7、8】



### (3) 協力隊との共同授業

#### ①土別市の現状と特産（観光資源）について

土別の特産品の説明、天サイダーの位置づけ、ご当地サイダーの役割を学んだ上で、天サイダーを売るメリットとデメリット、現在の味の評価をし、この評価を基に試供品を作製することとなった。

#### 【メリット】

- ・売れた金額で土別を発展させられていく。
- ・土別の代表的なものとして紹介できる。
- ・商品がわかりやすくお土産にしやすい。
- ・地産地消をしている。

#### 【デメリット】

- ・売れ行きはパッケージに左右されやすい。
- ・瓶なので持ち運びが大変。
- ・普段買い物する場所に売っていない。
- ・リピーターになりにくい。
- ・ターゲットがわかりづらい。

#### 【味の評価】

- ・後味が悪く、甘ったるい。
- ・独特な風味。（青臭さが残る）
- ・炭酸が弱い。（すぐ炭酸が抜け、おいしくない）
- ・もっとスッキリ飲みやすくさせたい。
- ・温くなるとおいしさが半減する。

【写9、10、11】



#### ②2代目天サイダーを考える1（ターゲット選定）

現・天サイダーの市場ポジションを振り返った際、ターゲット層が広いことがわかった。生徒からは、ターゲットを観光客に絞り販売価格上げるとい

う意見が出た。そのことより、1本あたりの原価アップが要求できる。1本当たりの原価が増えることで、味やラベルの自由度があがる。販売価格は上がるが、クオリティを高くして手に取ってもらいやすいパッケージにすれば良いという意見でまとまった。

### ③2代目天サイダーを考える2（味・ラベル編）

出来上がってきた4種類の試作品を飲み比べ、意見を出し合った。この授業日はJRが運休となってしまったため、リモートで参加する生徒がいた。リモート参加の生徒は翌日に飲み比べ、意見を出し集約した。集約した意見を生徒と協力隊が話し合いを行った。どれも捨てがたい味となっていたが、生徒から「また飲みたいと思うのは、オーソドックスなサイダーの味だと思う。」「味を加えたレモンや塩では無く、美味しいサイダーとして勝負したい。」「地産地消を目指すなら、レモンと塩は入れない方がよいと思う。」と意見が出た。その結果、試作品2の「現・天サイダーよりもラムネ味を強くし、スッキリとした後味」に全員一致で決定した。この味をベースに後日、甘さや炭酸の調整を行い、新・天サイダーの味は完成となった。

ラベルについては、デザインの考え方や見せ方の説明を受け、ワークシートを使いデザインと説明文を次回の授業までに記入させることとした。

#### 【試作品を飲んだ感想】

##### 試作品1：現・天サイダーよりも甘さ控えめ

- ・ベトベト感がなくなったのが良い。
- ・スッキリとした味だが、物足りない。
- ・独特の後味は、改善されていない。

##### 試作品2：現・天サイダーよりもラムネ味が強い

- ・独特の後味が抑えられた。
- ・清涼感があって飲みやすい。
- ・他のサイダーと味での差別化が難しい。

##### 試作品3：現・天サイダーにレモン味を加えた

- ・爽やかさが増した。
- ・とても美味しいが、レモンは土別で栽培していない。
- ・レモンの風味がちょうどよい。

##### 試作品4：現・天サイダーに塩味を加えた

- ・甘しょっぱいのが癖になりそう。
- ・塩と甜菜の甘さに一体感が足りない。
- ・大人は好きな味かもしれない。

【写12】



### ④ラベルデザインの発表

各自考えたデザインの発表を行い、コメント付きで投票し3つのデザインに絞り込んだ。生徒は、絵が上手い下手ではなく、お客様に手に取ってもらうために工夫した部分の説明を評価していた。どうしたら売れるのか、手に取ってもらえないと意味がないと、この授業あたりから全体的に責任感が増してきたように感じた。

【写13】



### ⑤デザインの打ち合わせと広報活動について

前回、ラベルデザインが選ばれた生徒は、オンラインでデザイナーと打ち合わせを行った。初めてのオンライン会議に緊張した様子であったが、デザインのコンセプトを直接伝え、イメージの共有を図ることができた。

また、広報活動はどのようにしたらよいか。告知、集客、販売方法などを条件に、より広く知られるには、どのような手段があるかを考え実行するこ

ととなった。

SNSでのPR、HPでの販売、街中にポスターを貼る、CMの作成、各メディアに取りあげてもらおうなどの意見があり、実現可能なものは、すべてやってみようと広報活動へと繋げていくこととした。

【写14】



#### (4) 広報活動

商品の概要が決定し、発売日が令和2年6月19日に決定し、広報活動を本格的にスタートさせた。

広報活動は主にSNS、HP、ポスター、POP、新聞、広報紙を利用することとした。

##### ①SNSの運用

協力隊のメンバーに天サイダー専用のSNS (Twitter、Facebook、Instagram) を開設していただき、発売に向けた準備の様子や、事前告知、実習販売会の告知などを行った。3種類のSNSを利用したが、生徒にはFacebookは馴染みがなく、上手く活用できなかった。Twitter、Instagramは連携させながら運用し、一定のアクションを得ることができたと考えている。まだ上手く利用しきれてはいないが、今後の課題として取り組んでいきたい。

また、SNSについては生徒が当たり前のように使っている中で、教育現場では「SNSは使わないように」、「SNSでのトラブル防止について」などの友人間での利用やメディアリテラシーに則した面での授業や指導が多いように感じていた。総合ビジネス科では「ビジネスにおけるSNS」を体感させ、実践していけないかと考え、授業を通して使い始めている。

#### 【SNSの利用のまとめ】

##### ・Twitter

国内で一番登録者数が多いSNSである。投稿がどれだけ見られているかなども簡単に確認でき、投稿の仕方を工夫しながら活用した。



##### ・Instagram

生徒が主に使っている媒体であり、観光関係の自治体や企業も多く使っている印象であった。リアクションや繋がりも視認しやすく手軽に使われていると感じた。実際に、実習販売の告知はInstagramを見て買いに来たというお客様が多数いた。



##### ・Facebook

生徒には、馴染みがなく使いづらい様子であった。ただ、ビジネスの場では個人間の繋がりが太くなるSNSであると考えている。ここまでは、上手く利用できていない。



#### 【ChromebookでSNSを更新する生徒】



##### ②ポスター、POP作成

ポスターは、販売前のポスターと販売後のポス

ターの2種類を作成することとした。事前ポスターでは、「なんだろう?と疑問を持ち、販売前にお客様が気になる存在にしよう」と話し合いで出てきた意見であった。学校のPCや生徒のスマートフォン・タブレットを使い作成をした。

POPについては、天サイダーの販売促進を目的として作成した。あえて手書きで作成することで、親しみやすさを出し、手に取ってもらおうと考えた。手書きが苦手な生徒は、PCを使い作成を行った。

出来上がったポスターやPOPは、生徒が天サイダーを販売している事業所に、電話でアポイントを取り、放課後に訪問して貼らせていただいた。

電話でのアポイントや訪問に際して、事前に電話応対や訪問時のマナー、名刺の渡し方について、「ビジネス実務」の授業内で事前指導を行った。

事前ポスターはとても反響が大きく、発売前に多くの方に知ってもらうことができた。作成した生徒は達成感を得ることができた。また、POPに関してもお客様が手に取りやすく、わかりやすいものになったと販売している事業所から好評であった。

さらに、販売の拡充を狙ったオンライン販売についても、生徒の意見を反映させた販売サイトを作成した。サイトについては、利権の関係から、士別市の第3セクターである羊と雲の丘観光協会株式会社のHP内に作成し、他の商品とともに販売を行っていただいている。管理運営に関しては、同協会に一任しているが、年度末には決算報告等について授業を行う予定である。

#### 【HPでのオンライン販売】



#### 【生徒が撮影した写真】



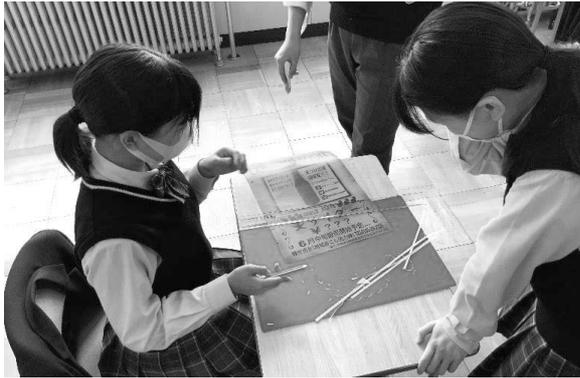
#### 【販売前ポスター】



#### 【販売後ポスター】



【ポスターの配布準備】



【出来上がったPOP】



【事業所訪問】



### (5) 販売実習会

令和3年7月22日に道の駅羊のまち侍・しべつ<sup>1</sup>の屋外にて販売実習会を実施した。夏の再拡大防止特別対策期間中であることから販売時間は3時間とし、感染予防対策を施しながらの実施となった。

当日は、天候にも恵まれ販売予定の5箱(120本)が1時間で完売し、急遽5箱(120本)を追加することとなったが2時間半で売り切ることができた。販売会の前にはInstagramで呼び掛けをおこない、実際に購入されたお客様からは「Instagramを見てきた

よ。」と多くの声をいただいた。生徒は、大勢のお客様が立ち寄り購入してくれたため、最初は動揺して、お釣りを間違えたりと、硬くごちない対応であった。時間が経つにつれて硬さも取れ、明るく接客するように心がけていた。自分たちが手掛けた商品が目の前で売れる達成感と取り組んできた広報活動の成功体験を得ることができた。また、次回の改善点を捉えることができたと考える。

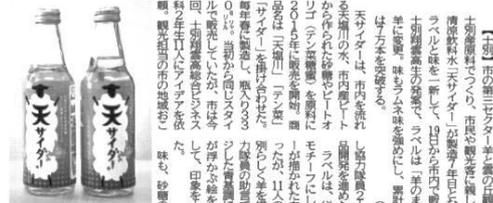
### 【生徒の反省】

- ・コロナ禍であったので大きな声で呼び込みできなかった。次回は、元気に明るく呼び込みしたい。
- ・目だけでお客様に表情を伝えるのが難しいと感じた。
- ・正の字を覚えた。スキルアップした。
- ・実際に自分たちが作った商品が売れる喜びを感じた。
- ・お釣りを間違えて渡したので、少ない金額でも電卓を使ったり、お客様に渡すときの確認を怠らない。
- ・空き瓶のリサイクルはできないのかな。
- ・お客さんの足を止めるよう工夫して呼び込みできた。
- ・天候に恵まれたのでいっぱい売れたと思う。
- ・次に販売するときは、もっとうまくやりたい。

### 【写15】

## 天サイダー ラベル、味一新

### 製造7年目 士別翔雲高生がアイデア



【士別】市の地産特産品「羊のまち侍」が販売、製造7年目を迎える「天サイダー」が製造7年目を迎える。羊のまち侍の味を一新し、19日から市内4店舗で販売される。天サイダーの味を一新し、19日から市内4店舗で販売される。天サイダーの味を一新し、19日から市内4店舗で販売される。

天サイダーは、市内産羊乳と地元産小麦が原料。羊のまち侍の味を一新し、19日から市内4店舗で販売される。天サイダーの味を一新し、19日から市内4店舗で販売される。

### 羊のデザイン／ラムネ味強めに

内七軒」との響きを兼ねて決めた。

## 【実習販売会の様子】



### (6) 今後の活動について

今後は、この取り組みを継続させていくために広報活動がカギになると考えている。SNSでの発信、地域と連携した取り組みを強化し、販売エリアを広げていきたい。

次年度に向けた取り組みとして、リニューアル初年度の販売本数、売上金額、利益を算出し、翌年度の仕入れ本数を決定する。併せて、アンケートや聞き込み調査を行い、天サイダーの取り組みを可視化し、改善点を明確にした上で、どのような広報活動を行っていくかを決定する。生徒の反省にあったように、空き瓶のリサイクルに関してもSDGsを絡めた取り組みができないか、教科横断型授業も視野に検討したい。

学科内では、「マーケティング」、「財務会計」、「ビジネス情報」等の科目と連携した授業展開を担当教諭に依頼し、「知っている」だけではな

く「知っていてできる」授業を行う予定である。

## VI まとめ

天サイダーリニューアルプロジェクトの導入期は、コロナ禍で制約が多く、計画が二転三転せざるを得ない状況ではあったが、協力隊や市役所担当者の支援によって、順調に動き出すことができた。

生徒とは、授業で得た知識と技術をもとに、彼らの発想を生かしながら企画の立案、商品開発、広報活動、販売活動までの流れができたと感じている。次年度は、本プロジェクトの最終である。3年間を通して、生徒が「主体性」と「目標とする力」が身に付いたか、郷土愛が醸成されたかを検証する評価の年である。生徒が令和3年度の取り組みを改善しながら大きく成長することを期待すると共に、担任としては身に付いた力が進路という将来に繋がることを願っている。

令和4年度から新学習指導要領が始まり、新たな取り組みを行う中で、今回の天サイダーリニューアルプロジェクトの反省を活用していきたい。観光資源が乏しい地域で何ができるのかを考えると、アイデア（企画）を提案（売る）ということが重要だと感じている。今回のように提案し、一緒に商品開発から販売までをできるケースは少ないと思うが、授業の取り組みの中で生きた題材を探しながら企画提案の取り組みを総合ビジネス科の取り組みのひとつとしていきたい。

私は「ビジネス＝課題解決と捉え、今ある商品やサービスを向上させる手段」だと考えている。派手な取り組みはできないかもしれないが、地域や企業のことを生徒とともに考え、高校生にしかできない提案を続けていくことが、持続可能な地域を担う人材の育成に繋がると確信している。



設立 昭和 38 年 5 月 25 日

回	開催 年度	講 師 氏 名	演 題
1	昭38	森戸 辰男 (中央教育審議会会長)	高校教育の問題点
2	昭39	高坂 正顕 (東京芸術大学長)	日本教育の課題
3	昭40	沢田 慶輔 (東京大学教授)	考える力をもった人間を育てる教育
4	昭41	平塚 益徳 (国立教育研究所長)	後期中等教育の諸問題について
		中川 秀三 (札幌医科大学教授)	大脳生理学と精神衛生について
5	昭42	細谷 俊夫 (東京大学教授)	わが国の中等教育
		伊藤 祐時 (日本大学教授)	進路指導について
6	昭43	高坂 正亮 (京都大学助教授)	転換期における日本の諸問題
		犬飼 哲夫 (北海道大学名誉教授)	開拓百年と北海道の野獣
7	昭44	岸本 康 (共同通信社論説委員 / 科学評論家)	宇宙開発と変革の時代
		益井 重夫 (国立教育研究所第2研究部長)	教育改革と後期中等教育の諸問題 ー諸外国の実情と関連してー
8	昭45	衛藤 藩吉 (東京大学教養学部教授)	日本と中国
		岸田純之助 (朝日新聞論説委員 / 評論家)	情報化社会における教育のシステム
9	昭46	林 健太郎 (東京大学文学部教授)	民主主義を考える
		矢口 新 (能力開発工学センター所長)	教育革新の課題
10	昭47	和達 清夫 (中央公害審議会会長)	地球科学と環境問題
		市村 真一 (京都大学教授)	変わりゆく日本と教育
11	昭48	天城 勲 (日本育英会理事長)	近代学校制度 ーその性格と展望ー
		橋本 重治 (応用教育研究所長)	教育評価の今日の問題
12	昭49	会田 雄次 (京都大学教授)	日本の心と世界の心
		菊地 浩吉 (札幌医科大学教授)	ガンの免疫
13	昭50	池田弥三郎 (慶応義塾大学教授)	言葉としつけ
		田上 義也 (北海学園大学講師)	北の環境の中で
14	昭51	加藤陸奥雄 (東北大学学長)	自然保護
		岡路 市郎 (北海道教育大学学長)	「教え」への幻想
15	昭52	村松 剛 (筑波大学教授)	国際情勢と日本の進路
		河邨文一郎 (札幌医科大学教授)	医療と福祉
16	昭53	黛 敏郎 (作曲家)	日本の昔
		田中 彰 (北海道大学教授)	近代日本の岐路
17	昭54	犬養 孝 (大阪大学名誉教授)	万葉のころ
		武谷 愿 (北海道大学名誉教授)	エネルギー資源の今日と将来
18	昭55	今堀 宏三 (大阪大学教授)	かけがいのない地球と私たちの環境
		倉田 公裕 (北海道近代美術館長 / 明治大学教授)	美術に見る東西のころ
19	昭56	広中 平祐 (京都大学教授)	日本の教育を考える
		小林 禎作 (北海道大学低温科学研究所教授)	「雪華図説」と雪文様
20	昭57	黒川 紀章 (建築家)	共生の時代
		梅原 猛 (京都市立芸術大学教授)	アイヌー日本文化の基層
21	昭58	外山滋比呂 (お茶の水女子大学教授)	新しい人間像と教育
		伊藤 隆市 (北海道教育大学教授)	北からの出発
22	昭59	黒羽 亮一 (日本経済新聞社論説委員)	なぜ 今 教育改革か
		岡田 宏明 (北海道大学文学部教授)	北方民族における伝統と近代
23	昭60	加藤 秀俊 (放送大学教授)	生涯教育の将来
		石黒 直文 (北海道拓殖銀行常務取締役)	これからの企業の求める人間像
24	昭61	江藤 淳 (東京工業大学教授)	ことばとこころ
		岡村 正吉 (北海道虻田町町長)	地方自治と教育
25	昭62	野坂 昭如 (作家)	近ごろ思うこと
		小松 作蔵 (札幌医科大学副学長)	心臓移植をめぐる
26	昭63	多胡 輝 (千葉大学教授)	日本人と創造性
		美濃 羊輔 (帯広畜産大学教授)	バイオテクノロジーの現状と問題点
27	平元	金田一春彦 (文学博士)	日本人の心
		高橋 良治 (釧路市丹頂鶴自然公園園長)	タンチョウの四季

回	開催年度	講師氏名	演題
28	平 2	菊地 元市 (青山学院大学法学部長)	経済法秩序における公正としての正義 －日米構造協議を中心に－
		高畑 直彦 (札幌医科大学神経精神科教授)	心の危機と反応
29	平 3	なだいなだ (精神科医 作家)	心の底をのぞく
		坂本 与市 (北海道文理科短期大学学長)	オスとメスのエソロジー
30	平 4	伊東 光晴 (放送大学教授 京都大学名誉教授)	技術革新の現在と社会の変容
		古葉 竹識 (野球評論家)	耐えて勝つ
31	平 5	C. W. ニコル (作家)	自然と人間
		若井 邦夫 (北海道大学教育学部教授)	子どもが発達するとき －必要とあそびのあいだ－
32	平 6	中村雄二郎 (明治大学法学部教授)	共通感覚と自己表現
		杉岡 昭子 (札幌国際プラザ専務理事)	「故郷忘れがたく候」の旅
33	平 7	河合 雅雄 (京都大学名誉教授 / 日本福祉大学教授)	人間－進化の道からずれた動物
		山中 燐子 (北海学園大学人文学部教授)	世界の中の日本と日本人
34	平 8	佐原 真 (国立歴史民俗博物館副館長)	大むかしと現代
		横湯 園子 (北海道大学教育学部教授)	子どもを観る目 －教育臨床心理の立場から－
35	平 9	浅井 信雄 (神戸市外国語大学教授)	国際化と私たちの暮らし
		中野 武房 (北海学園北見大学教授)	カウンセリングを体験してみませんか
36	平10	梶田 叡一 (ノートルダム女子大学学長)	変革期の高校教育を考える
		シンポジウム	「今こどもの心は」 －問題行動の背景を探る－
37	平11	養老 孟司 (北里大学教授)	からだと脳
38	平12	河合 隼雄 (京都大学名誉教授)	青春の夢
39	平13	阿部 謹也 (共立女子大学学長)	日本社会の構造と教育
40	平14	五木 寛之 (作家)	日本人のこころ
41	平15	毛利 衛 (宇宙飛行士 / 日本科学未来館館長)	宇宙の視点からの教育
42	平16	寺島 実郎 (三井物産戦略研究所所長 / 日本総合研究所所長)	世界潮流と日本および北海道の進路
43	平17	吉村 作治 (早稲田大学国際教養学部教授)	夢の実現の仕方
44	平18	桜井 進 (河合塾、早稲田塾、数学講師 / sakurAi Science Factory 主催)	サウンド オブ サイエンス ジョン・ネイピア ～対数誕生物語
45	平19	金子 勝 (慶應義塾大学経済学部教授)	ニュースの嘘と教育
46	平20	阿刀田 高 (作家)	アイデアの発見
		阿刀田慶子 (朗読家)	
47	平21	福岡 伸一 (青山学院大学理工学部化学・生命科学科教授)	科学のおもしろさをどう伝えるか
48	平22	見田 宗介 (東京大学名誉教授)	現代社会はどこに向かうか
49	平23	内田 樹 (神戸女学院大学名誉教授)	転換期の教育 －グローバルズムに抗して
50	平24	川口淳一郎 (宇宙航空研究開発機構教授)	「はやぶさ」が挑んだ人類初の往復の宇宙飛行、その7年間の歩み
51	平25	古賀 稔彦 (柔道家 / 医学博士 / IPU環太平洋大学 体育学部体育学科教授)	夢の実現 (挑戦することの大切さ)
52	平26	大棟 耕介 (NPO 法人日本ホスピタル・クラウン協会理事 会長、愛知教育大学非常勤講師)	心を開き、活気を生み出す『笑い』の力 －ホスピタル・クラウンの現場から－
53	平27	溝上 慎一 (京都大学高等教育研究開発センター教授 大学院教育学研究科〔高等教育開発論講座〕) (兼任)	社会に繋がる学習 －アクティブラーニングとトランジション－
54	平28	中島 岳志 (東京工業大学 リベラルアーツ研究教育院教授)	自主規制はいかにして起きるのか
55	平29	児美川孝一郎 (法政大学キャリアデザイン学部教授)	地域の未来をつくるキャリア教育の創造 －新学習指導要領が示唆すること－
56	平30	新井 紀子 (国立情報学研究所社会共有知研究センター センター長・教授 一般社団法人教育のための科学研究所 代理理事・所長)	A I時代の教育～社会はどこへ向かうか
57	令元	齊藤 誠一 (北海道大学北極域研究センター 研究推進支援教授)	これからの北極域研究 －気候変動とSDGsの視点から
58	令 2	中止	
59	令 3	安田 登 (能楽師〔ワキ方、下掛宝生流〕公認ロールファー 関西大学 特任教授)	未来へつながるリベラルアーツ － Society5.0時代の古典の価値

# 北海道高等学校教育研究会会則

## 第1章 総 則

第1条 (名 称) 本会は北海道高等学校教育研究会という。

第2条 (事 務 局) 本会の事務局は会長の所属校に置く。

## 第2章 目的および事業

第3条 (目 的) 本会は高等学校の各教科などに関する事項を研究し、会員相互の研修と識見の向上につとめ、高等学校教育の振興を図ることを目的とする。

第4条 (事 業) 本会は前条の目的を達成するための次の事業を行う。

1. 研究会の開催
2. 講習会、講演会の開催
3. 機関誌の発行
4. その他本会の目的達成に必要と認められる事業

## 第3章 組織および役員

第5条 (会 員) 本会の会員は北海道高等学校職員、教育委員会職員および高等学校教育に関心を有するものをもって構成し、登録は一人一部会とする。

第6条 (教科部会) 第4条の事業を遂行するために教科部会を置く。この部会の運営は教科毎に定める。

第7条 (地区支部) 地区支部は北海道高等学校長協会の支部単位とする。この部会の運営は支部毎に定める。

第8条 (役 員) 本会に次の役員を置く。

1. 会 長 1名
2. 副 会 長 4名
3. 監 事 2名
4. 地区支部長 (道校長協会支部数に準ずる)
5. 教科部会長 14名
6. 顧 問

第9条 (役員の選任) 会長、副会長および監事は総会において選出する。顧問は総会の推薦によりおこなうことができる。

1. 教科部会長は各教科の部会から1名を選任する。
2. 地区支部長は各地区ごとに1名を選任する。

第10条 (会長、副会長の職務権限) 会長は本会を代表し、会務を統括し、会の責任を負う。副会長は会長を補佐し、会長に事故のあるときは、その職務を代行する。

第11条 (教科部会長の職務権限) 教科部会長は各部会を代表する。

第12条 (地区支部長の職務権限) 地区支部長は各地区を代表する。

第13条 (監事の職務権限) 監事は本会の業務、会計を監査する。

第14条 (役員の任期) 役員の任期は2年とする。ただし再任を妨げない。

第15条 (総 会) 総会は年1回定期に行ない会長が召集する。ただし、必要に応じ臨機に開催することができる。総会で討議する事項は次の通りとする。

1. 予算および決算
2. 会則の変更
3. その他重要事項

第16条 (会 費) この会の会費は会員の納める登録料およびその他の収入をもってこれに当てる。登録料の徴収細則は別に定める。

第17条 (会計年度) この会の会計年度は毎年4月1日に始まり、翌3月31日に終わる。

付 則 本則は昭和38年5月25日より施行する。

- |            |      |            |      |
|------------|------|------------|------|
| 平成17年5月30日 | 一部改正 | 平成18年5月30日 | 一部改正 |
| 平成19年5月8日  | 一部改正 | 平成21年5月12日 | 一部改正 |
| 平成26年5月7日  | 一部改正 |            |      |



---

---

令和4年3月16日 印刷  
令和4年3月16日 発行

北海道高等学校教育研究会本部事務局

〒064-8535 札幌市中央区旭ヶ丘6丁目5番18号  
市立札幌旭丘高等学校内  
TEL(011)513-2238 FAX(011)513-2244

印刷株式会社さんけい

〒063-0850 札幌市西区八軒10条西12丁目2-48  
TEL(011)611-8866 FAX(011)611-0422

---

---